

ネパール王国探検記 日本人 世界の屋根を行く

川喜田



292.2587

Ka/94

内藤II

人文研

京都大学 図書



200025123596

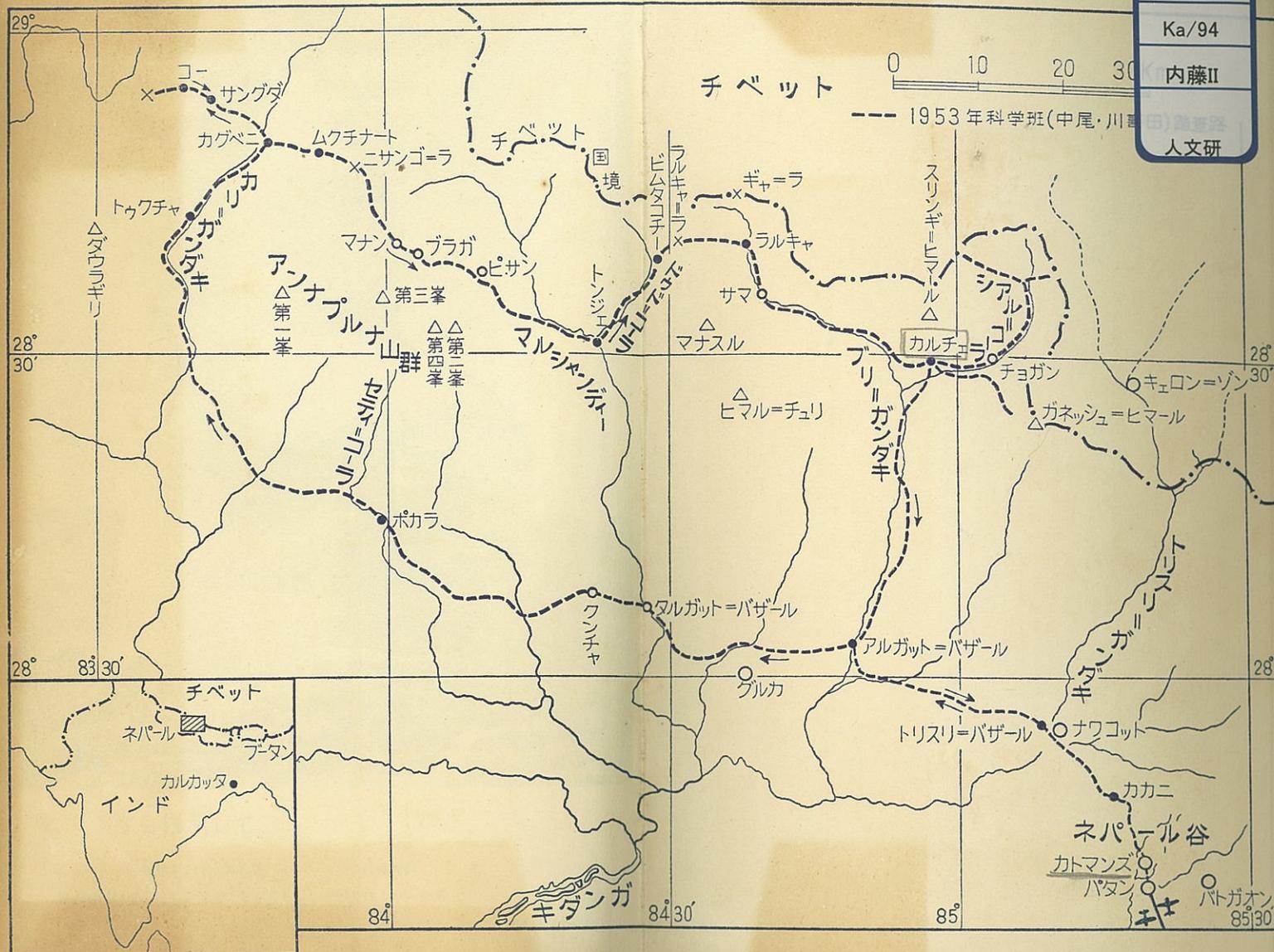
ネパール王国探検地図

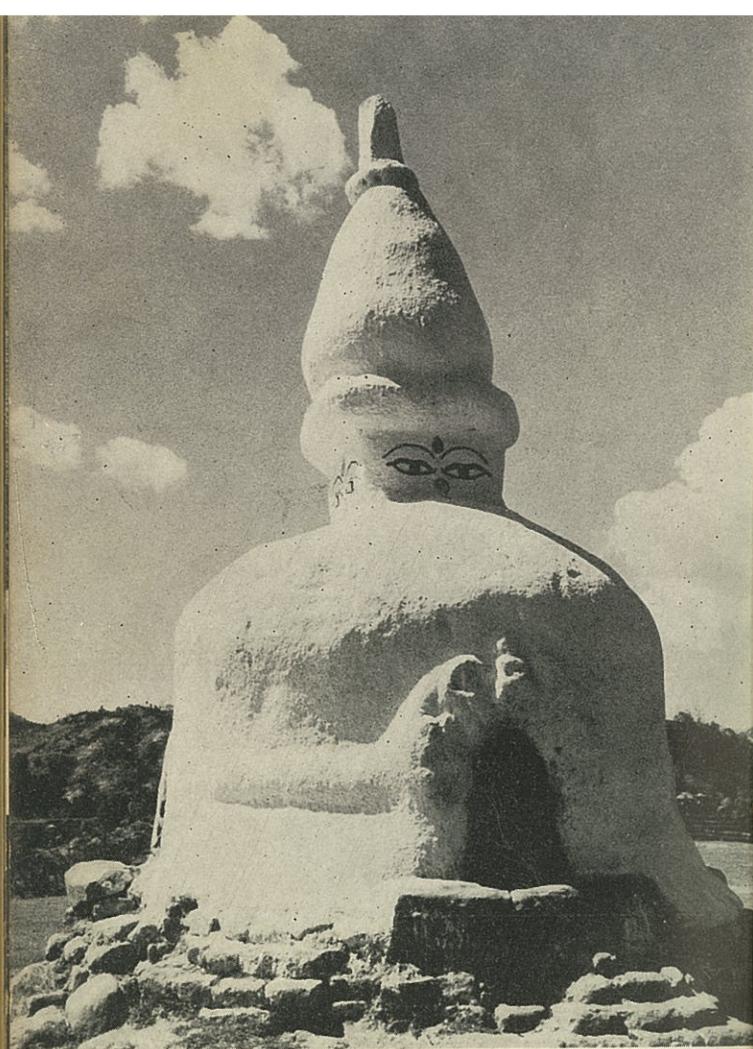
292.2587

Ka/94

内藤II

人文研





ヒマラヤを目ざして

1. ネパールの首都カトマンズに近いネパール谷の仏舎利塔
石壁に白泥で化粧をほどこしてある。この形式はネパール独特のもの。

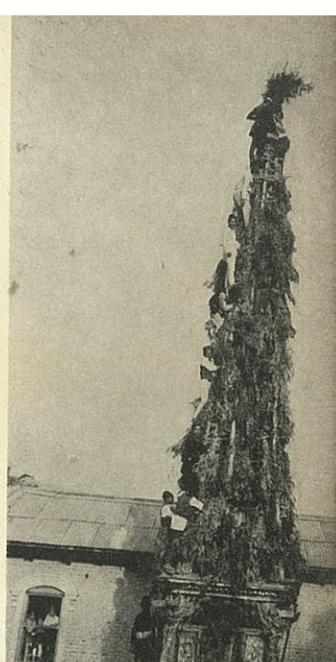
28°
30'

28°

トガオン
85/30

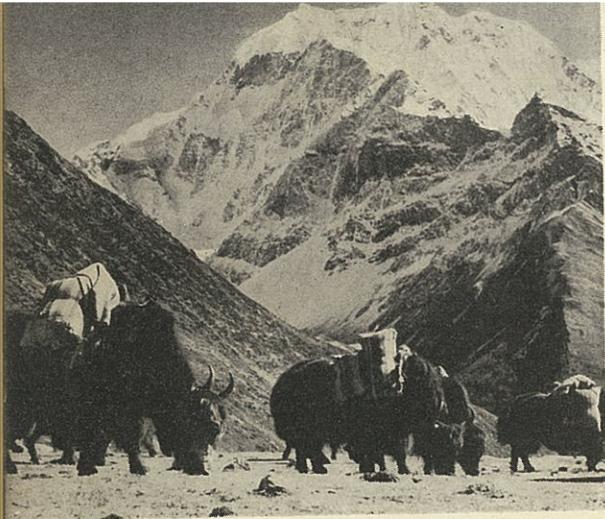


- 5 見おろすかぎりの段々畑 ヒマラヤの海拔2000メートルにしがみついたグルン族の村落（点線内）が見える。上
- 6 ヒマラヤを横断する通商路上にある商業の町トクチャ いましも、塩袋を積んだロバの隊商がゆく。塩はチベットからネパールへ、穀物はその逆に運ばれる。下



- 2 雨の神マチェンドラの祭りに使う山車（チェリア）の頂部 この車は京都の祇園祭りの鉾にそっくりだ。（カトマンズにて）上右
- 3 カトマンズの中心部、王宮付近にあるドゥルガ女神（大黒神）の像（依田孝喜氏撮影）上左
- 4 ヒンズー教の祠 祠内にみえるシバ神の神体は、男根の象徴である。（トリスリーバザール付近にて）下





3. ネパール・チベット境にそびえる七千数百メートルの高峰
パンプーチ ヤク(チベット牛)の隊商が、この山の左に
あたる高い峠を越えて、チベットからやってきた。(マナ
スル北方にて、中尾佐助氏撮影) 上
4. 氷河の押し出した側堆石の丘が連なり、その裾に羊の群れ
が草を食む。後方に見えるのは七千数百メートルのプラン
ガル 峰(マナスルの西北にて) 下



1. ヒマラヤの大峡谷ブリーガンダキ 断崖の縁(点線内)にひっかかったようなチベット
人の村が見える。(中尾佐助氏撮影) 上
2. 1の峡谷の枝谷にある断崖上の部落 著者が40日あまり住みこんだところだ。手前はカ
ングリン氏族の屋根、むこうはシンムシェ氏族の部落、その右側に仏舍利塔が見える。 下





6. チーズを干すチベット人たち 上

7. チベット人のバターづくり . 下 (上、下ともシアル＝コーラ
上流のチベット人村にて、中尾佐助氏撮影)



5. インドからネパールをへて、チベットへ帰るほがらかなチ
ベット人の一家族 (マナスル付近にて、依田孝喜氏撮影)

ネパール王国探検記

—日本人世界の屋根を行く—

川喜田二郎著



商標登録 467067

内藤敬子氏寄贈



I



II



III



IV



8. チベット人の家々にならず見られる白い旗のぼり・タルチョー 旗にはお経が印刷してある。村の通路は、ときに建物の下をトンネルのように通っている。上右

9. ラマ教の儀礼に使う宗教模様を取る型板 Iの第1列(人間の様な姿)は神。Iの第2列、IIの第1列、第2列(鳥、獣、昆虫、蛇など)は悪魔。IIIはラマの使う祭具。IVは左半分が7曜のマーク、右半分が占いの符号。(民族学博物館所蔵) 上左

10. 死者の骨の粉を泥にまぜて作ったタンゴ ラマ寺や仏舎利塔の中に置かれ、死者の霊をとむらう。(マナスル東麓のサマ付近にて、竹節作太氏撮影) 下



まえがき

一九五三年に、私はヒマラヤの巨峰マナスル登山隊に、科学班の一員として参加した。この本は、その私の、学術探検の物語である。

いったい私は未知の世界を探検したり、未開拓の学問分野に分け入ったりするのが大好きな性である。それに一人の先輩がいた。登山家としては中途半端な修業をしたにすぎない私を、探検という金のかかる道楽の道にひきずりこんだのは、その道の大先達、今西錦司博士である。今西博士はまた、私の学問の仕方にも強い影響を与えた。ヒマラヤへと勇み立って出かけることになった遠因のひとつは、ここにある。

私の育った現代というのは、混沌たる疾風怒涛時代である。若い私の魂が時代に対して感じやすかったのも無理はない。ことに第二次世界大戦前後の暗い世相は、私にとっても決定的な影響力を持った。そこで私は一介の学徒として、どうすれば世界に平和と繁栄が作りだされるか、その道を探りたいと願った。そもそも地理学という混沌として間口の広い学問を自分の専攻にえらんだのも、たんにロマンチズムばかりではなく、時代の呼び声を直観的に感じたからであった。

まず私の関心にのぼったのは、ウナギ登りにふえつつある世界の人口が、いかにして飯を食うことができるかという問題である。この問題については、戦後の数年をついやして、ともかくも、方角のあらましぐらいは一家言の立てられるところまで努力した。しかしそれでもまだ、平和の理論を打ち立てるには十分ではない。異なる民族、異なる文化のあいだには厚い壁があって、これが平和の敵となる。そこで私は文化人類学に興味を持ちはじめた。

この本の書かれることになった始発駅は、私の探検的欲求である。そしてこの本の最後に現われてくるものは、平和への「民族の理論」である。それはこの本に関するかぎりは終着駅だけれども、もちろん、いっそう大きな探検への始発駅にすぎない。

この本はそういう願いをもこめて書きおろされたのだから、当然私は、日本人以外の人びとも広く読んでいただきたいと思っている。文中しばしば、日本人や日本文化を引きあいに出したのも、一つには、外国人がそれを読んで日本文化について理解を深めるかもしれないと思っただけである。私はずいぶんと好き勝手なことを、遠慮会釈もなく書いた。あるいは、そのために、フンガイする人があるかもしれない。しかし全巻を注意して読んでいただければ、私が特定の民族や個人に、感情的な好き嫌いをおしつけているのではないことは、わかってもらえると信ずる。率直な語りかけのないところに、ほんとうのおたがいの理解と信頼は生まれようがあるまい。

また、本文にてくるカルチュ村については、村名や村人の名前など、すべて仮名を使って書いた。その村人たちの人権を無視した結果になっては申しわけないから。

おわりに、この探検行、およびこの本の出版に御尽力をいただいた方々に、心からの御礼を申しあげたい。とくにネパール王国の官民諸賢、日本山岳会、とくに探検当時の榎有恒会長、三田幸夫隊長以下の隊員の皆様、毎日新聞社の方々、科学班の活動を陰に陽に支援された京都大学の生物誌研究会の方々、人類学的研究に御支援を賜わった民族学協会の各位、とくに渋沢敬三会長および岡正雄理事長、私の所属する大阪市立大学地理学教室の皆様、および、その他多くの方々に対して。私の旅行のよき道ずれであった中尾佐助氏には、たんに旅行のうえだけでなく、有益な知識のうえで、じつにいろいろのお世話になった。

私の採集した少々の民俗品は、東京の民族学博物館の所蔵となっているが、本書中のその写真は、同博物館の御厚意に俟つものである。それから、わざわざ貴重な写真を御貸しいただいた竹節作太、依田孝喜、中尾佐助、林一彦の諸氏に厚く御礼申しあげる。とくに断わってない写真は私の撮ったものである。そして、本書を書く機縁を与えられた川村俊蔵氏および、終始私のわがまを辛抱して出版に御尽力いただいた光文社常務の神吉晴夫氏および同社出版局企画部の伊賀弘三良氏には、再三の御礼を申しのべたい。

なお、私のネパール学術報告のうち、民族関係の主要なものは、左の三つに載せてある。必要な方々の御参考までに挙げておきたい。

川喜田二郎(一九五五)「ネパールにおける民族地理学的諸觀察―第一報、宗教を指標とした文化のひろ

がり」、民族学研究、第十九巻第一号。

同(一九五六)「ネパールにおける民族地理学的諸觀察―第二報、集落型、地域組織、諸民族の生態学、

及びテベット人村ツムジュの調査」、民族学研究、第十九巻第三・四合併号。

J. Kawakita (1957): "Ethno-Geographical Observations on the Nepal Himalaya", *Peoples of Nepal Himalaya*, edited by H. Kihara.

一九五七年十月一日

京都にて

川喜田二郎

目次

まえがき.....三

1 ヒマラヤを目ざして.....二

雲の晴れ間に行動しよう.....二

作戦 計 画.....三

娑羅双樹の白い花.....一九

ヒマラヤの前衛線を越える.....二四

ネパールの首府カトマンズ.....二六

思想は進歩的、生活は保守的の貴族たち.....三三

生殖を司る性力の女神.....三八

血まみれの斧を持った男に会う.....四三

伝統を守って、丘上に住む人びと……………五三
 インドの最高階級は、ネパールの最低階級……………五九
 通訳君をギャフンと言わす……………六七
 奇 遇……………七九
 ダウラギリと商業民族……………八八

2 チベット高原に行く……………一〇四

チベット人の世界……………一〇四
 住民の違う二子村落……………一〇九
 聖なる高み・タルチョー……………一一六
 あやうく、村落戦争に巻きこまれる……………一二三
 “山のあなたの空遠く”……………一三一
 なんでも屋のチベット人……………一三八
 さすらいの人生……………一四四

字 ぬ

3 カルチエ村に住みこんで……………一五七

あの村にはいろいろ！……………一五一
 家畜から性教育を受ける牧童……………一五七
 系図買いの苦心……………一六八
 同じ氏族の者同士は、結婚できない……………一七七
 家長になるのはだれだ……………一八四
 君の羊は何頭か？……………一九三
 縁談は、なぜ男女平等にゆかないか……………二〇一
 黒幕の村長……………二一一
 ラマ家族の秘密……………二二七
 嫉妬の悪霊が人を殺す……………二三八
 赤 い 岩……………三三八
 超人とミイラ……………三四五

サイコロの人生……………二五四
 愛 欲 無 限……………二六〇

4 ネパール探検から得たもの……………二七〇

どんな魚が釣れるかわからない……………二七〇
 一妻多夫——その一 兄弟による共有……………二七六
 一妻多夫——その二 叔父と甥おひいによる共有……………二八四
 チベット文化と、漢文化の分かれ道……………二九〇
 チベット文化と、ヒンズー文化の分かれ道……………二九六
 お家柄と腕一本……………三〇〇
 富士山の登り口は一つではない……………三〇九

1 ヒマラヤを目ざして

雲の晴れ間に行動しよう

ヒマラヤ。この名前がわれわれの仲間や、先輩たちを魅み入いらせてから、もう何年の月日が流れたらう。われわれは、その名を忘れなかった。そして、その夢——ヒマラヤ遠征の夢——は、とうとうわれわれのものとなったのである。ひとたびは、重苦しい戦雲の中に粉微塵こなみじんに潰つぶえさった希望だったのに。

もともと京都を中心にばらまかれていたわれわれの仲間は、ちよいと浮世ばなれしたロマンチストの集まりだった。登山や探検が好きで、しょっちゅう海外遠征計画を立てては、つぶしてきた仲間である。そのうえに、このロマンチストどもは、きわめて執念深しんじんいときている。今西錦司博士などはその尤もつたるものである。だから、戦雲の垂れこめていた世の中がいくぶん落ちついてくると、またまた性しょうこりもなく集まって、遠征計画を立てることになった。そして、今度こそヒマラヤであった。

この計画はやがて発展して、京都のグループから日本山岳会に株がゆずられ、目標の山は八〇

○メイトル級のジャイアントたるマナスル峰がえらばれた。ついで一九五二年の遠征隊の登路発見につづいて、翌年、翌々年と登山隊が送られることとなった。そして、ついに一九五六年五月九日、第三次登山隊の手によって、マナスル峰は日本隊の足下に降ったのである。それをなすとげるまでのいくたの困難や挫折と敢闘のいきさつは、たしかに一編の劇的な物語である。

残念ながら、私は今ここでそれをのべる余裕がない。しかし、それらについては、すでに多く報告されているし、映画まで二編もできあがっている。ここにはのべるのは、このヒマラヤ遠征の副次的な活動であった、学術探検の物語、それも私じしんのおこなった調査の物語である。私が遠征隊に参加したのは、一九五三年の、三田幸夫さんを隊長とする、第二回遠征隊(第一次登山隊)のときである。このときには、十三名からなる登山班のほか、二名の学術探検班が作られた。いちおう当時の呼び方にしたがって、これを「科学班」と呼んでおこう。科学班のメンバーは、植物学および農学を担当する中尾佐助さんと、地理学および人類学を担当する私とである。

そして私たち二人は、登山班とは異なったコースをたどって、ヒマラヤの奥地を広く歩くことになった。そのため、日本にもどったのも登山班より後であった。私たちは、今までほとんど文明人に歩かれなかったコースをたどり、海拔五二〇〇メートルにおよぶ峠を三つ越え、モンソンの豪雨を吸って狂奔する激流を渡り、目もくらむような断崖の險路を数々跋涉してきたのだ。しかしその活動は、登山のそれに比べれば、まことにじみなものである。雪線に達するか達

しないような峠越えが、劇的であろうはずはない。

ところが、学術探検の劇的性格は、そういう点より、もうすこし内面的な精神的な側面にある。いったい、登山の遠征にしても、「その前夜」という部分を抜きにしては、ほんとうの劇にならないのであるが、学術探検では、「その前夜」ばかりでなく、むしろ「後日物語」のなかに、重要な劇がひそんでいるものである。こういった点は、世間あまり知られていないようだから、この書物では、その部分をもできるだけ取りあげることしよう。

いずれにせよ、われわれは時期を見る点で成功したようだ。戦雲は遠のいた。しかし、いつまた一天にわかにかき曇らないとはかぎらない。だから、「雲の晴れ間に行動しよう。」これが、われわれの発起の合言葉なのであった。

作 戦 計 画

一九四二年に大興安嶺の探検をやったときには、私は計画の発起から、いよいよ出発というまでのあいだ、「その前夜」のお膳だてに、さんざん苦勞させられた一人である。ところが今度は、「結婚」、および「出生」という人生の一大事にとりつかれたために、隊の準備という活動からはほとんど離れていたのである。そして私の参加がきまったのは、出発もまちかいかいころだったので、いわば他人まかせの状態で「遠征丸」に乗り組むようなことになってしまった。今度は据

を食ったわけである。私は、自分の学術活動の計画だけを立てればよかった。こんな楽な話はないのだが、ふしぎなことに、私はあんまり愉快ではなかった。計画というものは、最初から苦勞をかさねてこそ、自分の生み落としたものだといふ喜びが深いものだ。

とにかく、そんなぜいたくなことをいつている暇もなかった。私はなにをなすべきか？

私はよく知っている。遠征というものは、雑務にはじまり雑務に終わるものだ。雑務ほど大事なものはない。だが、それにもまして大切なものは、何かをなしとげようという意欲なのである。意欲の貫いていない遠征というものは、外見はどんなにがっちり整っていても、じつは、ひょろろに危険をはらんたものである。それはちょうど、気合いのぬけた登山家が、つまらぬところで遭難をひきおこすようなものである。

それでは私の意欲は、ヒマラヤの頂に立つことだったろうか。正直に告白するが、私にもまたヒマラヤの処女峰に立ちたいというひそやかな願いが燃えていた。残念なことに、私はその適格者ではない。そしてまた、私に期待されたものは山頂に立つことではなかった。

私には登山以外に、まだまだ自分でもよくわからない欲求が燃えていた。知識欲？ 探検欲？ まあなんでもいい。そういうところにおこう。私は若かった。知られない国に分け入って、知られない知識をかき集めたいという意欲は、登頂できないということのために、なおいつそう強固なものとなっていた。マナスルを目ざす皆さんが、頂を仰いで張り切るといふなら、何くそ

こちらもまけるものか。八千メートル以上の知識の山によじ登ってみせるぞ。いやはやどうも、今にして思えばたいへんな闘志をもやしたものである。

だからまず私の念頭にきたのは、私たちの目ざすネパールヒマラヤが、どれくらい世界に知られていないかということである。この点で、少なくとも学術的には、この国は世界にほんのわずかしら知られていないようだった。それというのも、この国がただけわしいヒマラヤ山中にあるという理由ばかりではない。後にのべるように、ネパールは日本と同じように、欧米人の侵略を恐れて、一世紀半ほど前から鎖国を實行してきたからである。その鎖国が解かれたのは、私が出かける、つい三、四年前からだった。

だから私の作戦計画のまずもって第一の方針は、地理学および人類学に寄与する知識なら、目にふれしだい手あたりしだい、なんでもかでも持ちかえろうという点にあった。けれど、これは心がけとしては結構であるが、じつさい問題として「なんでもかでも」調べられるものではない。だから私は、多少とも自信の持てる事柄を中心に置いて調べるように、さらにテーマを局限した。ここでは、その退屈なプログラムの羅列はよしておこう。結論的にいうと、まず第一に、ヒマラヤ山中のどれかの民族の生活誌をできるだけわしく作りたと思った。それから、住民の農業のやり方や植物の垂直分布、などといった問題をえらぶことにした。

つぎに、私は道づれと協定しなければならぬと思う。というのは、植物採集を担当する中尾

君が、できるだけ広い地域を歩きまわろうと望んだのは当然であった。ところが、私のねらう人間生活の調査は、毎日歩きまわっているだけでは、表面の事実だけしかつかめないものである。どうしても、どこかの村で長滞在をする必要がある。そこで、この相反する必要をどこかで妥協させなければならぬ。相談の結果、中間案として、全旅行期間中で一ヵ月半ないし二ヵ月は、どこかの村落に滞在し、残りの期間は、できるだけ欲ばって広く歩くことに落ちついた。

さてこういうふうによく歩きまわるとなれば、広く歩きまわらなければできない仕事をつけ加えた方がよい。そこで私はさらに、気象観測の仕事をつけ加えることにした。棒状寒暖計、アスマン湿度計、最高最低寒暖計などといった計器類が、梱包される荷物の中にしのびこまされてゆくこととなった。

そこへもってきて、どうも遠征計画というものは私たちの意のままにならないものだ。前年の遠征隊の隊長だった今西錦司博士は、なかなかむずかしい仕事を持ちこんできた。ヒマラヤ原住民の心理学的テストをやれというのである。そこで、その訓練のために、私は出発前の多忙の日を、いやというほど、テストの練習のために引きまわされたのであった。そのうえに今西博士は、私にとっては未経験な蝶類の採集をしてこいというのだ。

私は迷った。しかし心理学的テストは人類学にとっても有益だし、どこかの村を調査にかかれば、そういったテストをする暇もできるかもしれない。チョウチョの採集は、あきらかに地理学

的にも参考になる。チョウチョのすみ場所は、それぞれの土地の気候や植生のちがいと密接な関係があり、したがって地理学にも参考になるものだからだ。今西博士はそういったことについて貴重なヒントを与えるような論文を書いていた。だから私も引き受けることにした。

今西博士はまるで心の中でこういつているようであった。「おまえなんぞが行ったって、どうせ大してましな仕事はしてきやしない。だから、わしの指図どおり、チョウチョの採集と心理学テストをしてくれればよいのだ。あとの始末はわしにまかせておけ。」

私は私で、「バカにしなさんな。」という腹であったが、子供らしく憤激するには少しひねっていた。私はそのような仕事に十分価値は認めていた。しかし今西博士よりはもっとその価値を認めていたつもりである。たとえばチョウチョの採集である。今西博士は私に採集の心得をひととおり訓示した後でいった。「しかし同じ種類のチョウチョをやたらにたくさんとっても何にもならないぞ。」と。「ハイハイ。」といったものの、私は心の中でつぶやいた。「なあと、同じ種類でもちがった場所とれば、それだけ価値があるんだ。たとえばモンシロ蝶を一ヵ所で採集したって、それではモンシロ蝶のすんでいる地域を地図に描くことはできない。分布図の作れるまで採集するのが地理学の仕事じゃあないか。」

心理学テストにしたって同じである。ヒマラヤ山民の心理テストだけだったって価値は少ないものだ。テストを受けた彼らが、何を飲み食いし、何を着、どんな家に住み、どんな社会生活の中

で暮らしているかを、あわせて調査してこそ、彼らの心理テストも意味を持つというものである。そこで私は、ヒマラヤを歩いている自分を想像した。その想像の世界で、私はリュックサックに氣象観測の道具を入れている。肩からは写真機、地図ケース、ハンドレベル、バロメーター、プランコンパスをかけている。その上に水筒も。ポケットにはフィールドノートがあり、胸には鉛筆をさしている。手には捕虫網を持ち、腰にはチョウチョを入れる三角紙入れをつけている。毎日午前十時には一服して氣象観測をやる。一休みごとにバロメーターの目盛りを読み、歩きながら植物を眺め、その状態はただちに、ばあいによってはそのために歩きながらも、ノートブックに書き入れること。

そのうえに、私は主目的たる人間生活の実体、たとえば村落の戸数や田畑の耕作の仕方や、人びとがそこで何をしていたかを記し、さらに進んで村人たちにさまざまのことをきいてそれを記録しなければならぬ。それも現地の上語がわからないから、通訳を使ってきかなければならぬのだ。あれこれじっさい起こりそうな状況を思い浮かべて、私ははたして成しおおせるかどうかを検討してみた。何度も何度も、椅子の上で、あるいはベッドの中で、執念深く考えた。

それらは今日ふりかえてみても、むだな努力ではなかったと思っっている。私は若さにみなぎっていて、猪突した。たとえば、慣れない手つきの捕虫網を、徹底的にふりまわすことにした。断崖を横切っていくような高山病にまいってはいやうが、ふれるかぎりにはふりまわした。その結果、約

一千匹のチョウチョの生命をうばったのである。これだけでも、私は死んでから極楽に行くことを諦めている。どこからそのような情熱がきたのか、またそんな仕事がそれほどの努力に価するののか、私は正確に答えることも証明することもできない。ただ私は、本能的に、必要なことをしたと思っっている。

こういった話のほかにも、作戦計画についてはまだ語りたことが山ほどあるのだが、それらはこれからおりにふれてのべることにしよう。私たちは三月十八日の夜、羽田空港から機上の人となった。

娑羅双樹の白い花

カルカッタの灼熱は、まったく、頭がクラクラとするような気持であった。ヘルメット帽がなければ、すぐ死んでしまうだろうと思う、この町の真昼間である。よくこんな暑さの中に人間が生きているものだ。しかし現に生きているから仕方がない。しかも暑い街路の上をハダシで行く人びともある。目抜ききの電車通りには、ひきもきらぬ人間の洪水もあった。

そんなしだいで、フーグリ河畔にある緑濃い植物園を訪問したときには、まったく、ホッとした。ここも暑いけれど、少なくとも気分的には涼しいから。もっとも、これは、まだ寒い日本の春先から一挙にインドに着いたからではある。おりからインドは乾期だから、なおのこと猛暑に

はちがいなかった。じじつ、帰り道にふたたびこの町に立ち寄ったときには、モンズーンの雲が
 疑々と垂れこめていて、あんがい暑さを感じなかったのである。

それにしても、春先のこのひからびた猛暑の中には、昔、私の歩いたミクロネシアの緑濃い熱
 帯とはちがった、何かしらどぎつみの匂いがまじりこんでいた。扇風機をかけたばなしでホ
 テルのベッドにねころびながら、ふとそんなことを考える。ここは大連だ。インド半島などとい
 ったって、あまり大きすぎる半島だから、欧米人なんかは、よく「印度、亜大陸」というじ
 やあないか。大陸というものには、われわれ島国人から見れば、なんとなく一種の殺伐さとい
 うか、どぎつさというか、とにかくそういったものがあるものだ。満州にわたって、そういうもの
 がただよっている。よくいえば、一種ピリリとしたものがある。

初めて満州の旅をしたころ、日本の港にもどってきたときの印象が、脳裏をかすめた。そのと
 きの日本は、まるで東海の仙人島のように懐かしく柔らかく、絵に描いたようで、その細部まで
 も目のさめるように美しかった。南洋群島だって、優雅といえはいすぎかもしれないが、少な
 くもものやわらかかった。島とか、半島といったものは、そういう優雅なものなんだ。

暑くるしいので、反転しながら天井をみつめて、また考える。たしかに大陸は島とちがう。だ
 が、雨の降り方が多いか少ないかも、どぎつさを感じさせる原因かもしれない。何しろ日本みた
 いによく降るところでは、あたりが一面うっそうと緑で、それが柔らかみをもし出すのかもし

れない。山がたくさんあるから、土地に変化があって、なおのこと生き生きと緑が多いのかもし
 れない。私の頭にはふたたび、あの見たすかぎり蕭々とした北満の大平原が浮かび出た。

けれど、昼間みた目抜通りの人波にただよう一種のどぎつさは、人間の多すぎるところから発
 散してくるそれであったから、犬の子一匹いない北満の殺伐さとはすぐに直結しなかった。何か
 この双方のあいだにも大陸の持つ公約数はあるんだがなあ、などと思いつつ。

そこへボーイが洗濯物はないかとききにくる。出ていったと思うと、またべつのボーイが、お
 茶と菓子を持ってはいってくる。あたりまえな話だ。いいホテルなら、世界中どこへ行ったら
 て、そんなサービスをするのは、きまりきったことじゃないか、と思われるかもしれない。しか
 しそのときの私には、それがあたりまえではなかった。第一、ホテルの中にボーイが多すぎる。
 ホテルの前に立つ役のボーイがいる。ドアをあける役のボーイはまた別だ。廊下のところどころ
 に佇んでいるボーイ、お茶を持ってくるボーイ、洗濯物を取りにくるボーイ、といったぐあい
 である。あるいは、そのお役目のいくつかは一人で兼任しているのかもしれないが、たいてい別々
 であることは、顔つきや服装のちがいでわかる。便所に行くと、ドアをあけてくれるボーイがあ
 り、用をたして出てくると、水道の栓をひねってくれる。そして手を洗ったところを見はから
 ず、タオルをさしだしてくれる。

インドがカースト制度の強い国だと、かねがね聞かされていたものの、カースト制度の社会

が持っている雰囲気には、私にとってはこれをはじめであった。もちろんホテルのボーイのカーズトを今問題にしているのではない。ただ私は、天井をみていた空想の時間が、ボーイがはいってきたので中断され、ついでボーイの物腰をみていううちに、この一日二日のそういった経験を思い出したのであった。そしてまさに、カーズト制度の世界にいるんだと気づいたときに、あのどぎつさのえたいの知れない感じが、その制度ともからみついていることを悟った。

そうだ。カルカッタのどぎつさ。それは猛烈な暑さだけのせいでもなく、緑が少ないというせいばかりでもない。住んでいる人びとの発散する表情や物腰、街頭の光景、そういった人びととものの動きの中にも原因がやどっているんだらう。第一、大陸では人間の歴史が厳しいんだらう。砂塵を蹴立てておそいかかるジンギスカンの騎兵隊、カイバル峠から、よき獲物とばかり炎熱のインダス川平原を見おろしているチムールの軍団。行って見たこともないくせに、貧弱な歴史の知識がもやもやと飛びだしてきて、天井のあたりにそんな空想画を作り上げる。そしてどういふことになるんだ。そうだ、そこでももちろん戦闘がある。つづいて、残酷な征服、容赦のない擄取、異民族の法律と、異国人の習慣の押し売り。カーズト制度の起原は知らないが、何かこういって大陸の歴史の厳しさから生まれたものだと直感する。インドの風土のどぎつさには、そういうものがまた絡みついてるのだから。

ふと、中国農民の物悲しそうな表情が、辮髮姿とともに浮かんできえた。だが、それにつづい

て、昨日今日みたカルカッタの場末の民衆の、もっと物悲しい、うつろな表情がでてきた。そうすると、中国農民たちの顔、いや、長春や奉天の苦力たちの顔までもが、それよりはずっと生活力にみちた生き生きとしたものに思われてきた。

それにしてもこの暑さはどうだ。やはり暑さは問題である。その暑さの中に人波が押しあいへしあいしているじゃないか。その底にはなんともいえない寂しさが流れているようにも思う。その救いのない日盛りの下に、たとい昨日見たような植物園の静けさがあったとて同じことだ。熱帯の、そして大陸の、緑の木陰は、なんともいえない、しいんとした寂しさにひたされている。

これから十日ほど後に、私はふたたびネパールの亜熱帯の谷間を歩いてきた。腰をおろした頭上には、娑羅双樹のあおおと気持よくのびた枝が広がっていた。そして、その緑の梢には、おりから細かく白い花が一面に音もなく咲き、ほのかな香りをあたりになだよわせていた。梢越しのバックに空が青く明かるく広がっていたのが、よけいにあわれであった。その雪のような小花が、そのときハラハラと散っていたかどうかは、もう忘れてしまった。けれどそのとき、お釈迦様がこういった木やボダイジュの下で、救いのない人間の無常を感じたことを、いと自然なことと思つたのは事実である。暑かった。しかし、もし暑くなかったら、私はそんな暇なことを実感することもなかったらうと思う。

ヒマラヤの前衛線を越える

カルカッタからネパールの首府カトマンズまでは、近年開けたインド航空会社の定期航空路がある。これによれば、カルカッタを早朝に発つて、正午ごろにはカトマンズに着いてしまうのである。われわれはこれを利用することになった。これ以外に、この国の首府へ乗物で着く方法は無かったのである。首府とインド平野とのあいだには、まだ自動車道路さえも完成してはいなかったのだから。

機上から見おろす乾燥期のヒンドスタン大平野は、どこもかしこも茶褐色に埃っぽく見えた。さすがのガンジス川も、かなりやせほそって見える。いたるところ農耕地や干上がった溜池がみえ、点在する村落のみが、猛暑から身を守るように緑の木陰に取り巻かれている。ムザファルプールでちょっと着陸すれば、タラップに足をふみだしたとたんに、ふたたび、あの灼熱した空気が、ムッと押しよせてくる。飛行場のかたわらの畑には、栄養不良のコムギとサツマイモが、ひからびた土壌の上にはばらばらと生えていた。

ここからふたたび飛び立つと、機首は北に向かって、いよいよ目ざすヒマラヤ山系に飛びこんでゆくのである。ヒマラヤ山系というのは、世界第一の山脈群だけに、その幅も広い。日本では、東北地方の横幅くらいは十分ある。これだけの幅の中に、いくつもの山脈が、だいたい並行して東西に走っている。

その中で、なんとといっても圧倒的なのが、八〇〇〇メートル級の巨峰を数多く擁している大ヒマラヤ山脈である。乗り組んだ私たちの仲間の目は、この大ヒマラヤの巨峰の姿が現われるのを、今やおそしと待ちかまえている。ときどき、もどかしそうにガラス窓をこすっている者もいる。が、残念なことに、前モンソン期の北インドの上空には、何かしら、目にみえぬほどこまかいチリが高空までただよっているらしい。そのため、美しく晴れているのに、空気があまり透明とはいえなかった。だから、巨峰群が窓外に姿を現わしはしたが、一同は思ったほどの満足が得られなかった。

ところで私の目は、もうひとつ注目しなければならぬものを追って、一心に下界に注がれていた。それはタライである。ヒマラヤ山系がついにインド平野にのぞむ最前衛線として、シワリク山脈というのが、大ヒマラヤとほぼ並行して走っている。この山脈は、またこのあたりではマハーバーラタ山脈ともいわれ、いわばネパール国にはいる前衛線をなしているのだ。地図を見ると、せいぜい二〇〇〇メートルから二五〇〇メートルの高度なのであるが、いろいろな点できわめて注目すべき山脈である。この山脈が北インド平野にのぞむ山麓に沿って、タライと呼ばれる密林地帯が颯々と带状に残っているのである。タライの密林帯は、世界にきこえた猛獣狩りの名所だ。インド洋から吹きつけるモンソンの湿気が、このシワリク山脈にぶつかり、南斜面にたくさん雨を降らす。そのうえに、この山麓は炎熱の地ときているので、悪性のマラリア、

その他の疫病が猛威をふるうのである。そこで、毎年毎年たくさん人間が、この目に見えない悪魔の手にかかって死んでしまう。

猛獸よりもはるかに恐ろしいのは、この熱帯の疫病だといわれる。インド教には有名なドゥルガという女神が信じられているが、この女神は、またひじょうに恐るべき半面があつて、彼女は人間どもに毎年犠牲を要求する。雨期になると、彼女は、この地方でアウルといわれる悪性のマラリヤを虎のように放ち、この目に見えない虎に人間の命を食わせるのだそうである。こういうわけで、あの人間に充満した北インド平野にすぐ地つづきでありながら、タライにのみはこういうふうに入煙まねな帯状の密林帯が残ることになったのだらう。今でもタライを横切る旅人は、夜のあけないうちから出発して、その日のうちに、この物騒なドゥルガ女神のすみ家を通してしまふということだ。

日本人のセンスでゆくと、シワリク山脈の天険が、ネパールというヒマラヤ山中の国を守つたのだらうと考へてしまふ。それも確かに事実ではあるが、地図を開いてみると、ネパールとインドの国境は、シワリクの分水嶺を走っておらず、北インド平野の北寄りを走つていのである。つまりネパールは、インド平野の中にまで領土を広げている。よく注意すると、その国境はタライの南縁とだいたい一致しているのである。ネパールを守つたのは、まずもつてタライなのであらう。

この国は十八世紀後半から十九世紀前半にかけて国力が充実し、しきりに周囲を征服して領土を広げたのだ。そのあげく、カルカッタを中心に勢力を広げつゝあつた英国の東インド会社と衝突してしまつた。両者の間には何度も戦闘があつたが、英国の遠征軍が惨敗を喫したこともあつた。その遠征軍は勢いこんでネパールの首府を攻めるつもりで出かけたところ、タライを通過したため、バタバタと疫病でたおれてしまつた。そこを山岳戦に長じたネパール軍にたたかされたのである。戦死者は、戦闘でやられた者よりもドゥルガ女神にいらまれた数の方が多かつたらしい。

以来両者のにらみあいには和睦わくが転じて今日に至つた。十九世紀の中ごろには、英領インドで未曾有の大反乱が起つたが、このときには、ネパールの徳川家康とくがわといふべきジャングハバドゥールが英国軍を助けて反乱を鎮圧した。英国とネパールの友好関係は、これ以来ますます固まつてきたのである。しかしネパールは内心英国はじめ西欧の侵略をいつも警戒してゐた。だから十九世紀のはじめ以来、外国人、とくに欧米人の入国は、すっかり御法度ごはつどになつてしまつたのである。英国だけは公使を首府のカトマンズに置いてきたが、そういった数えるほどの外交官も、この首府の近辺以外を離れて国内を歩くことは許されなかつた。ジャングハバドゥール以来、歴代の將軍は、毎年冬に、タライにでかけて、豪華な猛獸狩りをもよおすのが恒例となつた。この猛獸狩りは、ネパール中のおもな貴族階級が、その妻子や一族郎党まで引きつれて、なかば、園遊会をかねたぜいたくきまるものだったらしい。しかしそれも、ただの東洋的豪奢者ではなくて、

外国に対する一種のデモンストレーションだったろう。

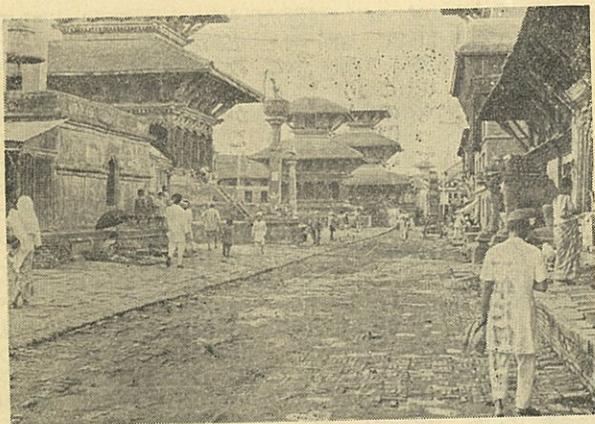
さてそのタライは、しかし、機上からみると、まことにあつけないものだった。森林地帯らしいものが現われてきたかと思うと、もう飛行機はシワリク山脈にかり出しした。おそらく近年には、さすがのタライもだんだん開拓されたのであろうか。ところが、いったん姿を消した耕作地は、シワリクの稜線に近づくとともに、またもやたくさんあらわれてきた。みごとに段段畑が見わたすかぎり山頂や山腹に等高線を描いている。機は見るみる山腹に近寄り、あわや激突するかというすれすれの低さで、かろうじて飛びこえた。その丘上に、手ごとくほどに、エキゾチックなネパールの農家を見おろすことができた。私たち日本人の通念は、谷間に田畑があるもので、山のテッペンには森林におおわれているものと相場がきまっていたから、タライからシワリクの山嶺さんてんにかけての景観の推移は、それじしん、失望のようでもあれば好奇心の満足のようでもあった。

そのシワリクを越えると、もういくばくもなく、カトマンズのしずかに横たわる盆地となる。京都盆地ほどのこの盆地は、これはまた目もさめるような緑のカーペット。あのひからびたヒンドスタン平原とは打ってかわっている。緑の沃野よくやの中に赤瓦が目をはいて、首府の町や村々は、絵に描いたような、こまやかな柔らかない平和の色調に包まれていた。

ネパールの首府カトマンズ

カトマンズは、じつさい、降り立ってみても、ロマンチックな町だった。まず驚かされるのはお寺の多いこと。まるでお寺で埋まっているかと思うばかりだ。日本ではお寺の多いこと随一の京都の町に住みなれた私にも、これは驚きである。そのお寺の建物も、見なれないヒンズー教のものほかに、日本の寺院建築から受ける印象と通じる木造のものが少なくない。とくに五重の塔に類するパゴダは、まさに奈良の印象のそれである。いや、むしろ本家はこのネパールだったろう。思えば文化というものが海山千里を越える足の長さは、私の想像以上のものらしい。

後日物語であるが、私はネパールのさる高官を案内して、奈良の諸寺諸仏や法隆寺ほつりゅうじを見せて歩いたことがあった。欧米人向きのこの月並みコースも、彼



1 バタンの町の中心地（旧王宮付近）

氏には睡眠剤だったらしい。私の説明に退屈そうな相槌を打つばかりだった。無理もない。お釈迦様が生まれたのも、大乘仏教の拠点となったのも、ネパールの方が本家本元なんだから。そしてカトマンズからほんの一里か二里へだたったバタンの町には、まぎれもなくアソカ王が杖をひいて建てたストゥパ（仏舍利塔）が残っていたのだから。

この町では、仏教のお寺とヒンズー教のお寺とが区別できなかった。だれにきいてもむだであった。それほどにこの両者が混交してあたかも日本の神仏混交のような状態にある。ヒンズー教と仏教とがこれほど仲よく握手しているところは、地球上どこにもないのかもしれない。私の見たところ、ネパールの中だつて、この盆地以外のところでは、たいていヒンズー教とチベット仏教（つまりラマ教）とが、截然と分けるほどに、異なった色合いで分かれていた。

お祭りもまた、やたらに多いらしい。というのは、日本の登山隊が来たということを珍らしがつて、この国の上流紳士たちが、つぎからつぎへとやってくる。そして、隊員がヘキエキするほど好意をもって、今日ほどこそこへお祭りを見に行こう、明日ほどこそへバドミンソンの試合を見に行こう、とさそいだすのである。お祭り見物の勧誘があまり多いので、私はある紳士にきいてみた。「いったい、一年に何回ほどお祭りがありますか？」「さあ、三日に一度くらいあるでしょう。」

そのお祭りのひとつ、マチェンドラ祭というのを見に行つた。わりあい大きなお祭りとも見え

て、たいへんな人出である。とある広場で山車をみた。その山車の形がなんと京都の祇園祭りの「鉦」にそっくりではないか。これに綱をつけて町の通りを練りまわしてゆく。このマチェンドラ祭の高い塔は、緑の木の葉でびっしりおおわれるのである。マチェンドラという神は魚の形で象徴され、水の神である。この神様をまつらないと、早になるそうである。緑の葉でおおうのも、雨にたいする願望と関係があるのかもしれない。

お祭りの行列は、商店がびっしり軒を接するせまい下町の通りにはいりこんだ。これらの家々は、古風な美しい彫刻のある窓ワクやテラスを持って、三階建や四階建になっている。一階を店に使い、二階以上には町の人たちが住んでいる。私はそういった家の三階に陣取つた。行列のにぎやかな美しさもさることながら、サリィをまとつた婦人たちが、向かいの家々から半身を乗り出してお祭りを見ている姿の方が魅力的であつた。それから、彼らが階上のテラスに美しい草花を鉢植にして飾るのが好きなのも、いかにも好ましい習慣であつた。

こういつた町の情緒や風俗は、きつとインドふうのにおいの強いものだろう。けれど、町の男女の表情は、あのにぎやかさをきわめたカルカッタのそれよりも、もっと素朴で活気のあるものに思われる。ネパールの方が、どうやら無邪気らしい。その顔たちは、目や鼻の彫りこみの強いいかにもインド人ふうのそれから、日本人と瓜二つの蒙古人型にいたるまで種々雑多である。ここはどうやら、北インド系統の人種と蒙古人種との推移点らしかった。カトマンズの屋間はや

はり暑かったが、日本の夏といった程度で、もはや耐えられないほどのものではない。ここは海抜約一三〇〇メートル余。

いったい年がら年中お祭りをしている、のんきな見物ばかりしては、どうして町の人間は飯を食ってゆけるんだらうと、余計なことを考えてみる。この疑問は、とうとう日本に帰ってくるまで未解決で持ち越しつづけた。しかしその後、資料を整理してゆくうちに、どうやらいちおうの結論となった。それはこうである。

まずネパールでは、小さい村にはせいぜい一つ二つ祠ほくらがあって、お祭りも一年に一回あるかなのである。大きな町になるほど、神社仏閣の数もふえ、お祭りの回数も多い。ところで祭日の前後というのは、同時にまた市の立つ日である。だから大きい町ほど市日が多いのである。いいかえると、大きい町ほど商業が盛んなのだ。庶民が食っているのは、つまりこの商業なのである。日本でも昔あった三日市とか八日市のたぐい、あるいは今も見られる京都の北野神社きたのじんじやの縁日えんじちといったたぐいのもの。そういった宗教と商業との結びつきが、はるかに、大規模に徹底的になったものが、つまりカトマンズやポカラといったネパールの都市のお祭りの姿であらう。

思想は進歩的、生活は保守的の貴族たち

それにしても、珍しい外国登山隊をもてなしてくれた上流階級の人たちの生活は、私たちに

は何か浮世ばなれしたゆつたりさをもっていた。今は行政府の建物になっている旧将軍家の豪華な建物や王宮などといったものをのぞいても、街中にはしばしば個人個人の邸宅がある。また町の郊外には、田園の中に、いかにも荘宅しやうたくというにふさわしい、堂々たる民家が煉瓦れんが作りに瓦屋根かやねで絵のような調和をたたえた姿をみせていた。

こういった邸宅は上流の貴族的な階級の人たちのものだという。そして、私とその内部をいくぶんでものぞき知ることのできた、ごくわずかの例だけからみても、なかなか立派なものである。電気洗濯機だの電気冷蔵庫だのという、気のきいた近代的な設備こそとほしく、そして古めかしいけれど、いったい日本の隊員のだれがこんなりっぱな私邸しりていを持っているだらう。ひよっとすると、日本の大臣でさえ、こんな邸宅を持っている人はまれではないかと思う。

上流階級の若い子弟たちは、私が帰りみちにふたたびこの町にたどりついたときにも、親切にもてなしてくれた。いっしょにピンポンもやり、ラグビーの試合も見にゆき、議論も戦わせた。ただ幸か不幸か、日本の今の青年諸君には、たとえ上流階級にしたところで、彼らのようなのんびりさはなくまっている。毎日のようにキャメラをふらさげてお祭り見物やパーティーにでかけたり、郊外に散策さんさくに出たり、はては世界情勢についての政治論議や哲学的論議さえも、ほんとうに春日長しかるとしという気分気分でやることは、もうなんとなく望めない夢となっているのじゃないか。けれど、この町の上流階級には、まだそういった雰囲気ふんいきがただよっている。

蛍光灯も輝き、映画館にも人が満員というこの立派な町に、自動車がたくさん走っていたってふしぎではないはずである。しかしなんと、町の広場に客を待たたくさんのタクシーこそ見うけたけれど、トラックと称する産業用自動車には一台も出くわさないのだ。いや、私は一度だけそれを見た。ただしそれにはグルカ兵が満載されていたのである。煉瓦とか薪とか米俵なんかはのつていなかった。煉瓦は、カンカン照りの大通りを、ハダシの男が丸竹の天秤棒で続々とかついで運んでいた。薪は郊外の方向から、前額にまわしたバンドの助けをかりて男女が背中に負ってくる。

よく考えてみると、この町に外部から自動車などはいってくる道路はなかったのだ。重いものは、インド平野から山地にかかるあたりで分解でもしてかついでくるよりほかに仕方があるまい。私は携行していたネパールについての書物を繰ってみる。あった、あった。なんだかひじょうに重そうな品物を、何十人という雲助たちが力を合わせて木のわくのようなものに乗せてかついでくる写真があった。それも、とんでもない険しい山道である。じっさい、この町にとつてはおびただしい数の、あのタクシーは、こういうふうにして、分解され、かつがれ、ふたたび組み立てられて、はるばるあのインド平原から持ちこまれたものなんだ。

さてその自動車のおかげで、いったいどれだけ広く国中を走りまわれるのだろうか。これについてはもう明々白々である。いよいよこの町を出発した日に、私たちはものの数キロ北の方へ自動

車に乗って走ったところで、おりてしまわねばならなかった。また平坦な盆地の中だけけれど、郊外に出たとたんにこの始末である。そればかりではない。そこから歩き出した細道は、十分と歩かないほどで小さな川にぶつかってしまった。橋がない。なるべく足をぬらしたくないという料簡の隊員は、人夫にオンブしてもらって向こう岸まで渡るし、私のような不精者は靴のままジャブジャブと徒渉してしまった。こういう調子だから、自動車なるものが、もっぱら首府のカトマンズの町中と、せいぜいその郊外のような近さにあるパタンとかバトガオンといった町の範囲にしか奉仕していないことは明きらかである。私たちからみれば、まことにぜいたくな自動車の使い方というものだ。これ以外、少なくともシワリク山脈の北側では、ネパール国中どこへ行っても自動車などはない。

ところで、われわれがネパールの上流階級の悠然たる生活水準にうらやましさを感じているかと思うと、その人たちはまた逆にわれわれと接して驚き、かつうらやましがっている。われわれの持参したテントやシュラーフザックはいわずもがな、写真機もテープレコーダーもラジオも、みな日本製だときいてびっくりしている。「メイド・イン・ジャパン。ふうむ。」といった調子である。「日本とはまあなんと幸せな国だろう。」まんざらお世辞でもない嘆声をつぶやいたインテリがいた。

「こんな立派な登山隊をはるばる派遣する費用は、あなたの国の政府が出したんだろう。」「いや

これは毎日新聞社という、日本の一新聞社が後援したんですよ。」
 「一新聞社にそんなことができるとは、二の句がつけなかつたらしい。それにしても、ヒマラヤくんだりまで来ることが出来る私たち隊員は、彼らからみれば、日本でも有数の大金持階級にちがいないと思ひこんだのも無理はない。あに計らんや、私たち隊員の多くがドイツのサラリーマンで、その日ぐらしの連中とは。これも後日物語であるが、ネパールから日本へ留学にきたV君やR君は、旧知のわれわれの日本における住み家が、あわれな二階借りやポロアパートだったことに深い失望を感じたことであろう。まったく日本国民は、いつのまにか、実質上はるかに社会化されていたのだ。日本は、ある意味では、社会主義国である。」

私はまた帰途この町ですごしたある夕べの、愉快、かつ皮肉な議論のひとつを思い出す。そのとき、この町の上流階級の青年諸君たちは、好きな政治談議の方へ私たち二人をひきずりこんで行った。彼らの熱心な主張は、日本でいえばまず社会党左派といったあたりの、たいへん進歩的なものだった。そして彼らは、私と中尾君の二人を、保守的であるといつてやつけたものである。しかしこの進歩的な青年諸君は、ちやうどあの古歌を連想させる生活、「大宮人は桜かざして今日も暮しつ」という生活をしてるではないか。思想と生活とがこんなに分離していても、それを彼らは矛盾と感じていないらしい。私たちはにこにここと笑いながら、彼らの鋭鋒えいほうの前にカブトを脱いでおいた。

2 お偉い人は籠かごで行く……

莊宅しょうたくに住む人びとは、地方に莊園しょうえんを持っている大地主だということだった。たとえばわれわれの世話をよくしてくれたD君も、タライに広い莊園があるそうである。そこからの地代で、こういう上流階級の生活が支えられているらしい。彼らは一昔前は莊園貴族であったのかもしれない。もう一昔前には莊園領主であったのかもしれない。しかし彼らの多くは、今ではこの首府近辺の都市に住んで、いわば不在地主となっているようである。そういう人たちによって、いわば、あの都市の消費文化が支えられているのである。中央都市に住む魅力、そしてできれば宮廷で栄職について花を咲かせたいという願望は、たとい宮廷が近代的な行政府となり、ネパールが立憲制の議會政治の国となっても、実質的に当分は変わらないと思う。ネパールはある意味で、中央集権のいちじるしく進んだ国のようである。ちやうどそれは、日本が近代的な政治形態の国になっても、いやそうなればなるほど、蟻あちの甘きあまに集まるように、東京へ東京へと人間が集まってくるのに似ている。

こういって莊園を、この国ではビルタと呼んでいる。ビ

ルタもここ数年は中央政府に税金をおさめなければならなくなったそうだ。カトマンズを出発して数日後のことであるが、ある夕方私たちは、とある暑くるしい谷あいの村落にテントを張った。村人に村の生活でも聞こうと思つて話しかけたら、彼は私を中央政府の役人とても間違えたのか、しきりに税金の不平を訴えた。この村の界限は、どうやらビルタの領分だったらしい。ビルタが不在地主の所有するところであつても、そのかわりに現地の村々には、たいてい二、三人ずつの年貢取りたて役がいるという。

「ただ、家を一軒建てただけなのに、一年間に、二ルピー(約百円)も税金を取りたてにきました。しかも彼らは、納付しても受領証をよこさないんですよ。だからわしらは、今年から申し合せて払わないことにしましたよ。モシル村(隣村)の連中なんざあ、もう三年越しに不払い運動をやっていますさあ。」

莊園時代からインド航空会社の定期便のかよう時代までをかかえて、この国民も今やたいへんな時期にさしかかっているにちがいない。

生殖を司る性力の女神

トリスリバザール。うっそうたる木陰をたち割つて、乳白色の奔流が岸いっばいにみなぎり、泡だつていた。焼けつくような谷底にもかかわらず、その川べりに近づけば一陣の涼風が頬を打

つ。「水浴びでもしなくては……。」などと喉を鳴らしたつて、どっこい、そうはゆかない。水ぎわに降り立って汗ばんだ手を浸せば、これはまた手が切れるように冷やかなのだ。

激流をまたいで立派なワイヤーの吊橋がかかっていた。橋の両たもとには、斜面に人家が密集している。煉瓦作りに赤みがかつた瓦ぶきの二階建や三階建。石畳の道が迷路のようにそのあいだを縫つて登つてゆく。両側には反物や雑貨、マツチ、タバコ、さてはトウガラシ、シヨウガ、その他の野菜を売る店が軒並みにつづく。が、それもまもなくとぎれ、私たちは町はずれのマンゴー園にはいりこんでテントを張った。人夫たちは用がすむと町の方へ姿を消し、入れかわつて町びとが数人珍らしそうにテント場を見物にくる。

それはカトマンズを登つて五日めのことだった。私たちのコースは、海拔一三〇〇メートル以上もある「ネパール谷」の盆地から、いったんは海拔二〇〇〇メートル以上のカカニ丘を越え、それから一挙に亜熱帯の谷間へくだつていたのである。朝には温帯を出発して夕刻には熱帯へ。その景観の激変には、注意深い旅人なら驚嘆せずにはおられないのだ。坂道をくだつてゆくとともに、われわれはまるで蒸風呂のなかに落ちこんでゆくようなものだった。とつぜん、ボダイジュ、パンヤン、娑羅双樹などが現われ、農家を囲んでいるバナナとパパヤとマンゴーが私の目をひきつけた。あつと思つた足もとから、私たちのふみしめている土も、あの熱帯特有の紅色に変わつてゆく。私は、立ちどまってバロメーターを見る。「海拔一二〇〇メートル。」向かい側の丘

をハンドレベルでのぞく。それでもやはり、紅色のラテライト土は、ほぼ同じ高さまではいあがつていた。海拔一二〇〇メートル。巖密にいえばそれは亜熱帯の上限であった。

シワリク山脈と大ヒマラーヤ山脈とのあいだには、こんな熱帯性の谷間と丘陵とが、迷路のように錯綜していた。私たちは、まさかヒマラーヤに来てまで熱帯を歩くとは思わなかった。しかも私たちの第一段階のコース——カトマンズとポカラとを結ぶそれ——は、まさにこの熱帯を縫っている。とうとう二週間あまりも私たちはそういう所を歩くことになってしまった。私たちはバナナをほおぼり、マンゴーやポダイジュの木陰に逃げこんでは汗をぬぐった。自然林はどこにも残っておらず、いたるところといてよいほど田畑になっている。急峻な丘の頂^{いたた}までもがそういう調子であった。なかんずく谷間の部分には、雨期ともなれば一面の水田と化するだろう乾田がひろがっていた。おりからの乾燥期のこととて、私たちの皮膚はまずヒリリとするほど焼けあがり、まもなく一皮むけてしまった。牛とともに水牛の群れがあちこちに、水を求めてうるついているのだった。寝ぐるしい夜をテントの中からはいだして、月影のもとに静まりかえる茂みや丘のたたずまいを眺めまわしていると、どこか丘の上の部落らしく闇空にかがり火が明滅し、銅羅^{たたら}や太鼓の音が異様な情緒をさそうのであった。

トリスリ^リバザールは、そんな亜熱帯の谷間にあった。キャンプ地のマンゴーの茂みを漏れる光はわずかである。しかしその下には、珍らしい亜熱帯の蝶が舞っていた。小一時間捕虫網をふ

ると、私は蝶を入れた三角紙の上に書いてゆく。

「トリスリ^リバザール、海拔六〇〇メートル。」

インド測量部作製の八マイル対一インチの地図を見る。チベット高原から流れ出たトリスリ^リガンダキという川が、大ヒマラーヤをたち割って、このマンゴー園のかたわらを南へと走っている。あの川水の乳白色は、氷河から融け出た水流につきものなのだ。もちろん、手の切れるようなあの冷たさも、そこから運んできたものにちがいない。しかしこの川筋は、そのうえに、ヒマラーヤを越えてチベットから、荷物を山のようにかついだ旅人の群れをも運んでくるらしい。

われわれの歩んできた道、それはカトマンズとポカラとを結んで東西に走る、いわばネパールの東海道だ。この東海道が、南北に走るトリスリ^リガンダキの交通路と交わったところに、このバザールの町ができたのである。そういえばチベット人が時おりうるついていた。バザールというのは市場町のことである。

テント場の見物人の中に、知的な顔をした、すこし弱々しそうな少年がいた。

「君はこの町に住んでいるのかい？」

「いや、カトマンズから来たんだよ。二、三日すればここでお祭りがあるから、それを見に来たんだよ。」

あくる日もよいお天気だった。私たちはバザールを出はずれて、西の方ポカラをめざして歩き

出した。道は細道で、谷あいの乾田を縫っていた。まもなく数人の女づれがやってきた。黒っぽい着物を着た彼女らは、サンゴ珠や銀貨のようなものをつらねた頸かざりをいくつもかけ、腕にもいくつとなく腕環をはめ、そのうえに耳たぶには耳かざりが輝いており、まさに満艦飾まんかんしやく。そしてガヤガヤと楽しそうだ。きけばトリスリバザールのすぐ東の丘上にあるナワコットという町のお祭りにゆくんたという。そこには、有名なヒンズー教のお寺があるのだ。昨日の少年の言っていた、あのお祭りのことだろう。

まもなく、またもや十数人の一行がやってきた。おやおやと思うまもなく、また一隊。それから、来るわ来るわ、続々とやってくる。どれもこれも東に向かつて、トリスリバザールへ、ナワコットへと急いでいる。

「どちらへ行くんだ？」

「ナワコットへ。お祭りへ。」

そんな応答ばかりである。

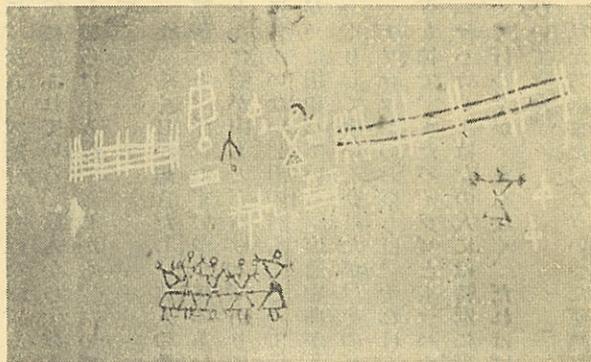
正午ごろになった。東へ向かう旅人は、さながら颯々長蛇えんなんしやうらの列で、それが、炎暑の田圃道たほを練ってゆくではないか。これじゃ東海道どころではない、銀座通りだ、などとくだらないことを言いながら、私たちばかりは西へ西へと歩いてゆく。

いったいこれだけの人間が、この山奥のどこから集まってくるんだらう。しかもふしぎなことには、旅人の大部分が女性なのである。彼女らは例の満艦飾で、いかにも楽しげにさわがしく、元氣にあふれている。数人から十数人ずつ一隊をなした各チームの中には、男性たちもいた。しかし彼らは小人数で、しかも、たいていチームのお尻の方に、お供か護衛役かといった恰好かっこうでついでくる。

ようやく日が傾きだし、旅人の数もまばらになってきた。私たちは、今夜の宿りとする峠上の部落へと、汗をぬぐいつつ林のあいだをつづら折りに登っていた。そのとき、上の方から、みごとな合唱が山もどろけとばかりにひびいてきた。合唱はだんだん近づく。おもに女性の合唱団にちがいない。男の声もまじっていたが、あきらかに女性たちがリードし、男たちはそれにしたがって相和している。坂道を曲がると、見なれない私たちが現われたので、彼女らはいささかびつくりして歌いそびれたが、そのビリっことに二、三人の男がお供していた。

ナワコットのお祭りは、それほどにもこの山奥の人びとをひきつけているのだ。神様はドゥルガ女神で、またバイラビともマハカリとも呼ばれている。お祭りはその春の大祭なのである。「マハカリは女の人には特別に御利益ごりやくがあるんです。」そう説明した彼女たちの一行は遠ざかって行ったが、まもなく、だれははかるところもないような威勢のよい合唱が、谷間の方からひびいてきた。

私たちはまた、こういった亜熱帯の村々の農家の壁に、ときおり稚拙ちせつな味わい捨てがたい子供



3 農家の壁に描かれた楽書のような壁画

の楽書のような壁画をみかけた。あるとき、私はその楽書のひとつを、なんのために描かれているものか、村人にたずねた。

「ああ、それですか。これは毎月一度、満月祭の晩に神様に捧げるために描くんですよ。ほら、ここに百姓がクワなどを持って農園に出かけようとしているでしょう。そのまわりにあるのは、織機やワタ繰機といった道具ですよ。ほら、ここに畑の柵と果樹があるでしょう。これですか。これは娘が果樹の苗を手入れしているところです。ここに描かれているのは、女たちが集まってダンスをしているところです。」

お祭りの晩に、そら、この絵の上にある壁の凹みに灯火をつけて神様に果実の豊饒を祈るのです。お祭りをやっつてから、初の果実を農園にとりにゆくのです。」

「この絵はだれが描いたのですか。」

「この家の女です。そら、そこにいるでしょう。」

なるほど彼女はすこしへだたった路傍に腰をおろしていた。中年の女だ。私は彼女に、この絵の意味をもうすこし説明してくれと頼んだ。けれど彼女は、そんな秘密のことを外来者にはいえないといったふうに、にやりとほほえんで何も語ろうとはしなかった。こういった満月祭のための壁画は、かならず女性の手によって描かれるということは、その後に追々わかってきた。

この国のネワール族という民族には、おもしろい風習がある。すなわち、少女は、まだ処女の時代に、ベールという木の実と儀礼的に結婚させられるのである。

バイラビは「恐るべき神」の意味だというし、マハカリーは「大黒神」という意味である。ドウルガは恐るべき神でもあるとともに、豊饒と生殖を司る神でもある。生殖を司る彼女は、また性力の象徴でもある。性の力、生殖の力は、とりわけ女性の持つものだといった感じ方が、この地方の住民を支配しているのだろうか。

血まみれの斧を持った男に会う

女性合唱団をきいた峠の上で一泊したあくる日の朝、私たちは山田のあいだをぬって西の谷間におりて行った。ところが、とある田圃のなかに二メートルほどの岩がうずくまっていて、少年をつれた男が、そのかたわらにいるのを発見した。見てみると、器に入れたミルクを岩に注ぎかけ、それから二人で手を合わせて岩を拜んでいる。

「何をしていなさるのかね？」

「トウモロコシがよく実のるように祈っているんです。」

「どんな神様かね？」

「チーグですよ。蛇の神様です。」

私は思い出した。ネパール谷のはずれの部落で泊まったときも、村はずれの畑のわきの石に、ミルクをぶっかけて生米をほらまいて祈った婆さんがあったようだ。また私は思い出した。それは旅立ちの初めの日にかよったバラジという離宮にある、有名な浮仏の像である。涼しい木立の中に、美しく石で畳んだ長方形のプールがあって、その水の中に、黒い岩を刻んで作ったビシユスー神のうるわしい神像が横たわっている。しかしその神の横たわっているクッションは、見るからに気味わるくからみあった蛇——ユブラ——なのである。清い水は神像の顔のあたりをわずかに水面に出す程度で、しかも淀んだプールではない。水はあふれて、百八つのカケヒの口から噴水のように流れ落ちていた。

私たちはまた、この峠の下り道で、一つの石積みほこの祠を見つけた。それはほんのカマドのようなお粗末な野天のものであったが、その祠に並べられた御神体は、黒ずんだ丸く長い石数個なのである。(口絵「ヒマラヤを冒す」の4参照)これ以来御神体に興味を持ちだした私は、失敬にも、その後神様の祠があるとなるべく中をのぞくように心がけた。シバ神をまつるといふ四角い建物の中に、やはり丸っ



4 水の中に横たわるビシユスー神の像 (依田孝真氏撮影)

こい石がすえてあるのを発見したのは、それから数日後のことである。

黒っぽく丸長いこれらの御神体が、精力の象徴たる男根をあらわしているということ、むしろ帰ってから人に教えられたところである。こういった丸っこい石が二つばかりすわっていて、そのかたわらに亭々たるイチジク科の大木が伸びているような場所は、そのほかにもときおり見うけることがあった。そういった場所を通りすぎるとき、村人たちが合掌して通りすぎる光景もみられた。あるときには、その石にシバ神が手にする三叉の鉞ほこが立ってかけてあることもあった。またあるときには、そういった石と大木とが、シメナワで張りめぐらされ、その下のところに村人が水甕みづかをかかえて集まるカケヒ場の泉の見られることもあった。しかし私には、なぜ石がこういふふうにならぬか、その崇拝の対象になっているか、はわからなかった。ただ石が抱えているものすごい生殖力あるいは精力が作用して、そのかたわらの大木がすくすくと伸びたんだ、といった幻想が、なんとなく私に浮かんできた。

祠の御神体として鎮座しますシバ神の石には、敬虔な村人がこすりつけた赤や白の宗教用の顔料のほかに、たいていのばあい、ヨモギだとか、そのほかの青々とした草木の枝葉がお供えしてあった。この青葉は、けっして水の筒などに挿してあるのではない。それは、まるでそうしなければならぬように、痛々しくももぎとられて、その青春を神に捧げるおのが使命をはたしたように、まだ生ままましさを残しつつ萎えて横たわっていた。私は無言のうちに、そのお供えが、日本の神前の櫛や仏前に活けられたお花のお供えとはちがった感覚のものであることを汲み取った。それは花のお供えのような装飾的なものをふくんではないし、また、活けられた草花のように、できるだけ新鮮さをたもととしたものでもないようだ。

それは破壊と創造の神というシバ神に捧げられるにふさわしい供え方ではないか。ところで、そういったシバ神やドゥルガ女神の祠の前に、私たちはよく点々たる血痕を見いだした。もちろんその前で、羊や山羊、ときには水牛が犠牲に供えられたのである。「恐るべき神」。その神は、犠牲の血を見て慰められるのであらう。生ままましい草木の枝葉が供えられるやり方にも、私のような日本の仏教徒には何かなじめない、「恐るべき神」のどぎついにおいがただよっているのである。

犠牲といえ、私たちは、もっとすさまじい殺人事件の物語にぶつかることになった。それは、やはり大ヒマラーヤを貫流して南下するマルシャンディーという川にぶつかった渡河点にあ

る、暑いバザールの村にたどりついたときのことである。細道の向こうから来てすれ違った男が、ひからびた血潮のべつとりとついた斧をさげているではないか。ぎょっとした私たちが、その男から聞いた話は、つぎのような悲しい物語であった。

バザールの村からほど遠からぬこの男の村に、善良な農夫がその善良な妻と幸福な生活を送っていた。ところがまさに昨夜のこと、その農夫は夢で神のお告げを聞いたのである。

「おまえは妻をただちに殺さねばならない。」

これは、神が妻の血を犠牲に要求したという意味なのかどうなのかはわからない。妻は、なんの過もなく夫に仕えていたのだそうである。それにもかかわらず、夢のお告げで目覚めた夫は、あの斧を手にとつて、滅多打ちに自分の妻を切り殺してしまったのである。夜が明けた。村人はこの殺人事件を、たった今、この地区の裁判官兼警察官に届け出るべく、血潮をかぶった斧を持って私たちとすれちがったのだ。

さて話は先へ飛ぶ。これから十日もたったころだろうか、私たちは、大ヒマラーヤを横切るカリガンダキという大河の川谷を歩いてきた。そのときつれていたポーターの一人が、河床の石礫を見まわしながらうろろしていたが、やがて丸っこい石ころを一つ拾って、私のもとに持ってきて何かいう。私はその石を観察したが、試しにと思つて岩の上に力まかせに叩きつけて割ってみた。すると、なんとその中から、みごとなアンモン貝の化石が姿を現わしたではないか。

これはおもしろいと思つてその男に半ルビー銀貨をやると、付近の二、三人のポーターも、われもわれもとばかり化石探しに熱中しはじめた。八貫目もある重荷をかついだまま川原をはいずりまわるといふ、さながらゴールドラッシュのブームがはじまつてしまつた。これでわかつたのであるが、そういったアンモン貝の化石は、河床で洗われて、たいてい丸っこくすりへつていゝうえに、ほとんど黒い石となつていたのである。ときにはその上に、鉄分の赤錆色のフィルムがかぶさつていた。それからまた、化石の芯の部分には、貝の石灰分が何かの金属成分に置換されたせいか、金色に輝く部分がよく見うけられた。なるほどと私はうなずいた。というのは、この川の上流には、ムクチナートという、巡礼の聖所としてきこえたお寺がある。

「そこには、年中燃えつきることのない火がもえていて、また、中に金塊のある黒い石があるのです。」

こういった神秘的な物語を、私たちと行きあはう巡礼からよく聞かされていたのであるが、彼らはまんざら根も葉もない物語をでっちあげていたのぢやなかつたのである。

やがて私は転石のあいだから、指の頭ほどの、ウズラの卵のような美しい黒い小石を見つけ出した。その先端部には、アンモン貝の化石によく見うけられる空洞の小さな穴があいていた。私はこの小石をも砕いてみようとしたが、かたわらにいたポーターの少年に叱られてしまつた。

「いけません。こういう穴のあいた黒石には大神が宿つてゐるんです。」

これもまたシバ大神の象徴をなす神聖な石なのである。その後知つたところによると、このカリガンダキの黒石、つまり菊石(アンモン貝)の化石は、ヒンズー教徒たちのあいだにはひじょうに有名なものだとしたことである。そして北インドの多くの人びとは、この聖なる黒石を大切に保存し、崇めてゐる。

私はだんだんと、しかしなお、ひじょうにぼんやりと、こんなことを感じはじめていた。黒い色、それはこの地方の住民たちのあいだに、ひじょうに根深い象徴的な意味で感得されているものだ。シバ神の御神体が黒い石だといふばかりではない。ドゥルガ女神は「黒い大神」と呼ばれているのではないか。ビシュヌー神は黒い岩で刻まれている。まだ何かあつた。何か「黒」と結びついた生活感情が、この亜熱帯の世界にただよつてゐるようであつた。

私は思い出した。私たちがつれていたポーター連は、キャンブ地につくたびに毎晩歌を合唱していた。その歌の一節はつぎのようなクリシュナ神(ビシュヌー神の生まれかわり)への賛歌である。「あの夜空に美しく輝いてゐる星。それはただの星ではない、クリシュナの星なのだ。」

哀愁を帯びた緩慢な調べが、くりかえしくりかえし合唱されて、漆黒の夜空に流れてゆくのであつた。

黒はそれが暗黒の夜と結びついてもふしぎではなく、破壊の象徴と結びついてもふしぎではない。そういえば、お祭りそのものが、この地方では夜行われるものが多いようである。また暗黒

は、そもそも大地、あるいは地下の世界の持つ属性なのではなからうか。

母なる大地。それは万物の生命をそこから生み出すものである。それは草木をあおおと茂らせ、穀物に豊かな実のりを与え、女性たちにたくさんの子を生ませる。大地の精力がその力とくに凝集した岩石の中に宿っているとしたりとて、なんのふしぎがあるう。また、大地や石の下をうろつき、植物の繁茂する水辺をうろつく蛇が、母なる大地の精として、またその使者ともして崇められたとて、ふしぎではあるまい。また、そういった大地の力が、ドゥルガのような女神として象徴されるのも自然だろうし、この母なる大地への奉仕者として女性が重要な役割を演ずるのも、むりからぬ習わしではなからうか。そして女性の妊孕力の周期に合わせたように熱帯の夜の月が満ちるころ、大地の贈物の結晶たる果樹の実を受けとるべく、女たちが母なる大地の司祭者をつとめるのであろうか。ここに母なる大地の贈物が、とくに植物の生産力、しかも人間の労働の加わることとほしい果樹の実のりにおいて、はっきり現われることを注意しよう。

しかもその母なる大地は、同時に生きとし生けるものを破壊し去って、ふたたびその大いなる懐に呑みこんでしまう、暗黒の大地であり、限界の大地でもある。ドゥルガやシバヤ、それから太陽神とさえいわれるビシュヌーすらもが、この地方の人びとのあいだで暗黒の色彩と結びついて信仰されているのは、そういったしだいからではなからうか。生を生み、同時に生を破壊し

去るこの大地の神に対して、しかもなお生きんとしてやまない人間たちが、血潮のしたたる生贄をもつて、あるいは痛ましくも緑の草木を折り取って、そしてまたお祭りの日には青人草がおもしろく楽しむさまをみて、母なる大地が慰められることを求めたとしても、それもまた無理からぬことに思われる。

伝統を守って、丘上に住む人びと

いたるところの村落に泉場がある。村はずれの林のなかに、あるいは村中に美しく石畳を組んで、そこにはカケヒから清冽な水が流れ落ちていた。カケヒの落ち口はたいい石を刻んで牛の頭や蛇の頭を象っている。水はその口から流れ落ちるといふ仕掛けになっていて、こういった泉場を造る文化の伝統の厚さを示すようであった。

毎朝毎夕、村人たちが水がめをかかえて集まり、順番を待つあいだ話をかわす。ときにはサリ―をまとった女、ときには籠の中に水がめを入れた男たち。彼らは水浴もそこでやるらしいが、朝寝坊の私は一、二度しかそれを窺っていない。

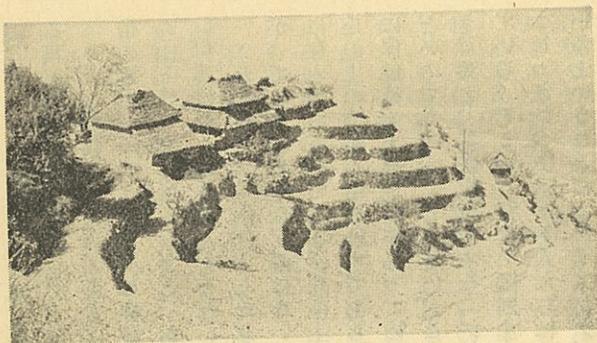
ところで、ふしぎなことに、こういった地方のどこを歩いても、私たちは井戸というものを見ることがないのだ。彼らの村落は、たとい丘の上にあっても山の中腹にあっても、どこからか地下に水道を設けて、こういった泉場に引き水しているのだった。おそらく近代的な都市の水道と

いうものも、あるいはこういった歴史的伝統の上に築かれたものかもしれない、などと思う。というものは、カトマンズとかポカラといった町にはいつてみると、町のところどころにこういった水道口の泉場があり、なかにはもう近代都市の水道口と同じ金属製の蛇口と栓のあるものさえあるからだ。

ヒンズー教徒たちにとって、泉や川は神聖なものとして登場する。穢れを落として聖なる流れで沐浴する習わしは、ただガンジスの河畔だけではなく、シワリークの山脈を越え、ネパール谷のバグマティー河畔にも、名もない村落の泉場にまでも浸透している、一つの偉大な伝統なのであった。

水もまた母なる大地に属するものらしい。しかしなぜそれは停滞する水でなく、流れていなければならぬのか。バラジの浮仏のあるプールは、淀んだ池水とはわけがらがうらしく、流水のプールであり、百八つのカケヒから流れ落ちる、そういった水ではないか。こんな疑問が漠然と私の頭にわいてきた。彼らはなぜ流れる水を好むのだろう。

私たちはこの亜熱帯の世界を、数カ月後に、今度はモンスーンの雨季の泥濘に悩まされながら歩くことになった。そのとき初めて、この疑問のいくぶんかを解くべきヒントが胸に浮かんできた。なるほど、この暑く暑い世界で、流れない水、停滞した水、あるいは泥濘が何を意味するかはおのずから明きらかである。ヒマラヤをふたたび降りてきてたどりついた最初のバザールの



5 ネパールの典型的な農村 段々耕地は畑 (依田孝喜氏撮影)

町、ちょうどトリスリッパ、バザールを小型にしたアルガットリッパザールの村人たちは、青黄いろく生気のない顔つきや、あきらかに發育不良の体格を示していた。村人たちによれば、マラリヤが跳梁バッコしているということである。ドゥルガ女神が、恒例のようにその犠牲を求めているのだった。

停滞するのは不衛生であり、それは悪疫の源ともなる水である。流れる水はこれに反して、人びとにとっていつそう清潔で安全な水である。それが科学的にどれだけ証明された事実であるかどうかはべつとして、少なくとも住民たちにとって、自覚的であろうと無自覚的であろうと、何千年を費して獲得した伝統の知恵なのではなからうか。じっさい、悪名高いタライ地帯はもちろんのこと、この奥地ネパールでさえ、亜熱帯の谷底には悪疫の危険がたえず人間をおびやかしているのではなからうか。

ポカラにたどりつくまでに、私たちの越えた峠は、大小合わせれば相当な数にのぼるだろう。ところが、ふしぎなこと

に、こういった峠の上には、おきまりのように大きな村落がある。日本ならばさしずめ峠をわたる松風の音がするばかりで、たまに地藏堂や不動堂がまつられているくらいは峠ではないか。昔ふりわけ荷物の旅人の往還でにぎわったころだって、せいぜい茶店があったくらいだろう。亜熱帯のネパールではすっかり事情がちがうのだ。峠の上ばかりではない。こういった峠道から付近の山々峰々を見はるかすと、あるわあるわ、街道筋からはずれた丘の上にも中腹にも、村落らしい村落はむしろほとんどそういう丘上に陣取っている。

これに反して、一汗干した私たちがふたたび谷底においてゆくと、そこには田圃ばかりがひろがっていて、ろくな村落はない。まったく、ネパールの大部分の人びとは、谷底を避けて丘の上に住んでいるのである。丘の上の方が水を得ることがむずかしいにきまつている。交通だって、丘の上の方が不便なはずである。それにもかかわらず、丘の上に陣取るといふことは、まず第一に保健衛生上の理由があつてのことらしい。谷底は水湿が多く、暑熱がはなはだしく、悪疫がひどいのであろう。じっさい、この地方には、ネパール語で丘の上の平を意味する「ダーラ」という言葉と、谷底を意味する「プエディー」という言葉があり、よく村落の名前にも添えて使われている。そういう言葉で区別すべき重要な実体があるからではないか。

じっさい、チベット人たちは、こういった暑熱と悪疫の低地へおりてくることを大いに恐れているということだった。アンナプルナとかエベレストとかいったヒマラヤの巨峰に挑んだ英国登

山隊の剛の者も、ちょうど私たちの通ったアルガット・バザールの近辺で、あやうく命を落とすほどの大病にとりつかれてしまったのである。

日本に帰って三年目、私はあるときつらつらとそういう問題を考えているうちに、ひとつ亜熱帯の上限を画する海拔一〇〇〇メートルの等高線を、地図の上に追跡してみようという気になつた。その結果は、まことに恐るべき明瞭さで、一つの事実がきららかにされたのである。すなわち、この亜熱帯的なネパールの中で、古くから重要な町や村は、ほとんどみな、一〇〇〇メートル以上の島状の丘陵の上に位置しているのである。そうして、こういった、衛生的に恵まれた島状の地域の中に、とびぬけて大きな島が一つあつた。これこそは、首都のカトマンズをはじめ人口十内外の三都市を擁する、あの「ネパール谷」の盆地であつた。

私は椅子にもたれ、ときどきフィールドノートを繰りながら、あのネパール谷の光景を改めて思いおこす。亜熱帯の谷底が、あおあおとした緑の茂みに包まれつつも、一種深閑とした寂しさ

に包まれていたのにくらべ、どういうわけかネパール谷の田園風景のみは、いかにも活気があり、豊かに、ロマンチックだった。モンズーンがおとずれると一面の水田と化する耕地には、そ

うだ、裏作のコムギやオオムギに加えて、ジャガイモ、タマネギ、エンドウ、ソラマメなどといった蔬菜類が育っていて、私たちの旅立ちを浮き浮きと元気づけるようだった。あちこちの台地の上には、竹ヤブやサイザル畑に取りまかれた村が点在し、斜面には、牛や羊がのどかに草を食

んでいた。じつさい私たちは、ふと日本のどこかを歩いているような錯覚を覚えたものだった。遠望する民家ですら、日本のワラぶき農家を思わせる寄棟や入母屋の形をしていたではないか。この「ネパール谷」こそは、ふしぎにも神の恩寵の特別に加わった、ネパール国中きっての、宝玉のように輝いた小世界だったのである。そもそもこの国のことをよく知らなかったわれわれは、ネパールといえば、地図上に描かれた、国の領土としてのネパールばかりをさすものだと思いでいたのである。だから、ある隊員が旅人をつかまえて「君はどこへ行くんだ？」と尋ねたとき、「ネパールへ行くんですよ。」と返事されて、ハテナと思ったものである。バカにするなはい。ここがネパール領だということくらい、あたりまえじゃないか、と。しかし旅人がさしたのはい、じつは「ネパール谷」のことである。

こんな調子で、「ネパール谷」というほんの一にぎりほどの（京都盆地か奈良盆地ほどの）盆地こそは、そもそも本来の「ネパール」だったのである。ちょうどそれは、ヤマトの国たる日本の中で、ヤマト盆地こそは特別に早熟に文化の開けた土地であったように。そしてそのネパール谷に「あおによし奈良の都」が咲く花の匂うように栄えたごとく、三つの古い古い都バタン、カトマンズ、バトガオンが、今なお咲き誇っている。その町を埋める五重の塔や寺院までもが、奈良をさながらの情緒を添えているとは。ただちがうのは、日本は奈良盆地ばかりでなく、その国土のたいていの地方が、あまりにも恵まれた温帯なのであった。

こういった温帯地域は、ヒマラヤ沿いにみると、たいていヒマラヤ山系の南側にしがみついたような峨々たる山腹地帯にすぎない。けれど、その中にはなほなほだまれには、ちょうどこのネパール谷のように、温帯の高度にあたって離れ島のように平坦な盆地がある。カシミール谷がまさにそれではないか。帰国して二年目のころ、私はようやくそんなことを考えはじめていた。インドについてのくわしい地誌が、こういうときに役に立つ。私はページを注意深く繰ってゆく。そして「やはりそうだ。」とうなずいて本を閉じた。インド共和国とパキスタンとの血みどろの係争地となった広漠たるカシミール州は、ほとんどが峨々たる山地と荒れはてた瘦せ地である。ところが、ヒマラヤ山系にいだかれたカシミール谷だけは、温帯に相当する別天地であり、緑なすオアシスの島のように繁栄をつづけてきたのである。この島こそは、カシミールきってのカシミール、本来のカシミールなのである。

インドの最高階級は、ネパールの最低階級

幸か不幸か、人間はつねに、もつとも楽な最短距離を歩きたがる動物である。現に私たちだって、熱帯の蒸風呂のような谷あいを歩くのがいやなくせに、明日もまた、エンコラエンコラと高い峠越えをするかと思うとうんざりする。すこしでも楽な低い所を縫って、早くボカラの町に着きたかった。ちょうどその注文のように、私たちの「街道」は、最短距離を求めつつ、というこ

とは必然的に暑い谷間を縫いつつ、峠から峠へと連なっていた。その道ぞいの谷あいには、トリスリッパ、バザールよりは、さらに格段に貧弱な、バザールの村落が点々とどこどこに佇んでいる。道をはさんで立ち並んだきたならしい家々の密集である。暑くるしい谷底がなお暑くるしさを増すようだ。たいていは二十軒にもみたくないし、半農半商で暮らしている。掘立小屋数軒が並んだにすぎない街村もある。

店先にあるものとは、日なたくさい色布地類、シガレット、マッチ、あるいは土産の薪、穀物、牛乳、タマゴ、地酒、それに娑羅双樹の葉の束ねたものくらいである。丘の上に陣取っている農村のような、ゆったりした高貴さというものはどこにもない。でも私たちのポーター連は、こういうバザールに着くと、魚が水にもどったように、やれやれとうれしそうな顔をして、どこかの店先でくだを巻くのだった。

谷底をきらいながらも谷底にバザールを作って住まざるをえない人びとは、近年ますますふえてきたらしい。彼らは商業の利益を求めて、丘の上の村々から溢れてきたのである。雨期になると、半数は付近の丘上にある母村にもどって田畑を作るといふ村落もあった。しかしそんな村でも、あと半分は、帰るに家なき各地からの流入者で、彼らはもうここが定住の場であった。谷底のバザールの村々は、十年前とか数十年前といったふうに、近年にできたものが多い。二十四軒集まっているタルガット、バザールという村は、まだそれらの中でもましな方であった。それ

はヒマラヤを断ち割って流れくだるマルシャンディーという大河の橋のたもとにあった。橋は立派な鉄の吊橋である。旧將軍家の支配した時代、英国人の技師を雇って作らせた橋である。「約五十年前、あの橋ができてから、ほんの二、三軒しかなかったここに、人びとが集まってきて、この村ができたんです。」

「文明」が開け、「交通」が改善され、「交換経済」が進んできたおかげで、この地方の人びとは丘の上から谷底にひきずりおろされてきたのだろう。ボンベイから仕込んできたんだという田舎くさい反物を並べた店先で、ふとそんなことも考えてみた。

たそがれが迫っていた。バザールの端にあるヒンズー教の祠で、吊鐘がカアンと鳴り、お堂の中に灯明がともされた。

「夕方になると、村の女のだれかがあの鐘をつき、そしてお灯明をつけて祈るんです。村人はそれを聞いて夕方のきたのを知るんです。」

こういつたバザールの住民は、各地からの住民が集まってきたせいとか、一軒ごと民族がうらうらほどであった。一ばん端にマガール族、その隣の家はネワール族、五軒目はグルン族、それからカーミ（鍛冶屋のカースト）、ダマイ（仕立屋のカースト）、サルキ（皮職のカースト）、……といったふうだ。そもそも民族のちがうということ、カーストのちがうということのあいだに、彼らの意識の中では区別が設けられていないようであった。ヒンズー教の祠が立ち、ヒンズー教の人

生観が支配しているらしい亜熱帯では、同時にカースト制度の社会ができあがっているらしい。カースト制度というのは、インドの社会を支配する有名な階級制度である。それぞれの階級をなすカーストは、ほかのカーストと絶対に結婚しないといわれる。上級のカーストの者はとりわけ下級のカーストの者を不浄扱ふじょうかくいし、ばあいによっては、体に触れることも厳禁する。各カーストには、それぞれ職分しやくぶんというものがああり、ほかの職業を自由にえらぶことができない、など。だが、そんな話を人から聞かされたり物の本で読んだくらいでは、いっこうに私には実感が伝わってこない。

それでも私たちは、「あれは壺作りのカーストだ。」とか、「あれは旅音楽師のカーストだ。」などということを聞かされていると、なんとなくわかったようなわからないような気がする。驚いたことには、動物の鳴きまねをするカーストというのがある。旅の初めのころ、ポーターの中にそのカーストの者がいて、隊員たちをその巧みな鳴きまねで驚かせていた。帰ってから書物で調べてみると、妻に売淫ばいゐんをさせるカーストというのまであるということだった。それにもかかわらず、土地の人や通訳のS君が、皮職や鍛冶屋など、とくに卑いやしいとされるカーストの連中にたいする嫌悪けんあくの情には、まことに病的、少なくとも生理的？なものを感じる。

こういったカーストのうち、とくに職人的なカーストの連中は、バザールの村や町にたくさん集まっているらしい。そういった職業で身を立てやすいのはバザールだからだ。こうして、バザ



6 ネパールの旅音楽師 このカーストは、たぶん「ゲイン」と呼ばれる。

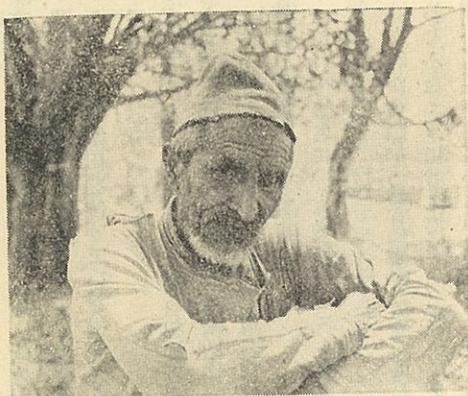
ールといわれる商業集落が発達する亜熱帯のネパールは、カースト社会の製造所である。そういったカースト意識を持ちあわせない山地の諸民族出身の連中も、ひとたび自分たちの民族の本拠ほんきよを離れて谷底のバザールの中に巻きこまれると、あるカーストの者として格付けされてしまうらしいのである。いな、通訳のS君によると、「ボテヤ」すなわちチベット族も、とくに卑いやしい、アウトカースト級のカーストだということになってしまふ。彼らははるかかなたのチベット高原に住んでいて、カースト社会のお仲間入りなどしていかないのだが、それでも、ヒンズー教徒の手にかかると、勝手にカーストの格付けの中に投げこまれてるのである。だから、ことによると日本人も、どれかのランクのカーストとされているのかもしれない。

いずれにしても、ダマイやサルキなどという歴然たる職能的カーストは、もう民族的起原もわからなほど昔から、ネパールのカースト社会の中に織り

こまれてしまった。しかし鍛冶屋かじやのカーストたるカームは、英国のある登山隊の報告によると、ダウラギリ峰の西南にあたる山中に集団的な村々を作っているらしい。だから、あるいは、もとはそのあたりを郷土とする「民族」だったのかもしれない。ネワール族はネパール谷を郷土とする民族であるが、そこですでにいくたの「揃いのカーストに分化していったらしい。それにしてもその郷土では、大多数は農民なのである。ところが私の歩いた亜熱帯ネパールでは、バザールの住民の主力を占める職人カーストと化している。グルカ兵の主力をなすグルン族というのは、ヒンズー文化の見解をとる人びとからは、ちゃんといつのカースト扱いを受けているけれど、事實上はどういう職業的分野のレットルもはられていないので、いわばヒキダシ番号の不明瞭なカーストである。

ところで、ポカラに近づくとともに、私たちはブラーマンの「カースト」がはなはだしく住む傾向を発見した。ブラーマンは僧侶階級のカーストで、それはインドのカースト制度では最上位を占めるものだときかされてきた。しかしこの地方のブラーマンは、ほとんどすべて貧しいお百姓である。第一、近代的な交換経済の進んでいない、農業的なこの山奥の社会で、僧侶や鍛冶屋ばかりを専業にする人口を何割もかかえることは、理屈上からもできる相談ではない。農業は、まず大部分のカーストの人びとが実際上兼業もしくは専業にしている生業せいぎょうなのである。

それにもかかわらず、ブラーマンの村々には、私たちの注目をひいたいくつかの特色がある。



7 ブラーマンの百姓じいさん

まず、彼らは酒を飲まず、したがって地酒を作っていないことだった。こういった「ブラーマン地帯」ばかりを二、三日旅したマナスル登山隊員の田口二郎たぐち じろうさんは「酒が手にはいらなくて閉口したよ。」と、飲み助の不平をこぼしていた。つぎに私はあるブラーマンの百姓家を訪ねたとき、

その住居や家畜小屋がひじょうに清潔なのみた。また、そういった百姓家には、丸太ままたをくりぬいた巣箱に、蜜蜂が飼われているのをしばしば見かけたのである。いまひとつ、ある夕べ、とあるブラーマンの村でキャンプしたとき、彼らが歌ってくれた神々への賛歌が、緩慢で物悲しく単調なものだったことである。いうまでもなく、インド音楽に一貫して流れるあの哀調である。それは躍動を底に秘めたリリカルな哀調ではなく、「動」を呼び起こさない哀調なのである。

こうしてブラーマンの百姓たちは、ここでは貧乏な連中であつた。彼らは、貧乏なネパールの田舎の民衆の中で、けつして相対的にすら経済的上層階級ではなかつた。ポカラの町を発つて二日目、私たちがとある

高峻な山岳地帯に足を入れはじめたところである。見あげるような山腹に、立派な石造りの村々があつて、グルン族が住まっていた。そこはもはやお米の栽培できる高さではなかつた。谷底を見おろすと、水田を作っている村々が見え、そこにはブラーマンが住まっていた。旅人は私に説明する。

「ごらん下さい。お米を作らねば暮らせないブラーマンたちは低い谷間にいる。ところがグルンたちは米などなくても大麦や粟を作つて暮らせる連中で、精力的だ。あんな高い所に石を削りつゝ立派に家を建てている。彼らは盛んに商業もやり、地主になつて、谷底のブラーマンたちを搾取しているのですよ。」

これはまさに、大きなヒンズー文化の社会が、その膨張の限界線にぶつかつてゐる、その風景なのだろう。

あれから四年の歳月が流れた。正しいかどうか十分な自信は持てないのだけれど、私はこのごろこんなふう考へている。彼らブラーマンの生活の中にも、やはりヒンズー風文化を律する原理がにじみ出ているのではなからうか。そのひとつの原理と云うのはいわば「清潔感」の原理とでもいおうか。おそらく悪疫の恐ろしい熱帯の世界で、ヒンズー文化の養つた徳は、衛生的な意味での清潔の尊重であつた。停滞する水を不浄視し、流れる水を清浄視する清潔感。腐敗と結びつきやすい肉食を不浄視し、菜食を清浄視する清潔感。一般民衆は、それでも、タブーとなつて

いる神聖な牛のほかは鶏肉や羊肉を摂取するけれども、理想として現われる菜食の清浄という觀念はいぜんとして尊重される。蜜蜂を飼うブラーマンの生活態度の中には、その極端なものがあるのじやなからうか。なぜと云うに、蜂蜜こそは、草花の蜜を集めたものであつて、そこにはなら穢らわしい動物の死体をふくまないからである。

ヒンズー風文化の底に、こういつた「清潔感」の原理があるとすれば、この物差しこそカーストの高低をはかる物差しになつてゐることもあわせて注意しなければならぬ。けれどもちろん、こんな単純な原理だけでインド的な民衆生活の底流がつかめるものではない。

通訳君をギヤフンと言わす

前年の今西博士たちの偵察の結果、ネパールではネパール語とチベット語が使われていることがわかつた。チベット語は、奥地のチベット人たちが使つてゐるという。その他にゐるんな民族がそれぞれ自分たちの民族語をしゃべつてゐるようだ。しかし、そういう情報を得たときは、あと二カ月もするかしないうちに日本を発たねばならないという情けない瀬戸際だったのである。

私は即座に方針をきめねばならない。「英語とネパール語のできる通訳を一名」、先発隊の田口二郎氏に手配してもらふことにした。このほかに、私はどれか一カ国語のにわか勉強をする決心をきめた。私自身語学の才能にかけては平均値以下だということを万々承知しているので、現地

語を二つも習得するなどという器用なことはアブハチとらずになるにきまつているのだ。それどころじゃない、半年やそこの調査期間では、一つの言語さえ、とうてい大した実用の域にたつしないに相違ない。これが私の予想であった。

それなのに私は少なくとも一カ国語の入門をしようと決心をつけた。それはチベット語にしなればならない。なんとならば……。なんとならば、チベット語を学んでおけば、いつの日にかあの広漠たるチベット高原に足を踏みいれるとき、きつと役に立つにちがいないんだから。

日本でチベット語の会話がやれる人は、指折り数えるほどしかあるまい。幸いにして、京都には佐藤長さんがいた。私はこの人の門をたたいてお願いした。このお願いぶりがふるっている。

「十日ほどの学習で入門の手ほどきを完了してくださいませんか。」

さすがの佐藤さんも、このめぢやな注文には目を白黒させられたらしい。「よく考えたうえで……。」というわけで私は断わられてしまった。しかし当時の私としては、それだけの時間をもみいだすのだって精いっぱいの有様だった。

しかも私はけっして断念しなかった。というのは、過去の経験からつぎのようなことを直観していたから。すなわち、人間相手の野外調査をしようとするものは、たといどんなに不完全な学習でも、相手の使う言葉をすこしでも学ぶべきだ、と。なぜかというに、その土地の言葉をすこし学ぶだけでも、全然学ばないのにくらべれば、その土地の雰囲気はずっと身につくものだ。そ

の土地と人びとを、はるかに多くの共感でもって観察することができただから。これが大切なことにちがいない。土地の言葉を学ぼうとしない人間は、すでにその心掛けだけでも人類学者たるに価いしないのではなからうか。

「中途半端ならむしろやらない方がよい。」という考えが、野外調査の何たるかを解さない人びとの悪悟りであることは、ヒマラヤの旅を終えた今、私にとってははっきり断言できる結論である。そのうえにこういう貴重な副産物があった。すなわち、私が片言にせよチベット語の会話をやったおかげで、通訳はいい加減な通訳をしてゴマ化することができなくなったのである。

幸いにして通訳は確保された。私たちは首府の町でそのS君に落ちあった。S君は今年四十三歳。カルカッタのネパール領事館の英語教師をしているという。出身地はビハール州ムザファルプールで、ブラーマンのカーストだそう。体はがっしりしており、理論的な浅黒い顔に、濃いアゴヒゲ。彼はよく語る。私たちと会うなり、ひととおり自分の技能を御披露におよんでくる。ヒンディー語は母語だからもちろんとし、英語は達者だし、ネパール語もペラペラだ。そのうえ、チベットにながく滞在していたことがあり、チベット語もお得意だという。彼には通訳として以外にポーターたちの世話や現地人との折衝など、連絡官としての仕事にも奔走してもらった。通訳にあたっては、とくに人間相手の調査をする私には協力してもらおうように念を押したの

である。

ところが、インドのインテリにありがちなことらしいが、彼はすこぶる弁舌さわやかで、そのうえ、旦那然としてゐる。体を動かさず、横柄であつかましいというので、さっそく登山隊員一同から毛嫌いされた。由来日本人は「不言実行」などということを美德としているから、ここに早くも日印両文化の断面が姿を現わしてきたのである。しかし、カトマンズを出発してはや二日目には、登山班と私たち科学班とはわかれわかれになってしまったので、私たちはそれ以上不愉快な雰囲気成長を恐れなくてもよくなった。

S君を入れて三人の、のんびりとした旅が始まった。S君は私たち二人の旦那衆を観察する。年輩からいって中尾君の方が年長でリーダー格である。前年ネパールに来たこともある。ブローケン・イングリッシュも、そのため私より一日の長がある。そのうえ、パーティーシップのうえから当然のことなのであるが、私は万事中尾君のやりよいようにと思つて、すなおに協力するようになっている。すべてこういうことをいち早く見て取つて、S君の情勢判断は、つまりはこうだったろう。

「中尾旦那さえ丸めこんでおけば、川喜田旦那などは歯牙にもかけるにおよばない。」

ところが私の方はどう思つていたかというに、まず私にとっては通訳君の行動の仕方じたいが興味ある人間研究の対象のひとつである。だから、登山班の人びととの不快な摩擦も、私には一

歩さがつて観察の対象にする余裕のある態度があつた。だからそのつぎに、S君が上記のような見方で中尾君や私を評価しているということも、たちまちのうちに見抜いてしまった。そこで、そういうS君を、通訳としてどう使つてゆけばよいかという方針も、出発後二、三日をへるかへないうちにちゃんと立つてしまつていた。

S君はそれとは知らない。たちまち中尾君と親しもうになり、盛んにブローケン・イングリッシュのお相手をして冗談をとぼす。自分の博識な教養をもちらつかせる。そして二人で楽しそうに、小馬鹿にしたようなからかいをも私に向けてくる。それはちょうど、たつたこの三人の小社会の中にカースト制を作つて、自分の位座をその中でできるだけ高くたもとうとするもののように。だから、私があればこれと通訳をたのんでも、適当にあしらつて、もっぱら中尾君との雑談に憂身をやつしている。困つたことだと思ひながら、私にはおもしろいことでもあつた。それに、私も早くブローケン・イングリッシュに慣れる必要があつたし、何よりも旅立ちの初めには何もかも目で見ることが新鮮で、それをノートするのに追われていたのである。だから、あまり苦情はいわなかつた。

まもなくS君は、何か堅いものにコツンとぶつかる。たとえば日中歩いているとき、私がかか珍らしい村人の持物を見つけ、それについて、村人の説明をきいて通訳してくれとたのむ。彼は村人からちよつときくが、「いづれキャンプ地に着いてから。」といつて、私には通訳しない。キ

ヤンプ地に着くと私はさっそく彼に、昼間聞いた村人の話をするようにうながす。彼は、すっかり忘れていたという表情で、「まあ夕飯でも食べてからにしましょう。」という。よろしい。そこで夕飯がすむ。私はふたたびノートとエンピツを持って彼をうながす。彼はシブシブ通訳する。それでもまだ空とぼけたり、「うるさいな。」とあからさまにいやな顔をしたりすることがある。すると私は、「君は通訳をしなければならぬ。」ときっぱり命ずるか、「きのうから四遍も約束を破っているから、これ以上逃げてはいけぬ。」という。つまり私の方は、けっして焦らぬこと、トコトンまで実行を求めることを、堅く決心しているのだから、最後にはかならず彼がカブトを脱ぐのである。

やがて彼は、しだいに厳格な訓練の中に投げこまれてゆく。たとえは村人が話したことを、何時間後で通訳するということは許されなくなってくる。というのは、そういうルーズなことを申し出ると、私がある場できっぱりとさとすからである。

「君、記録というものは、その場で即座にしなければ正確とはいえないものだよ。君は知らないかもしれないが、それが調査というものの正統的な態度なのだよ。よく心得ておきたまえ。」

彼は「知らない」といわれることや「正統的でない」といわれることが恐ろしい。それで、そういうことは熟知しているとやっきになって私に力む。私は適当に薬が利いたと思つて、何くわぬ顔で答える。

「知っているか。それなら結構だ。それらしく実行してくれ。」

ある日私は、畑で働いている百姓に、彼の使っている農具のことを聞こうとした。S君に通訳をたのんだところ、彼は百姓に尋ねないで、とくとくとしてその農具のことを説明しはじめ、インドではどうのこうのと博引傍証におよんできた。こういうことは、それまでにもしょっちゅうあったことである。そこで私はいう。

「君、僕は今インドのことをきいているんじゃない。また君の知識を聞いているんじゃない。このお百姓が、ここでこの農具をなんと呼んでいるのか、どういふふうに使っているのか、それを通訳してもらいたいんだ。」

彼には、それがよくのみこめないらしい。「この博学なおれに教われればよいものを、何を好んでこんな無学なドン百姓に物をきく必要があるんだ。」といったことが顔に書いてある。私はテコでも動かないといったふうに、私の希望どおりにしてくれるのを待っている。「仕方がない。」と思つて、彼は折れてでる。

私の質問は幼稚であり、素朴である。なにしろ私にはなじみのなかつた土地のことだから仕方がない。しかも私はすこしも恥ずかしそうでない。調査の要訣は、物知りぶつて早のみこみしないことだ。いくらベテランになつても、少年のように素朴に、疑問を発することだ。ばあいによつては、知っていることでも、たびたび白紙の気持でものをたずねることこそ、よく訓練された

野外調査者なのである。

ところが、このような態度や発想法は、S君にはとてもみこめない。旅が始まるやいなや、まずS君には私の質問ぶりが幼稚きわまる無学ぶりの暴露にみえたのも無理はない。そこで、この無教育で無訓練な旦那に、自分の深遠な教養を御披露して「どうだ、恐れなかったか。だから万事おれにまかせておけ。」といわぬばかりのお話を、耳にタコができるほど聞かされたのである。それでもいっこうに恐縮もしないし無神経らしい旦那の態度をみて、彼はやがていささか拍子ぬける。それから、「そんなくだらないことを調べてどうするのか。」といったことを尋ねます。私は答ええない。私たちの旅は続く。そのうちに私の注文がだんだん厳しくなつてゆく。彼は抵抗する。そこで、私はお説教をする。

「科学的な調査では、些細な知識こそ大切なんだ。それを克明に記録することが大切なんだ。君、どんなすばらしいことを調べたって、それを、いつ、どこで、だれがだれから聞いたとか見たとかということが記録してなければ、一文の値打ちもないんだよ。」

ついこのあいだまでは子供同然とタカをくくっていた相手から、いつのまにやらこちらが子供同然に仕込まれつつあると思えば、ずいぶんS君も腹が立ったろうが、柳に風とばかり、「そんなことくらい君は知ってるはずだが。」とか、「正統的なやり方というものは……。」といった注釈文句をきかして、同君の自尊心の力を活用するというのが、私の方針であった。

とうとうある日のこと、つぎのような光景が起こった。私たちはとある川のほとりに休息して翌一日を滞在することにした。滞在するといっても、それを利用して、すぐそばのバザールの村を調査するつもりだったのである。私は調査の前日、明日は午前十時に調査に出かけるよと、S君に約束しておく。

さてその当日の午前十時になった。ところが、彼は中尾君と雑談していて、いっかな腰をあげない。私は出発準備のまま立ちん坊で、ときどき彼にうながすのだが、S君は私を適当にあしらつて、あいかわらず腰をあげない。そのうちに私の方が折れて調査を断念するだろう、と、彼はふんでいるのだろう。

私はわざとしばらく一時間も立ちん坊をしていた。これくらい立ちん坊をしていると、いくらインド時間でも「どうにも言いわけが立たない」時間になった。そこでにわかにはガツンと叱りつける。私のケンマクに驚いて彼は腰を上げたが、それでもなお口から出まかせの弁明をする。

「今日は村のお祭りなので、村長はいませんよ。」

「なに、村長がいなければ、村の家々を一軒ずつまわって全部面接してくるから、そのつもりでいてもらいたい。」

「いまから出かけても、すぐ昼飯で帰らなきゃなりませんよ。」

「それは君の責任だ。昼飯を食わなくても大丈夫死にはしないから安心しなさい。」

それから彼を村に連れて行って、もっともやっかいな部類の質問を通訳させて、彼の度肝を抜いた。私が通訳に聞きとりをさせたのは、村の戸口調べだの、土地の所有関係だのといった事柄だった。こういった質問を村人が嫌うだろうことは、私といえども百も承知している。そして、はじめての土地に行つて、いきなりこういうたぐいのことを質問するのは、ふつうは愚かなことでもあり、場合によっては危険なことでもある。ただそのときは、そこまでの私の経験から大丈夫と判断していた質問ではある。

もとより外来者のこういった質問にたいしては、疑い深い村人は口を割ることを好まない。しかし人間相手の調査では、われわれは時として神経を因太くして端的に物をきく押し、強さを必要とすることがある。S君はそういうことにはまったく慣れていないらしく、村人と私とのあいだにはさまって、膏汗を流さんばかりにおろおろしている。それを、崖からつき落とすように私が押しまくる。まあこういった調子で、さんざん彼の油しぼりをやってキャンプに引きあげた。

考えてみれば、私もまったく因業オヤジかもしれない。何しろS君には、調査者たる私の意志の強固さを、骨にしみるまで徹底させようというのだから。私のフィールドノートには書き込まれている。

「……もしこのようにときに引きさがれば、以後のすべての調査は、ことごとくに妨げられる。初心者がもっともしくじるのはこういうところであり、いたずらに他人の心理をシマ憶測して通訳の

感情の動きに妥協し、それを巧みに操縦しようとするのは、巧みに似て巧みでないのである。かえって人間の心理の機微を看破できないものというべきか。」

ポカラの町をすぎてから、私はやおら荷物の中から、チャールススベル氏の『チベット語口語文典』を取り出した。もはや何日か後には、チベット語を語る人たちの世界にはいるにちがいない。それに備えて、泥坊をみつけて繩をなおうというのである。チベット人地帯にはいったら、さっそく会話を試みなければならぬ。そうして、どこか落ちついて調べるチベット人村に居すわるまでに、なんとかいづくぶんでも実用に供せるくらいになりたかった。

それからは毎晩毎晩、キャンプ地のテントの中に横たわると、あたかもお経を読むようにチベット語の例題文をいくつかずつ丸暗記するのが私の日課となった。中尾君がやかましいといってテントをなるべく私のから離すようにしたこともある。私の語学は遅々として進まなかった。けれど今でも、ローソクの光を頼りに毎晩ボソボソとうなっていたあのヒマラヤの幾十夜は、私にとって忘れがたくも楽しい思い出である。

じつをいうと、自称するようにS君のチベット語が達者かどうかを、私は、漠とした直観から、そうとう疑っていた。私が会話練習をはじめると、彼は自分のチベット語の腕前を信頼しろというのだった。だから、「あなたが、いままさら下手な勉強をしない方がよい。」という。それか

ら、チベット語のちよつとした単語を言ってみせ、大丈夫というところをみせる。私はいろいろと質問してみる。わからないところがあると、「ラッサ辺ではそうはいわないですよ。それはたぶん、どこかちがった方言ですよ。」などという。

やがてヒマラヤの北側へぬける日がきた。そこはチベット語の圏内である。しかし少数の男たちだけは、ネパール語もあわせて解することができたのである。私は会話を試しにかかる。S君はいぜんとしてネパール語で用をたしている。

「まだネパール語で用をたしているところで、わざわざチベット語でしゃべるといふことはしない方がよい。」

このころからS君の私にたいするそういう反対が、強くなってきた。私は彼がチベット語などほとんど知っていないことを、もうはっきりと見抜いてしまったので、柳に風と受け流している。まもなくチベット人の村落で滞在調査をやるころには、彼は完全にその無知を自認したかたちになった。

こうなってしまうと、いかほど貧弱な会話の知識でも、調査にとっては、かけがえのないものである。ヒマラヤの南側では、村民がネパール語で話すのを、S君が英語に訳せばよかった。言葉は、いわば一回折れ曲がるだけですんだのである。ところがチベット人の村では、村人がチベット語で話すのを、シェルバ人夫のH君がネパール語に翻訳し、それをS君が英語になおすこと

となった。二回折れ曲がる勘定である。これでは、私のノートに書きこまれるときには、そうとう角のすりへった資料になっていたろう。

だから私は、全神経を動員して、村人がチベット語で話すのを、ローマ字化の規約にしたがつてそのまますばやくノートに書きこむ練習をした。意味はわかる部分の方が少ない。けれど、このおかげで、翻訳が省略されたり歪曲わがまされたりするのを、大いに牽制けんせいすることができたのである。へんなことを言えば、「こういうのははずだが……。」と私から突っこんでゆく。そんなことがしばらく度重たびかさなるうちに、彼らの方が注意して訳するようになってしまったからである。少々の語学というものを軽蔑して習っていなかったら、どんなに横着よこづかをされていたって、お手あげのほかはなかったらう。

奇 遇

ボカラほどすばらしい山岳風景に恵まれた町が、世界にいくつあるうか。ダージリンのタイガ―ヒルがすばらしいなどといったって、カンチェンジュンガの巨峰群は、かなり遠方に横たわるにすぎない。カトマンズの北にそびえるカカニの丘は、ダージリンよりもさらにすばらしいヒマラヤの展望台だろう。明けゆく空に、東ははるかエベレストから、西はダウラギリ峰にいたるまで、あますところのない世界屈指の巨峰群の荘嚴なオンパレードは、たしかに、特筆に値いしよ

う。けれどボカラの町には、八千メートルを越えるアンナブルナの巨峰群が、しかも落ちかかるばかりの近々とした距離に迫っていた。その純白の大氷壁をみよ。マッターホルンを何倍も大きくしたようなマチャプチャリというピークは、じつはアンナブルナの枝尾根の突起にすぎない。けれどもその尖塔は、アンナブルナ主峰のさらに前方に、この町を押しつぶすばかりの近さに虚空をつんざいでいた。

賛嘆のつきないこの荘麗な天上界のふもとに、ボダイジュやマンゴーの静かな影を落として、町が横たわっていた。氷河から流れ落ちてきたばかりのセティコーラという川が、滔々とこの町に向かつて奔りくんだり、やがて柔らかない洪積層に物凄く溝を刻みこみ、ほとんど地下に姿を消さんばかりになって町中を貫流していた。

私たちは、セティコーラを見おろす断崖に近く、とある寺院のかたわらにテントを張った。この寺院こそは、今を去る約五十五年も昔に、日本の一禅宗坊主たる河口慧海師が杖をとどめたところらしい。ある町びとが私にそう教えてくれたのだ。

ところで、カトマンズでの親切すぎる欲待にわずらわしさを覚えた中尾君は、ボカラの町に着いても、県知事だとかだれそれだとかには、いっさい顔だししないでおこうといひだした。彼には人間ざらいな一面がある。だから、道中だつて、なるべく人家を避けたところに、しずかにテントを張りたいというわけである。したがって、カトマンズからボカラまでの長い道中で、民家

にとまったのはたった一晚。それも珍らしく雨模様だったので、やむをえず、というわけである。私だつて、テントのほうが小さっぱりして気楽で、どれだけ好もしいかしれない。しかし民衆の生活にすこしでも触れる必要のある私の立場では、これはみすみす、観察のチャンスを負困にしていることはわかりきっている。調査目的を異にするものの道ずれ道中は、こういう妥協をせねばならぬところにもつらさがある。そのうえに、そもそもこういう街道は、ビブラムの登山靴で十九世紀くさい英国紳士趣味の猿まねをしてぞろぞろキャラバンを率いてのし歩いたりするのではなく、やはりコウモリ傘をつき、荷担ぎは三、四人にとどめて宿場から宿場へと日をかさねるのが旅の正道というものだらう。

ともかくこういうわけで、私たちはいわぼこっそりと森かげにテントを張ったのだ。しかし、文字どおり「こっそり」というつもりだったとしたら、それは滑稽なことだった。というのは、私たちはすぐさま、この町にスイス登山隊が滞在しているということを聞きこんだのである。そこでさっそく、彼らを訪問しようということになった。スイス隊は、この町で準備を完了してグウラギリ峰目ざしてでかけるところだった。

町の北郊にある美しい草地に彼らはテントを張っていた。私たちは隊長のアンドレ・ロッシュ氏や地質学者のハーゲン博士らに気持よく迎えられた。そこへ彼らがおりしもお茶に招待していたボカラ県知事ポーラン・シン氏がやってきた。私たちは野天のテーブルを開んで歓談した。

私の隣にはポーラン・シン閣下がいる。彼はいう。

「君たち二人がポカラに来ることはとくに知っていたよ。なぜすぐわしの所に訪ねてこなかったんだ。いいキャンプ地も教えてあげたのに。」

ポカラに着く五日行程も前から、軍用電話がこの閣下のところへ情報を伝えていたのだ。二名の日本人がポカラの方へ接近しつつある、と。知らぬはこちらばかりである。それでも閣下はべつに怒っているわけではない。逆に、たいへん好意的なのだ。

「わしは日本人をよく知っている。日本人は気持のいい連中だ。クニズカという人はとくにじつこんだった。」

エエッとばかり私は驚いた。それは国塚一乗くによかづのという人で、これこれこういう人ではないかときくと、今度は私がクニズカを知っているというので閣下の方が驚く。

太平洋戦争たけなわのところ。日本の陸軍は、ビルマに光機関ひかりきかんというものを置いて、ここでインド侵攻のためにインド国民軍というものを編成して指導していたのだ。とくにこの機関は、ネパールのグルカ兵を利用することには力こぶを入れていた。ポーラン・シンの率ひらいるグルカ部隊は、ここで国塚大尉に指導されていた。

やがて敗戦がおとずれる。ポーラン・シンは英国の手によって、しばらく牢獄らうごにぶちこまれる。

けれども、独立をかちえたインドは、インド国民軍の中で戦ったこれらの人びとを、むしろ独立に奉仕した勇士として、歓呼して迎えたのである。彼は釈放されてネパールにもどり、ここポカラ県の知事として返り咲くこととなった。

他方国塚一乗くによかづのの方は、シンガポールで長い牢屋暮らしをやる。しかし幸運にも彼は、英国の厳しい戦犯処刑をまぬがれ、やがて故国の土をふむことができる。そして敗戦後の混乱した時代に、京都の町のある夕べ、彼は偶然川喜田に会い、しばし欲談する。やがて彼は、古戦場のインドに舞いもどった。しかし今度は市井しやうの一商人としてである。彼はカルカタにインド国籍の商社を作る。インドに骨を埋めようなども考えている。そのせいも、近年復活したカルカタの日本人会にもめったに顔を出さない。

その彼が、ある日カルカタの町角で、ぱったり旧友三田幸夫と会う。三田は日本の草わけのアルピニストの一人だ。そしていつの日にかヒマラヤに遠征することを夢みていた。そのために彼は、自分の就職まで、東南アジア相手の貿易商社ときめたのである。このような関係で、S商會にいた三田は、シンガポールあたりでも国塚とよく顔を合せていた。けれど今度インドに来た三田こそは、一九五三年のヒマラヤ遠征隊の隊長であり、その隊に川喜田も加わっていた。

こういふだけで、国塚は日本人会の設けた登山隊歓迎宴にも出席してみる気になった。その宴がだんだんたけなわになる。国塚は声高にネパールのグルカ兵のことをしゃべりだす。おや珍

らしい知識を持った人がいるぞ、と思って、その斜め向かいにすわっていた川喜田は顔をあげる。先ほどから、一度会ったことのある人だと思ひながら、彼は思ひだせない。ようやく思ひ出す。「あなたは国塚さんじゃありませんか。」

国塚は川喜田を忘れていた。しかしこの二人の間には、おたがい知ったS氏やA氏やK氏の名があった。彼は驚く。宴が果てると、川喜田の泊まっていたホテルに来て懐旧談に夜をふかす。やがて川喜田はヒマラヤの山中に入りこんでゆく。ポカラの町はずれで、彼は偶然ポーランニシンの隣に腰をおろす。そしてポーランニシンが偶然クニズカの名をもらした。もちろん彼はクニズカがカルカタにいるなどはつゆ知らなかつたのである。

外国人でこの町にはいった人は、つい数年前までは皆無に近かつたのである。その町に忽然と今年から飛行場ができた。すでにスコットランドのあるキリスト教会が、ここに伝道のミッシェンを作った。それから、アメリカのポインツフォア計画で来ているアメリカ人の農業技術者がいる。スイス隊に参加しているハーゲン博士も、国連関係で派遣されている地質学者である。ポカラは急激に変わるうとしている。

中尾君が言い出した。

「ひとつそのアメリカ人の所を訪ねて、お茶でもよばれてこようじゃないか。」

二人は出かけた。町中の一軒を借り、コックを一人雇って、その蔬菜専門家が住まっていた。私たちはコーヒーを啜りながら、しばし四方山話をする。しかし彼はあまり打ちとけない。どうも彼の顔には、アジア人にたいする優越感のようなものを書いてあつて、日本人などの田舎くさまりなじんではないらしい。それからまた彼氏の顔には、「おれもまあ、何の因果か、こんな世界の大イナカに流れてきて、愚劣な連中を相手に技術指導などをせねばならんとは。」といった、いくぶんみずから嘲けるような表情がただよっているようだった。ファイトなんかいっこうに流れていない。早く花のワシントンかニューヨークに返り咲きたいんだらう。

彼の話によると、ポインツフォアの計画は、このポカラ近辺の開発を促進するために、去年は畜産専門家、今年は園芸専門家というふうに、まことに合理的な計画にしたがつて順ぐりに技術者を派遣しているんだという。そういう話をききつつ、私には皮肉な考えが浮かんでくる。「いかにもアメリカらしい、オートメーションみたいな考えだ。だが民衆になじもうともしないような技術者を送りこんで、ひとりよがりの『慈善』みたいなことをしたつて、いったい後進国民の福祉にどれくらい役に立つんだらう。この膨大な計画の末端で何が起こっているか、ご存じないような『計画』なんぞは長生きするよ。アメリカとアメリカ人も、ことによると日本におとらず官僚主義の街道をまっしぐらに突っ走っているのかもしれない。アメリカはますますローマ

帝国に似てきたようだ。」

ハーゲン博士などには、そういう官僚臭はすこしもなかった。バタクさいのが好きな中尾君も、なんだかあまりよい気分がしなかったらしい。二人は黙ってテントにもどった。ところが、私たちのテント場には、この町のハイスクールの校長さんが頻々と訪れてくるようになった。かなりの年輩で、あごひげを蓄えたその重々しい顔つきや物腰は、彼が「教養」というものを重んずるインド型の紳士であることを物語っている。彼は日本人が珍らしい。日本人に好意を持っている。だから、しょっちゅう入りびたりに私たちと付きあって近づきになりたい。親切にあちこちを案内し、日本の話や国際問題の話をして、それも「哲学的」雰囲気でも話したがるのである。

滞在しているといっても、私たちにはいろいろ仕事もある。四六時中おつきあいというわけにもゆかない。私にはいささかうるさく思われる程度である。中尾君にはさらにしつこく感ぜられる。こういう反応の仕方じたいが、日本人らしい気の短さかもしれない。

校長さんは、自分の学校の式日にぜひ列席してくれ、といってきた。中尾君はもちろんにべもなく断わる。私は断わるのも悪いと思っただけで出かける。ハイスクールはつい何ヵ月前にできたばかりだった。校舎がまだできていないとかで、ワラぶきの掘立小屋が二、三棟あるばかりだった。ハイスクールといったって、日本の小学校程度の教科を教えるだけらしい。広場に並んです

わった百人ばかりの生徒は、年齢もまちまちのクラスに分かれている。

驚いたことに、私は、この学校の有力なパトロンらしい一紳士と並んで、主席席にすえられてしまった。やむをえないと私は観念した。どうせ一言何か挨拶しろと注文があるだろう。あいにく私はひどいブロンクン・イングリッシュしかしゃべれない。覚悟ができる心臓が強くなつた。はたせるかな、だ。私は紹介され、立ちあがると、ポカラの町の美しさをたたえ、ネパールの皆さまと日本人とはおたがいの信頼の上に立って助け合ってゆきたい、と結んだ。私はただ自分の率直な気持ちを挨拶にかえたのだが、校長さんがネパール語に通訳すると、生徒や教員たちがやんやと拍手して、私はやっと、ほっとする。「信頼と相互扶助」、私の文句の中のこの所がたいへん校長さんの気に入ったところであった。そこでさっそくメモランダムを作り、読み上げて私に渡してくれた。日本人ならば「信頼と相互扶助」などといったって、儀礼的な美辞麗句として片づけてしまうところだが、その後、校長さんと話し合った雰囲気からして、彼がそれをもつと「哲学的に」深くきいてくれたことがわかった。私はそれを心から感謝する。ネール氏の高遠な理想主義をささえている民衆はここにもいたらしい。

まもなく私は意外なことを発見した。異国の町に初めて踏み入った私たちである。町びとたちが、私たちをどう見るだろうということに敏感だったのもむりはなからう。ポカラの町びとたちは、はじめてはいって来た私たちに、一種の警戒的な注意を払っていたようだった。ところが、

私たちがアメリカ人のところを訪問したということは、たちまちのうちに町びとの噂うわさになったらしい。そうすると、その警戒の念は疑惑と冷やかさの方に傾いていったのである。というのは、アメリカ人たちは町びとに信用がなかったからだ。しかるに私がハイスタールを訪問し、その校長さんと私たちが町の通りを仲よく肩を並べて歩いて以来、町びとの私たちに接する態度は一変してしまつたのである。今までの堅い冷やかさは消え失せてしまつて、それにかわつてニコニコとしたほほえみが、町かどから私たちを見送つたり、店先の買物で私たちを迎えたのだった。君のもたらす情報やら校長さんの話の端々はたはたから、そういった雰囲気の変わりようが何にもとづいていたのかを私は悟つた。考えてみればあたりまえかもしれない。自分たちの子弟をあずかるあの校長さんが親しくしている人間なんだから、私たちが悪者じゃないという評判を獲得してもいいわけだった。

ダウラギリと商業民族

そのうえに、この校長さんと付きあつたおかげで、私たちがいま一つふしぎな御縁を拾うことになつたのである。それは、あの式の日私の隣にすわつた紳士のことである。彼の顔は、日本人とまつたく瓜二つうりふたつだった。リュウとした夏背広を着こみ、腕には金時計、そして彼はアメリカ製のシガレットを私にすすめてくれた。まもなく私は知つた。彼はタカリー族という民族の酋長しゅうちやう

格かの人で、この学校のパトロンだということだ。彼の一族は町を目抜きめぶきの通りに、三階建の立派な家々をかまえて商店を張つていた。私たちは、町の通りと二階のテラスのあいだでおたがいにニコニコと挨拶をかわしたこともある。私たちが校長さんの案内で、町から一里ばかり離れた美しい湖水へ遊びに出かけたとき、それでも彼とその一族郎党は、楽しそうにピクニックに出かけていて、私たちにしげに話しかけてくれたのである。

いったいこの町のおもな住民はどういう連中なんだろうか。まもなく私はこういうことを知つた。この町の中心部を占めてもつとも有力なのはタカリー族という連中である。彼らはひじょうに精力的な商人である。もともとカリガンダキ川の峡谷きやうこく、ダウラギリ峰のふもとに住んで、チベットとネパール間の商業をやっている民族のだけけれども、このポカラの町にも進出してきて、町の中心部をほとんど占めているんだという。おやおや、それでは、私たちがこれから目指す方向こそ彼らの郷土ではないか。私はポカラを去る日に、例のタカリー族の紳士を訪ね、彼らの郷土への紹介状を書いてもらった。

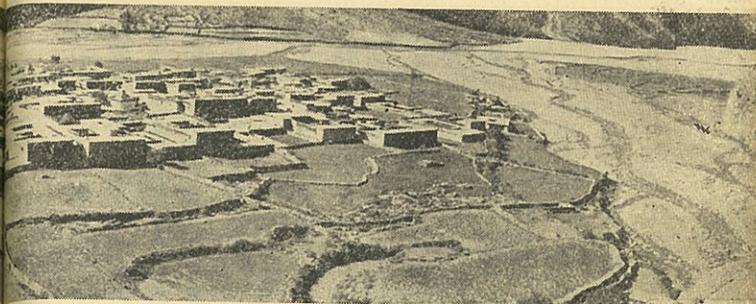
そのカリガンダキの谷筋やまのすぢを溯さかのぼる者は、幾重いくえんにも折りかさなつた壮大な山ひだと、それにもましてその上部にはるかな輝きを放っている雪白のヒマールを仰ぎみるだけで、いったいどこからこの大河が姿を現わすのだろうといふかるのである。谷は深い。いまにも行きつまるのではないかと思う。しかし一つの山裾をまわると、また忽然こつぜんとして大河が姿を現わし、上流の姿が展開し



8 トククチャの全景 それは、町ともいえないほど小さいが、清潔で、健康

それは町ともいえないほどの小さい町のだが、清潔で、健康感にみち、そして活気がみなぎっている。隊商がひとつまたひとつと町にはいり、町を出ていった。ここはチベットとヒマラヤ以南の世界を結ぶ往還の要衝ようしゅうなのだ。あの断崖をもともせず、遠い異国に富を求める隊商たちは、ひきもきらず町を通りぬけるのだった。あるときにはラバの隊商が、あるときにはロバの隊商が、そしてときにはゾウ（牛と、ヤクといふチベット）の隊商が、この町にはいり、また出てゆくのだ。その馬の首につけられた鈴の音が、異国への郷愁をさそうように、町の石畳の通りをぬけてゆく。あるいは、午後の日も傾いたころ、それらの隊商が到着するやいなや、どこかの石塀をくぐり、どこかの中庭につながれて、あっというまに安らかな宿りの態勢にはいるのである。

隊商の駄獣だじゅうの背には、ふりわけの麻袋があった。その中にはチベットの岩塩や、ネパールの穀物がぎっしりつまっているのだらう。馬子まごたちはけわしい山道を、一隊また一隊と駄獣の後を追ってくるのだ。彼らはすべて男、それも若い男が多い。駄獣の後



で活気がみなぎっている。

ていった。

行きつまるはずはないのだ。この大河は、はるかなチベット高原に源を発し、やがて世界屈指の二巨峰——ダウラギリとアンナプルナ——の間で大ヒマラヤを真っ二つに断ち割り、氷河の水を集めつつさらに南へ、亜熱帯の世界へと休みない旅を続けているんだから。

この大峽谷のただ中にトククチャという町があった。近づけば近づくほど大きくなる氷雪の峰々がこの町をとりまいていて、ここではふり仰ぐ首すじが疲れるほどに高々としていた。清らかなカリガンダキの流れに近く、この町は段丘の上を占めている。石畳を敷いた街路が二、三本町を貫いていた。街路をはさんで、石壁造り二階建の家々がびっしり立ち並んでいる。石塀のくぐり戸をあけて中にはいると、そういった家々はみな中庭を持っていて、中庭に面して人びとは二階に住み、下は薪置場まきおきばと厩舎うまやになっているのだ。屋上は平屋根になっていて、乾燥地帯特有の澄みきった陽光がさんさんと降りそそいでいる。

から、あるいはムチをふるい、あるいは口笛であやつり、ののしり声をはりあげ、そしてしばしば石ころをひろって怠け者の馬どもの尻に投げつけるのだった。

「上流から一袋の塩を下流へ運ぶと、一袋のオオムギと交換されるんです。そのオオムギ一袋をふたたび上流へ運べば、三袋の塩と交換できるんですよ。」

行きずりの馬子がそう答えて、私たちとすれちがっていった。

キャラバンの鈴の音に明け暮れる、こんなヒマラヤの大峽谷。これがタカリー族のふるさとであり、トゥクチャの町こそは彼らの首府ともいふべき町なのであった。町はずれのラマ寺のかたわらにテントを張った私は、彼らの一人をティープレコーダーの前にまねいて歌ってもらった。

「冬がくれば沈黙した森のしじまの中に、あの山、この谷は閉ざされてしまう。けれどそこそ、わたしたちのふるさと、こよなく愛すべき私たちのふるさとである。夏になれば、青草がもえ出で、牧場には牛、畑にいそしむ人、そしてキャラバンを追う人びとの群れ、これが私たちのふるさとなのだ。」そんなふうな歌詞だった。

不幸にも録音は機械の故障ですべてフイになってしまったし、正確な歌詞は今再現すべくもない。けれどその沁みとおるような抒情のひびきが、今でもまだ私の耳のどこかに残っている。

人口わずか一万たらず、そしてこんなヒマラヤの山奥に住むこの商業民族については、かつて世界の学界に名前を紹介した人さえたった二、三にすぎなかった。いくぶんでもとりまとめて紹

介することになったのは、おそらく私じしんの報告が最初かと思う。けれど、ここでこの民族の物語にいささかでも触れたのは、そのためではない。こんな民族と日本とを結ぶ、ほんの一すじの奇しき因縁を記したためなのである。

一八九九年の春、(といえは、日清戦争がすんでまもなくという昔なのだが、) 仏教研究のためチベットにはいることを志した日本の一青年僧が、ネパールのヒマラヤ山中に踏み入っていた。彼の名を河口慧海かわくゑいという。

当時のチベットは、ネパールにもまして外国人の入国をきびしく拒んでいたのである。とくにインド側から入国にたいしては、厳重きわまる警戒をおこなたらない。いうまでもなく英国の侵略を恐れていたのであって、そのうえにチベット政府の背後には清朝が圧力をかけていたのである。

河口師は、チベット入りの本街道、すなわち北インドのカリムボンからラッサにはいる道避け、ネパールを間道としてえらぶ決心をした。もちろんチベット人に化けての密入国である。ところがカトマンズの町に着いて、いろいろ調べた結果、ネパールからの道すらも、本道を通じては危いことを知った。彼は間道の間道を求めてポカラに至り、そこから私たちとほぼ同じと思われる道をへて二つの高い峠を越え、カリガンダキの溪谷を溯り、トゥクチャの町に着いたのである。

ある。カトマンズの郊外にある仏寺の和尚が、トゥクチャのハルカマンという人にあてて紹介状をくれたのである。

ハルカマンはなかなか利かぬ気の豪傑で、このニセ者のチベット坊主の世話をよくやってくれた。ハルカマンはチベットへもしばしば出かける。自分の家の一切蔵経もチベットから買ってきた。あるときには、ネパール国王の命をうけてチベットへ一切蔵経を買いに行ったこともあって、それが国王の図書館に収まることとなった。

ハルカマンのもとを辞し、首尾よくチベットのラッサに潜入した河口師は、仏教の勉学の目的をほぼ達したころ、日本人たることが露見しそうになる。それを察するや、数々の困難を冒して彼はインドへ脱出した。彼がチベットを脱出するやいなや、ラッサにおいて彼と親交のあったチベット人たちが、チベット政府のためにつきつきと投獄されることになったのである。この噂を聞いた彼は、なんとかそれを救わねばならないと考えぬき、ネパール国王の口ぞえで、ドライラムに直訴しようと決心する。チベット政府はネパール政府と友好的だったから。

今度は堂々と身分を明かして、彼はネパール国王に会おうとするが、気違い坊主扱いされて、番兵になぐられたり玄關払いを食わされたりして、なかなか謁見してもらえない。こういった困難をいくつも克服して、ついに彼は、カトマンズの王宮で謁見を待つことになった。

このとき彼はパッターリとハルカマンに会い、おたがいにびっくり。かつての一介の乞食坊主が

ところもあらうに国王の内殿から姿を現わしたとは。それがハルカマンの驚きであった。

驚きのすぎやらぬうちに、慧海は大王殿下に謁見する。殿下は彼のネパール密入国の一件を鋭く切りこんでくる。慧海は答える。

「私は四年以前にこの国を通過したにはちがいがございませぬけれども、とつぜんこの事を申しあげますれば、当国の関所の官吏及びいささかにも関係ある当国民が殿下の怒りにふれて、あるいは罰せらるるに至りほしきかと憂いましたから、ソコで私はこれを殿下に申しあげなかつたのでございます。……私の願うところは私が当国を旅行したゆえをもって殿下の臣民を罰せざらんことを真実に希望するのでございます。もしその希望を容れられぬならば、私は確かにこの国を通過したに相違ございませぬけれども、ただ今申しあげた私の言葉はお取り消しを願いたい。」

「よろしい。私はけっしてあなたがこちらに來たことについてはわが臣民たちを罰しません。まったくあなたは安心するがよろしい。」

(これにひきつづいた国王と河口師とのドラマチックな謁見記については、ここに省略することとしよう。)

以上の物語は、私じしんの集めた資料ではない。今は亡い河口師の、『西藏旅行記』から、私が忠実に編集したものである。だが、ハルカマンをめぐるこの物語を、私をおいて編集できる者

が、いったい全体、あるだろうか。

ヒマラヤからもどった私は、河口師の報告を、逐一、かみしめて読んでいった。そしてそこに、トックチャの町の名とともに、ハルカマンの名を発見したのである。私は、自分のノート、ヒマラヤで持ち歩いた歴戦のフィールドノートの一冊とつき合わせてみようと思う。このノートには、トックチャの町で得たタカリー族の記事があって、この民族をリードする最有力な商人の家系セルチャンの名が記されている。「ハルカマン」の名は、このセルチャンの家系の二代前の祖先として、そのノートに記されていた。まさにピシヤリと符節を合することである。

この少数民族は、少なくとも日露戦争よりも以前に、ハルカマンをリーダーとして、インド・チベット間の通商に活躍していた。彼らの通商は、だから遠距離商業であり、卸売商人的である。けっして日なたくさい小売商人ではない。だからこそ、彼らはまた政治にたいしても鈍感ではありえない。現在でも、仲間の有力な一員を常に首府のカトマンズに駐在させて、ネパール政府との連絡も怠らないのだった。私は聞きおよんでいる。数年前にこの国のタバコの特売権を獲得したのは、じつに彼らであった。

だが、私は根が情報マンではない。毎日の新聞もろくろく詳しく読んでいない人間だ。それにひきかえ、私の妻は夫のためと思つてか、「ヒマラヤ」だとか「ネパール」だとか名のついた記

事なら、何でも切り抜いてスクラップブックにはりつけて置いてくれた。こういう妻の努力に對してすら、私は十分応えていなかったのである。ある日、こういうスクラップブックを珍らしく手に取った私は、ギャフンといつてしまった。日付はいつか、何新聞かはわからないが、二、三年前、日本で国際見本市の行われたときの記事である。写真入りで、「食い入るような眼差し」のネパールの兄弟バイヤー、Y・M・スエルチャン氏とK・M・スエルチャン氏」と解説がある。

「ご両人はヒマラヤのふもと、ネパールのカトマンズにあるスエルチャン商会という貿易会社の経営者、スエルチャン兄弟。……年は三十歳前後だが、『よくもまあ……』と思うほど日本人そっくり。もちろんこの見本市のために空路かけつけてきたものだ。立ちどまる時間もおしいといつた表情で、『小さな機械がほしい。ネパールの政治、経済はいまひじょうにむずかしい。あとでゆっくり話す。』ときた。そうかと思うと、毛糸手編機やマッチ箱製造機の前では、まるで吸いよせられたようにじっと動かない。」

ネパールの商人で日本を訪れた人は、私の知るかぎり、たった三人である。ハルカマンのお孫さんにあたる先刻の二人と、ネパール族出身のラトナ氏だ。ラトナ氏は、ネパール政府の代表として、日本で行われたある国際宗教会議に出席するためにやってきた。東京では彼は三田幸夫さんのところを根城にしていた。そして京都に來ると、奇妙なことに京大の桑原武夫さんを頼って訪ねてきたものだ。桑原さんから電話がかかって、私がお相手をした。

ラトナ氏は、宗教会議がすんでもどうしたことかいつこうネパールに飛んで帰らない。四国へ行ってサンゴ珠の工業を視察したり、京都へ来れば西陣織を見たいと言いだす。京都で顔を合わせた私は、氏が宗教家であるよりも一個の商人であると感づいてしまう。私どもが川島織物だとか西陣の織物館を案内して見せても、それだけではどうしても満足しない。とうとう私たちをのせたタクシーは、西陣のとある織元のノレンの前まで乗りつけてしまった。

店にはいって、あれやこれやの織地を並べさせたところが、彼は二、三流品の反物がすっかり気に入ってしまった。しきりに、その場で取引の交渉をはじめようとする。織元は、どうやってこの「貿易」をやつてよいか、戸惑つてしまう。そんなことは生まれてからやつてみたこともないから、だまされて損をするんじゃないかなるかという不安が顔に書いてある。ラトナ氏はやっきになって支払いの方法や手続きについて説明をおっぱじめる。私はおもしろく見物していたが、彼氏にきいてみる。

「いったい、この織地をどこへ売つつもりなんですか？」

「チベットへ、ラッサ方面へ売るんです。」

彼の一族はカトマンズに本店を置き、カルカッタとラッサに支店を出している、ヒマラヤの商人なのであった。私は考えさせられてきた。元来からいうならば、貿易と移民によらなければ食つてゆけないのが日本の国民ではないか。食わんがために大戦争までおっぱじめたほどではない

か。だから、ヒマラヤやチベットの奥まで商品を売りこみに出かけてしかるべきは、むしろ日本人である。それになんという醜態だ。ヒマラヤの山奥からわざわざ日本へ買いつけにお客様がきている。しかも、やつてきたお客様が、どこの何者だということについては、知りもしなければ知ろうともしないのが、この日本人という奴である。

相手が小者であるから、とるにもたらぬことだ、と、悟つたような見方をする日本人があるかもしれない。欧米人にたいしてはたった一こと「ワンダフル」とほめてもらいたいために無駄金でも使うくせに、大切なアジア後進国のお客様にたいしてはまるでサムライみたいな頭でうっかりすると「無礼であろう。退りおろう。」とどなりつけなければかりに自分の店先にふんぞり返っているのが日本人かもしれない。日本のインテリにいたつては、そのうえに、商業的進取の精神を蔑視すらしている。「たんなる商人にすぎない。」「利益の追求に汲々としているヤカラ。」「人間の膏血をしばり取る奴ら。」「ユダヤ人。」といった類のものから、「飽くところを知らぬ資本主義の暴虐。」「死の商人。」といったモダンで「進歩的」な表現に至るまで、商業ないし商人にたいする軽蔑や憎悪の雰囲気、日本の氣の利いた知識人のあいだになければ幸いだと思ふ。

ほんとうのところは、江戸時代以来の「土農工商」の觀念から大して進歩していないサムライ的な頭のものが、「福祉国家」だとか「社会主義」とかいったいへん進んだ看板とゴツチャになって、現代の日本の知識人を毒していなければ幸いである。私はそういつたサムライや「お上」

のにおいの強い、官僚主義的な考え方が、日本の今後を毒しはしないかと恐れる。ところが、日本の知識人が抱いている「商人」にたいする反感などは、ネパールにくらべれば物の数ではないのかもしれない。ネパールの知識階級の青年である某君に、タカリー族のことをきいてみた。彼は吐き出すように答える。

「ネパールのユダヤ人ですよ。人民の膏血を搾っている奴らですよ。」

そういうった某君は、ひじょうに進歩的なイデオロギーの持主であるが、同君のこの反感の深いところには、一種のカースト間のひがみと反目といったものがうごめいているようだった。彼は武士のカーストの生まれであった。

たったひとにぎりほどのマルワリ族がインド四億の経済の死命を制しているように、たったひとにぎりのタカリー族は、ネパールの商業経済の中でかなり無視できない勢力を持っているらしい。じつさい、トゥクチャで彼らのひとりの語ったところでは、「われわれは、あたかもマルワリのような民族だ。」と自認しているのである。けれどそれほどまでに発展しつつある彼らの力は、何によって培われているのだろうか。ちょうどヨーロッパの近代資本主義の発展に、ルネッサンスとプロテスタントイズムに養われたたくましい魂が必要であったように、彼らの発展の陰には、「商魂」を裏打ちする民族のルネッサンスがあったのだ。

この民族の「目覚め」は、おそらくハルカマンの活躍したころから胎動していたのだろう。

「今を去る二十五年ほど昔から……。」
と彼らは語りだす。そのころから彼らは自分たちの民族の生活刷新運動を開始した。彼らは毎年一回八月に部族総会を開催し、この総会で、向こう一年間、彼らの生活を律する綱領や法令がきめられる。重大な事件が議せられる。この部族会議の上に立って十三人から成る行政委員会が構成され、その委員会がこの困難な「民族改造運動」を推進することになったのだ。

こうして委員会および総会の決議事項は、タカリーたちの生活の広範な面に影響をおよぼすこととなった。まず第一には経済生活の改善である。「どの家族も、食糧や燃料といった必需物資を、むこう一カ年分つねに貯えて置くべし。」という方針が、厳格に実行された。それから、商業活動を円滑にするために、部族の共同基金を設定した。その金利はわずかに年四パーセントであり、タカリー族の者はだれでもこの融資を受け得るのである。私が後にチベット人の村で調べたところによると、彼らチベット人のあいだでは、金利は年に三三パーセントだというから、これは比較にならない低率だといつてよい。

「過去十五年來」彼らは教育の価値を認めだした。トゥクチャには小学校が作られ、この基金に三万ルピー(ざつと百五十万円)が設定された。これが、こんな山奥で行われたとはなんと驚くべきことだろう。ここに着くまでに、私は小学校といわれるものを二つ三つしか見かけていない。そのどれもが、最近開校したばかりの寺子屋式のもので、しかも、早くも氣息エンエンの経営状

態のものさえあったのだから。

トックチャの小学校の立派な校舎はまだ完成していなかったが、町はずれの草地では、青年教師が二、三十人の子供たちの授業を、毎朝九時ごろからやっていた。数枚の土産紙とぎんしを綴った教科書の一つには、ネパール語と英語の短文がのっていた。生徒は小型の石の黒板くろばんを使っている。自習時間になると、よくできる子供が大声で文章を読む。それについて他の子供連がいつせいに大声でくりかえしていた。そのほかに、このちっぽけな町に、啓蒙用の図書館と施業所せいぎやじょとが設けられているということだ。いずれも行政委員会の活動で作られたものである。

そのうえにタカリー族の富裕階級は、高等教育を受けさせるために、自分の子弟をインドの大学に送っていて、私が訪れた当時にはすでにバナレス大学を卒業したマスター・オブ・アーツが一人生まれていた。だから彼らの教育改革は掛声かこゑだけではない。あのポカラのハイスクールも、まったくこの連中の資金援助によって生まれたものである。

彼らはさらに宗教改革にまで手をのびした。もともとこの民族の宗教はジャングリ教という土着の信仰だった。おそらく天神てんじん地祇ぢきを拝し、シャーマンのような僧のいた宗教だったのであるが、その内容は私にはまだいっそうわからない。さてそこへ、約四百年も昔に、北の方からラマ教がはいってきて、ラマ僧はジャングリの僧を追放し、その経典はすっかり焼きはらわれてしまったそうだ。それからまた、南の方からはヒンズー教の影響がおよんできた。こういった二大宗

教におおわれつつ、しかも、もともとの民族信仰は、ひそかに今日まで生きぬいてきたのだ。

タカリー族の行政委員会は、このように小さな民族と小地域の中に三つもの宗教が並立するのは不便であるとして、公的にはジャングリ教を是認ぜにんして、これに一本化することにきめたのである。こうして宗教の復古運動が起こったのである。かつての盛時をしのぼせるように、この町には今なお立派な仏典図書館とラマ寺がある。しかし私が訪れたとき、そのラマ寺の僧房が寂びさびれていたのは、こういう事情からだときかされた。

たんなる金銭にたいする食欲あつじゆだけでは、もはや、彼らの立ちあがりたちあがりを説明することができない。タカリーたちの民家の中に招じ入れられ、その清潔な屋内と、暖かい好意にふれつつ、そんなことを私は思う。それはルネッサンスやピューリタン革命や明治維新がそうであったように、もっと全面的なものと根元的な、人間の目覚めに立っているものようだった。それにしても、こんな小さな民族にも、時いたればこんな疾風怒涛しつぷうどたう時代がおとずれるとは。私は彼らの「青春の目覚め」のために乾杯したい。

2 チベット高原を行く

チベット人の世界

トゥクチャを過ぎると、峡谷はしだいに打ちひらけてゆく。まもなく私たちは気がついた。いつものまにか私たちはすっかり様子のがった世界に来ていたのだ。それは高原と砂漠の国である。たった数日行程のうちに、なんとという変わりようだったろう。

天空には塵ひとつない。まさに天空である。地上はどちらを向いても茶褐色の世界である。私たちのキヤラバンはそんなところをなおも進んでゆく。丘の斜面に最後までしがみついていたビヤクシンの木も、みるみるまばらになってゆく。あとにはただ、ポツンポツンと散らばった低い灌木ばかり。そのほかはいっさい、砂と礫とむき出しの岩ばかりである。こんな丘がいくつもいくつもの、コバルト色の空をバックに、荒々しい稜線をくっきりと浮きたたせている。ただカリリカンダキの流れのみが、いかにもやさしく段丘のあいだをのたうちまわっていた。それにしてもここでは、いっさいのものがいっそう荒々しい。荒々しく、直截簡明で、ピリリと引きしまった精神的な風景である。

漆黒の夜空には、数えきれない星がまたたいていた。そしてまた旅立ちの朝がめぐってくる。高原の気は冴えきっている。あたりは一面、光の大洪水だ。だがこの国では、もう太陽を呪う必要がない。ここでは陽の光が、いかにも尊いと感じられる。

そしてある朝のこと、バロメーターはついに三千メートルをさすようになった。私たちはその日、西北に進んでいた。私は未練がましく南の空をふりかえる。褐色とコバルトばかりの単調を破って、白銀の巨塊がぬっと立ちはだかっている。アンナブルナの北壁だ。神々しいヒマラヤ褶（ヒマラヤの高山にのみ見られる、烈風のためにできた縦の水雪のヒマ）をまとい、凄味をふくんだ青氷の壁が、まさに何千メートルを一気に切っておとしている。妖しいほどの荘厳さをたたえたその絶頂は、私の心をとらえて放さない。みつめているほどに、まるで吸いこまれてゆきそうだ。私は登りたい。この足であの天上界にようじ登りたいと思う。いかんせん、登れるだけの実力がない。しよせんはおよばぬことと思いがら、かえすがえすも残念である。

けれどその巨峰も、いつしか南の空にかかるようになっていたのだ。もはや彼女は一步一步私たちから遠のいてゆくのだ。私は馬首を西北に立てなおす。

急斜面を登りきると段丘の上に立った。足もとから、ひからびた広原が、どこどこまでも広がっていた。ガラガラの上の砂礫の上に、背丈の低い灌木だけが、ポツンポツンと規則正しく間隔を置いて散らばっていた。カラガナだ。砂漠の国特有の灌木だ。手出しもできないほど一面の刺につ

つまれた灌木だ。

灌木には、黄いろいマメ科の花が、こぼれんばかりに咲いている。惜しいかな、風と太陽のほかに匂いがない。しかしそれで十分だ。刺のある、こんな冷やかな荒野が、私にはしたわしい。私の胸はおどった。うちまたがった土産のチベット馬が一足あゆむごとに、砂ぼこりが広原を流れてゆく。北の方には、だんだんおとろえゆく山なみが、それでもなお大うねりのように望まれる。あれが大ヒマラーヤの最後の余波なんだと思う。あの空の下、星の下、たぶんもう二、三日北へ進めば、国境を越えてチベット領になるのだ。

私の身内に、高鳴るものもえあがってきた。

「砂漠の日は高く、夜の花いとおしや……。」

そんなエキゾチシズムか。そうでなくはない。異郷への郷愁か。そうでなくもない。ただそれは、少年の感傷、ほのかなる郷愁、などというには、あまりにも激烈な情熱だった。

いまにして私はさとした。大ヒマラーヤもしい。大ヒマラーヤはすでに後にある。そして私たちの駒は北にむかっている。その方角には、もはやあの恍惚たる巨峰などはない。あるのはただコバルト色の天と茶褐色の大地、そして風ばかりだ。はてしもなく、そんな世界があるばかり。ほかに何があるというのだ。ある。何ものかがある。私たちをひきつける何ものかがあるんだ。……しかし悲しいかな、私たちは国境を越えてはならないのだ。

私たち二人は、数頭のヤクに大切な荷を積ませていた。ふさふさと長い毛におおわれて、この動物はいかにもおっとりとした愛嬌がある。カランカランと首の鈴を鳴らせながら、彼らはお行儀悪く群がって行進してゆく。その鈴の音には、中央アジアの響きがこもっている。中央アジアは、じっさい、この足もとからはじまっているんだ。

段丘がつきると、またけわしい山坂がはじまった。対岸には、断崖の中途にひっかかった蜂の巣のように、村が一つみえる。よくあんなところに家を建てたものだ、気が知れない、などと思う。乾燥地帯特有の平屋根造りが、崖っ腹に折りかさなるように密集している。蜂の巣といって悪ければ、一個の近代的ビルディングのようでもある。その村はもう廢村になっていて、だれも住んでいない。風が蕭々しやうしやうと広原を吹いている。真昼の太陽が輝いていた。

おそらく断崖づたいに引かれた水路がこわれたものか。それとも戦乱の世がおさまるとともに不便な場所を見すてたのか。この村民は、今では崖下の溪谷けいこくの出口に、青々としたオアシスの中をえらんで、いかにも楽しげな一群の建物を作って住まっている。チベット人たちのオアシス。褐色の大地と対照的に、目も覚める緑の麦畑。ところどころにこんもりとしたドロヤナギの茂みがある。氷河から融け出た川水が、蜿蜒えんえんたる水路でここまで引かれ、それから網のような水路にわかれて、蒔きつけどきの麦畑やソバ畑に灌溉かんがいされるのだ。

彼らチベット人は、この褐色の大地のように陽に焼け、埃ほこりと脂あぶらにまみれて汚い連中だった。生

まれてから体を洗ったこともないという。しかし、付きあってみると、——いや、付きあわなくてもその顔だけみても——明かるくて影がなく、活気が体にみなぎり、そして素朴ではあるが深さをたたえた連中である。ちょうど、あの澄みきったチベットの空と氷雪の峰のように、単純明快にしてピリリとしている。

ポダイジュと娑羅双樹のしげる暑熱の世界から、チベット人の住むこの高原の世界にあがって来るには、ヒマラヤを横切つてわずか数日行程の旅で十分だった。ヒマラヤの大峡谷の、そのまともともせばまった関門を境にして、おどろくべし、たった一日のうちにすべての風物が一変してしまった。青々とした熱帯性の草木の茂りは、忽然として松林に、ついで砂漠状の荒原に変わつてゆく。傾斜したワラぶき屋根の民家は、屋上に土を敷きつめて作業場とした平屋根に変わる。ヒンズー寺院、泉場、そしてもの悲しく単調な賛歌のひびきは忽然と消えうせ、神秘的なチヨルテン(仏舍利塔)と青空にはためく白い旗ノポリ、そして躍動的な歌声に合わせたタツブダンスが現われるのである。タカリーたちは、この二つの世界を結びつけていたのだ。

たしかにすべてが一変していた。風物が一変したばかりではない、人びともまた一変したのだ。人びとの着物や言葉が一変しただけではない、人びとの慣習もまた一変したのだ。人びとの慣習が一変しただけではない、人びとの考え方や感じ方まで一変したのだ。いや、考え方や感じ方ばかりでない、人びとの魂とその行動の発想法も一変したのだ。なんとなく私はそう直感する。ま

もなく、それを裏づけることがつきつきと起こるにちがいない。

住民の違わない二子村落

カリガンダキ川の上流にあたるカグベニという村で、私たちは大部分のポーターを解雇してしまつた。あとに残したのはただ三、四名選抜した、カトマンズ以来の子飼いのメンバーだけである。ここからさらに西北の山岳地帯へ、およそ一週ばかり「遠足」にかけようということになった。

しかしこの「遠足」は、とんでもない山岳旅行である。川谷を出はずれるやいなや、もの一日急斜面を登りつづけ、夕方にやつと「葱ガ洞」という高山帯の岩窟にたどりついた。翌日は急斜面の山腹を縫いながら、ついに四四〇〇メートルの高さに達し、そこから急に下つて三八〇〇メートルの沢にテントを張る。私たちの頭上間近く、氷河が無気味な口をあけていた。翌日はふたたび登り、ふたたび降り、もう一度登つて、四五〇〇メートルでキャンプ。これから先はもう植物は何も生えていないというので、翌日は一日滞在して、ヤクに存分食いだめをさせる。それからさらに一登りして四八〇〇メートルほどの谷間に泊まる。明け方には吹雪がきた。頭はずきんずきんと痛みどおし、食べものは吐いてしまい、はじめて経験する高山病にフラフラになりながら、とうとう海拔五二〇〇—五三〇〇メートルの分水嶺まで往復したのはさらに翌日のことで

あった。万年雪の世界がその高さからはじまっていた。しいんとしたただ雪と岩礫の世界である。ふらふらに参っているわれわれを尻目に、カグベニでやとったヤク使いのリンジンという男は元気なものであった。彼は相棒に少年をつれてゐる。毎夕キャンプ地に着いて荷をおろすと、彼らは向かい斜面にヤクを放す。ヤクどもは首の鈴をときどきカランといわせながら、おとなしく灌木や草を食べてゐる。しかし夜中のうちに、彼らはとんでもない高さまで登っていて、朝方には姿もみえない。それをさがしにいつて急斜面をよじ、ついでののしり声をはりあげたり石をぶつけたりしながら追いつてくる。ヤクを使うのにはものすごい体力がいるにちがいない。

私たちがこんな旅をしたのは、カリガンダキの一支流ケハルンパの流域だった。この川はあまりにもものすごい峡谷を刻んでいるから、沢通しにはまったく通れない。ただはるかな山腹から、身の毛もよだつような断崖を見おろすのみである。その山腹からさらに頭上には、ところどころ黒い断崖をのぞかせた氷河と万年雪の山々が、倒れかからんばかりに切り立っている。谷の向かいも、上流も下流も、そんな山々が取りかこんでゐる。

まったくのところ、どこにも出入口がないような山腹に、たった二つ部落があった。部落はサングダおよびコーとよばれていた。恐るべき隔絶村落。こんなところにも、住もうと思えば人が住めるのだ。まったく、人間という動物は想像を絶したしるものである。

こんな山道を越え、この寒村をはじめて世界に紹介したのは、私たちが最初ではなくて、慧海

師であった。

「勇を鼓して上に登れば登るほど空気が稀薄になりますので、動悸は劇しく打ち出し、呼吸は追って気管が変な気合になり、その上頭脳の半面は発火したかの如く感じて、ドウにもして見ようがない。……ある山腹の如きは、雪崩のために積雪と岩とを持ち去られて、砂ばかり残っているところがあります。……星と雪の光を便りに甚だ急なる岩の坂を西北に降ること一里半。殆んど坂落しのような山です。やがてサンダーという十軒ほどある山村に着きました。」

間道の間道を求めてカリガンダキをさかのぼった慧海師は、カグベニの上流のツァーランという村に一カ年滞在し、完全にチベット語とチベット人の生活慣習を身につけた。それからいったん南方にもどると見せかけて、さらに間道の間道のまた間道を求めて、私たちと同じこのけわしい山坂を、ただ一人の案内人とともに越えたのだった。それから山を越えてもう一つの寒村にたどりつくと、その案内人も解雇してしまい、山のような荷をかついで、まったく道のない鞍部を越えてチベットに越境してしまつたのである。つまり師の最後のコースは、間道の、また間道の、またまた間道の、またまたまた間道であった。

私はまったく舌をまく。その剛毅。その不屈の魂。その周到な準備。そしてその正確な観察。だがこの超人に追隨できるだろう。しかるに、師の旅行記があまりにもおもしろすぎ劇的にすぎるために、世間ぜまい日本の「有識者」の中には、彼のなしとげた偉業を疑った人も少なく

かったそうだと。

「おまえのいうホラなんか、あてにならない。ほんとうにチベットへ行ってきたというなら、今度は証拠に植物の標本でもとってこい。」

二回目のチベット入りするとき、彼はほんとうに植物採集もやってきたのだった。けれどその標本は、中尾君がこのヒマラヤ行で多数の標本を持ち帰るまで、何十年もむなしく東京のある場所にある標本室に埃をかぶったままだった。私たちの植物標本の整理が京都大学の北村四郎教授の手で行われたとき、慧海師の標本は初めて専門家の手によって鑑定されたのである。その標本がヒマラヤやチベット方面でなければ得られないものだったことはいまでもない。そのうえに、チベット語の土名も正確に記載されていた。

「標本はじつによく作製されています。当時学会に発表されていたら、その中には何十という新種があったのですがね。惜しいことをしましたよ。」

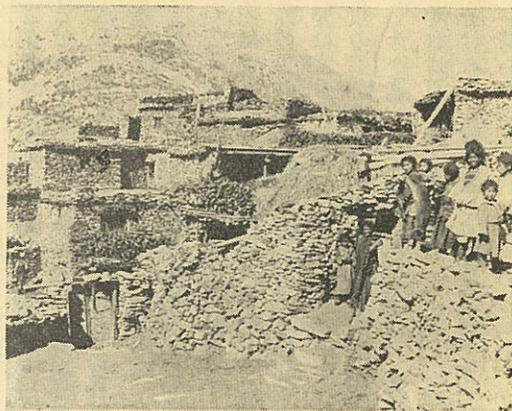
北村教授はそう語った。

英訳された『西藏旅行記』は、海外では高く評価された。チャールス・ベルのようなチベット通も、この書物には一目を置いた。私は彼のコースをずいぶん歩いたから、身にしてみてもそれがよくわかる。サングダの部落は、師の記したところとほぼ一致し、十一家族が住まっていた。いたい、デタラメが書いてあるかどうかは、たとい同じコースを歩かなくても、いくぶんでもこの

地方のことを知っている人にはわかるはずだ。それなのに、彼の真価を評価できずに、あるいはほことさらにケチをつけて無視しようとする人びとが、お膝元の日本にいたとはまことに情けない。真実が語られているにもかかわらず、彼の旅行記があまりにもドラマチックであるということと、そういったドラマがこの世界の屋根では現実起こりうるんだということ、——そのことじたいの中に、じつはチベット文化の秘密が横たわっている。私はやがてその点にふれてゆきたい。

氷河から流れ出たばかりの溪流から、急峻な山腹づたいに、もの数町ばかり水路が築かれていく。その水路が山の鼻をまわると、サングダの耕作地が見えてくる。北斜面のちよつとした緩傾斜地に、低いアゼに取りまかれた矩形の耕地が段々畑になっていた。段々畑地のいちばん上に、蜂の巣のように密集した石造りの建物がある。私たちのテントのまわりに集まってきた村人は、髪は茫々と総髪で、きたないチベット人の中でもとりわけきたない連中だ。しかしリンジンの親類の娘がカグベニからここに嫁入りしているとかで、村人たちはわれわれにも気をゆるしている。ケハールンバの峡谷をへだてて、対岸に二つの村落がみえた。ひとつはすでに廃村だという。それは百年ほど昔のサングダ村だったが、あまりに険しい崖づたいの水路がこわれてしまったので、ここに引越してきたんだそうである。いまひとつ遠くにみえるのがコー村だ。

驚いたことに、コー村の住民とサングダの住民とは同一なのだった。サングダの畑の方が広い



9 二子部落の一つサングダ (中尾佐助氏撮影)

ので、春から秋にかけては村人はサングダに住むのである。春先になると、水路の水を畑に流しこんでうるおし、スキで耕し板ハロー(土をくたき)で、土をくたくと、そこにコムギやソバを蒔きつける。蒔きつけがおわってから何日かおいて、もう二、三度灌漑する。そのひまをみて、いくたりかの村人はコー村に出かけ、同じように、灌漑をして作物を作る。秋の取入れも同じように、サングダだけでなくコー村まで出張して働いてくる。この二つの村のあいだは、登りくだりのはげしい山道を、まる一日近くもかかってしまうだろう。ありがたいことに、北斜面にあるサングダと南斜面にあるコーとは、農繁期に約一カ月のずれがあった。

サングダの収穫が終わるとまもなく、彼らは家財道具を家畜の背に積んで、村をあげてコーに引っ越してしまう。そして四、五カ月の冬ごもりがすむと、ふたたび村をあげてサングダに舞いもどる。私たちがコー村付近を通ったときには、すで

にその村はガランドウになっていたので。なぜそんなに移動するかというと、北斜面のサングダでは五尺から一丈もの雪が積もるからである。人間が出るきできないばかりではなく、家畜も一歩も出られなくなる。これに反して南斜面のコーでは雪がひじょうに少なく、降っても一日二日のうちに消えてなくなるからだ。

三年前の冬、大雪崩が起こって、サングダの水路がふつとんでしまった。水が生命線だという乾燥地帯のこととて、彼らは飢饉におちいってしまった。カグベニまで、たらない食糧を買入れにいった、やっと食いつないだそうだ。もしコー村の畑がなかったら、どうなっていただろう。こんなふうには、南北両斜面を占めて二子をなすこの二つの村は、どちらも固有の利点と欠点をそなえている。その利害長短を巧みに組みあわせて、村人は行ったり来たりして暮らしている。すばらしい人間の知恵だ。

けれど、村をあげての引っ越しなどというものは、土地にしがみついている農民たちにとつて、そんなにたやすいものではあるまい。まず第一にトラックの代りをするものは家畜よりほかにはない。十一軒の村人は、じつにヤク二〇〇頭、山羊四〇〇頭、ゾウ(ヤクと牛の雑種)二〇頭、馬三〇頭を飼っている。上品な畜産家がみれば肝をつぶすような荒れはた灌木地が彼らの牧場だ。しかも村からずいぶんはなれた急斜面に、いたいけな子供たちがひねもす山羊の見張番をしているのに出あった。人間の一生にもさまざまあるものだ。

ただ荷物を運んでくれる家畜があるばかりではなかったのだ。彼らは農民であるとともに牧童としても育ったのだ。年齒もゆかぬうちから、きびしい自然の中で、おそろしいほどの孤独の中で育ったのだ。引っこしをなんとも思わないさういった村人がおればこそ、こんな凄惨な山の中に、二子村落というおもしろいものができあがったのだらう。いや、彼らはそれ以上だった。こんな離れ小島によくもまあ、と思っているのは、私たちから見ての話なんだ。村人のいうところによると、こんなところにおいても、彼らは駄獣をつれて遠い国々まで商業にでかける。流浪は彼らにとって、ただやむを得ない悪ばかりではないらしい。孤独は彼らにとって、いつしか、愛すべきものとさえなっているようにみえる。少なくとも私たちの従者リンジンと彼のつれあいの少年は、私たちのような旅を愛する変わり者とふしぎなほど気が通じる道づれだった。

聖なる高み・タルチョー

そのサングダ村民にとっぴちばん大切なのは、春の蒔きつけの直前に行われる農事祭であった。その日取りをきめるのは重大問題だ。やりそなってはたいへんだ。よく宗教のことに通じているものに聞かなければならない。今年も彼らはトゥクチャのラマ僧のところまで教えてもらいに行ってきたのである。その日になると各家庭の長は、部落の上手の山腹にあるチョルテンに集合し、山羊を一頭天なる神に捧げて殺し、農作のよからんことを祈る。犠牲を捧げた後、そ

の場で一同酒を飲み、山羊で会食して家に引きあげる。「天のお祭り」と彼らは呼んでいる。こうしてお祭りをすませると、彼らは吉日をえらんで、全村いっせいに種蒔きをするのだという。

コト部落のすこし西に、むかし畑だった見すてられた荒地がある。そこにひとつの岩があり、岩の上にお粗末に石板を積んだ祠があった。にぎりこぶしがいはいくらいのその空所には、何も御神体らしいものがない。ただ岩の上が自然にすこし凹んでいるだけだった。

「昔サングダのラマが空を飛んできて、この岩の上にてのひらを置いたんです。だから、それらの跡が残っているんですよ。」

と、リンジンが教えてくれた。なるほど、その自然の凹みは、手型ともみえなくはなかった。今も村人はときどきここへおまいりに来るんださうである。空から仙人が舞いおりるといふ考え、そして、人間がさういった神通力を獲得できるといふ感じ方が、いかにも暗示的だ。

チベット人の世界にふみこんでから、いちばん目につくもののひとつは、おびただしいチョルテン（仏舍利塔）である。一重の塔ないし二、三重の塔をなして、その塔の上がった先端は、天空に向かつて直立している。チョルテンの根元には中に空洞がもうけられていて、その中には、聖者のお骨やその他の宝物が入れられるさうだ。そのほかに、塔の形は成さないけれど、積石塚のたぐいがいたるところにある。その積石塚のテッペンには、針葉樹の直立した梢が切りとってつきさしてあったり、ときには、そのかわりに竹がつき立ててある。それから、木の枝を折りとつ



10 ネパール・チベット国境に立つ積石塚（中尾佐助氏撮影）

れている。

チベット人の世界にはいって、まず第一に目をひく、もうひとつの景物。それはほとんどどの

て、その先々に木綿のテープを吹き流しにたくさんぶらさげたものも、そのあたりにたくさんつきさしてある。ちやうど日本のシデ（御幣）みたいな感じをあたえる。

ところで、こういうチオルテンや積石塚は高い所に建てられている。村を見おろす丘の上、断崖の絶頂、山の鼻、峠の頂上、そういったところに圧倒的に多いのだ。

それらは村人や旅人を、悪霊の挑戦から守るものだという。と同時に、何か高いところに住む、聖なる力にたいして祈るものでもあるらしい。森におおわれた高い峠の頂に、一本の喬木をえらんで、おびただしいシデが梢にぶらさげられていることもあった。それはまるで高い所に住んでいる神に呼びかけ、あるいは峰の梢の上を吹きわたってゆく風の精霊に呼びかけるシグナルのように。シグナルの白木綿には、チベット語の経文が墨で印刷さ



11 屋上の旗ノボリ 家々の屋根は段々式につながっている。

民家にも立てられている旗ノボリである。彼らはそれをタルチョーと呼んでいた。今西博士はそれを「大名行列みたいな旗」とひやかす。私にはそれが、日本の鎮守の森に立てられる村祭りのノボリのようにもみえる。あるいはむしろ、「南無八幡大菩薩」と印した八幡船の旗ノボりにみえる。この旗ノボリもまた悪霊を追放し福運を招くためにあるのだ。じっさい、この白旗には、お経の文句や三宝をのせた馬、さては獅子や鷲の絵が、版木で印刷されているのだ。こういった白い旗ノボリは高い旗竿の上にとりつけられ、一軒ずつの家のそばに立てられたり、屋根の上につけて立てられている。アパートのように何世帯もが住んでいる平屋根造りの建物では、屋上に何本も立てられている。無数に林立する白旗が、からりと晴れた青空をバックに、いっせいに風ではためいている光景は、なんともはや、源氏の大军がいるようで、勇ましいかぎりである。これではいかな悪霊も退散すること受けあいだ。

チオルテンといい、タルチョーといい、いかに彼らが、何ものかを恐れ、何ものかを熱烈に祈っているかを思わす



12 大岩壁に刻まれたオムマニベ（パド）メフムの色つき文字
（竹節作太氏撮影）

ものばかりだ。このおびただしい宗教的標示物を見よ。そのほかにまだそういったものがある。いたるところに石板に刻みこまれた、「オムマニベメフム」（オムマニパドメフムとも読む）の七文字。これだけ刻むのでも並みだいていではあるまいと思うほどある。蓮の華の上に栄光あれ。」という意味なんだそうだが、ほんとうはどういう意味がよくわからない。神秘的、神聖な文句である。まあ「南無阿弥陀仏」とでもしておこう。

「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。……」

熱烈なおごそかな合唱が、この高原の世界に充満しているかのようだ。

タルチョーの旗竿の先端には、ビヤクシンの青葉が一房とりつけられる。ビヤクシンは香りの高い針葉樹である。このあたりの乾燥した高原にはこのほか多い木で、高山帯にのぼっても、灌木種のビヤクシンがはいつくぼっている。ビヤクシ

ンのない地方にゆくと、マツの木が旗竿に使われていて、その梢の最先端だけ、一房の緑の葉が残っていた。ビヤクシンの青葉はまもなく枯れるから、それを新しいのと取りかえるのがたてまえである。

カグベニのとある朝、私は三階建の屋上にあがった。家々の屋上には、タルチョーの白旗が林立している。ふと見ると、隣家の屋上にその主人が出てきて、ビヤクシンの枯葉を新しい青葉と取りかえているところだった。男のそばでは、フライパンのようなものの上で、ビヤクシンの青葉がいぶされている。その香り高い煙は、紺碧の空に軽々と溶けこんでいった。

私のいたその屋上には、周囲のところどころに短い煙突状の凸起がこしらえてある。その上に一株ずつビヤクシンが植えこまれていた。その枝にはシデがぶら下がり、そのそばには山羊の頭骨が供えられていた。なあるほど、うまく考えたものだ。これは、いちいち取りかえる必要のないビヤクシンである。

「それにしても、彼らはこの天空のどこかを祈っているんだ。」
と私は直感する。

「いったいこの白い旗ノボリは何のためにあるんだらう。いったいなせ彼らはビヤクシンを好むんだらう。また、なぜ、それは緑でなければならぬんだらう。」

私はふと、柳田国男さんが日本のお祭りについて書いているのを思い出した。鎮守の森の旗ノ

支流ドッド「コーラ」をさかのぼると、マナスル峰の西北に達する。そこからまたもや五二〇〇メートルの高い峠（ラルキヤ「ラ」）を越えると、マナスルの東側に出て、登山隊のベースキャンプに到達するのだ。私たちは、五月下旬か六月上旬にはふたたび会おうと、三田隊長以下と約束していた。今日はもう五月十三日である。

戦争をおっぱじめたのは、ちょうどアンナプルナ山群の北にあたるマナンポットとよばれる盆地である。この盆地にあるマナンという村とブラガという村がいがみあっている。そこを迂回してゆく道はないものか。なにしろ山また山のヒマラヤだ。チベット領にはいりこむか、さもなければふたたびもと来た道をヒマラヤの南にもどるかしないかぎり、われわれはそこを避けるわけにはゆかない。

このチベット高原では、噂うわさというものが恐るべき速さで伝わる。インフルエンザでもあるまいに、これはたいへんな伝染力だ。われわれのところにもいろんな情報が刻々集まってくる。こういうときの通訳S君は、なかなか頼もしい。情報を総合すると、事の起りはこうだった。

一九五一年、つまり一昨年のこと、ブラガの村で、ひとりの若者が殺された。殺した男は、チベットからやってきてこの村に住みついた男である。けれど彼は村のボスになっていた。若者の父は無念に思ったが、自分の村ではどうすることもできなかった。彼は隣村のマナンの連中に訴えた。マナンの者がそれをとりあげて、ネパール政府の役人に訴えた。

ところでこのマナンポット盆地は、あまり僻遠ひくえんの土地なので、政府の役人なんかいない。ここにいちばん近いお役所といえば、マルシャンディーぞいに大ヒマラヤを横切って、ほるか下流にあるクンチャという村にある。そのクンチャの役人のだれ一人として、「マナンポットに行ってみたこともなければ、行きたくもない。」と、英国の登山家ティルマン氏は記している。それどころか、マナンポットは、かつてネパール政府に税金を差したこともないのだ。ただ、どんなに地方自治の権限が強くても、殺人事件だけは中央政府の役人に報告しなければならぬので、まえになっている。

こんな調子だから、クンチャの巡査が報告をきいてブラガにやってきたのは、ようやく昨年の秋。ちょうど今西博士らがアンナプルナの試登を目ざしてこの盆地に足をふみ入れていた頃だった。巡査が来たので、その人殺しの男は、いち早く国境をこえてチベットに高飛びしてしまった。

ところが、年は明け、春になった。チベット境の高い峠も、ようやく越えられるようになったころ、このブラガの壮漢は、数人の手下を従え、機関銃一丁と小銃をたずさえて舞いもどった。駐在していた巡査は、あわをくらって遁走してしまった。そしてただちに、ブラガ、マナン両村の対立になってしまったのである。両村とも、戦闘員は各十数人だという。小競りあいが何度か行われた。

マナン側は銃器の不足を感じた。彼らは山越えて代表をカリ「ガンダキ」の川谷に送り、自動小

銃などを買ひ求めにきた。それはいいが、そのついでに、このお使いどもは、われわれのヤク使いだつたリンジンを勧誘した。マナン側に荷担しろというのである。それと知らずにわれわれが彼をつれてマナンポット盆地に乗りこんでいたら、どんなことになっていただろう。われわれは、極力彼に同行するように頼んでいたのだから。

ところがリンジンのおかみさんがそれを嗅ぎつけて、私たちの宿舎にガナリこんできた。彼女のものすごい剣幕のまえに、さすがの牡漢リンジンもちぢこまってしまった。喧嘩のようなすさまじい罵声に驚いたわれわれは、「なんだ、なんだ。」とそのまわりにかげつける。そして、こういった顛末をはじめて知つたのである。

これではまるで西部劇だ。私は映画「平原児」を思ひだす。堅気になつたバッファロー・ビルのスウィート・ホームに、やくざの親友ビル・ヒロックがやってきて、またぞろ二丁ピストルの世界にさそい出す。おかみさんが泣きわめく。まったく、あれにそっくりだ。ここがヒマラヤの奥地だといって、バカにしたものではない。小銃はおるか、機関銃や自動小銃までおつとび出しているんだ。好漢リンジンばかりではなく、チベット人の男たちには、西部のやくざの漂泊魂も欠けてはいない。チベット人たちは異国の物にたいする好奇心が強いのだが、ツバ広のソフト帽なんかはこのほか好きらしい。だから彼らの外貌にまで、西部のカウボーイの味がただよっている。

そのうえに、キャラミティー・ジューンまでそろっているではないか。私はリンジンのおかみさんのケンマクを見てはじめて知つた。チベット婦人の勇壮活発なこと。ジーン・アーサーの候補者ぐらはいくらもある。

そういえばこんなこともあつた。私たちがカグベニにもどつてきた日は、午後の日も傾きかけていた。そのとき村はずれで四、五人の村娘と、パツタリ出会つた。彼女たちは、これから一泊で葱が洞まで薪とりでかけるんだと喜々としていた。私たちがフウフウいつて小一日をついやしてたどりついた、あの高山帯の岩小屋へ、しかも今ごろからでかけるのである。

彼女たちは強い。頑健だ。ある村では、ポーターはほとんど女性であつた。八貫目の重荷を、男たちとまったく同じようにかつぐ。彼女たちは荒らくれ男に負けずにやりかえす。ことにおかみさん連にかかつては、男どもは小さくなつてしまふ。彼女らは朗かだ。そして愛情の問題でも男たちと対等で、積極的らしい。やがてこのために、私たちもひどい目に会うことになつた。

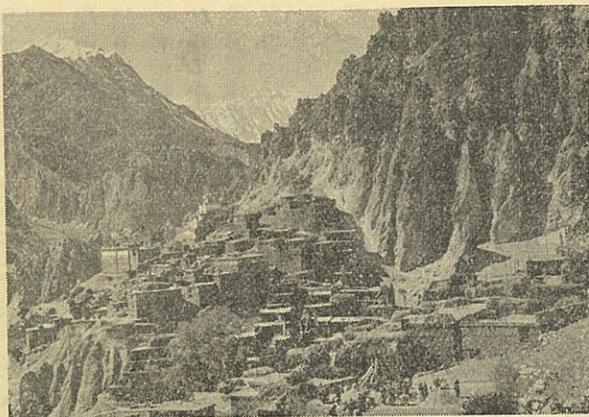
おかみさんの一喝で、とうとうリンジンには同行を断わられてしまふ。そのうえ、カグベニ村人にはむこう二日間禁足令が出た。それに違反した者は十五ルピーの罰金が課されることになつた。だれも同行してくれない。ということは、ヤクの背に荷を積んで運ぶ方法がないということだ。

いよいよ二、三日後にマナンとブラガのあいだに決戦が行われるという情報が伝わるや、村長

たちがただちに全村民を集会所に招集し、禁足令を決議したのだった。それでも私たちは、ぐずぐずしている暇はなかった。情勢というものはいつ好転しないものでもあるまい。それに、マナンポットの中でも、その両村以外は、鬭争に巻きこまれていないらしい。ともかくも、できるだけその近辺まで行進してみよう。こう決心して、われわれが出発したのは、もう五月十七日だった。ムクチナートまでの一日だけは、むりをいってリンジンをつひぱりだすことにした。罰金はわれわれが払ってやる。ムクチナートでは、リンジンの紹介でサムドゥーという男をやとうことにする。

そこから私たちは二日かかって、氷河と万年雪のきらめく峠を越えた。いよいよマナンポットにふみこんでゆく。そのころ、私たちは、よいニュースをきいた。紛争に調停者が現われたそう。少なくもここ二、三日は決戦は行われまい、と。私たちは即座に決心をして、翌日は強行突破でこの両村の地域を一気に通過することとなった。

調停者はトンジェ・スツバだということだ。トンジェという村は、マナンポットのだいぶ下流にある。ちょうど大ヒマラヤを北側へぬけたばかりの所にある。ここでマルシャンディーの本流と、支流のドッドリユーラとが合流している交通の要所だ。スツバというのは、半ば封建領主のような、自治権の強い郡長にたいして、中央政府が与えてきた称号である。タカリー族のリーダーたちも、外部の人びとからはタカリー・スツバと呼ばれている。



13 戦争に巻きこまれたブラガ村 (林一彦氏撮影)

マナンの村が見えてきた。その上にアンナブル第三峰の偉大な山容がどっかりとそびえている。マナンは、うち見たところ、戸数百戸もあるうかという、密集した大村落だ。ゆるやかな丘ひだの出っ鼻にある。それをとりまいて、蒔きつけたばかりの麦畑がひろびろと丘の起伏を埋めている。畑には鋤く人びとや土をくたく人びとがみえる。ソバの蒔きつけに忙しいのだ。なんのことはない、一見まことに平和な光景だ。

マナンとブラガの中間にきたころ、銃声が広い谷間にこだました。私たちはハッとす。だがそれっきり何事も無い。見れば広い河原にテントが張られていて、そのテントのまえにむかって二組の男たちがばらばらと駆け寄ってゆく。あれがトンジェ・スツバのテントだという。どうやら調停がはじまるらしい。ほっとするまもなくブラガにさしかかる。ブ

ラガは私たちの道の上に、崖にしがみついたような村だ。私たちの一行が通りかかると、村中は蜂の巣をつついたように興奮している。ものすごい男どもがワイワイいって、私たちを指さし、崖から石を落とし、のしり声をあげている。仕方がない。私たちは黙々と、そしらぬ顔をして通りぬける。クワバラ、クワバラである。私たちはどんどん足を早め、下流へ下流へと急いだ。つぎの村をすぎ、またつぎの村をすぎ、もうここらでよかろうという所まで落ちのびて、美しい牧場のかたわらにテントを張った。

S君は熱を出して、翌日は丸一日骨休みをすることになる。ところが、昼ごろトンジエ・スッパの一行がひきあげてきて、私たちのそばにしばらく休憩のテントを張った。スッパのKJ氏は、なんと二十歳あまりという青年だ。仲裁にはいるというせいにか、彼はネパール風の服装でキチンと正装し、腕には金時計を巻いている。白馬に打ちまたがっている。ところが、彼がつれた十数人のお供は、フェルトのガウンにフェルトの帽子や長靴、つまり純然たるチベット服のいでたちである。仲裁は不成功だった由である。マナン側は仲裁を受け入れたが、ブラガ側はどうしても受けられない。昨日の午後も小戦闘をやったそうさ。

そこへチベット人たちが続々とつめかけてきた。いかにもうす気味が悪い。いったい何ごとが持ちあがるんだろう。だんだんふえて、私たちのテントを取りかこんでしまった。きけば、彼らは皆マナンの村人だそうさ。彼らは村をあげてスッパのあとを追ひ、いま一度仲裁をやってくれ

と懇願しに来たんだという。これはマナンの人口を調べるのに絶好の機会だと思って、私は頭数を数えにかかる。ほぼ百十数人、その中には女や子供がちよっぴりまじっている。これから推して、この村はまず百世帯以上あるだろう。ブラガはそれにおよばない。

KJ氏は再度の調停をことわって引きあげてしまった。マナン村人は、あきらめて散っていった。そしてやっと、私たちにはほんとうの休憩がやってきた。

この村落戦争の結末がどうなったのか、私は知らない。ただ、私たちがボカラから書き送った手紙が機縁で、この年の秋に、京都大学からふたたびアンナプルナ山群へと登山隊が送られることになった。彼らが、ブラガにほど近くベースキャンプを張っていたとき、戦闘で負傷したばかりの男どもが、傷の手当てを受けにやってきたそうさ。してみると、戦争は、少なくとも秋まで続いていたことになる。根気のいい話だ。

「山のあなたの空遠く」

そんな山奥で暮らしているマナンポットの人びとだ。彼らはさぞや広い世界も知らず、せまい天地で角をつきあわしているんだろう、そう思う人があるかもしれない。ところが、である。

私たちは、さらに三日間下流へと行進した。そこにキャンプしているとき、下流から二人の青年がやってきて、私たちのテントで話しこんでいった。緑のジャケツを着こみ、黒革の洋靴をは

いた彼らは、なんと、ブラガの男だった。インド方面に商売にでかけ、いま村に帰るところだった。チベット服を身にまとい、日焼けして、汚らしく、いかにも粗暴なあの連中と、ここにいるスマートな青年が、同じ村民だとは、信じられぬくらいだ。

彼らはしょっちゅう外界に遠征する。デリーやカルカッタに出かけることは珍らしくもない。昨年もこの地をおとすれた中尾君の話では、彼らはカルカッタ辺で安いガラス玉を仕入れ、ビルマのラングーンに行き、チベット産の宝石と称してそれを高価に売りつけたりする。インドの汽車にどうやって無賃乗車をするかという方法も心得ていて、「近ごろはどうも無賃乗車がむずかしくなった。」などとうそぶいている。そのほかに、こんな話がある。はじめてこの盆地に足をふみ入れたのは、ティルマン氏の一九五〇年の隊だった。このとき隊員の一人が、写真を撮ろうとしてキヤメラを村人に向けた。村人はさぞや写真機を珍らしがったり、はにかんだりするだろうと思つたところが、あにはからんや、相手もおもむろに写真機をとり出して、登山隊員をパチリと撮つたそうである。

今西博士の隊は、前年の秋、この盆地で、たしか三ルピーか三ルピー半でポーターをやとつたはずだ。ところがその後、アメリカ人かだれかがこの盆地をおとすれた。日本隊は八ルピーでやとつたから、というわけで、その外人隊はずいぶん高いポーター賃をふっかけられたそうである。日本隊が賃銀をつりあげたので……といつて、彼らは恨んでいてとかきいたことがある。とんでも

ないぬれぎぬである。こういったふうに、小商売となると、なかなかどうして、彼らチベット人は一筋縄ではゆかない。

私たちが中央政府に關係のある偉い旦那だといつので、彼らチベット人はいちおう私たちにへりくだっている。ときには卑屈な態度を示す。けれど彼らが内心傲然たることは、ちゃんとその顔に書いてある。ことに、商売のかけひきになると、そういった彼らの本性がはっきり表に出てくる。ただ外人人たいていそうだとはいうばかりではない。彼らおたがい同士のあいだでも、ひとりひとり傲然たるものだ。よくいえば独立自尊のつら魂を持っていた。

こういった傾向は、ただマナンポットばかりでなく、チベット人の住む世界どこにでも、大なり小なり観察されるのである。

私たちがまもなく生活することになったカルチェ村だつて同じことだ。カルチェ村の三十六軒の人びとのうち、商業を有力な副業にしている連中が約三割もある。元来この村は、交易の交通路からははずれていない農村だ。しかし彼らの商業活動は村の余剰の生産物たるバターやコムギ、オオムギを売るばかりというだけの消極的なものではない。付近の交易路を通ずる米と塩との交易にも参加する。彼らはまた羊、山羊、牛、ゾウ(ヤクと牛の雑種)などの毛皮や皮革をもたくわえておいて売るが、そのほかに積極的に雪ヒョウや鹿の毛皮も買い集めておき、これを売りに出かけるのだ。そのほかに、ネパール政府の専売になっているジャコウをも買い貯えて密貿易をや

る。こういう品々をカルカッタまで運び、商売をやり、そこで染料を仕入れてきてチベット方面に売るのである。

買物もそのついでに買ってくる。羊や牛の脂肪、羊肉、羊毛、塩、トウガラシ、米、砂糖、チベット産の洗濯用ソーダなどの品物だ。必要な木綿の衣類まで、カルカッタへ出たときに買って帰るんだという。彼らが村外へ売りこみにゆくように、村外からやってきて、村人に売りつける商人もまたある。染料、茶、珊瑚、器具、粗織の毛布やフェルトなどといった品物を持ちこんでくる。

チベット境の高い峠は、長い冬のあいだ通れない。このころにはインドやカルカッタ方面に出かけることが多い。七月から向こう三カ月間は、米と塩の交易をはじめ、チベットとの商業もつとも盛んになる。九月になればチベットへ羊毛を買いにゆく。十月終わりごろには、やはりチベット方面へ羊肉を買いにゆく。まもなくふたたび、チベット境の峠は、深々と雪におおわれてしまう。

何貫もの重荷を負い、絶壁を横切ったり、激流をわたったり、そして胸をつく山坂を登ったり下ったりしながら彼らはゆく。ヤクやゾウバ(ゾウの去)の群れを追い、空気の希薄な峠に悩まされ、広原の夜吹雪にたたかれながら、それでも彼らはゆく。何日も何日も彼らはゆく。彼らの商業は体一つだ。それは運輸業でもある。それがつとまらねば、異国の、どこか遠い空に幸運をつかむ

こともできないのだ。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう」それはチベット人のために作られた詩なのかもしれない。

苛酷な、危険な、こういった激しい労働が彼らの商業であり旅である。しかも彼らはこういった遠距離商業を、ただつらいもの、いとわしいものとして受けとっていないことは明きらかだった。「働けど働けど楽にならざり、じっとわが手を見る」こともあったろうけれど、それにもまして、山のあなたの空遠く幸を求めてゆくロマンでもあった。それが証拠に、こんな旅をしている彼らの顔の明かるさをみよ。ときには一人で、ときには赤ん坊をカゴの中に入れた家族づれで。いったいカルチュの村では、九月といえは麦の蒔きつけどきで、猫の手も借りたい農繁期である。その季節にすら、商業遠征に従事する村人がいる。私は村長の一人であるダドルジェに尋ねる。

「あなたは去年の農繁期に何人くらい人手をやとったのか。」

「知らない。なにぶん、そのころはカトマンズへ商売に出かけて留守だったから。」

私がこの村に滞在しているあいだに、中尾君は、ほど近いチベット国境まで植物採集に出かけることになった。そのポーターの賃銀は一日四ルピーだ。割りのいい商売だと思って、さっそく申しこんできたのはダドルジェだ。

「村長のあなたがポーターを志願されるのはいかなものでしょうか。」

と、シエルバの巨君に断わられてしまった。

坊さんだという一人の村人は、信心に凝った敬虔な男だということだったが、私たちの帰途に彼もポーターを志願してきた。なんでもカトマンズへ巡礼にゆくからといって、とうとう彼は旅行の最後までわれわれのポーターをつとめた。もちろん彼の背中には、私たちの重荷の上に、さらに商売用の品物まで積まれている。カトマンズに着いて巡礼がすめば、私たちの支払う人夫賃プラスこの商品で、商売人に早がわりするのだ。

私が、この村で民俗品を集めにかかると、この「坊さん」はさっそく、自分のお経や宗教用具を持ってきて、法外な値段をふっかけてきた。「いざとなると、信心をとるか商売をとるかかわかったものじゃない。」などと私は思う。

が、そういった私のつぶやきにも、いくぶん日本人の偏見が含まれているのかもしれない。なぜというに、日本では、男が機織の仕事をするのはおかしいと思われ、学者が金もうけをするとは卑しいとか、坊さんが商売をやるとなまぐさ坊主だとか、小作人が蓄音機でも買えば小作人らしくらぬと思われてきたからである。みんなが、自分の地位にふさわしいポーズをとろうとしている。日本人は、「らしからぬ」といわれることをひじょうに恐れているようにみえる。だから、巡査の服を着ると、人間であるまえに巡査になってしまう。

今日ではずいぶんと日本も変わった。「女らしからぬ……。」などといおうものなら、あべこべ

に親父やオフクロをやりこめる娘も、都会にはたくさん現われてきたようだ。けれど、これはまだきわめて新しい傾向だ。たとえば、四十、五十の年輩の紳士で自転車に乗れない人を、私は三、四人知っている。そういう人は、たいてい良家の長男だ。なぜ乗れずに通してきたかという、「自転車などはデッチの乗るものだ」から、長男たるの器がそんなものに乗るのは恥ずかしいことだったからである。

私たち若い世代は、そんな親父やオフクロを、旧式だといって笑う。ホーケンテキだときこおるす。自分たちはもつと自由にものを考えたり行動したりしているつもりだ。だが、そういった自由人も、どこかの異民族、たとえばこのチベット人に触れてみると、自分たちがあたりまえだと思っていたことが、いかにあたりまえでないかに気づくと思う。自分たちのたいへん進んだ考え方が、じつは、小さな世界でだけ通用していた物差しにすぎないと感ずるだろう。

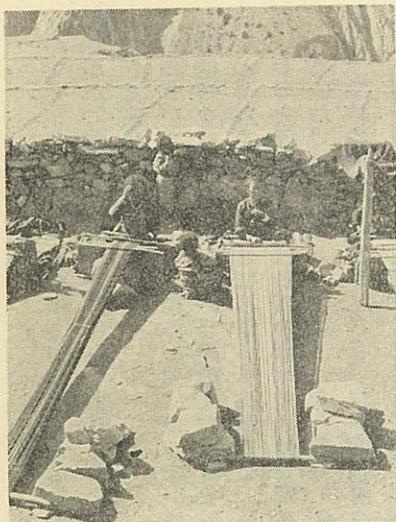
村長だからといって、みすみすもうかるポーター稼業をしてどこが悪いんだ。坊主が巡礼と金もうけをだき合わせにしてどこが悪いんだ。自分にとって、お経を読むよりも売って金にした方がいいのなら、すべからずいい方をとりたいものだ。おそらくこういう発想法は、ひじょうに「近代化した」日本の青年にも、なかなかできないだろうと思う。あるいは、そこまで解脱した坊さんは、日本ならまれにみる高僧かもしれない。しかしここチベット人の世界では、それはべつに太陽族でもなければ、英雄的な人物でもない。だれもかれもが到達しているやりかたなのだろう。

なんでも屋のチベット人

そんなふうには、どんな農村の連中でも、彼らは本来的といってよいくらい商業に情熱を持っていた。サングダのような大山奥の連中すらもそうだった。ここでは、農村と町場との相違は、程度の差であって質のちがいではない。たとえば民家の構造にしてからがそうである。トゥクチャやカグベニのように大いに商業で榮えている町でも、サングダやマナンのような農村でも、同じような家の構造だ。どれもこれも中庭を囲んで二階建あるいはそれ以上の建物が建ち、二階以上に人が住み、一階はウマヤと物置になっている。

一步ヒマラヤを南にまわると、バザールの町なみと農家とは、さいぜん截然とわかれた二つのタイプだといってよい。そして、同じようにヒマラヤ越えの通商路に近くても、ここでは一般の農民に、商業的情熱とか冒険心とかはさらさら見あたらない。

ところが、こんなに商業が好きな民族のくせに、カルチュの村人のだれ一人として商売の専門家ではないのだ。農業の片手間でやっているのだ。だれでも商売をやつてよいし、農業をやるうと牧畜をやるうと自由である。村長をやるうがポーターをやるうが自由である。坊さんになるのは、あとでのべるが、先祖代々の坊さんというのがある。しかしそれ以外に、志しさえすればだれでも自由に入門できるのである。とくに男性にたいしてはそうである。えらくなるかならぬか



14 羊毛の機織をするチベット婦人

は、御本人の努力と、精神力、体力と、運がいいか悪いかしだいである。貧乏人だからといって坊さんになっていけないことはない。

男だからこれをしてよろしい、女だからいけない、といったことも、ひじょうに少ないのだ。あったとしてもたいてい程度の相違である。カルチュの村で調べたところでは、畑仕事のなかで男がやらないものは何もない。放牧も薪集めも材木の伐採や運搬も水運びも商業も、なんでもこ

いである。そればかりか、チベット人の世界のいたるところで、男が羊毛つむぎをやっていた。片手に羊毛のひとにぎり、もういっぽうの手には、紡錘フスをぶらさげて、昼日なかにクルクル、クルクルと呑気のんきそうである。とりわけ旅に出たときには、このクルクルが手すさびらしい。たったひとつ、女でなければ見かけないチベット人は、男も女も戸外労働が好きとみえる。青空をバックに、織りあが

ってゆく羊毛地を眺めたり、何かべちゃくちゃ楽しそうに話したりしながら、彼女らは仲よく楽しんでせつせとタテヨコを織ってゆく。ところが、ある探検家の報告をみると、チベットでは男もさかんに機を織っていたと書いてある。おそらくこの仕事すら、男女のあいだで程度のちがいにすぎない仕事なのだろう。

私の歩いたチベット人地帯の中で、カルチュエは比較的男女の労働に差のある方らしい。

「男は糸つむぎなんぞしない。機織なんぞは全然しない。裁縫もすべて女まかせだ。」

などといった。ところがある日のこと、私は二人の男がひねもす作業場にすわって何かしているのを見た。一人は仏画のカケモノの表装を直している。もう一人は、服の修繕とお裁縫をやっていた。

あべこべに女の方はどうだろう。女が鋤すきを使っているのと、隊商の家畜を追いまわしているのだけは見かけない。これはおそらく、労働が激烈すぎるのかと思う。ことに女性にとって無理なのは、ひじょうな敏捷を要する仕事と、一時にはげしい力を出さねばならない仕事らしい。だから、いかほど荒仕事でも、持久的な力仕事なら、彼女らは堂々と男性に伍するのだ。ことに畑の土くだき、肥料運び、草取り、薪集めは、カルチュエの婦人のおもな野良仕事である。カラサオをふりまわして麦打ちをするぐらいは、彼女たちにとってなんでもない仕事である。そしてそれどころか、ポーターの荒稼ぎすら、すでにのべたとおり、まったく男どもにひけをとらない。チベ

ット人の女性は、まず男の一倍半も働くといつてよからう。

カルチュエの村で、軽労働でありながら、たつた一つ、女性がしてはならないものがあつた。それは種蒔きだ。女性がやっつては縁起えんぎが悪いのである。このお話は大へん重要だ。後回しにしよう。

彼らがどんな仕事をやってもよいということは、たてま、え、ただでなく、またふるまいの上でも見てとられる。じつさい、一人の男が、畑仕事をやったり、遠い牧場へ一週間も泊まりがけで家畜の見張りにゆくかと思うと、さらには重荷をかついで半年も旅行をする。そうかと思うと、こすっからい商取引に半日をつぶしたり、そのつぎには子供のお守りをしたり、それがすむと裁縫をしたり、それがすむとバター作りやお料理作りをしたり……。たいへんせわしく予定表がつまっているみたいだが、もちろんそんな意味ではない。われわれ文明社会の人間よりははるかにゆっくり、あわてず騒がずやることには間違いない。それにしても、一人の男が、あるいは一人の女が、こういうふうには、バター屋のごとくなんでもやるといふことは、考えれば考えるほどおもしろく、重要なことだった。

不幸にして、彼らの世界を歩いているとき、私はこの問題をきわめて漠としか意識していなかった。ただ、カルチュエの村で彼らの民具を集めにかかったとき、おや、と思つたことがある。彼らの日用品には、手ぎわよくできた品と、まことに不器用なものが入りまじっていた。

器用な物品は村人が作ったものではなかつた。酒徳利は、はるかヒマラヤの南の国から買いついてきたしるものだ。そのほか、木の茶椀類がある。これは隣村にながく住んで、今は死んでいる木工専門家が作ったものだ。彼がチベット人だったかどうか、残念ながら私の手帳は何も語らない。それから、ちゃんとした農具は、この村に流れこんで住みついているカーミというカーストの男が作ったものである。彼の一族は、ヒマラヤの南側から流れてきた他所者だ。顔立ちもチベット人とはすつかりちがつて、黒い肌をしている。しかし、カースト制度のないこのチベット人の村では、彼らはただよそ者というだけのことである。

それらの品にくらべ、村人の作った木の杵は、だいいち、すこしイビツである。杵秤もゴツゴツと不器用な製作品である。錘などはただの石コロを羊の皮で包んだだけのものである。彼氏や彼女の使うパンツは、不器用きままる裁ち方のものだった。ただチベット風の長靴のみはいちおう達者なできばえである。もっともお粗末なものは、彼らが男女ともにくしけずる櫛である。それは、はがした竹をたばねて紐でくくっただけのものだ。茶センのできそこないのようなしるもので、どうにも民芸品などとは申しかねる。こんな櫛で、写真を見ただけでは男か女か区別できないような、総髪や二つ分けの髪をおたがいにくしけずる。彼らが宗教用に木の板に刻みこんだたくさんの動物や祭具の模様は、拙劣なために、かえって稚拙の味わい捨てがたいものがある。

（口絵「チベット人」最大の傑作は、ある青年が道楽に凝って作ったチベット琵琶だったが、それとて

も器用というほどのものではない。

彼らが、なんでもやるバタ屋だということ、彼らの製作品が不器用だということとのあいだに、何か器用な理屈の上の結びつきをすぐ発見することはできなかった。私のノートには、どこそでだれが何をしていた、とか、その物品は隣村のだれが作ったんだ、とか、およそ、くだらぬことがあちこちにバラバラに書きこまれていたにすぎない。私はそのまま日本に帰る。バラバラの資料を事項別に整頓してみる。ふしぎなことに、そこからひとつの仮説がひょっくり生まれてきた。それはこうだった。

彼らチベット人の製作品が概して不器用なのは、まさに彼らが、どんな仕事でも一通りやる連中だからである。なんでも屋の彼らは、なんでもやるかわり、何についても熟練工にはならない。ちやうどそれは、いい年ごろになるまでなんでもかんでも学習した日本の学生が、卒業したてでは何ひとつ知らないのに似ている。

そこで私はこんなことを考える。そういつた能なしの大学生が、今日の社会では大いに歓迎されている面もあるのだ。なぜというに、彼らは能なしかもしれないが頭は柔らかいからだ。彼らは専門の職人になるのが遅かった。それだけに融通がきく。人格的にも一つの鑄型にはめこまれることが少ない。そして、近代的な職場では、われわれの処さねばならない周囲の状況は複雑であり、刻々変化する。頭の柔らかい人間がいなければ困るんだ。こういう材幹は、まんべんなき

教育によって、全人格的に成長したものに求めなければならない。

彼らチベット人は、幼稚な程度にしる、全人格的に育ってきた人びとといわねばならない。悪くいえば、彼らはバター屋でありチンドン屋である。けれどもよくいえば、彼らは近代教育がよってもって理想としてきた教育を受けていることになる。日本だって、文明開化ともなれば、殿様の子供もソロバンの練習をさせられる。「作業」と称して植木屋か土方の真似をさせられ、あるいは旅芸人のごとくに歌をうたい、貧乏人の子供に号令をかけられて体操をやる。まさにチンドン屋こそ、近代的普通教育の神髄でなくてなんであろう。

さすらいの人生

マナンポット盆地を過ぎると、しだいに私たちは森林地帯にはいつていった。山道はけわしくなる。バロメーターはしだいにくだる。ピサンという三一〇〇メートルの村で、もはやヤクのキヤラバンを帰さなければならなくなった。これから下流は道がけわしすぎる。そのうえに、ヤクは低いところでは参ってしまふ。

「トウモロコシの育つところへは、ヤクはゆけない。」

そんな諺が高原の国に流布こぼされていた。チベットを象徴するこの動物は、海拔三五〇〇メートル以上でないと居心地が悪い。そんな高地でけっして畜舎に飼われることなく、年がら年中山

に放し飼いである。もっとも荷物を積んで一時的にゆくなら、二五〇〇メートル辺まで下ることが出来る。トウモロコシのような熱帯性の作物は、そのあたりから下でだんだん多くなるのだ。

サムドゥーと相棒の少年は、もときたムクチナートへと帰ってしまふ。われわれはポーターがいなくては動けない。ところが、あいにくピサンの村は春祭りだった。祭りは明日終わる。それがすむまでだれもポーターに行きたがらない。S君が村長に頼み、百方手をつくしても、集まるポーターは七人だけだった。やむをえない。また翌一日滞在とさめる。

翌日の午後三時ごろ、ぶらりとテントを出てお祭りを見に行ってみる。村の畑にはほとんど人がみえない。畑のまんなか、丘の中腹に、密接した平屋根民家がある。その中ほどにちっちゃな空地があった。そこが踊りを楽しんでいる場所だ。村民は老若男女ほとんど見物している。空地のまわりはぎっしりの見物人だ。あふれた連中は、まわりの屋上から見ている。

広場の中央では、旅芸人の一行が踊りをしている。私が着くと、見物人はいつせいに私の方を見る。私を案内したチベット人のポーターが耳打ちをしてくれる。私は踊り手たちに五ルピーやる。気前のいい旦那だ。踊り手たちはそろって私にお礼をいった。そのお金を、中央におかれたお椀の中に入れる、お椀のほかにトウモロコシも山と積まれている。ジャガイモもある。まもなく見物人たちは、私などは忘れて、一心に踊りに吸いつけられる。ときたま半ルピー銀貨を投げつけてやるのがある。屋上からシガレットを一本投げつけるのがある。

踊り手たちは八、九人いた。年輩からいって、老人も中年も青年も子供も、そしてそれが男女ともそろっていた。ちょうど大人数の一家族のように。服装はだいたいチベット風だが、いろいろと変化がある。帽子はフェルトのチベット帽のほか、古代的な冠かんむりのようなもの、グルカ兵の軍帽などをとりまぜている。靴も、チベット靴あり、黒革洋靴あり、ハダシありというふうにさまざま。マスクもかぶっている。ボール紙で作った人顔、烏天狗からすてんぐみたいな顔、それから素顔におどけた彩色をした婆さんもいる。

踊りには、何人かいっしょに踊るもの、二人で踊るもの、一人で踊るものなど、じつにさまざま。まるで独奏こまのような早さで回転しながら、ひとりで踊るのがある。そうかと思うと、合唱あり、単独唱あり、あるいはほとんど劇に近い会話風のもの、剣の靈力で盲人の目をあける象徴的なもの、おどけた身ぶりで観衆をドッと笑わすもの。いっしょにやったり、単独でやったり。一区切りの演劇や踊りは、たいていほんの一、二分だ。これを変化に富ませて、つぎからつぎへと模様変えしてゆく。銅鑼どらと太鼓の係が一カ所において、ときどき伴奏する。それらにつれて歌うリズムのダイナミックなことは、ヒンズー教の社会でよく単調緩慢な賛歌の比ではない。

見物人は、広場の周囲に、屋上に、飽きず打ち興じている。踊りの合間に、中央には地酒が持ち出され、踊り手はかわるがわる飲む。見物人中にも、ちよいちよい飲んでいのがある。なかには、乳飲うちま児に、その強い酒を茶碗で飲ませている母親もいる。



15. 16 ビサン村の春祭り(真中にあるのは、村人が旅芸人に与えた、いろいろの心付け)

踊りはなおも続く。しかし私は一時間あまりで引きあげた。案内した男によると、彼ら旅芸人は毎年一回やってくる。はるかなチベットの、ラッサ、シガツェ、ギャンツェといった方面からやってくる。こんな旅芸人のほかに、戸口から戸口へと流して歩くのもいた。私がかぐべにいたときだ。ある日、夫婦者の旅音楽師がたずねてきた。彼らもまたチベットから流れてきたのだった。チベット琵琶びわを奏かなで、タップを踏んで、彼ら夫婦者は歌った。躍動的なリズムにの

せて、はらかな空へのノスタルジアを歌った。紺碧の虚空に向かつて、どこまでも、彼らは歌った。私には歌詞の意味がわからない。しかしその気持を意識すればつぎのようなものだろう。

「わたしゃルイジアナからアラバマへ、

バンジョーを持って出かけるところです。」

ところでお祭りよりはポーターかせぎのほうがよいという七人の男どもは、どれもこれもピサンの生まれではない。よそから流れてきてここに住みついた連中だ。彼らは貧しい。いい仕事があるともたどこかへ流れてゆかぬともかぎらぬプロレタリアンだ。カグベニでわれわれが解雇したひとりのポーターが、二週間もまえにこのピサンを通っていったが、彼らはその男からいい情報を得たらしい。今にいい旦那が通りかかると。われわれはいい仕事にありつけるといっわけだ。

その旦那がとうとう来た。われわれの十数人のポーターのうち、男はこの七人だけで、あとは全部ピサンのご婦人だ。さあ出発。

このプロレタリアンの中に、中尾君が昨年顔見知りになったのがいた。彼はラッサで生まれた。各地を遍歴したあげく、昨年ピサンにいついたばかりだ。善良な男だったから、中尾君が自分の植物採集の手伝いもさせようと思つて目をかけてやった。ところが、子飼いのポーターの中にブラーマンのNP君がいた。彼はずっと、中尾君の植物標本作りの助手をもつて任じていたのだ。自分の仕事の領域に新米がはいりこむことはたまらない。しかもアウトカースト級のチベッ



17 カルチェ村のプロレタリアン

ト人である。彼はことごとくに新米をいじめる。そのうえに通訳のS君も彼をきらう。かわいそうにその男は、三日後にトンジェに着くや、ポーター辞任を申し出た。

こういったプロレタリアンに興味をおぼえて、その後も私はときおり気をつけていた。たいいてい村にこういう連中がすこしずついるようだった。彼らはいいてい極貧の家に生まれたか、子供のときに親父が死んでしまったか、ケンカして家をおとつび出したか、運が悪く破産してしまつたか、それとも頭が悪くて甲斐性のない連中のようなだ。もっとも、私のノートに集めた事例数は少ないので、没落するまでのいわく因縁はもうひとつはつきりわからない。

女のプロレタリアンは、ついに見かけなかった。そのかわり、カルチェの村では、三人の女性の借金奴隷をみいだした。一生その身柄でいなければならぬ借金奴隷をラムーと呼び、一時的のそれをメラと呼ぶ。ラムーが一人に、メラが二人いた。彼女たちの親父はそれぞれ別なのだが、いずれもカルチェのある村人たちから借金していた。そして、その借金を返さない

ちに死んでしまった。こうして親父の借金のカタになって、彼女たちはラムーやメラになったのだ。これはいかにも、チベット人の女性たちが人権を尊重されているという話と一見矛盾するではないか。

ところで、プロレタリアンどもと付きあって驚かされることもある。私たちがポーターに使った彼らは、けっして、一般のチベット人たちより悪くもよくもない。むしろ善良な男がかなりいる。その人のよき加減が、かえって彼らの没落の原因かとさえ思うことがある。彼らは一般のチベット人たちと同様に明朗で、くつたかない。自分たちは食えないからポーターをしているんだということ、ちっとも卑下していない。

浮草のプロレタリアンといえ、日本なら一般人からさげすまれる傾向がある。そればかりじゃない。こちらの持物を、いつ掻っぱらわれたり、だまされたり、おどかされたりするかしれないと、気のどくにも色メガネで見られる傾向がある。彼らは「ひがんでいて、それだから信用の置きなない」人間だと見られる。「流れ者」とか、「寄るべもなき」などという、あわれで陰惨で物騒モノワザシということになるだろう。それほどでなくても、縁談の相手をえらぶとき、片親なしに育ったとき、小首をかしげ、両親ともなかったといえ、大首をかしげる。そしてじっさい、日本では、そういう社会の色メガネのために、ひがんで不良少年や不良少女になる人びとがいかに多いことだろう。ニワトリと卵とどちらが先か。悪いのは、ひがんだご本人か、それともひがませ

た社会の方か。たぶん、力の強い方、つまり社会の方が悪いんだらう。

チベット人の世界ではすっかりちがう。彼らは陽気なプロレタリアンだ。カルチェの村のペムバ老人は、もう一軒お隣の連中といっしょに、こういったプロレタリアンを一人ポーターに使っていた。ペムバは村中きっての金持である。けれどこの金持とプロレタリアンとは、作業広場で仲よくならんで終日竹カゴ編みをやる。おたがいにベチャクチャと何か楽しそうにおしゃべりしている。どうも、いっこうにプロレタリアンらしい悲愴さというものがない。

あの村にはいろいろ！

五月三十日、雪煙をあげるマナスルを、はじめ西面から望む。五月三十一日朝十時ごろ、ピムタコティにて。私は、双眼鏡でマナスル登山隊を発見した。頂上攻撃隊がノース・コル(北の鞍部)から、頂上付近のプラトールをめぐって登っている。私と隊をへだてる直線距離じつに十二キロ。それにもかかわらず、息づまるような光景だ。われわれのキャンプはたちまち大騒ぎになった。じっと見ていると、数個の黒点が、すこしずつ位置を変えてゆく。急峻な岩壁に近づいたとき、彼らの姿は霧に没した。同日、われわれの一行は、ラルキヤリ(ラはチベット語で峠の意味)の登りの高山帯で一泊。長大な三本の氷河がチベット境の高峰から出て、眼下で一本に合流。

六月一日、ラルキヤリ越え。S君は完全に参る。ピッケルで押ししたり、手をひっぱったり、よ

うやくにして越す。午前中は行きかう隊商が多い。夕刻ラルキヤで泊まる。高山帯にあり、夏だ
けでぎあがる交易場である。チベット境のギャラは、もうま近い。塩袋が山と積まれている。途
中、中尾君は、頂上攻撃隊がプラトリーを降りる姿を発見。昨日、今日と好天続きだ。ついにマナ
スルは陥落したか。

六月二日、ブリガンダキ源流を降りサマ村の上手、登山隊のベースキャンプに到着。三田隊
長の顔をみるなり「おめでとう」という。隊長は、げげんな顔をする。昨日から望遠鏡をのぞ
きつづけたが、プラトリーにはついに人影らしいものを見なかった。この分では、頂上はおろか、
プラトリー到達すら見込なしと、ひじょうにしょげている。

そこへエツホーのかけ声とともに、登山隊員が続々下山し、いっさいが判明した。頂上はつい
に逸した。しかし、加藤喜一郎、山田二郎、石坂昭二郎の三君は、七七五〇メートルというすば
らしい記録を樹立した。善戦したものみの知る満足感がたただよう。まず、おめでとうだ。

ベースキャンプの夜、私たちは無事を祝って酒をくみかわす。そこへ無電係がラジオ放送を伝
える。英国隊によってついにエベレストが陥落したのだ。失望落胆やる方なし。私はこの晩をけ
っして忘れないだろう。

六月八日、ベースキャンプをあとにする。登山隊はラルキヤラを越えてマルシャンディーを
降り、ボカラへ。われわれ科学班はブリガンダキを下ってガネツシュヒマールの山ふところ、

シアルコーラの谷へ。右と左に手をふって別かれてゆく。科学班にはシェルパのH君とA君が
加わった。

そのシアルコーラという川は、チベット境に源を発し、ガネツシュヒマールおよびスリン
ギヒマールという七〇〇メートルを越える雪山のあいだを刻み、最後にはものすごい峡谷を
形成してブリガンダキに合流する。ブリガンダキはさらにそこから、絶壁また絶壁の底をうが
ち、ついに大ヒマラーヤを横断して、あの亜熱帯の世界にそそいでいる。私は、シアルコーラの
流域に、最後の目標としてひとつのチベット人村をえらぶことにした。

モンズンが近づいていた。毎日曇天が続く。私たちの道は、川谷をからんでけわしい。六月
十一日のこと、私たちはとうとうブリガンダキを見すて、目ざすシアルコーラの流域へ越える
峠道を、あえぎあえぎ登っていった。道は、登れども登れどもつきない。途中の急斜面で一泊。
六月十二日、なおも登りつづける。

とうとう私たちは、とある寂しい草っ原の峠に登りつく。バロメーターは三五二〇メートル。
ほとんど富士山の高さである。私たちはほっと腰をおろす。シアルコーラはどれた。シアルコー
ラは、はるかなはるかな眼下に、黒くろと無気味な沈黙をたたえていた。森林と断岸につつま
れ、その谷底には太陽の射しこむときもなさそうだ。川谷を取り巻く白雪のヒマールに、ちよう



18 カルチュ村から見た二、三の隣村

ど夕ばえがやってきた。懐愴なまでにオレンジ色の輝きをはなっている。明暗のコントラストに私たちはしばし酔う。

けれどそのとき、私は村を探していた。私の村はどこだ。私の目は視界のあらんかぎりを探しもとめてゆく。あった！ 手早く、目ざとく、私はそれを見つけてしまった。

ヒマールから流れ落ちる急斜面は、ほとんどその直線を変えずに、暗い谷底まで落ちこんでいるようにみえる。だがよく注意してみると、ちょうど明暗二つの世界の中ほど、私たちの峠と同じくらいの高さに、いくぶんか傾斜のおとろえた棚のようなところがあった。そこに、そんなところに、ちょうどまあ絶海の離れ小島のよう、南をうけて黄金色に実のつた麦畑がまだらに散らうに、ぼっている。双眼鏡をとおして、チベット風の人家の塊が二つ三つとらえられる。急斜面に、よくもすがみついたといった村々だ。なんと美しく愛らしい村々だ。それは濁世を遠くへだた

て、ほんとに幸福そうにみえる。私の決心は即座にきまった。

が、まもなく、あつというまに霧がすべてを包んでしまった。霧の中に鈴の音がして、それからまもなく人影が現われた。牧童である。きけば、あの村々のひとつはカルチュといわれ、われわれのいる峠のあたりは、カルチュの牧場だという。彼はその村の男であった。

その夜のキャンプはみじめだった。飲み水もない牧場の急斜面にかりうじてテントを張ったわれわれは、おまけに夜半、いやというほどの豪雨にいためつけられた。テントは浸水する。荷物はぬれる。ポーターたちはずぶぬれで寒さにふるえていた。今まであまりにも乾燥期の快適さに油断していたわれわれは、荷物やテントの雨よけにも、とかくおこたりがちだったのである。モンスーンがついに到来したのだった。この日以来カルチュを去るまでの一ヵ月半というもの、雨の降らない日は一日としてなかったのである。

翌一日休養したあくる日のこと、私たちは霧雨のそぼ降る中を、そのカルチュ村に着いた。途中で道づれになった牧童の男が、ぜひ自分たちの家に滞留しろという。そういう男にかぎって、とんでもない何かの意図があるかもしれない。隣村の方が私の村として適当かもしれない。雨に濡れそぼちながら、私はさらに隣村まで偵察にでかけた。驚いたことにその隣村の人びとは、えたいの知れない私たちを恐れて、取り合わないようである。けっきょくこの男の家にやっかいになつて、カルチュ村を私の調査の対象とすることにきめた。後にして思えば、彼はほんとうに

善良な男であった。

その男の親父はベムバという老人で、村でも指折りの金持だという。といつても、われわれには、ありふれた石造りの民家にしか見えない。彼らの家はみな二階建である。一階は土間で、物置や畜舎になっている。人は二階に住むのだが、この家はちよつと大きいとみえて、二階の一隅にも物置部屋があった。且那衆にS君をくわえた三人が、その二階の物置を占領し、人夫衆は階上の一部と階下を使うことになる。

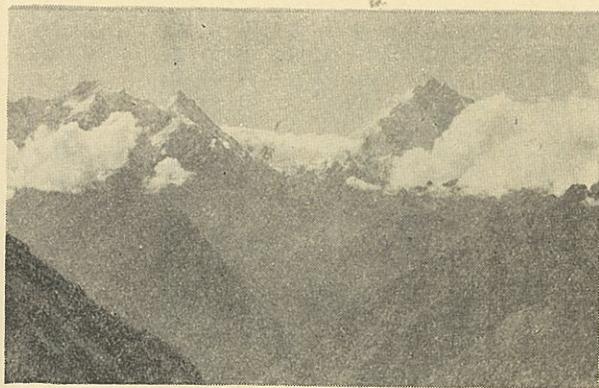
さあ私たちの新居をしつらえねばならない。まず机と椅子を作る。机の上にはビニールのテーブルクロスと、空きビンを利用した花^{はな}活けが置かれる。窓ガラスがわりもビニールを使う。本棚もできたし、その隣にはラジオもそなえつけられた。寝室ができあがって、これでいっさいである。さあこれから、資金のつづくかぎりこの村の生活を続けよう。

3 カルチエ村に住みこんで

家畜から性教育を受ける牧童

毎日のように雨が降る。雨の粒はたいはいこまかい。メカ雨のようなのが、ながくながく降る。霧小便のようにもなる。それがもっとこまかくなつて霧になる。あたりは何もみえない。降っていないといえるのは、こんな霧のときくらいだろう。ときどきポーツと空が明かるくなる。午前中には、どうかすると一瞬晴れてくれることもあった。深い谷をへだててて壮麗なガネツシユヒマイルが雲表にチラリと姿を現わす。村の背後にはスリンギヒマイルの大^{おほい}屏風^{びんぷう}がのしかかっている。しかしこの山はあんまり近すぎて、氷河のかかったところはチラチラとのぞいているくらいにしかみえない。それでもそんな瞬間がくると、「ソレ、写真機だ。」と私たちは騒いだ。シャッターを切ったと思ったら、またまた霧がかかってしまった。そして、どうかすると滝つ瀬のよ^ような雨も降ってきた。

私はまず村を見て歩く。ずいぶん急傾斜、おそらく二十度もあろうという傾斜地が、段々畑になっている。外側に急傾斜した段々だ。オオムギの黄金色はもう完全に収穫期になっていて、



19 カルチェ村から望む、ガネッシュ・ヒマールの最高峰 (右)

どんどん刈りとられてゆく。刈り手は子供が多いようだ。青みがかっていたコムギ畑も、一日一日と黄ばんでゆく。そんな畑が何十町歩もひろがっている中ほどに、彼らの人家が三カ所に分かれてかたまっていた。

はいつてみたいが、隣村の偵察でこりた。あんまりずうずうしく近よらないようにしよう。家の建築は、乾燥地帯のような平屋根ではない。分厚い割板や、自然石のスレートぶきで、棟には竹編みのムシロがかぶせられ、押石ののっかっている。

畑のつぎる周囲には森林がはじまっている。森林のないところには荒地がある。たぶん牧場なんだろう。村の背後にだけは、帯のように岩壁がっつらなっている。が、その上にも人家がすこしあるらしく、タルチョーがヒラヒラしている。たぶん、ゴンパ(ラマ寺)だろう。ゴンパは、もうひとつ畑のまんなかにもあった。そこにひとつの大岩があつて、大岩の上に立ったそのゴンパには、金

色の尖塔が輝いていた。それから、いたるところの岩の上、断崖の出っ端などに、おびただしいチョルテンがあつた。堂々たるもの、ちっちゃなもの、二つ三つならんだものなど。ここもやはりチベット人の世界である。

こんな山奥でも、コムギ畑のできばえは見事なものだ。土は石ころまじりで、いかにもやせ土にみえるが、よくも作ったものである。ひじょうにたくさん堆厩肥たいりょうひを入れるにちがいない。私はすぐにその肥料の素もとを発見する。あちらの岩かげ、こちらの森の中に、雨をよけて、うず高い落葉の山が盛り上げてある。女や子供が熱心に落葉掻きをして集めたものだった。そしてそれがウマヤに投げこまれ、牛や羊に踏まれて、こうしてできた堆厩肥がどっさり土の中にすきこまれることは必定だ。

もう珍らしくもなくなっていたが、チベット人たちは、こんな急斜面の畑でも、二頭びきのゾウバ(ゾウの去)や牛を使って、オオムギの刈跡をすいていた。日本の百姓などが見たらキモをつぶすような傾斜だ。こんなところで鋤すきが使えるはずがないというだろう。それでも彼らは現に使っている。

彼らはこんなふうな農民だ。けれど日本の百姓のように植物栽培だけにこりかたまっている連中じゃない。蔬菜園芸に芸術的な情熱を持っている連中じゃない。もう私たちはそれをよく知っている。きつとたくさんの牛や羊を持っていることだろう。日本の農業を手と鋤くわの農業という

なら、彼らの農業は少なくとも家畜と鋤の農業だろう。いや、彼らはそれ以上に、半農半牧民に
 がない。

またまた雨がげしく降ってきた。私はわが家にもどった。

村のおもな放牧地は、われわれの足なら半日近くもかかるという、ツォムドンというところ
 にある。私たちが村入りするまえに豪雨にやられてひどい目にあつたところである。そのあたり
 には、焼けぼっくりになった立木や切株があちこちにあつた。村人が森林を切りひらいて牧場に
 変えた証拠である。

しかし村の近くにも、いたるところに牧場があつた。それに、耕作地がおしまいになっている
 とくろよりずっと上の方まで、崖のような急斜面に草地がみえる。そんな高いところまで、およ
 そ草が生えられるかぎりの高さまで、子供たちは放牧にゆくそうである。村人によると、それは「近
 い方の牧場」だそうである。「遠い方の牧場」へは、オトナがゆく。男がゆく。ときに一週間くらい
 泊まりがけでゆき、塩をやったりするそうである。マムゾウ(ジウ)や牛を持っていく連中は、五月
 中旬から九月ごろまで、そこに放し飼いにしたままである。乳をとるマムゾウや畑をすく牛、そ
 れから羊や山羊は、畜舎に入れて飼う。朝になると子供たちがそれらの家畜を階下の畜舎から追
 いだし、たそがれの迫るころ、またどこからかぞろぞろと帰ってくる。

一日として霧の絶えない夏である。霧の中に断崖の影が、墨絵のようにときどき見えかくれす



20 チベット人の夏の搾乳キャンプ地(中尾佐助氏撮影)

る。私は断崖のあいだをよじながら散策する。鈴の音が意外な近くで聞こえたが、家畜の姿はな
 かなか見えない。子供の影がポツンと一人、崖っぷちに見える。

ある朝のことだった。連日の雨で、村はずれの小流も、岩壁の上からどうどうと大滝をなして
 流れ落ちていた。そして滝ツボからさらに、ごうごうと
 威圧的な響きをふるわせ、つぎの滝つ瀬へと泡立ちなが
 ら急いでいた。私は木の間がくれにそれを眺めていた。
 いつものように、ぞろぞろと家畜の群れを追い立てなが
 ら、二人の子供がやってきた。さすがにためらっている。
 やがて浅瀬をみつけ、膝までひたして徒渉していった。
 私も、そのあとを追ってみた。谷川の流れば、おとなの
 足にも冷たく、そしてはげしかった。これが子供たちの
 幼い胸に、より強く、あるいはより深く、何ものかの刻
 印を残さぬことほなかるう。しかしその子供たちは、私
 がいることなど知らない。彼らはどこか霧の中に姿をか
 くってしまった。

そして晴れた日には、彼らはポツネンと牧場にたたず



21 厄除けのおまじない 左は戸口に張るもの、右は旅人のもつもの。
いずれも土産の紙に印刷してある。(民族学博物館所蔵)

てしまった。これは武器になるほか、獣肉の処理に役立っている。女は腰からスプーンなどもぶらさげる。だいたい、オハシだとか小刀だとか、七ツ道具を腰からぶらさげる風習は、蒙古やキルギスあたりの遊牧民にも共通のものである。

第一、男女ともに、かならず首からお守袋やお守箱をぶらさげている。お守袋の中には約八十種の厄除けの呪文がはいっているそうだ。こういったお守りが、彼が彼女を守るものであることはいままでもない。そのほか、彼らがかならずかけている頸飾は、これも、たんなる装飾のためだけにあるのではない。厄払いの目的があるのだ。私は手に入れようとしたが、おそろしく高価で、まず四百ルピー以上二千ルピーもするので手が出ない。ネパール・ルピーを円になおしてみると、二万円ないし十万円ということになる。これが、お話にならぬほど生活水準

んで、ヒマールの斜面に起こった雪崩の底響きをも聞くにちがいない。ある日、向かいのルンパ
ー(ガネツシユヒマールを村人はそう呼んでいる。)に、途方もない大雪崩が起こった。
「白いものが山をかすめて飛んだ。」

という噂が、村人の口から口へ、不安げに、終日ささやかれていた。

幼いころから、彼らは、こういうふうな、孤独にたえることにならされる。何か急な事故でも起これば、いっさいを自分の力で処置せねばならない。だれも助けにきてくれない。第一、こんな深い霧の中では、彼がどこにいるんだか、だれが見つけだせよう。すがるべき父母も、頼るべき先輩も、急場のまには合わないではないか。運がよければ、せいぜいのところ、近くにいる友だちくらいだろう。友だちというものは、いいものにちがいないと思う。それにしても、ここでは権威あるものに頼るわけにはゆくまい。また、おれは読み書きがいちばん成績がよいとか、木工をやらせれば左基五郎の上をゆくとか、そういった一芸一能のみを誇ったとてなんにもならない。なんでもひととおりでできる人間の方が偉いのだ。

ひとりでも生きぬくように育った証拠は、彼らの服装にも現われている。腰の帯からは、火打石や裁縫道具がぶらさがり、ふところには、木の茶椀を入れている。裁縫道具などは男に見かけることが多い。男は腰に短剣をさげていることもあるが、カルチェ辺ではもう一昔まえにすたっ

の低い彼らの持ちものなのである。

だが、その牧場には、また、楽しいことがあり、夢があり、そしてときには、激しい情熱の花もあるらしい。つまり、だれにも拘束されない「自由」というものがあるらしい。この霧の中ではそれを見とどけることもできないのだが、長いあいだチベット人の世界を歩いてきた私には、なんとなくそれがよくわかる。

ある日、私は、もともと信頼すべき村人の一人、ダコプーからもをきいていた。男の子も女の子も八歳になると、ああやって牧畜に出かけるんだそうだ。彼はそこで、友だちからいろいろなことを教わる。どうやって牛や羊の番をしたらいいか。困ったときにはどうしたらいいか。そういうことのほかには、氏族のこと、村のこと、ゴンバのこと、恐ろしい悪魔や神様のこと、要するに社会的知識と訓練の万般を教わるんだという。こんな月日が過ぎて十三歳ごろになると、男の子は商業をやる術を人から見習う。女の子は自分の家庭の仕事を一人前に手伝うようになる。

「……それからどうなるの？」

「いや、それからがたいへんだよ。」

そんな会話が、この霧の世界のどこかでささやかれているような気がする。

とつぜん私はズバリと彼に問う。セックスの知識は、どこで、どうして教わるんだ、と。はっ

とした彼は、しかし答えははじめた。いったん話し出せば、彼はすらすらと、正直であった。

こういう聞き方は、とっておきの手であった。相手が答えにくいような問題を、マヌーつ動かさずに、ズバリ、単刀直入にきくのである。ここぞというときに使う術であって、やたらに使うべきではない。

ダコプーの語ったところではこうだった。彼は、たぶん、自分の若かりし日を思いだすように語った。

男の子は八歳くらいで性的知識を得る。彼はこの年ごろで牧場にゆくと、まず家畜の交尾を見て疑問を起す。

「なぜあんなことをしているの？」

年上の子供はとくとくとして知識を披露する。よせばよいのに、牛や羊の話から人間にまでおよんでくる。男の子は、強い好奇心もまじって、やってみたいという衝動に駆られる。そこで、女友だちのある男の子は、牧場や森に彼女をつれだして実験してみる。女の子もまた、はじめは牧場で家畜から暗示を受ける。そして、主として男友だちから強いられて学ぶんだという。月経がはじまるのは十三、四歳ころからだそうだ。

セックスの第二期の訓練は、男の子が十四から十六くらいになったときである。彼の兄の妻が、兄のいないときに彼を呼んで、経験があるかどうかきく。経験がないというと、彼女が手は

どきをしてくれる。

「しかし彼が長男だったら、兄よめはいないはずだ。いささか不公平な話だなあ。」

と、私はノートをとりながら、よけいなことを考えてみる。

もともと、こういう経験は、みんながみんな同じでないのはいうまでもない。なかには、結婚してから妻に教えてもらおうというのもあるそうだ。それから、たいていの男女は婚約後二、三日目に事実上の夫婦関係ができれば、ときには一ヵ月までかかる迂濶ウヅカなものもある。いずれにしても、全般に彼らは早熟である。

きびしく、声のないあの自然の中には、女友たちとの赤裸々な人間的対面もまたたしかにあったのだ。

人類学者にとって大切なことは、「彼らの身になってみる」ことである。これは至難なわざにはちがいない。肩に食いこむ荷物の重味や、単調な旋盤をまわす職人の生活、紫煙をくゆらす重役会議の雰囲気、さては裏町で細長い空を眺めながら、妻はオムツを干し夫はクズ拾いに出てゆく生活。そういったさまざまな人生行路のどれにたいしても完全にその身になって感じたり考えたりすることは不可能だ。体がいくつあってもたりまい。しかし、それにもかかわらず、なるべく相手の身になってみようという気持のひと、なるべくよい論文を書こうと思つて検察官のよう

に相手を見る人としては、理解のしかたに大きなへだたりができるのだ。

彼らは「自由」を知っている、と私は感ずる。そしてこの「自由」が「夢」をつちかっていると思う。「牧場の夢」などというのは、詩人とか画家のセンチメンタルな空想にすぎない、と思う人もあろう。あるいは、金の使い道に困っているブルジョアが、スイスあたりの別荘で、安楽椅子に寝そべりながら牧場を眺めている自由にすぎない、などと、知ったかぶりにきめつける人もあるかもしれない。たしかにそういう「夢」もあるかもしれない。けれど、ここチベット人たちの世界には、そういった夢とは別個の、もっとたくましい夢がただよっていきそうだった。

ヒラリー卿とともにエベレストの頂に立ったシェルパのテンシンは、ちょうどこのカルチェ村とそっくりのところで、つまりエベレストのふもとで育つた。シェルパ族というのは、チベット人の中の一民族名である。ありがたいことに彼の手記が出版されているので、彼らチベット人の少年がどんな雰囲気の中で大きくなるか、よくわかる。

「私は幸運な男だ。私には夢があった。そしてその夢が現実となった。」

私は子供のころから、いつも、遠い国のことや大がかりな旅行のことを夢みてきた。

私はいつもヤクを氷河のわきの山の斜面で草を食べさせておきながら、頭の上にそそり立つ山の偉容を、あこがれの目で眺めたものである。私はそれに登る夢を抱きはじめた。」

系図買いの苦心

ところで、日本を出るとき、私は調査項目のようなものをなんにも作ってゆかなかった。どんな相手か見当もつかないのに、そんなものを作れない、という気持もあった。しかし他方では、今までの外地や内地の調査の経験から、現地のにぞんでからそういうものを作ればよい、という自信もあった。

村に落ちつくとき、私はさっそく、その調査項目表を作る。作ったといっても、いぜんとしてきわめて大ざっぱなものである。「信仰について」だとか「牧畜について」などといったほどに粗っぽいものだ。そのうえに、そんな項目表の順序どおりに調べてゆくのではない。相手は教科書じゃあるまいし、物体でもないんだ。随時随所などというところとちよつと聞こえがよいが、要するにデタラメにいろいろなことをきいてゆくのである。

まず最初には村の名、地名、村長の名、寺の名など。なんでもないふりをして、コンパスとハンドレベルと歩測をたよりに、村の略測図をもやってみる。それから作物の名をきいたり、いつごろ蒔きつけていつごろに収穫するかというようなこともきく。家畜の名前をきき、そのついでに畜産品——バター、チーズ、ヨーグルトなど——のこともきく。

こういったことは、いわば索引みたいなことで、いろいろのものの名前がわからないと、それ以後の調査は手をつけられない。またこういったことは、わりあい誤解されずにきくことがで

きる。度量衡の単位や季節の名前といったことも、いわばこの索引みたいなものだ。コムギはいつ蒔いていつ収穫するか。S君はこんがらがってツジツマの合わない通訳をする。やりなおしだ。まずもってチベット暦の知識からきいてかかる。彼らは、いわば日本の旧暦のようなものを使っていてから「五月」だなんていつたって太陽暦の六月半ばごろをさしているんだ。話が通じよくなつてゆく。

こういった索引的知識の中に、彼らの生活を確実にとらえるために、きわめて重要なものがある。それは、ひとりひとりの人間の血縁的続きからである。

理想からいうと、少なくとも四ヵ月以上ほどこの村で暮らし、まずもって、ひとりひとりの村人の顔と名前とおぼえてしまふべきだ。昔の日本軍隊の中隊長は、二百人ぐらいの部下の名前は、熱心な人ならおぼえてしまったものだ。高崎山のサルを研究している私の友人たちは、百匹以上のサルの顔を皆おぼえてしまった。だから、やろうと思えば、それぐらいの村人の顔と名がおぼえられないことはあるまい。しかし不幸にして、私たちの財布はすでに軽かった。よくいつて一ヵ月あまりしか滞在できないだろう。私はこの方法をあきらめる。

それでも、最低限、血縁関係の系図だけは作りたいと思う。これは、たいへんな難事業だ。なぜかという、だいたいこういったことを外来者に知られるということ、彼らはひじょうに嫌うだろう。日本の村や町を調べるときさえそうである。そんなことを調べて何にするんだ。税金

をかけられるんじゃあるまいか。家族内の秘密を暴露するんじゃあるまいか。そういうった疑惑がつきものである。いわんや、こゝは異民族の中である。どんな誤解を起こされるかもしれない。私は村に着くなり、村長たちに堂々と私の滞在する趣旨を伝える。私はあなたがたの生活を研究しに来たんだ。あなたがたの風俗や習慣をいろいろ聞き、勉強したいと思つている、と。彼らはわかつたようなわからないような顔をしている。いったい何を調べられるんだらう。何をきかれるんだらう。

それから私は、毎日、村人を一人二人ずつ招いては、いろいろなことをきく。「つまらないことばかりきく。作物の話、方言の話、オヤジやオフクロをなんと呼ぶかといったこと、バターやチーズはどうして作るんだという話、お医者さんはどこにいるんだという話、村の水車の話。できるだけとりとめなく聞く。デタラメにきく。

村人は、「なあんだ、そんな話か。」と思う。「そんなことも知らないのか。」と思うことでも、私は熱心にきいて、ノートに書きとめていく。ときには知つていても、いかにも知らないかつたような顔をして「なるほど、なるほど。」とうなずいてやる。それから、こちらもときどき話してやる。「日本というところでは、われわれはこんなことをしているんだ。」と話してやる。こんどは彼らがきく。それから、私の母や兄や友だちの話もしてやる。彼らが、つい話に実がはいつてくると、私は予定表などにはかまわずに、脱線してきいてやる。

彼らのいる面前で、しゃあしゃあとノートをつけるのも、なかなかよいときがある。それは、彼らのつまらない話でも、私がひじょうに信頼し、尊重していることをあらわすからである。

私は早く彼らの血縁的続きながらを調べたいのだが、こんなふうに慎重にやらなければならぬ。ようやく十日もすぎてから、私はその目標にそろそろと近づいていった。

村には三つの小集落があった。まず私は、その三つの集落の家数をきく。カングリーンが十軒、プランガルが十八軒、シンムシェが八軒、合計三十六軒だそうだ。私たちは、つまりカングリーンという集落の中の一軒に滞在しているのだった。それからまた、忘れたような顔をして、ほかの話もきく。

晩になる。私はノートをひっきりかえしながら、整理しつつ首をひねる。この村では、それぞれ家族に姓というものがない。家族の中にひとり家長がいて、その家族の名前は、家長の名前で代用しているのだった。岸家とか鈴木家などという名はない。「信介のすけんとこ」とか、「茂三郎のさぶろうんち」があるだけである。村長のダールドルシェはシンムシェの一軒だそうだ。カルマートブギヤルもシンムシェにいる。もう一人の村長ダコプーはプランガルにいる。だいで奮闘して埋めていったが、それぞれの部落ともまだ二、三軒の名前しかわからない。

私はダコプーに目をつける。彼は一見ひかえ目な、じみな男だ。しかし私は、彼の陳述がいちばん正確で正直なことを感じはじめていた。何かものをきくと、一瞬、どこか遠い空をみつめて

いるような顔をして、それからおもむるにボソボソと話した。冷静沈着な男である。

とうとう、ある日、彼はプランガルの十八軒の名前をみな教えてくれた。あたりにはほかにだれもいなかった。今度はシムシエの順番だ。私はダドルジエを呼ぶ。彼はなんのかんのといつて話をそらそうとする。私は、わかっている四軒の名前をあげて、「そのほかに？」とうながす。あと二軒の名前をあげて、「それだけです。」と、彼は答える。

「もう二軒あるはずだ。全部で八軒だよ。君はうっかりしていたね。」

「そうそう、ハルプーとツァンググティレがいた。」

彼も空とほけて白状した。

「カンダリンの十軒の名前は？ プランガルの方はもうわかっているが。えいと、ツォタシノン、チュムベル、ルムベムプー、カルトック……。」

彼は驚いてしまった。「よく知ってる旦那だ。」自分の集落のことでない、彼は平気である。カンダリンの家族の名を皆しゃべってしまった。

それからまた私は分散戦術をとる。一日、二日おく。

「グルブープーの家は何人暮らしたったかな？」

「プチマの家には、嫁さんと姉さんがいるだろう。そのほかにだれがいっしょに住んでいるんだ？ そうか、それじゃあ、全部で四人だね。」

私は苦心惨怛だ。ようやく各家族の人員をつきとめる。もう一度ダコプーをつかまえてたしかめる。ほとんど一致していた。ときどき子供を数え忘れていただけだ。このとき、ついでに、男何人女何人という内訳をきく。

それから、私は、オジイサンとかオカアサンとか弟とか孫といった親類の呼び方をきく。すらすらとわかるのもあったが、たいへんややこしくて、言う人ごとにちがっているのもあった。イトコの呼び名やオイ、メイの呼び名などはとくにそうだ。いくらきいても混乱して、いまだにわからないのがある。これは、彼らの親類の仕方が、われわれのとはよほどちがうからだ。こういうときに、たとえどこそこの家族の人員の名前が全部わかっていると、ひじょうにはつきりするんだが、つまりだれそれだれそれをなんと呼んでいるか、ときくことができるからだ。さて、これでもいい準備ができた。私は、信用できそうな男を二、三人えらぶ。ひとりずつ来てもらう。シェルバのH君と通訳のS君と私のほかには、あたりにだれもない。私はなるべくなごやかな雰囲気をつくりながら、しかし毅然として、一軒ずつの家族の中の、ひとりずつの続きがらをきいてノートに図解してゆく。答え手は、ときどき一人二人省略したり忘れたりする。私はまたもやつっこむ。

「もう二人女がいるはずですよ。」

一軒分を全部おわると、私は総人数と男女別に、以前きいた数とまちがいがいかどうか確か

る。それからもう一軒についてききにかかる。

やっと、続きが調べがすんだ。この部落だけで、男一五人、女一〇三人、合計二二人。このほかに、カミミという鍛冶屋の家族が一世帯六人、ラマ僧の家族が二世帯二人。総計二三人が、このカルチュエ村を作っている。だが、それだけでは、まだ不十分だ。また一日二日おいて、こんどはひとりひとりの年齢をきいてゆく。

彼らは一昔まえの日本人のように、「ネー、ウシ、トラ、ウー、タツ、ミー……。」という十二支を使っている。これに木火土金水の五つを組み合わせて、六十年周期でもって、それぞれの人の年齢をおぼえていた。彼は火のウシ年だ、といったふうだ。同じ集落に住んでいる者なら、他人の年でもじつによくおぼえていた。「年はいくつだ？」などときくと、一生懸命に、この「火のウシ」年を年齢に換算すべく指おり数えている。そして「四十六歳ですよ。」などと答える。私は日本でもそういうふうな年齢をおぼえるのだと話をする。そして、紙切れに何やら書きつけてまえに置いてある。彼が年を数えるあいだ、ときおりまねをして指おり数えている。じつはなんにも数えていない。しかし彼が数えおわって何歳だと答えると、いかにも私の計算と合致しているといった顔をして、「ふむ、ふむ。」とうなずく。こういう旦那にかかったら年はごまかせないと思うだろう。私はやがて、相手が正直であると感じて、指折り数えるのもよしてしまふ。

フィールドノートに、こういった年齢を洗いざらい書きこむと、そのつきには、死んだ人間の年を数えだす。

「ツァンゴンブー夫婦には、そのほかに死んだ子が何人いたんだ？……二人。その上の子はいくつで死んだのだ？……今生きていれば幾歳だろう？」

彼らはもう正直だった。しかしなにぶん古い話になると、もう記憶がうすれかけている。できるだけ思い出してもらったけれど、こういった資料から後日計算した死亡率と出生率は、かなり正確さが落ちていたのもやむをえない。そのかわり、こういうことが暗示された。彼らは、死んだ人間の記憶を思いだすとき、壮年期でたおれた人間についてはながく記憶する傾向があった。これに反して、子供のうちに死んだり年寄りになって死んだ者のことは早く忘れてしまう。

最後に、私は、妻たちがどの村から嫁入りしてきたかを確認した。村のうちで、カンダリンからシンムシエへ嫁入りしたばあいだったら、この両方の集落の家族についてべつべつにそれを確かめ、一致するかどうかを調べてみた。

ほんとに骨の折れる仕事だった。

S君はかなり協力してくれた。しかし彼はすぐ「概論」をきこうとする。相続はどういうふうにするんだ、とか、一般にこの地方では一夫一妻だ、とかいうふうだ。日本だってインテリはず

ぐ概論をききたがる。大観をききたがる。しかしこれはよい方法ではない。個別的に、些細な事実を、しかも多角的にきいてゆくのがよい。些細な単純な事実から、しだいに合成的な一般的な方向へ聞きすすめてゆくのが大切なことだ。はじめにウソやマチガイがあっても、多角的にきいてゆくうちにかならず矛盾があらわれてきて、真相がわかるものである。私はこれを、「矛盾法」と呼んだり、「探偵小説法」と呼んだりしている。

「人はすべてにわたって、ツジツマを合わせてウソをつけるものではない。」これが矛盾法の原理である。

このように、ウソまたは黙秘権を行使されそうな事柄については、私は、最初ごく簡単な、しかも最後に質問することとおよそかけはなれた面からきいてゆくようにした。私が村の戸数をきいているとき、彼らはまさか最後に嫁さんのお里をきかれるとは思わなかったらう。

こんなこともあった。こういった家々の家系は、私にはしばしば「お家断絶」になるように思われた。跡継ぎがないために。ところが、ダコプーでさえ、

「絶えた家系などはひとつもない。」

と答える。さてブランガルのある家族の主婦は、カンダリンから嫁入りしているという。

「カンダリンのどの家から嫁入りしたのかね？」

ダコプーはグッとつまってしまった。

「その家系は……。絶えたんです。」

チベット人は、「絶える」とか「傾く」とか「下る」とかいうことを嫌う連中だった。太陽の昇る午前中は縁起がよく、それが下り坂になる午後は縁起が悪い。婚という漢字はタソガレというつくりを持っているが、この村では午後には結婚式をやるような不心得者はいない。

しかし、このように矛盾法によって家族や個人の秘密にするところをあきらかにしてゆくばあい、根本的に私がとっている態度は、当事者の基本的人権にたいする尊重である。私は思う。たんなる興味から、かるがるしく人の秘密をあばいて、快しとするような態度では、いくら表面を巧みにとりつくりついても、いつしか相手に感じられて、かえって目的を達しないものだ。矛盾を鋭く突くのも結構。押しの手も結構。ただそれが、一貫したヒューマニズムへの信頼でつねに裏打ちされていなければならぬ。その公明さによって、相手にたいして自然に信頼感や安心感が伝わるのを待つべきである。いたずらに冷やかな技巧におぼれては、かえってそれによってつまづくものだと思う。私の「系図買い」調査は、この大原則をはずしたら成功しなかったらう。

同じ氏族の者同士は、結婚できない

家族の組立てがだいぶんわかってきた。今度は、こういった家族と家族との関係を知らなければならぬ。これがほんとうの「系図買い」だろう。しかし、こういう家族間の系譜関係は、も

作っていたこともあるらしい。農繁期に、女手ばかりで困っている家族を助けてやるのも、氏族内の隣近所の家々だ。そのうえに、それぞれの氏族には、その守り神というものがある。この神さんの話は後にゆずることしよう。

ある日、プランガルの一主婦が病気で死んだ。そのため、ここ一週間はあまり私のお相手もできないとダゴプーが断わりにくる。私は、お葬式の模様などをじっさいに見たいと思う。しかし、人が悲しんでいるところへ外来人が行って、おもしろそうに見物したりものをきいたりするのも、いかにも心ない話だと思いとどまる。十ルビー(約五百円)を遺族に渡してくれと彼にたのみ、私もまた合掌した。私は仏教徒だから、こういうことがごく自然にできる。

そのついでに彼はちょっと話していった。自分をふくめ、プランガルの者は全員、一週間なにもしないで喪に服するのだという。彼女はよその氏族で生まれたが、この村に嫁入りすれば、こういうふうな氏族の一員として、その死にいたるまで扱われるのである。ところでそのときは、村の畑の大部分を占めるコムギの取入れどきの真最中だった。そのうえ、欲の深い連中は、すこし早く刈りとられたオオムギ畑を鋤いて、この夏のうちにもう一作ソバを作ろうというのだ。

私は野良に出てみた。麦を刈って束ねる者、家へとかついでゆく者、ワラを貯蔵所に運ぶもの、畑で鋤いている者……。まさに村中総出である。ネコの手も借りたい忙しさだ。しかも一刻を争うこの多忙のときに、プランガルの全村民は、文字どおり一週間完全に仕事を休んだ。なん

ということだ。それはたて、まえてなく、ほんとうに行われたのだ。

もっとも、ここで私はひじょうに重要なことを確めていなかった。この一週間のあいだ、あるいはプランガルの畑仕事を、他の二氏族のものがしてやっているとすることもありうる。それにたいして、プランガル村民が莫大な謝礼を他の二氏族にしてやることも考えられる。私のノートは、残念なことに、この点についてはイエスともノーとも言ってくれない。

口先でこそただの一週間のお休みだ。しかし、私のように、いくぶんでも百姓をした人間には、この休業の意味するものがズッシリと感じられる。それにもかかわらず実行された。氏族というものが、いかに村人を制約する力を持っているか、この例はおそらく氷山の一角をのぞみ見たのにすぎない。

同じ氏族の者同士は、ぜったいに結婚してはならない。



22 ソラと呼ぶ三日月型の鎌で小麦を刈る女と子供

じっさい私の作りあげた系図の中には、そんな例は一つも出てこなかった。それからまた、シムシエから分かれたといわれる近隣のゴンバ・テンシンという村の者は、これまたそのゆえに、シムシエの者とはぜったいに結婚してはならないのだった。

それにしても……、と私は考える。もしも父方の血統でも、その関係がうんと薄くなれば、どこか結婚のゆるされる限界が現われるのかもしれない。そう思つて一、二の村人に、こういった近親結婚のタブーの範囲をひそひそとききはじめた。「十二代はなれたら結婚できるんです。」と村人が答えた。話はおもしろくなりそうだった。そのときだ。とつぜん、破鐘やぶねのような声でどなったものがある。

「同じ親類アトクのあいだで結婚するような奴があるものか！もしあつたらそんな奴は犬イヌと同然だ！」
 みんなは驚いて立ちあがる。見れば宿の主のペムバ老人が、庭掃除をしながらわれわれの話を立ち聞いたのだ。怒つてから、ペムバ老人もわれわれも、ワッハッハアと笑いだしてしまふ。しかし、彼のこの一喝のため、私がどんなに続きを聞こうとしても、彼らはもうひとこともこの話題を言わなくなつてしまった。

ペムバ老人がここでブンギャといつたのは、父方のものにかぎらず母方の親類でも、血縁関係にあるものすべてをさすことばである。しかしこのばあいには、彼はパーザンすなわち父方の関係でつながっている同氏族の者同士の意味のつもりだったろう。じっさい、おたがいにパーザン

同士でさえなかつたら、たとえばお母さんの妹（つまり若い方のオバサン）とも結婚できるのだつた。お母さんは、よその氏族から嫁入りしてきたんだから、その妹にあたるオバサンだつて、よその氏族のものである。イトコのうち、お母さんの兄弟の娘さんとの結婚は、かなり実例がある。お父さんの姉妹の娘とは、やはり結婚している例はあつたが、すくない。お父さんの兄弟の娘とは絶対にできない。なぜというに、それは同じパーザンの者同士という理屈になるんだから。

こんなふうな、氏族は何かにつけ、彼らの社会生活を律する集団だった。各氏族に一軒ずつある総本家は、いわば彼らの共同の祖先の直系の子孫である。だから他の分家から、一種の尊敬の念をもつてみられている、という話だった。この村で唯一ゆいの例外だった婿入り結婚も、シムシエの総本家のばあいに見いだされた。それは家系の絶えるのを防ぐためである。お婿さんは、シアルコラの下の方にあるロクバの村からやつてきた。

この総本家には、父親のほかに二人姉妹がいるだけで、男の子がいなかったのである。ところがそのムコさんの妻は、つまり姉妹もろともだった。一夫二妻というわけである。

もし私が「概論」ばかりうけたまわつていたとすると、きっと私はこんなふうな理解して帰つたにちがいない。彼らの村では、氏族の統制がひじょうに強くて、個人の自由というものはほとんどない。彼らは漢民族と同じように、祖先崇拜にこりかたまっている。氏族の中には総本家と

いうものがあって、分家は皆総本家の権威の前に膝を折りまげている。そして、彼らは家系を絶やさないようにひじょうに骨を折っている。それで、絶えた家系はほとんどない。昔から家数はほとんど一定していて変わらない。家族の中では家長である父親がひじょうな権威を持っている。相続は長子相続だ。次男、三男は冷飯を食ってちぢこまっている。これを要するに、彼らはひじょうに後進的で、封建的な家族主義の中に立てこもっているんだ、と。

家長になるのはだれだ

じっさい、チベット人たちの生活をそういうふうにみた人たちが、有名な人類学者の中にさえあるのだった。私はいまや、そういう見方が、いかに事実と相違しているか、いかに偏見に満ちたものであるかを、はっきりと感じてくる。

ダコプーでさえこうだった。

「各氏族の中の家族数は、私の子供のときからちつとも変わっていない。」

ところが、私はもう系図を調べあげている。彼らの氏族の中では、分家はひじょうに多い。盛んに分裂増殖をしている細胞みたいなものだった。この分で昔からネズミ算式に分裂していたとすると、今ごろは立錐の余地もないくらいに家と人間で埋まっているはずである。

ところが、すでにお話したように、ダコプーは、断絶した家系などというものは一軒もないと

いう。あきらかにそれは矛盾だった。じっさいには、ネズミ算式に分裂増殖を続ける一方、他方ではそれに劣らないスピードで、消滅してゆく家族があったのだ。現に、実家が絶滅したため、妻のお里の家をきかれても返事ができない例が四例もあった。現にツァングティレの家は、四十一歳の彼とオールドミスの姉との二人住まいなのに、いまだに養子をとろうともしない。カルトック婆さんの家も、彼女と二十一歳の娘とだけだから、養子でも迎えないかぎり、家系は絶えるにきまっている。どうも、総本家以外のばあいには、いっこう婿養子を迎えようという気が配もない。

こういうせいかどうか、各集落には、石壁が崩れのことって「ペンペン草の生えた」屋敷跡も、一つ二つ見うけられる。たえず分裂増殖をやりながら、たえず死に絶えてゆく結果、プラスチックナスほぼ同数の細胞がかたまっている、というのが、氏族の実態だった。

総本家は威張っているだろうか。日本の農村でしばしば見られたように、本家の格式というものをもつて、分家たちは隸属し奉仕しているのだろうか。とんでもない。カングリーンでは総本家はツイリンの家だ。彼は貧乏で、幅も利かない。金持のペムバの家の隣にちぢこまっている。

いったい分家する兄弟は、
「おヨメさんをもらわなければ本家でいっしょに暮らしておられる。結婚すると分家しなければならぬ。」



23 カングリンの総本家 戸口(二階)にいるのは家長。

やはり彼らの家族では長子相続制度が支配しているものとみえる。ところが、シガワギヤルツエンという、これもまた私が信頼する村人はつぎのように言うのだった。

のだそうである。私が調べた事例から察するに、最初の男の子が生まれて一年くらいたったころに分裂するのが多いようだった。ところが、彼らの女性は潤達で、日本みたくいには、ヨメ、シユウトメ問題などで泣いているようなバカはいないらしい。両雄ならび立たなければ、さっさと分裂してしまう。というより、はじめから別居するのが多い。ときには兄弟の意見が合わなくてケンカして別居するものもあるらしい。こういうわけか、彼らの家族の過半数は、夫婦と子供だけという西洋式の家庭が多いのだった。

こういう一家の中で、家長は威張りかえっているだろうか。いっこうそんなふうにみえない。すでにのべたように、おヨメさんの方が幅を利かしているくらいである。

私は暇をみて、系図の中から統計をとってみる。その結果は、長男が家長になっているばあいがひじょうに多い。

「オヤジが働けなくなると、息子兄弟のうちで、いちばん才能があり、丈夫で、家族のためにつくる者がつぎの家長をつとめるのです。だから、どの男も家長候補者なんです。」

私はこの矛盾に困ってしまう。日本では、長男というものは「クサつても鯛」である。しかしこのカルチュエでは、どうもずいぶんちがった雰囲気支配しているように思えるからだ。親父の鶴の一声、だとか、長男風を吹かして、などということは、この村では通用してはいそうにもない。そのかわり、親の光は七光、だとか、困れば兄貴が何とかしてくれるだろう、なんていうことも、どうも当てにはならないらしい。親父と長男との結びつきだつてとくに強固だと思えない節がある。長男でも結婚して親父夫婦と別居しているものもあるじゃあないか。そうかと思うと、親父の方が分家して出ているものもある。こういう雰囲気の中では、シガワギヤルツエンのいうところの方が、なんとなく真実味を帯びている。けれどやっぱり、彼はデタラメをいったのだから。

この疑問は、とうとう日本にもどって一年目ごろまで持ち越されたままだった。私は日本にもどつてから、「系図買い」の資料をタテからヨコから集計したり分析したりした。ある日、つぎのような表ができあがったとき、私は踊りあがりなばかりに喜んだ。謎は一瞬にして解決のいとぐちに達したのである。

この表は、二人以上の兄弟が一家族の中で暮らしているばあいばかりを集めたものである。上

事例番号	長幼の序列			
	I	II	III	IV
1	76	69		
2	67	58	55	
3	65	58		
4	59	48	46	
5	52	49	46	40
6	33	27	8	
7	30	28	11	
8	30	13		
9	28	21		
10	28	21		
11	28	18		
12	24	9		
13	15	8		

表1 同居する兄弟における、家長の地位と長幼の序列。

注 (1) 表の中の数字は兄弟の年齢。
(2) 太い数字は家長をしている男。

の欄には、兄弟の中でどれが一番の兄貴で、どれが三番目か四番目かという年齢順が書いてある。そして、家長をやっている男は太い数字で書いてある。
全部で十三例のうち、九例までは、長男が家長に

しこれを年齢別にみよう。すると、どうだ。長男が三十三歳という例までは、一つの例外もなく長男が家長の地位にある。ところが、長男がそれ以上の年輩のばあいには、もっと若い弟が、つまり次男や三男が家長をしている方が多いのだ。これはいったい何を物語るものだろうか。

私はこういうふう解釈するのがいちばん自然だと思った。すなわち、長男は長男であるからというだけの理由で家長をつとめているのじゃない。彼が兄弟の中でもっとも有能なばあいにのみ家長でありうるのである。兄弟たちがまだ若い年ごろの時には、もちろん一番年上の長男が一番有能なばあいが多くだろう。弟たちはまだ一人前というのには早すぎるからだ。ところが、弟たちがだんだん一人前になってくると、兄弟の中で一番有能なのがだれか、ということはおいおいあきらかになってくる。さらに兄弟たちが年かさを増してくると、老衰してくるのは、今度は長男からだろう。もっとも有能ぶりを発揮してくるのは、かえって、まだ血気さかんな弟どもだ。そこで家長のバトンには、長男から弟のうちのだれかにゆすり渡されるのである。こう考えると、ソガワギヤルツェンの方が正しいことをいいたことになる。私の方が自分の偏見で事実を曲げかねないところだった。

そこでこの表は、同時につぎのことをも暗示することになったわけである。いったい彼らの男の一生というもので、いちばん有能な盛りというものは、はたして何歳くらいだろうか。右の表でみると、三十三歳までは長男が家長の座にすわっている。ところが、五十二歳の長男は、もうバトンを四十六歳の三男にゆすりわたしている。こういっただころから、私は、彼らの有能さの盛りは四十歳あまりだろうと推定する。それをすぎると、多くの男は、有能さがおとろえ、王座から蹴おとされるのであろう。

それにしては、この表に、どえらい例外が一つあった。長男で、七十六歳の高齡に達しながら、まだ弟にバトンをゆずりわたさない頑固者が一人いるではないか。彼はシムシエの大ボスであるバルバだ。どういたしまして、彼はそれどころでない。村随一の黒幕の親分だった。彼こそは筆頭格の村長だったのだ。彼はベムバとならんで、村中きつての金持で、ひじょうなやり手だということだ。彼は総本家の人間ではない。もともと彼は長男でさえなかった。それは系図を見るまでもなく、彼の名前が物語っている。バルバというのは、「中の弟」という意味だ。三人兄弟の次男だった。長男は現在すでに死んでいない。彼には六十九歳の弟がいるだけではない。もう四十四歳で嫁さんも持った長男が同居している。次男がすなわちダドルジェで、彼はもう十二年もまえに分家してしまった。

そういえば、同じような大ボスであるベムバ老人とは、そもそも、いかなる人物か。彼は農業や牧畜のほかに、商売をやつて相当の金を貯えたという話だ。彼もまた、もう七十歳になるというのに、家長の地位を息子にゆずっていない。彼の弟はとくに分家して一戸をかまえている。(したがって、表1には入れてないが) 彼と同居している長男は、すでに四十一歳になっており、その長男には十五歳になる息子まである。なんというしぶとい老人だ。

七月の農繁期にはいった。カングリーンでも彼の家ばかりはたくさんの人手をやとっていた。コムギ畑の刈取りと収納のためである。村内の娘たちが手伝いに来ていたほかに、まる一日行程へ



24 カリンと呼ぶ大笛を吹くベムバ老人(右は孫) この大笛はブマ教の儀式に使われ、3分の1の長さにおし縮められる。

だたったニレという村から、数人の娘が何日か泊まりがけてベムバの家に来ていた。階下の収納小屋からは、夜なべ仕事でコムギの穂を束ねる娘たちの歌声がひびいてくる。

ニレの娘のなかに、いくぶんうれい、をふくんだ顔立ちの美しいのがいた。ある日のことだ。私とS君だけのこところへ、彼がこっそりやってきた。

「ゆうべはあの娘といっしょに寝ましたよ。なかなか、情の深い娘でした。旦那もぜひ一度試してごらんなさいよ。」私たちは顔を見合せて笑った。七十歳というのに、大将、なかなかやるわい、と。

彼はなかなかプライドの高いところがある。私たちが偉い旦那だということで、ほかの男たちは、すべてほかのチベット風住民と同じように、お追従笑いを浮かべながら、厚かましく私たちに、シガレットだとか葉だとか空ビンだとかをねだるのである。しかし彼だけは、私たちが勧めるまでにはけつして請求しない。だからといって、彼にはべつに横柄さや高慢なふうもなく、私たちに敬意

こそ扱え、すこしも卑屈の色はない。

その彼は、しかしまた、見るからに強壯な体躯の持主である。すこしお天気がよいと、麦打ちのカラサオを軽々とふりあげて、すとんすたと、たくましく打ちおろす。そうかと思うと、少年を相手に、畑を牛で鋤すいでいることもあった。そうかと思うと、作業広場で私たちのポーターと仲よく竹刃ゴ編みをやっている。そうかと思うと、訪ねてきた商人を自分の家に泊めこんで商談をやっている。そうかと思うと、自分の幼い孫をかかえて、あやしている。あるときこの老人が、かわいそうにこの赤ん坊の尻をめぐったままで、うすら寒い庭のムシロの上にころがし、自分はずっとカラサオで麦打ちをやりだした。おやおや、と思つたら、そばにつないであつた犬が、赤ん坊の出すウンコを、きれいになめて食べてしまった。なるほど、犬にこういう用途があつたのかとあきれてしまう。

こういうふうはこの老人は、肉体的にも精神的にも、なにしろ精力絶倫なものがあふれている。だから私は思う。老人になつても並みはずれて精神的で有能な人間は、ちようどこのペムバやバルバのように、依然として家長の地位にとどまるのであろう。彼らは老人であるのゆえに尊敬されて家長の地位にまつりあげられているのではなかつた。四十、五十の渾はなたれ小僧よりもやり手だつたから、その地位にとどまつたのである。青年時代には、まだひそんでいる能力の個人差が十分にあらわれきらないから、年齢の上下こそ能力評価の安全な物差しなのであろう。しかるに、

男の最盛期から以後には、早くもぼけてしまふ人間と、年にもかかわらず最後まで脂あぶらぎつたところを見せる人間とは、ひじょうな開きがでるものらしい。

これでもわかるように、彼らの家長は、生まれながら予定された長男がなるのでもなく、また、順番が来たからといつてなるものでもない。その地位は、むしろ有能な男が勝ち取るのである。あるいは、その有能さのために、他のメンバーから推されて就任することもある。もつとも有能なメンバーが女であるならば、彼女が実質上の家長になるばあいだつてあるのかもしれない。私の調査は短期間だつたから、そこまで深いところはわからない。女ばかりの二人暮らしをしているカルトック婆さんの家をのぞいては、名目的には、すべて男が家長をつとめていた。

君の羊は何頭か？

家族の組立てがかなり分かつてきたので、私は家族の経済生活をもうすこし知りたいと思う。それには、どうしても、だれその家は畑何ヘクタールを持っているとか、家畜を何頭持っているとか、あるいは、そのうちのどれだけを貸したり借りたりしているか、というたぐいのことを調べなければならぬ。しかし、これまた、まことに至難のわざなるかな。彼らは、一軒ずつの具体的な財産を私に知らせまいと、極度に警戒しているようだ。私は例によって、目標からはきわめて遠いところから始めよう。彼らは畑や牧場の面積をどういう単位で数えているのか。

私はそれさえも、いきなり尋ねようとはしない。まず長さを測る単位からはじめる。両腕を広げた長さがドムであり、親ユビと中ユビを広げてつっぱった長さがタであり、人さしユビの幅がセムムだ、などという話を、おもしろ半分のような顔をしてきいてゆく。容量と重量の単位、荷物の単位、労働の単位、時間の単位、なんでもきいてゆく。そして、それらにまぜて、さりげなく面積の単位もきいたのである。

しかし、けっきょく、彼らは面積の単位などはないという。ないはずはないんだがと思って、いろいろきくのだが、どうしても答えてくれない。土地の長さをリングモといい、幅はトゥイマなんだというが、面積は知らないという。牧場の広さについても、きまった単位はないんだという。もっとながく村で暮らしたら、たとえば収穫高であらわした土地の大きさといったものがなかったのかもしれない。私は失敗した。

いずれにせよ、こちらも用心するにしくはない。村人のだれかから、たくさんの家族のことをとりまとめて聞く、などという虫のいい楽な方法は望めない。とすると、一軒一軒まわってきくよりほかに方法があるまい。けれどそれだって、「今日は。」と断ってはいって断って、「お宅の畑は何町歩、牛は何頭ですか？」などという調査みたいなことをするわけにもゆくまい。もつてのほかである。

とうとう私は一案を思いつく。それは、今西博士から頼まれていた心理テスト（ロールシャハ

テスト）のことだ。このテストのときには、どうしても一人ずつの村人と顔を合わせるわけである。この機会をのがしてはなるまい。テストは、一人の村人について一時間くらいはかかる。すんだときには、相手も私もほっとするだろう。そのときに私はタバコを一服吸う。相手にも一本すすめる。そして雑談にまぎらしつつ、彼の家の財産のことをきくことだ。それも欲張ってきくうとしてはだめだと思う。とうとう私は、持っている家畜の数だけをきくことにした。

「ときに、君んところにはゾウモ（ゾウ）が何頭いるのかね？」
 といったふうだ。

結果は、うまくいった。私は、全部で三十一人の面接者のうち、二十八人についてそういう資料を得た。ところが、その資料よりもっと値打ちがあるほどの副産物がひっかかってきた。

「君んところは何頭羊を持ってるのかね？」

などと私はきく。

「一頭さ。」

と彼は答える。彼は二十四歳の青年で長男だ。彼の三番目の弟は十五歳である。私は二、三日たつてからその弟にきく。

「羊は十三頭だ。」

なんだって？ 兄貴のいうところと弟のいうところはまるでちがうじゃないか、と私は思う。

だから、ほかの男をつかまえてきいたり、いろいろ調べてみる。事實はあきらかになった。兄貴がウソをついたのでもなく、弟がまちがったのでもなかった。私の方こそどうかしていたのだ。私は、日本人のクセで、「君の羊は何頭か？」という質問と、「君の家族は何頭羊を持っているか？」という質問を、同じ意味で使っていたのである。ところが、彼らは一人ずつ自分の家畜を持っている。その兄貴は、牡牛四頭、牝牛一頭、羊一頭を持っていた。弟の方は、ゾウモ五頭、牡牛二頭、牝牛二頭、羊十三頭を持っていた。

だから、「君の家族には全部で何頭の羊がいるか？」と、とくに念入りにきいてみると、彼は面くらって、「えーと……。」と、いっしょうけんめいに指折り数えて、オヤジの分、オフクロの分からはじまって、家族中のだれもかれもの羊を足し算する始末だった。文字どおり個人所有だ。私が調べた顔ぶれの中で一番若い十二歳の男の子さえ、牡牛を二頭持っていた。

家畜は動産だ。耕作地のような不動産こそは、家族共同の財産か、あるいは家長の財産だろうと思っけてきいてみる。ところが、これもやっぱり個人個人の所有なんだそうさ。私は疑いぶかい。いろいろの角度からきいてみる。しかし、

「オヤジが死ねば、その畑の何分の一はオフクロがとり、何分の一は、ヨメ入り前の娘がとる。」といったふうな財産相続の話を書いたとき、もう個人所有ということほこれで間違いないと知った。女までが畑をそれぞれ持っているのだった。そして、家族の住まう家屋さえも個人所有で

あって、遺産相続のときには、兄弟のあいだで部屋ごとに分配することもあるんだという。

彼らはチベット人の常として、オオムギやコムギやソバを焼いて粉にして食べる。麦コガシでいる。それをツァンパという。ツァンパを、バター入り塩入りのお茶の中でこねたりして主食にしている。そのツァンパは、家々にある石臼で挽かれることもあるが、そんなものばかりでは能率が悪い。水車へ持って行って大量に挽いてしまう。水車は、カールという隣村に四つあり、カールチェには一つしかない。急流の水をひいて、水車小屋の中で、水車と石臼はゴロゴロと水平にまわっている。

その水車も、それぞれみんな個人所有なのである。カールにある水車の一つは「カールの村の二人の男が共同で持っている。」というふうな、わざわざ「共同所有」を但書ただしがで説明するくらいだから、個人所有の原則はますます明きらかである。ツォムドン牧場のあちこちにあるレーという家畜見張小屋も、個人所有であった。

ただ、牧場はだれの所有でもなかったし、薪炭しんたんをとるナワバリもそうである。そういった土地は「政府のもの」であり、利用する権利は、村の領域のうちなら、だれにでも開放される。ある日、私の知ってる男の牛が、隣村の領域に一頭迷いこんで、そこで事故を起こして死んだ。その牛の肉は、所有者の彼が半分とり、残りの半分は隣村全体のものとなったのである。

こういうふうな個人所有の傾向の強いところでは、家長はただリーダーであるにすぎない。一

一人の家族員の持っている財産の総和が、すなわちその家族の財産なのである。彼は、そのいわゆる家族の財産の管理運営の権限は持っているが、彼じんの財産はその中の一部分にすぎないのである。財産の所有権と管理運営権とは、スバリと分けられていたのだ。だからまた、この二つのものの相続はかならずしも一致しなくてもいい理屈ではなかるうか。しいて日本の言葉で当てはめていうならば、遺産相続と家督相続とはバラバラに切りはなされているわけだ。

私たちの財布はだんだん軽くなる。もう私には、財産相続の実例を一々集めている暇がない。私は「概論」をきいて我慢しなければなるまいと思う。ところで、その概論を、もっとも素朴な人物であるンガワリギヤルツェンからきけたことは、せめてもの幸せだったろう。彼の話の中から、重要な点を二つ三つ付けくわえよう。

彼らは財産を三種類にわけける。一つは、「私の作った財産」、第二は「オトツツァンの作った財産」、第三は「オジイサンの作った財産」である。ところでオヤジが家長として、彼がその立場で働ける限りのあいだは、すべての財産はオヤジの管理下にある。オヤジがもう働けなくなるのと、息子たちのうち、「もっともよく働き、もっとも良い人間」が、この家督をつぐのであって、それは長兄であると末弟であるとを問わない。

さてオヤジが死ぬと、今度は財産相続だ。相続する財産の中には二種類がふくまれている。つまり「オジイさんが作った財産」と「オトツツァンが作った財産」とがふくまれている。オジイ

サンの分は、長男に全部ゆずられる。この長男は、オトツツァンからみでの長男であるから、オジイサンからみでは孫である。財産はこうして祖父から孫へであり、そういう形で長子相続である。

ところが、「オトツツァンが作った財産」の方は、息子たちに均分される。いや、息子たちばかりじゃない。生きのこった母にも嫁入りしていない娘にも、ある割合で分配されるのだ。たとえば父が死んで、あとに母と、息子二人、娘二人が残ったとせよ。このとき、財産は四種類に分類される。家屋、耕地、家畜、およびその他の動産である。家屋は二人の息子のものとなる。耕地はだいたい、母の六にたいして、息子は三、娘は二の割合で配分される。たとえば十六片の耕地ありとせよ。六片は母へ、三片ずつは息子ののおのへ、そして二片ずつは娘のおのへ与えられるのである。動産のうち家畜は、母の四にたいして、息子は三、娘は二の割合で分けられる。たとえば二十八頭の家畜ありとせよ。八頭は母へ、六頭ずつは息子ののおのへ、そして四頭ずつは二人の娘のおのにおに配分されるのである。その他の動産は、値ぶみのうえで母、息子、娘、どれにも均分する。

息子たちのあいだで、均分は相当徹底的なものらしい。たとえば家なども、部屋数によって分割したりするそうだ。畑も等分する。値ぶみしなければならぬ財産のばあいには、このためにしばしばもめごとが起こるらしい。値ぶみのばあいには、いつも氏族のリーダーが立会人になる。

それでも拾取がつかないばあいには、中央政府の役人まで呼んでくることもある。こういうしだいで、父が死んでから、この値ぶみがすむまでは、ばあいによっては食糧も食べられないという悲喜劇も起こるそうである。つまり、その家族の食糧も、死んだ父の財産だったから。

もし息子が一人もいなかったらどうなるんだろう。たとえば父が死んで、母と二人の娘が残ったとする。このばあいには、父の財産は四分される。(オジイサンの財産がどう処分されるのか、私は聞き落としていた。)そして、女連がそれぞれその四分の一をもらう。この四分の一は、あるいはラマに寄進し、あるいは礼拝のために使うなど、すべて死んだ父の名において宗教用に使わねばならない。

このばあい、女連が母と一人娘、あるいは娘二人ばかりが残されたとしても。そうすると、財産の分け前をもらえる女は、三人ではなく二人である。財産は四分されずに三分される。そして、女連が一単位ずつとり、残る三分の一は、前のばあいと同様に、死んだ父の冥福を祈るために使わねばならない。

父の死後、残された家族が、母だけ、あるいは娘一人だけとしよう。すると財産は半分に分けられる。女が半分もらい、あと半分はやはり宗教用に使わなければならない。

「つまり……。」

と、ンガワリギヤルツェンは要約する。

「いずれにしても、女ばかり残るときには、遺産は女の数に一を加えたもので割られるのです。そして残る一単位は、死者の冥福を祈るのに使われます。こうしたばあいにはいつも、父の兄弟のほかに母の兄弟がやってきて、これにくわえて、残った母や娘はもちろんのこと、氏族の頭も立ち会った上で、財産が分配されるのです。」

「それじゃあ、妻も子も失った男が死ぬときには、財産はどういうことになるんだ。」

「やっぱり、死んだ男の兄弟と、妻の兄弟がやってきて、氏族の頭を立会人にくわえて、財産を全部売ります。そのお金は全部、死者の冥福を祈るのに使われます。第一、こういう立場の男は、すでに生きているうちから財産を売ってしまつて、自分でこういうことをすることもありません。」

それから、私はなおもきく。その母がさらに死ねばどうなるのか。彼女の財産はいちおう息子たちに均分される。けれど、彼らはその財産を無条件で享有するわけにはゆかない。すなわち彼らはその財産を同じ氏族の連中のみ売って金にかえ、得た金をすべて死んだ母の冥福を祈るために使わなければならない。あるいは息子たちが母の財産を保有したければ、その財産に相当するお金を自分の懐ふところから出して、死者の冥福を祈るのに使わねばならない。つまり買いとつたのと同じことになる。

未婚の娘が死ねばどうなるか。娘の財産は、たとえば長女のばあいなら、それは長男のものに

なる。次女の財産なら次男が引きとるそうだが、このばあいだって母の死んだときとまったく同じである。死んだ姉妹の財産をひきとった兄弟は、いわばボダイをとむらう執行人みたいなものである。彼はその財産を売るか、またはその財産相当額の金を宗教用に投じなければならぬのである。

ながながと紆余曲折をへた彼の説明は、せんじつめればこういうことになる。女性は、財産をもらう権利の上では、男性とさほど開きはない。しかし、いったん女性の得た財産は、もはやふたたび無償で男性の手に相続されることはないのである。もしもこの話をほんとうだとすると、ラマ寺はいいお布施にありつけるわけだ。ポロい話だが、ほんとうかもしれないと私は思う。

縁談は、なぜ男女平等にゆかないか

これでだんだん話がわかりかけてきた。彼らの生活の中には、まったく相反するような二つの原理が、ふしぎにも同居しているらしい。その二つの原理は、ときにははげしく相戦いながら、ときには巧みに組み合わされながら、彼らの氏族生活や家族生活を形づくっている。

その一つは、血縁の者たちが集まって作る集団——つまり氏族や家族——にたいして、個人は従わねばならないという原理である。この集団の団結性は、父系というタテ糸の関係を背骨として固められている。そして、それはヨコ糸として、本家・分家・又分家・又々分家といった枝わ

かれ式の関係を用意しているのである。

ひとたび女が得た財産は、彼女の一生で用立てた後には、だれにもゆずり渡されずに、宗教的目的に使われてしまう。こういったふうな男女の扱いの不平等さは、あるいはタテ糸をしっかりともつためにできあがった制度かもしれない。死んだ後に処分される彼女の財産も、だれに売ってもよいというのじゃない。彼女と同じその父系氏族のメンバーに売らねばならないのだ。財産処分のときの立会人の中には、いつも氏族のリーダーが一枚加わっている。こういったことは、氏族が解体するのを防ぐような仕組みにも思われる。

まだそのほかに、女性が差別待遇を受けるばあいがあるのだろうか。それは、ある。縁談のまとめ方だ。

縁談のまとめ方方にはふたとおりあった。両家の父親の話合いでまとめるばあいと、恋愛結婚とである。前者のばあいには、親は息子のほうの意志はある程度打診するらしい。しかし娘の意志などはきかないで事を進める。それどころじゃない。娘には婚約までひとこともいわないのである。まことにふしぎなことだと私は首をひねる。なぜかという、チベット婦人のあの潤達さ、彼女たちの強気、そして、ときには亭主の横つらを平気ではりたおすような権力の強さは、すでに見てきたとおりなんだから。そして、それに釣合うように、チベット人男性のフェミニニストぶりもなくはない。なぜ縁談にかぎって、娘さんの「人権」が無視されるのだろうか。はたして

彼女はいつも、親の言いなり放題に唯々諾々としてゐるんだらうか？

婚約はつぎのようにして、きまるそうだ。縁談を申しこむ父親は、相手方の父を訪問し、もし承知いたしましたということになると、ともどもに酒を飲んで欲待される。入れかわりに、今度は申しこまれた方の父親が相手を訪問し、また一献くみかわす。これで婚約が成立する。もつとも、父親というものは正式の折衝者だ。それぞれの亭主が女房にお伺いを立てないで、独断専行すると思つたら大まちがいだらう。

婚約後、父母は息子にすすめて、嫁方の家をたずねて二、三日泊まつてらっしゃい、という。息子がやってくる。嫁方の両親は歓迎する。娘は、まだなんのことも知らない。夜になる。両親は自分の娘に、その息子といっしょに寝るようにすすめる。こうして、たいていは婚約後数日たらないうちに、息子と娘は事実上の夫婦関係を結んでしまうのである。ときには一ヵ月もかかるという迂闊な息子が、そのあいだのんきに嫁方に逗留するんだかどうか、私はついつい聞き落としてしまった。

ところで、こういう婚約時代の初夜に、両親のすすめをこぼんで、息子と同衾はお断わりとくる娘が、ときどきあるそうだ。親はあわてる。娘を説得これつとめ、ついに強圧的な態度でぞむ。それでもなお抵抗する娘がある。彼女の切りフダは、髪をみずからオカッパに断ち切って、「ラマ尼になりたいわ。」といつて両親を脅かすことである。それでもなお両親が破談にしてく

れないと、彼女のスピードのワンは、「自殺する。」といつて脅迫することだ。

「そんな実例を君は知つてゐるのかね？」

と私はきく。

「じつさい、そうして破談になつた話があつたのです。」

といつて、ダコプーは口をつぐんだ。

恋愛結婚のいとぐちは、あの霧深い森や牧場の交わりにはじまるという。そして、青年と乙女の愛がおたがいに真実だと感じたとき、彼ら、とくに青年は、父親を通じて相手の父親に申しこむ。こうして結ばれる夫婦もある。

なぜ縁談にかぎつて、こんなに女性の意志が無視されるのか。それはおそらく、氏族や家族という血縁集団の結束を乱さないために、いつしかできあがつた習わしなのではないか。だから恋愛結婚ですら、父親のルートを通じて事をまとめるのではないか。恋愛結婚は、それが氏族と家族を貫いている原理とはなほだしく抵触しないかぎりにおいて寛大に認められるようである。

こうして、縁結びのやり方の中に、彼らの生活の二つの原理——集団が個人を従えようとする原理と、個人が自分をたてとおそうとする原理——は相戦つていた。そして、集団の意志はいつも個人主義をおさえている。だが、その闘争が、そんなにかんたんにならぬ一方的な勝利におわつてゐるのでないことは、やがてあきらかになるだらう。

このほかに、もう一つ女連がはなだしく不平等に待遇されている分野があった。それは宗教に關連したことがらである。

カルチエの村にも、一年のうちに数回のお祭りがあるが、そのお祭りの儀式にたずさわる人びとは、男ばかりにかざられる。もちろんチベット人たちのあいだにはラマ尼もいる。この村にも、ラマ尼になるはずになっている娘が一人いた。彼女が生まれたとき、その叔父にあたる村のラマが運命占いをした。その結果、「この女の子は、将来もし結婚すると、すぐ死ぬであろう。」ということになった。こういうわけで、彼女は叔父のいるブレンボウ寺に住み、また実家にもよく行き来していた。叔父は彼女に乳の出る牛を二頭と羊五頭、その他、着物や食べ物やお金を支給している。女としてはひとかどの財産はある。だが、彼女はほかの娘たちとちがってザンギリ頭に断髪させられ、あたら青春の身そらをもてあましたふうで、よく私たちのところへ遊びにきた。私たち男性にからかってもらいたいそぶりがよくみえる。彼女は、お経などいっこう読めないそつだ。

少なくともこの村ではこんな程度である。坊さんの主力は圧倒的に男どもだ。そして、ラマのほかに、俗人の助手であるウムジュ、タワ、チョエバという三階級のものがある。これらが整然と協力して儀式をとりおこなうのである。女性はアウトであるのみならず、尼ニにはこんな組織的

階級はないんだという。

タルチョーの白旗には、版木でお経が印刷されている。その版木は村々にある。カルチエにもあった。だが、これを印刷する人間は女性であつては困る。タルチョーの先端には香り高いビヤクシンのシユクパが取りつけられている。その青葉が枯れたとき、新鮮な青葉と取りかえる人間——これも女性ニは嚴禁である。

まだある。すてにお話したように、畑に種を蒔くのは男でなければならない。なんとすれば、女では縁起が悪いからだ。

ペムバ老人の家のかたわらには、マヌーという薬草が数株栽培されていた。なんでもチベットから持ってきたんだそうで、これを植えている家は村中で二軒しかないんだとペムバ老は自慢である。ところが偶然の皮肉かもしれないが、この草は「花を摘むと枯れる」といわれ、また「女がさわると枯れる」そうである。なんとなく象徴的な、夢のような話だ。

血縁的な集団の原理は、このほかにもまだまだ、彼らの生活を律する重要な面を持っているだろう。「オジイサンの作った財産」が全部孫の代の長男にゆずられるんだという話を本当とすれば、それはまた直系と傍系を区別する裏つけかもしれない。それは総本家を中心とするヨコ糸を強める慣習だということになる。

こうしたタテ糸、ヨコ糸によって、氏族は固められている。農繁期ですら一週間の服喪を全員に要求するほどに強いのだ。そしてそれだからこそ、彼らの協働生活を能率的に秩序あらしめているのかも知れない。そしてまた、まさにそのため、まかり間違えば、氏族間の争いは、押さえ手のないためにマナンボットの村落戦争みたくになるのかもしれない。モンタギュー家とキャピュレット家の闘争になるのかもしれない。

シェークスピアの有名な劇に出てくるこの両家のはてしない争いは、しかしロミオとジュリエットとの悲恋によってめでたく終末をつける。チベット人にはロミオとジュリエットはいないのか。あるいはまた、社会の掟にたいして、最後まで抗争する、トリスタンとイズー姫の悲恋はないのであろうか。

いる。確かにいる。しかもたくさんいる。そして、それを支えているものこそ彼らの世界の他の生活原理、たくましい個人主義なのである。

そもそも氏族の中の各家々は、総本家のご機嫌とりなどはすこしもしていない。また家族のひとりひとは、家長の権威の前にはちびこまってははいない。彼らのあいだには家族主義はほとんどないのだ。

第一、家族には姓というものがなかった。あるのは一人一人の名前ばかりだった。彼らは自分の先祖のことは早く忘れてしまう。財産はみんな個人持ではないか。きつと金もうけも、ひとり

ひとりの甲斐性のいかんによるところが大きいのだろう。現に財産の分類からして、「私の作った財産」とか、「オトツツアンの作った財産」というふうには稼ぎ手の努力を大いに評価した分類である。女もまた稼ぐけれど、女の財産をただもらいでできない制度になっているので、そんなものを分類したって仕方がない。

おれのものはおれのもの、おまえのものはおまえのものだ。彼らは、私たち日本人よりはよほど自分の足で立っているように思う。そういえば心あたりのあることがあった。それは、彼らのあいだでは、貸し借りの觀念がよく発達していったことである。それからまた、こんな山奥だといふのに、お金で片づける物事が多いことだった。

財産を値ぶみして分ける慣習もその一つだろう。農具の貸し借りにも、同じ氏族の中でさえ借り賃を払う。作業広場だって、四、五日以上使わしてもらったら、貸し手の望む日に仕事を手伝いにいってやる。農繁期に人手がたらないと、同氏族内の家々の相互扶助もあるけれど、遠いところまで人手を求めてやとう。雇用労働制が発達しているのだ。これはもちろんこの村だけでなく、ひろくチベット人の世界にみられるのである。マナンボットの村人は、高い峠越えに一週間近くもかかるというチベット境の村から人をやとっていたくらいである。

だから村人は、借金をするにも自分の畑を抵当に入れる。三年間ひきつづいて借金が返せない、畑は自動的に質流れしてしまう。また貧乏者のAが金持のBから金を借りて、それが返済で

きないほどたまると、AはBの畑を借りて小作する。小作料に半分物納したうえに、自分の取り分の中からためたお金で、AはBに借金返しをしなけりゃならない。こうなると、Bは地主である。こういった地主の中には、もちろんラマ僧院もある。ラマ僧院は金を貸すこともある。

こういったチベット人たちと、私が初めのころに述べたヒンズー教徒たちとは、貸借觀念のうえでもひじょうなひらきがあるようだった。前年の秋の今西隊に参加した林一彦君は医師だったが、彼は一つのすばらしい発見を私に教えてくれた。

彼の隊の行く先々で、現地の住民が病気を診てもらうために押すな押すなやってきた。ここまではネパール中どこでも同じだった。ところがその患者さんの態度が、ヒンズー教の支配するあの亜熱帯と、チベット人の住む奥地とは、がらりと一変するようだ。ちょうど大ヒマラヤを横切るあたりで、忽然と一変するのである。ヒンズー教地帯では、村人たちは林君に無料で診察や施薬してもらうのを、あたりまえのこととしていた。それにひきかえチベット人の世界では、患者はお札の品をたずさえてたのみにくる。卵を二つとか、地酒を一本とか、あるいはジャガイモを一籠、といった調子である。彼らの生活水準は、ヒンズー教徒たちよりも低いくらいであろう。そして、もちろん林君は診察料を要求したことなんか一度もない。この事實は、ヒンズー教徒たちの世界にはただという觀念が普及しているのに反して、チベット人の世界ではただというバカげたことを認めないということを暗示しているように思う。

だから、カルチエの村に三人も借金奴隷がいたって、ふしぎではないのかもしれない。奴隷といたって鎖でつながれてなどはない。それでもあまり奴隷は逃げないものとみえる。目にもえない鎖があるとすれば、それは彼らの社会に普及している強い貸借觀念だろうと思う。貸したものは貸したものである。どうしても返してもらわねばならない。そういった、「ベニス商人」にちよいと似なくもないにおいが、どこかにただよっているのだった。

そもそも、自分の死後にボダイを弔ってもらおうとするやり方の中にも、この貸し借り勘定のにおいがなくてもない。たくさん金を払わなきゃ死後の世界で幸福になれまいとか、そうしなければこのつぎにはロクなところへ生まれまいとかいう不安があるのかもしれない。そしてたくさん金を払えるかどうかは、彼や彼女個人がためている財産の額に左右されることなのであった。

黒幕の村長

ところで話題をしばらく一転。いったいこの村の村長はだれだ。村長の地位はカンジエンと呼ばれている。カンジエンは、各氏族から一人ずつ選ぶんだそうだ。

ところが、私がおよびチュムベルだった。なんだ、カングリンからはひとりも代表選手が登場していないじゃないか。またしても概論と実態とはちがっている。

カンジエンは何をするのだと私は村人にきく。第一のお役目は、ネパール政府の税金を集めることだそうである。このために彼らは税金徴集簿を持っている。一年間の任期が満了すると、これをつぎのカンジエンに申し送る。第二の役目は、村内のもめごとをおさめることだ。「各氏族から一人ずつ出る」が、問題が氏族間にわたると、カンジエンたちが集まって処置をきめる。これでも落着しないと、この地方のスツバのところを持ちこむ。第三のお役目は、村内すべての公共事業を指導することである。道路の修繕だとか村のゴンパの修理などがそういった公共事業の一例である。そういったときに、来ない村人があるかどうかを監督し、もし来ない者があると罰金をとる。こうして集まった罰金などは、ためておいてゴンパに寄進する。

なるほどもっともなり、と私はお説を拝聴していた。しかしすこし腑に落ちない感じも残った。というのはある日のこと、このカンジエンのダッドルジュやダコプーがやってきた。そして、「今日はあいにくブレンボウ寺に増築の仕事を手伝いにゆかねばなりませんので、お約束だがゆっくりお話ししている暇がありません。」

という。

やむをえない、と私は思う。なんでも、スツバのお供をしてサマに行っている村のラマが、留守番役のタワ(ラマの助手格)のために家を建ててやるよう、カンジエンに指図をしていったのだそうだ。これじゃあ、村長はまるでカンジエンでなくラマではないか。そこで私はきく、カンジエンはそ

んなことぐらい指図だけしておけばいいんじゃないか、と。しかしそれではいけないんだそうだ。やっぱりカンジエンみずから、この土木工事の先頭で働かねばならないんだそうだ。なんだかどうも、村長たるもの、貫禄のない話だ。

それに第一、ダコプーの有能ぶりはよくわかるが、村長にしてはあまりに若すぎるようにも思う。私は年齢を調べてみる。チュムベルは四十六歳、ダッドルジュは三十六歳、そしてダコプーはわずかに二十八歳だ。

しかし私は、かなりながいあいだ彼らのいうところをいちおう信じていた。ところがある日、私はどうしても村人たちの経済生活をもっとはつきりつきとめたいと思って、税金台帳を調べようと考えた。私はダッドルジュをつかまえてたのんだ。

「先だつてのあなたのお話では、村長たるカンジエンは税金集めをやり、税金台帳をもっているということですね。すみませんが、その税金徴集簿というのほんなんものか、ちよつと見せてもらえませんか。あなたは村長だから、そ



25 二人の若い村長 (左ダ・ドルジュ、右ダコプー)

れくらいのことではできませんでしょうがね。」

彼はあわてて、弱ったという顔をしている。彼は見せたくないのだろう。私はうなずく。ところが、こんどは私の方が驚いてしまった。

「……じつは、私はそれを持っていないんです。それを持っているのはツォタです。ツォタがほんとの村長で、カンジェンはただその下っ走りをするだけなんです。」

彼がすべてを白状したので、私は今まで一杯くわされていたことがわかった。

事実上の村長格は、ツォタという地位だった。税金も彼らが集める。もし何かもめごとが起れば、それもツォタが命じておさめるのである。処罰の程度も彼が示すのである。それから、ツォタについて有力な地位はシャラと呼ばれる。シャラは、罪人を笞で打ったり、そのほかの方法で処罰を実施する役目である。この二種の地位は、スッバが任命するという形式をとっていて、不定期任期だそう。ツォタは、税金徴集の任をよくつとめないと、三年で交代させられる。カンジェンはツォタの命を受けて走りまわるにすぎない。高等小使である。そしてカンジェンの地位のみは、古いしきたりによって、毎年一回選挙されるのだ。

ツォタをやっているのは、カングリンのキムジュン、プチマ（五十五歳）、プランガルのツォタ、シン（四十二歳）、シンムシェのバルバ（七十六歳）。シャラをやっているのは、カングリンのペムバ（七十歳）、プランガルのバルム（二十四歳）、そして、シンムシェのカルマ、トプギヤル

（四十六歳）だった。ついに黒幕村長どもは姿をあらわした。彼らは外来者のわれわれにたいしては、村方三役のもつとも下っ端であるカンジェンを名目的村長に押し立て、この看板の背後に奥深く姿をかくしていた。私たちに会っても、自分たちの役割は何くわぬ顔をしてかくしていたのである。闇にかくれていたバルバ、ペムバの二大ボスの名前も、こうしてついに明かすみに出た。

これら村方三役の合計九人は、いずれも家長をしている男たちだった。私はこれらの九人を、役目別、年齢別、かつ氏族別に図にしてみた。図がそれである。

まずこの図の中には、三つの氏族がおたがいその勢力のバランスをひとしくするように代表者をえらび出している苦心がうかがわれる。カングリンはカンジェンを送り出していないかわりに、最年長級のところにシャラおよびツォタを一名ずつ送りこんでいる。プランガルは、ツォタおよびシャラに最若年のものを送りこんで辛抱しているかわりに、カンジェンに二人送りこんでいる。したがってこの村方三役は、まるで氏族代表の合議制村会である。

つぎに気づくのは、その年齢の組合わせである。平均年齢は、ツォタ↓シャラ↓カンジェンの順に若くなっている。だが、カンジェンの役つきが三人とも比較的に近い年齢にそろっているのに、ツォタとシャラとは、おのおのの役つきメンバー三人の年齢がひじょうに開いている。シャラのうち一番若いバルム（二十一歳）のごときは、カンジェンのだれよりも若い二十四歳である。

私はそれをこう解釈した。年齢が近くて有能さが匹敵するような連中は、おたがいに両雄並び

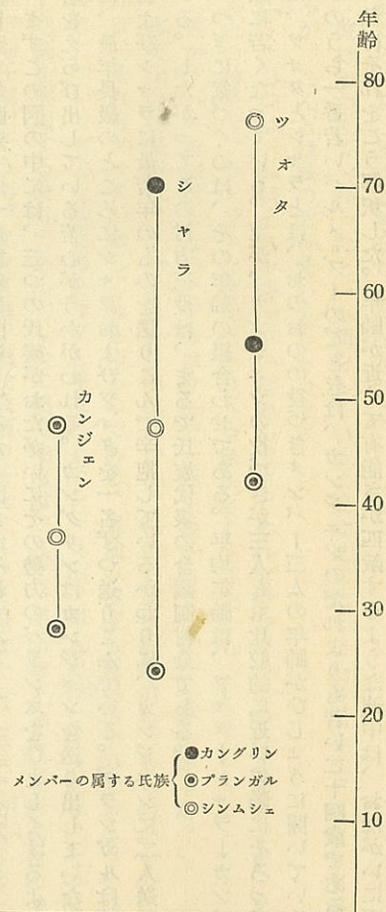


図2 年齢と村方三役の関係

立たない結果になりやすい。その摩擦を避けるために、バルバおよびベムバという両雄は、おたがいにお役目をわけて、それぞれツオタおよびシヤラの筆頭格のリーダーになっっているのだ。ひとつの役目の中でも、年齢の相当へだたつた連中が、いわばタテに組合わせを作るのは、これによって一方では摩擦を避けつつ、他方ではリーダーと追隨者ツライシヤの協力体制を作るためである。また、こういうタテのつながりじたいが、つぎつぎに育ってくる有能なリーダー候補を村の若者の

中から拾いあげて訓練してゆく役割をはたしているのではないか。彼らは「お家柄」の世界に住んでいるとはとても思えない。村方三役の地位も、家長の地位と同様、有能者をふるいにかける装置になっているらしい。

ラマ家族の秘密

ここにひとつやっかいな問題がもちあがっていた。この村にはお寺が四つある。シナムシェの氏寺になっているルングサング寺と、カングリンおよびブランガルの氏寺になっているブラジヤ一寺は、それぞれの氏族の住まいに近く、しかし、それとは離れて、畑の中や岩の上に建てていた。ルングサング寺は、もっとも古かった。それは昔々、村にお寺もなかったころ、「それでは人柄も悪くなる」というので、シナムシェの村人たちがこころざして建てたものである。

ルングサング寺について、三つの氏族の人たちが協力して作ったのがチュンガブ一寺だった。それは村をはるかに見おろす断崖の上に、神秘的なほの暗い森を背にして建てていた。それからさらに後世になって、チベット領からひとりよりのラマがやってきて、チュンガブ一寺の西方の崖っぷちにブレンボウ寺を建立したのである。

はじめルングサング寺のできたとき、初代の司祭者はシナムシェ氏族の出身者だった。それ以来このラマの子孫はひろがり、その一人は、付近で有名なゴンパテンシンを建てた。そしてそ

の子孫は今では同名の村落を作っている。ゴンパティンシンは寺の名であるとともに村の名でもあった。今でもシムシエの人びとは、氏族だけのお祭りのときにはゴンパティンシンのラマを招くのである。そしてこの二つの氏族は同じ血縁関係にある、というので、おたがいの間で嫁のやりとりはけっしてしないのだった。他方、シムシエのラマの直系の子孫は、その後断絶してしまつた。そこで村人は、はるかな東チベットのカム地方から、ひとりのラマを迎えた。そしてこのラマの子孫が、いまこの村の司祭者となつていたのである。彼はルンダサングだけでなく、村内の他の三寺の司祭者をも兼ねている。彼の家族たちは、断崖の上方に別個の僧院集落を作り、その連中のことを村人はラプランと呼んでいた。私が訪ねたとき、そこには別天地のようにソバ畑や麦畑が森に囲まれた斜面にひろがっていて、彼らの家族は畑で働いていた。「ブレンボウのラマ」と、村人はその司祭者を呼んでいた。

ところが、私はまもなくペムバの息子のンガワギャルツェンから教えられた。それはこのラマの長男はとんでもない悪党で、ひじょうに嫉妬深い男だというのである。

「あの男はじつに悪いやつで、いたるところでもめぐとを起こします。彼は私たちの家族に嫉妬を抱いていて、何かという食物や酒やお金をゆすりに来るといふ始末です。それに酒クセが悪く、いつか酒を飲んで私の太ももを短刀で刺したこともあるんです。あいつはラマになろうと思つて、今ではスツバをしているラマの召使兼秘書のようなことをしています。しかしほんとうは

この村のラマじゃないんです。以前この村のお寺には、ほんとうのラマがいたんですが、彼と大喧嘩して追いだされてしまつたんです。……追い出されてどこへ行つてゐるかって？ ええ、今ではブラガの僧院にいます。とにかくあの悪党は、スツバのラマと結託して、私たちの家から金をしぼり取っているんです。」

「それじゃ、今その男はどこにいますか？」

「彼はブレンボウ寺の近くにいますよ。しかし喧嘩以来、両親なんかおっほり出して別居していません。今はちょうど旅行して不在ですがね。スツバのラマのお供をしてサマに行つているので、まもなくいつしよにもどつてくるでしょう。なにしろスツバの威光を笠に着て威張るので、村人たちは皆恐れていますよ。」

そのラマのスツバは、シアルコーラの中流にある、チョガンという村に本拠を持っていた。しかし彼は、シアルコーラの全流域ばかりでなく、峽谷部から上流のブリガンダキ全流域にも君臨する郡長である。したがって、マナスル峰東麓のサマ村も、彼の行政権の範囲内にはいつている。春になると彼ははるばるサマ村にでかけ、その付近の谷筋の税金集めの仕事に携わりつつ長逗留をしていたのである。

まもなく妙な噂がわれわれの耳にはいつてきた。かの意地悪ラマは、日本の登山隊にひじょうな悪意を持っているということだ。どうしてそんなことになつたのか、私たちにさっぱりわか

らないが、やれやれ小面倒なことになってきたと思う。こういった人物がスッパの腰巾着こしきんぎょくになっているとすると、われわれのこともどんなにひねくれてスッパに報告されるかわからない。そうでなくても、私はスッパの帰り道をとらえて、このラマ郡長に挨拶あいさつだけはしておこうと思つた。

まもなくスッパの一行がカルチュエのルングサング寺に泊まったという情報はいつた。彼らは一泊するだけで、明日はもうチョガンへ出発するそうだ。そういった報告を伝えたS君にありがとうといつて、私は今夜すぐルングサング寺にスッパを訪ねようと提案する。しかしS君は、霧のかかった泥んこの夜道を寺まで出かけるのがいやだったらしい。そこで、なあに明日の朝会いにゆけば十分だ。一行はゆっくり出発するんだから、と出まかせのことをいつてしまった。私は今でも、ついうっかりそれを信用したことを後悔している。

霧の朝が明けた。例によって朝寝坊したS君をせき立てて、早くスッパに訪問の意思を伝えると私はいいつけた。ところがまもなくS君が、申しわけなさそうにやってきました。

「すみません。スッパリラマは、けさ早くチョガンへ発たつてしまつたそうです。」
私は憤慨ふんがいのあまりどなりつける。

「なんだって。よし、君はその責任をとつて、今から後を追っかけて、かわりに挨拶してこい。追いつけなければ、追いつけるところまで行くんだ。チョガンまで行けばかならず追いつける。」
そうどなつてみたものの、はるかかなたのチョガンまでこの弱卒を追出すのも気の毒に思つ

て、そのままにしてしまつた。

しかし憤慨する私自身だつて、往復三日ほど時間を犠牲にしてチョガンまで挨拶まわりに出かけるほどの気はなかつたのである。

私たちがカルチュエを去つて帰途についたとき、途中でこのスッパの伝令をしている男に出会つたことがある。しばらく雑談のうちに、私はスッパが私たちに気を悪くしているということを知つた。それみたことか、あたりまえだ、と私がいうとS君は正直に頭をかいた。私とS君とは、非礼を重々お詫わびするむねの手紙を書いて、伝令君に託したものである。

さて話はずもにもどる。S君をどなりつけた翌日のことだつた。私のところには、重要な情報ほうほうが舞いこんできた。それはスッパの一行がルングサング寺に一泊したときの出来事についてであつた。その晩のこと、例の意地悪ラマ氏は、スッパに侍はべつて村人にいばりちらしていた。彼はその席へ、われわれがサマから雇やとつてこの村まで連れてきていたポーターを呼びつけたのである。

そして意地悪ラマ氏は、村人やポーターに、こんなふうなやりとりを演じた。

「おまえたちは怪あやしからん。なぜあんな連中（つまり中尾君と私の一行）に宿舎を貸したのだ？」

「あの人たちは中央政府に關係のある人びとなので、断わるわけにゆきませんでした。」

「彼らのような外来者に薪まきを売つてはいかんぞ。」

そのとき、スッパのラマはそのことばをさえぎつて、この村の連中が今までどおり私たちに薪

や食糧を売ってもしつつかえはないと許可を与えたそうである。意地悪ラマ氏は、さらに鉾先ほこさきをかえて村人をいじめた。

「おまえたちはこの村の家族の名前をあの連中に告げたそうだが、もつてのほかのふるまいだ。」
「いえ、そんなことはけつして告げておりません。」

ここで彼は私たちのポーターに向かい、

「わしはかねてサマでおまえたちに申しつけたはずだ。あの連中の荷物をこの村まで運んでくる途中で、荷物を置き去りにしろと申したではないか。なぜそのとおりにしなかったか？」

「そんなことをおっしゃつても、私たちはポーターをしなければ食ってゆかれない人間なので。途中で置き去りになんかすれば、お金がもらえません。」

私は驚いた。聞きしにまさる意地悪な大将だ。それに、私が系図買いをしてのことまで、ある程度嗅ぎつけているとは。幸いにしてスッバのS L氏が公明な精神を持った人らしいのでよかつたものの、情報戦ではどうやら私の方が負けそうである。私はきく。

「ところで意地悪ラマはブレンボウ寺にもどつたかね。」

「いや、スッバのお供をしてチョガンへ行ったそうです。」

とS君は答える。S君もいささか人がよい。ほんとうにそう信じこんでいたのである。私は、どうだかわかつたものじゃない、といくらか疑い深い。

はたせるかな、だ。さらに何日かたつてから、S君がさもびっくりして、つぎのような情報を伝えたとき、もう私はかくべつ驚く必要はなかつた。

ルングサンク寺の一夜が明けてから、彼はカルチュにとどまっていたのだつた。しかし私たちに会うのを恐れたのか、彼はけつして姿を現わさなかつた。そして村人たちにいつけて、彼がチョガンに行つてしまつたといふらさせていたのだつた。そのうえ、彼は私たちのまわりにスパイを派遣していた。それは、あのザンギリ頭の少女、占いの結果ラマ尼にならなければならなくなつたパッサンドルマである。

こちらもさる者。パッサンドルマがラブランのラマ家族へ養女にとられていたということを知つてしまつた。だから彼女が遊びにきているときには、村人との面接調査も注意する。

「シーッ、声が高いぞ。彼女が来てるじゃないか。」

といった調子である。

ところであつかましいのは意地悪ラマである。村人には「薪を売つてはいかん。」などと説教をしておきながら、パッサンドルマを使って私たちにたいして酒や野菜や山羊やぎを売りつけにきて、たんまり金もうけもしていたのである。彼はよもやそんなことを私たちが知っていると思わなかつたであろう。こんどは情報戦で私の方がだいぶ勢いを盛りかえした形だ。それというのも、私も幾人かの村人とポーターを味方に持っていたからだ。

だが私は人類学者だ。調べようとする民族の中にはいって、彼らの党派争いに巻き込まれるなどということは、けっしてほめたことではない。「よい」とか「悪い」などということは、こちらの行動の便宜のうえからだけいふべきことである。「意地悪ラマ」などといつても、私自身がそういう感情的偏見を持って観察するようでは落第だ、と思う。なにしろ、もっとこのラマ家族のことを知りたいと思う。

ところが、このラマ家族の話となると、村人たちはほとんど口をつぐんでしまつて、何ひとつ話してくれないのだった。私はようやくやくにして、彼らの人員と男女別を知つた。しかし、彼らのひとりひとりの年齢となると、まったく調べようがなかつたのである。

やがて私は、ペムバ老人の姉妹のひとりがラブランへ嫁入りしてゐることを知つた。彼女はまだ生きてゐるそうだ。今のラマの母らしい。もう相当の婆さんにちがいない。だが、彼女がいくつの年齢かは、どうしても言ってくれない。同じような調子で、ペムバ老の末の妹も、やはりラブランに嫁入りしてゐることがわかつた。しかし彼女の年齢もまったく知ることができない。ただ彼女は、今のラマの妻だということがわかつた。いいかえると、意地悪ラマはこのラマ夫妻の長男であつて、ペムバ老の孫にあたるのである。

さらにこういうことがわかつてきた。ペムバ老の次女もまたラブランに嫁入りしたのである。ところが、彼女はいつたいただれの妻になつたのだろう。ここで村人の語る話は、支離滅裂^{しりめつれつ}ぶりを

示してくる。

「彼女はラマの弟と結婚した。」

「そのラマの弟はいまブレンボウ寺に住んでゐるのか？」

「いや、彼はブラガにいつてゐる。」

「それじゃあ、意地悪ラマと喧嘩して追い出された人かね？」

「そうだ。」

この追い出された男こそ、じつは村のお寺の正統的な司祭者だという人である。

ところが他の村人は、彼女が意地悪ラマの妻であつて、現にいっしょに住んでゐる、ともいうのであつた。この意地悪ラマと、追い出されたラマとは、だからおたがいに叔父^{おじ}と甥^{おひい}の間柄になるわけだ。いったい彼女は、どちらの妻なんだ。私の頭は混乱してしまふ。

その上に帰国してからくわしくノートをひっくりかえしてみると、ダコプーのような信頼すべき男が、彼女の夫を、あるときには叔父の方だといひ、あるときには甥の方だといつてゐることがわかつてきた。何がなんだか分からなくなつてしまふ。

こんなふうなペムバ家からラブランのラマ家族へは、過去二世代のあいだに三人もの女性が嫁入りしたのだった。ところがあべこべに、ラブランからもまた、過去二世代のあいだに三人もの女性が、ペムバ家およびその弟のところへ嫁入りしてゐる。すなわち、ペムバの死んだ妻はラブ

ランの女だった。ペムバの弟のツイリンツァングドイも、ラブランから嫁をもらって分家した。それから最後に、ペムバの長男のシガワリギヤルツェンも、ラブランから嫁をもらったのである。幸いにして、ラブランから嫁入りして出た女性については、年齢はことごとく確めることができたのである。

ある日、私はラブランの家族たちのいる方向へ、ブラリと探検に出かけてみることにした。私がありがたいチュンガブー寺やブレンボウ寺へ参詣にゆくというので、シエルバのHは喜んでお供をしてきた。けわしい九十九折りの道をのぼりつめると、崖ぞいにこのふたつのお寺があった。ブレンボウ寺のかたわらにはラマ夫婦の貧弱なすまいがあった。

ラマ夫婦のところには、孫のような子供たちもいた。妻の案内でチュンガブー寺を拝観し、参詣者名簿に署名して何ルビーかのお賽銭をラマにわたすと、私たちはなおも上手の方をさまよった。あいかわらず深い霧の閉ざした崖っぷちで、ふたりはしずかに寝ころんで草などをむしっていた。そこへ純情そうな青年がひとり現われた。私は雑談をしながらきく。

「君はいくつなの。」

「二十三です。」

「姉さんはいるの？」

「上の姉さんは嫁にいつてしまった。もうひとりの姉さんは二十六だよ。」



26 世襲ラマの一家

なんとなく寂しそうなその美青年の顔である。霧におおわれた空が、時々ポーッと明かるくなくなったり、また灰色になったりする。「調査」などというばかげた意識はどこかへ置き忘れたひとと

きだった。だがラブランのラマ家族十二人のうち、これが私のノートに書きとめられた、たった二人の年齢であった。

日本に帰ってから、私はこのラマ家族の系図を、なんとかまとめようと骨を折った。その結果、驚くべし、つぎのようなことがあきらかになった。

ラブランのラマは、自分のオバサンをお嫁さんにしていてではないか。つまり、自分のお母さんの妹をお嫁さんにしていて。さらに驚き入ったことは、ラマの弟とラマの長男、つまり叔父と甥とは、つい最近まで一人の妻を共有していたのだった。しかし、正統的な村の司祭者だったというその叔父は、意地悪者だというその甥と大喧嘩をおっはじめ、ついにブラガへ追い出されてしまったのである。そこで甥は現在その妻―ペムバ老の娘―を独占して、父母た

ちとも別居していたのだった。あの憂愁を湛えた青年は、その父母の子であり、意地悪な兄さんを持った弟であった。だが、ことによると、青年の実の父は、ブラガにのがれた叔父だったかもしれない。

すべての情報が、こういった関係を証拠だてる方に暗示を与えていた。それでもなお私は半信半疑であった。いったい、叔父と甥とが妻を共有するなどということがありうるのだろうか、と。

嫉妬の悪霊が人を殺す

こんなふうには、きつてもきれない姻戚関係にあるペムバ家とラマ家族とのあいだには、犬猿もただならぬ険悪な人間関係が渦巻いていた。それどころではない。妻を共有した叔父と甥のあいだでさえ、ものすごい大喧嘩がおっぴまると。そして、司祭職が代々伝えられてゆくはずの父子のあいだでさえ、気に入らなくなれば「オヤジなんかクソくらえ。」といった調子らしい。

これはまったく例外的な人物のばあいだからかもしれない。しかし、こんなこともあった。村人たちがチラホラもらすところでは、金持のペムバ老は、そのせい、かなりの村人たちから妬まれていたということだ。

私は面接調査のために、よくダドルジェを私たちの部屋に招いたことがある。私たちの「部屋」はペムバ家の一角である。お話がすむと、ペムバ老はよくダドルジェをつかまえて、「来い、

来い。」と自分の部屋へ勧誘した。まあ一杯飲んで行け、御馳走でも食って行け、というわけである。ダドルジェは、いやいや、わしは帰るといふ。その袖口をむりやりにひっぱってひきとめるペムバ老。そして最後に、「仕方がない。」といった顔をして、そのじつ内心ではまんざら悪くないと思つて御馳走にあずかるダドルジェ。そんな光景がちよといたび重なつた。

私はそういう「美しい」ところを見ながら思う。ダドルジェはペムバの娘婿である。だから婿をかわいがるのかもしれない。けれども、なんだか、かえって逆に、この二人はおたがいにねたみ合っているのかもしれない、とも感ずる。

同じような情景をよく観察していたS君が、こんなことをいひだした。

「ペムバは、ダドルジェが自分に嫉妬を感じているのをよく知っているので、彼をひがませないために、ああやって無理にでも御馳走をしているのですよ。」

「ふむ、そうかもしれない。」
と、私はうなずいた。

それからまた、ある日のこと、私がこの村の死亡者を一覧表に作ってみると、子供、とくに幼児の死亡率がかなり高いことに気がついた。そこへダゴプーがやってくる。私は彼にきいてみる。

「子供はよく死ぬようだが、どんな原因で死ぬのかね？」

「そうですね。よく二階から転げ落ちて死ぬことがあります。こういうときや、その他のとき

に、よく嫉妬で殺されます。」

「なんだって！ 嫉妬で？」

話はどうだった。たとい赤ん坊が偶然ころげ落ちて死んだとしても、村人たちは、そのほんとうの原因は、だれかの嫉妬のために呪い殺されたのかもしれないと思うのである。それをどうして調べるかという、ラマにきいたり、占いの本で調べて確めるのである。

いったいカルチェばかりでなく、私はすでに三、四カ所で、チベット人たちの妙な風習を知っていた。それはたいい村外の、人通りも見あたらないような寂しい路上に、二、三個の石が積まれていることがある。この石コロは三個積むのが建前だそうで、かならず折り取られたばかりの一枝の木の葉の上に積むのである。

カルチェに村入りする日にも、私は村からかなりへだたった三叉路の上にそれを見かけた。これには念入りに、調理した豆までがふりかけてあった。こういったものはどの地方でも、悪霊が村にはいらぬようにするために、だれか村人が作るのである。地方によって呼び方がいろいろあるが、ラムチェバとかラムチエケといふことが多い。シエルパによると、ラムチエといふのはチベット語で「地すべり」のことで、地すべりで道がこわれている状態をさすのである。

「なあるほどね。道をこわして悪霊を食いとめようというわけか。」

と考えると、彼らのいじらしい願いに、吹きだしたくもなり涙ぐましくもなる。おそらく、こ

れは地すべりの光景をまねた呪術である。地すべりの起こったような所では、よく立木がねじ倒されて、青い枝葉の上に土石がかぶさっているではないか。

こういったラムチエバは、おもに病人の病氣などをなおすばあいに多いらしい。また村人のだれかが死んだとき、死体を村外へ始末しにいつて、その帰りみちに作ることもある。死霊が後を追っかけてきて村内にはいると困るからである。

私は村人にきく。そういった悪霊どもには幾種類あるのだ、と。悪霊には四種類あるということだ。シンドゥレ、ソンドゥレ、ノエバ、およびフランドゥレである。シンドゥレは死霊、つまり死人の悪霊である。ソンドゥレは生霊、つまり生きている人間の嫉妬である。それから、ノエバが人間に襲いかかると、いろいろの病氣をひき起こす。フランドゥレというやつは、道路上をうろついている悪霊なのである。

災難がこの四種類の悪霊のどれであるかは、ラマが占い本で占ってくれる。もし悪霊がソンドゥレであるということになると、嫉妬を持っていると見られた人間に食物などを贈ってやりなさい、と、ラマが勧めてくれることもある。彼はありがたくその勧告を受け入れたうえ、なおラムチエバをも作るのである。彼は村はずれの路上にでかけて木の生枝の上に積石を作ったうえに、そのかたわらで火を焚いて食物を調理する。それはあたかも生きた人間がそのまま食べられるように、トウガラシの粉まで入れて料理するのである。できあがるとそれをラムチエバにぶっかけ

て、彼は叫ぶ。

「嫉妬よ、これをやるから二度と来るんじゃないぞ！ それでもまだ来るようなら、ラマに言いつけてお前を殺してやる！」

叫び声は空しく虚空に、霧の中に消えてゆくことだろう。そして、ぶつぶつぶやくように、こまを運びかえしてくるかもしれない。それでも彼はいちおう満足して家に帰るのである。ときには食べものでなく着物を置いて、悪霊の買取につとめることもあるそうだ。

悪霊の話が出たついでに、もう四種類の悪霊を追加しておこう。いったい彼らの運命占いには二種ある。人間の生存中の運命を占うもの（ソンドイコルワ）と、死後の運命を占うもの（シツイコルワ）とである。人が死ぬと、占い本でラマが占って、葬り方も決定する。というのは、四種類も葬り方があるのだから。

ひとつは水葬である。つまり死体を川の中にドンブリコとやるのである。もうひとつは土葬である。第三には火葬がある。そして第四には、鳥葬というのがある。鳥葬は、死体の肉を刻みとって鳥にやるのである。私はこの村で、この四種のどれも、じっさいに見ることはできなかった。しかしボカラの町を流れるセティコルワの川上で、川の中州に死体がひっかかっているのを見たことがあった。気味の悪いハゲワシが、そこにたくさん群がっていた。

それから鳥葬をムクチナートで見たことがある。ちょうど朝のことだった。とつぜん鉦や太鼓

の音に驚いたわれわれが宿舎からとび出してみると、お葬式の行列が通っているところである。付近の村で死んだという少女を、まるでワラ人形のように布ですっぽりグルグル巻きにし、それをまっすぐに立て、木の棒を通して村人たちが担いでいる。それにつづいて、たくさんの村人が楽器を鳴らしながら行列を作って広い谷間へとおりてゆく。ここで死体はおろされ、ただ二人の男を残して村人はみんな帰ってしまった。

私はこの珍らしい光景をもっと近づいて観察したかった。写真にも撮りたかった。けれど人が死んでいるというのにおもしろそうに近づいて見物したりするのは、いかにも心ない話だ。そのうえに私は外人だから、どういう誤解を招かないでもない。「科学の鬼」になるのも、ほどほどにしようと思う。それで双眼鏡をとり出し、遠くからじっと見つめていた。男たちは死体を刻んでいるようだった。そして空には、トンビのような黒い鳥が、早くも餌ものを求めつつ舞いはじめていた。

どんなばあいにどういふ葬り方をえらぶのか、私にはまったくわからない。だがこういった葬り方の話をきいて、私は思った。いずれにしても彼らは死体というものを大事にしないのだ、と。じっさい、これは漢民族などとはひじょうにちがうところである。

清朝の時代に、こんな実話があった。とある漢人の官吏が、息子をつれてチベットに赴任した。さて、帰りみちで父が病死する。そこで息子は大金を払って、父のために棺を手に入れる。

それから、嶮峻けんじゆんそのものの東チベットチベットの山道を、この息子は父の遺体を運ばせて郷里に帰ろうとするのである。こんな重い荷物の運搬には、とうぜん駕籠かごかきに割増しの酒代さけだいをばりこまなければならぬ。そのうえに彼らの郷里は、なんと浙江省チンキョウシヨウだ！ やがて、あまりにひどい山道のため、とうとうそのままでは死体が運搬できなくなってしまう。万策はつきた。最大の親不孝に気も狂う思いで、その息子は、やむなく父の死体を運びよいうに切斷したのだった。そうまでしても、息子にとっては、親の死体を郷里の家の墓地に葬ることが至上命令だったのである。

だが、チベット人たちがすべての場合に死体をお粗末にすると思つたら、それはいささか早合はやが点てんである。私はまもなく、たいへんな例外にぶつかる。

それにしても、死体を粗末にする彼らは、逆に死体の靈魂たましいのゆくえについては、どうやら非常に関心を抱いているらしい。この村では、人が死ぬとラマは彼の靈の死後の運命を占うのである。その結果、もし彼が神になるなら、彼の名を刻んだ像まがた(どんなものか私は見ていない。)を作つて、自宅かお寺に保存するのだという。けれど、もし彼が悪靈にとりつかれているといふことになると、彼の靈を悪靈から解き放してやらなければならぬ。

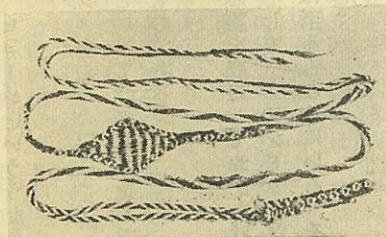
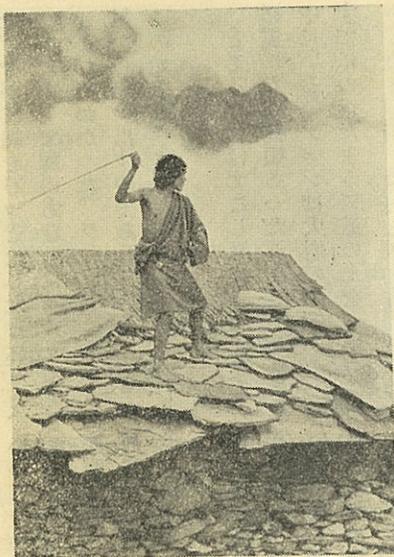
そのやり方がまたふるつていた。すなわち、まずこの死者の体の代用品として、ラマは、ミクピーテンというものを作るのである。これは種蒔き用の小型の竹カゴに、米、コムギ、オオムギなどの穀物を入れ、それに手足をつけ、彼の着ていた着物で包んだものである。このカゴの中へ

あるお経の文句を書いて入れる。それからお祈りをし、おわつてからそのお経の紙を焼き、その灰をツアンパで練つて秘密のところところに置くのだそうだ。そして着物はラマが持つてゆき、残りのミクピーテンは悪靈のいる場所に置く。かりに、悪靈がフランドゥレフランドゥレなら、道の上に置くのである。私はこう解釈する。死者の靈は、このばあいおそらく、お経を書いた紙の方へ吸いとられ、ついでエッセンスとなつた灰の中にはいり、こうして取り憑いていた悪靈にアバヨとお別かれを告げるのだらう。

ミクピーテンは死者のニセ物であらうが、なぜその中に穀物を入れるのだらう。たぶん、食糧品でもつて、あさましい悪靈どもをおびきよせようともいふのか。そうだとすると、これはひどいでしょうちというものだ。悪靈たるもの、まんまと一杯くわされるわけである。

ところがまもなく私は発見した。これにシンニユウをかけただましようちがあつたのである。そこはこの村の春祭りの話である。ナラツァムと呼ばれるこのお祭りは、なんでも、古い古い昔から行われていたものだそうだ。私はこのお祭りを、おそらく仏教がチベットにひろがる以前からのしきたりかとも想像している。お祭りの場所だつて、他のお祭りのようにチュンガブー寺あたりでやらない。それは、三つの氏族集落にあるちよつとした広場で、毎年まわし持ちで開かれるのである。

四日間にわたる、このナラツァム祭の意図は、村を清めるところにあるのだという。ラマも



28 (上) 投石縄で悪霊を投げとばす

29 (下) その投石縄 (民族学博物館所蔵)

「こうやる
のですよ。」
と聞いて、
村人は、屋
根にのぼっ
た。そして
石をはさん
で水車のよ
うにブンブ
ン投石縄を
ふりまわし

ものだ。そこで悪霊のカンヅメになったトルマを、ラマが投石縄で投げすてるのである。
いったい投石縄とはどんなものだろう。私は村人に持ってきてもらった。それは羊毛やヤクの
毛で編んだ二メートルばかりの縄だった。その一端は、指をひっかけるように輪になっている。
ここに人さしユビを入れ、同時にその手で縄のもうひとつの端を握るのである。こうして、二つ
折りになった縄の曲がり目は、石コロのせやすいように帯状にふくらんでいる。



27 人間の大腿骨で作った笛 (民族学博物館所蔵)

やってくる。それから村の男たち十四人が、ダンスを踊るそうだ。太鼓を鳴ら
し、鐘を打ち、笛を吹き、そしておそらく、グロテスクないろいろの動物の仮面
をかぶって。村人はみんな見物に集まってくる。
さてお祭りの重要行事は、まず最初にラマが八百よろずの善霊悪霊を招集する
ことである。ところが、この招集のために使う道具ときたら、うす気味の悪いこ
とに、人間の大腿骨で作った笛なのである。ちよっと吹いてみてくれと私は村人
にたのんでみた。すると、それは、まるで狼の遠吠えのように気味の悪い音をた
てて鳴りわたった。「もういい。」と私は手をふる。こいつは、悪霊どもを誘い寄
せるにはもってこいのしるものだ。

さてラマはあらかじめトルマというものをいくつか用意しておく。それはツァ
ンバを練った円錐形のものである。ラマ教の儀礼にはつきものの品らしい。その
トルマは、招待に応じて集まってきた善霊や悪霊どもの座席なのであった。ツァ
ンバつまり麦コガンは、チベット人の主食ではないか。だから、ここでもまた彼
らは、食べもので霊をよびよせようという魂胆なのだろう。

こうしておいて、楽しくおかしなお祭りの終わりに、ラマは秘密の呪文を唱える。すると、
アラアラふしぎや、悪霊どもはトルマの中から出られなくなってしまふ。こうなればもうしめた

た。やがて繩をバツと放したと思うと、いっしゅん、ヒューンといううなりとともに、石は猛烈なスピードで霧のあなたにスツとんでしまった。

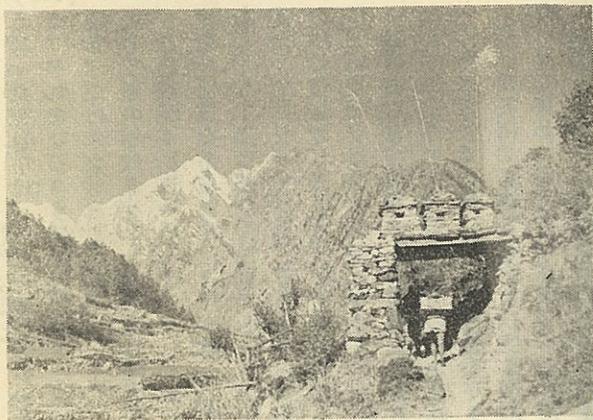
これでわかった。ラマは石のかわりに悪霊のカンヅメをのせ、「おととい来い」とばかりに村から追い出すのである。いくら相手が悪霊だからといって、ダンスをして喜ばしておいてからこの始末だ。まったく、ひどいだましようちもあつたものである。

ところで話はすこし脱線した。死人の魂を悩ます悪霊を登録しておかなければならない。その悪霊にも四種類あつた。ドューとツェンとルーと、そして、フランドゥレだった。ドューは森の中にいる。ツェンは大岩の中にひそんでいる。ルーは至るところにいる。そしてフランドゥレはすでにのべたように道の上をうろついているのだった。

赤い岩

ところで私は気がついた。この悪霊どものうち、ドューとツェンには、どこかですてにおなじみになっていたような気がする。私はノートを繰ってみた。

それはマナンボットの盆地をすぎて、マルシャンディー上流の谷々を旅していたころのことだ。この辺の村々はみな石門を村はずれに持っていた。ところが村々には何も囲いなどはないの



20 村の入口に立つ三位一体神の三色旗 (依田孝真氏撮影)

で、これは城門のようなものとはわけがらがう。道をまたいで立っているだけである。まあ一種の鳥居のようなものと思えばよい。ふしぎなことに、それらの村々の石門は、みんな川下側の入口にだけ建っていた。

二つほどそういう石門のない村もあつた。そのかわり、そういう村には、やはり下流側に竹を割いて作ったシメナワが張りわたしてあるのだった。そのシメナワには、男根の形をまねた木の棒が、ブラブラとたくさんぶらさがっている。まるでそれは悪霊が村に侵入するのを食いとめるかのように。

石門の上には三つの石塔が並んでいて、それらは色わけしてある。まん中のは白で、左右は赤と黒である。あるいは石塔に色がぬってないかわりに、塔の先端には短い旗ノボリが一本ずつ立っている。やはりまん中は白旗で、左右が赤旗と黒旗である。こ

フジ
ドユー

ういった三色塔は、三位一体神のシンボルであるという。「リスマムゴンボ」と、彼らは呼んでゐた。それはひじょうに強力な神で、いかなる悪霊をも村内へ入れないように撃退するのだそうである。白はクンジョ「スンボ」という神のシンボルであり、赤はツェンという神のシンボルである。そして黒のみはドユーという森の悪魔のシンボルだった。

ところがカルチエ村人は、このリスマムゴンボについて、すこしちがった説明を与えた。白は沈黙の性質をあらわし、それは観世首である。赤は笑いの性質をあらわし、それは文珠である。そして黒は怒りの性質であって、それは金剛手なんだそうだ。すっかり仏教的な色あいに変わってしまった。そしてツェンとドユーとは格下げになって、それは始末におえない悪霊の中に登録されていた。そうすると、カルチエの村人たちにとって、そういった不浄な悪霊どもは、いっこう崇敬の対象になっていないのだろうか。

私はある日、彼らの三つの氏族の神というものを知りたいと思う。そこでダコプーに来てもらった。あたりにはS君とH君のほかだれもいない。それでも彼は、私の質問に答えようとはしないでためらっている。私は辛抱強くだまって、ときどきうながすばかりである。

ついに彼は、あたりをもう一度うかがうような様子をし、そして一段と声をひそめて話しだした。話し終わって、彼は哀願するような目つきでいう。

「お願いだから、私が氏族の神の名前を話したことをけつしてどの村人にも言ってくたさるな。」

「誓って！ 私はけつして言わないよ。」

それほど、氏族の神についての話は、外人人にはタブーらしい。私はもうはつきりとさとった。彼らが家族員の続きがらといった系図買いの知識を私たちに話しながらないのは、日本の農村でそれを調べるばあいにいやがられるような意味——つまり税金の対象になったり、家族内のスキヤンドルを公表されたりするようなことにたいする恐れ——とはさらにちがったものが加わっているのだ。すなわち、氏族のことを外部に知られることにたいして、宗教的な感情をまじえた恐れが加わっているのであろう。

ところで、彼の話で、三つの氏族の神があきらかになった。カングリンの神はチューツェン大王、プランガルの神はバングゼン大王、そしてシンムシエのそれはエカザタイと呼ばれていた。私はこの中でチューツェンという名をききとがめる。それは何かツェン——あの悪霊——と関係があるんじゃないだろうか、と思つて、はたしてそうだった。ダコプーによると、それはツェン神の子孫なのだという。それは、カルチエと隣村カールとの境界をなす深い急谷のかたわらにある赤い岩なのであった。私はあの石門の上に立った赤い塔や赤旗が、やはりツェン神のシンボルだったことを思いだした。

その昔、チベットにはじめて仏教の礎をきずいたのは、すでに伝説的な人物に祭り上げられている蓮華生という人だった。彼はおそろしい神通力を持った人で、ヒマラヤを越えてチベッ

トにはいる途中、手むかう悪魔どもを片っぱしからなぎ倒し、封じこめ、あるいは悔悛かいしんさせてしまった。悪くいえば魔法使いだつたのである。こうしてチベットのすべてで、悪魔どもは平定されたのである。悔悛した悪魔どもも、いまや仏教の守護神になってしまったのだそうだ。あるいは、それは仏教側の言い分であつて、立場を変えれば、地方かたの神々はみな仏教王国の威力の前に征服され同化されたという方がいいのかもしれない。

しかしながら、チベット人たちの生活に長いあいだ根をおろしていた神々、あるいはそういう神々への信仰は、そう簡単に撲滅たつめつされるにはあまりにも根ぶかく生きてゐる、と私は考える。だいたい私の歩いたチベット人の世界の中では、首府のラッサに近いほど、つまり東の方カルチエ村の方ほど、仏教の征服力が強かつたようである。それについて、西の方へゆくほど、仏教以前からの伝統が、もつとなまなましく残つてゐるらしかつた。

みよ。西のはてでたどりついたサングダの部落では、村人はいまだに「天のお祭り」をやり、家畜を天神のために犠牲にしてゐるではないか。それは仏教以前の古代宗教といわれるボン教に特色的なものといわれている。また、マルシャンディーの上流では、今なおツェンやドユーは石門の上に堂々と祭られてゐるのだつた。ところがカルチエまでくると、彼ら地方かたの神は仏教の守護神の名に置きかえられてゐる。そして古い神々は、表面上は低級な悪霊の列に押しこめられてゐる。だが、それはまだ氏族のまつる神の中に、ひそかに、しぶとく生きのびていたのである。

私はある日、シュルパの丘とともに、村人の持つてゐる仏画の掛物かぶつを眺めていた。丘は私をつかまえて、その中の諸神諸仏の名前を教えてくれる。だいたいからいって、上等の仏様たちは上の方に描かれていた。下の方には、仏とも怪物ともつかぬグロテスクな守護神たちがたくさん描いてある。その中の一つ目小僧のような守護神もあつた。私はダコプーが教えてくれたシムシエの守護神であるエカザティエを思い出した。この神は人間に二眼を与え、自分は一服だけを肩かた間に持つてゐるんだという話をきいていたからである。

「これはなんだ？」

「それはエカザティエです。」

やっぱりそうだったか。エカザティエはかわいそうに、神様の部類にも入れてもらえないほど下の方に、それでも神様の新体制の中にひとつの「光榮ある」守護役をあてがわれていたのだつた。これで私は味をしめた。

今度はかなり上の方に、全身いたるところに目のついた、グロテスクきわまる神の姿が目についた。

「これはいったいなんだ？」

「それはザドユー神ですよ。」

ハアテ、と私は首をひねる。

「なにかドユーと関係があるのかね？」

「ええ……」

Hの話によると、こうだった。

黒で象徴化されるドユーは、神ではなく悪霊である。それは人力ではどうにも手のくだしようのない狂暴な自然力なのである。ところが、ザドユーという神は、ちょうど北極あれば南極があるごとく、光あれば影のあるごとく、この悪魔ドユーと結びついた神で、豪雨とか降雪とかいった狂暴な自然力をコントロールしたり防いだりするのである。なにか災難があると、人びとはラマを呼んで、占い本を使って災害の原因を調べてもらう。もしその災害がドユーのせいだということになると、ラマはザドユーの神座をトルマで作り、祈禱して、災害の原因をとりぞくのだそう。

このザドユーを礼拝するためのお経というものがある。これは靈験あらたかな本である。もしだれかが発心して三年間人里から遠ざかり、女性の顔を見ないでこのお経を一生けんめいに信仰するならば、彼は神通力をかちうることができる。たとえば遠い道を歩いている人間をバツタリ動けなくすることもできるし、雪や雨をコントロールすることもできる。Hの郷里ソログンブのとある村にも、現にそういう人が一人いるのである。

氏族の神をまつる行事についてはまだおもしろいこともあるけれど、これくらいにしておこう。

超人とミイラ

ふしぎなお話はまだまだこの村にあるらしい。まずこの村では、四つのお寺のうちもつとも村人の尊崇をあつめているのはチュンガプー寺であった。先刻お話ししたナラツァム祭をのぞくと、そのほかの村祭りは皆このチュンガプーで行われる。なぜこのお寺がそんなに尊崇されるかというところ、そこには二体の尊い仏様があるからだ。二体の仏様は、サンギエニオパメおよびサンギエニマラと呼ばれている。サンギエニというのは「聖者」というほどの意味である。

ところでサンギエニオパメというのは、無量光仏、すなわち阿弥陀如来のチベット名である。その阿弥陀如来は、村人にいわせると、昔々、遠い昔のこと、チベットから来たラマなのであった。彼こそはこの村の名と三つの氏族の名づけ親なのだそうである。そして彼は、「死んだときそのままの姿で、今なお目を見開いたまま、ミイラになっている」のだそうだ。彼の死体を安置するために、彼のこもっていたところに村人が作ったのが、ほかならぬチュンガプー寺であるという。

サンギエニマラは、シムシエ氏族の最初のラマだそうだ。彼もまたその死後、死体は高価な布で包まれ、今なおチュンガプー寺に安置されている。つまりサンギエニオパメと同じように、「死んだときそのまま目を見開いている」ミイラなんだという。

もちろん私はバカげた話だと思う。つまらぬお伽ばなしだと思う。第一、無量光仏がノコノコとこんな村をほつき歩くものか。シムシユの初代のラマは、当の村人が教えてくれたように、氏族の一員だったというチユングボギユバという人であった。それに何よりも、死んだミイラが目を開いているなどということがあつてたまるか。バカげたと思ひながら、何かの役に立つこともあろうと私はノートに書きつけてゆく。

ところが、このバカげたお伽ばなしは、月日がたつほど、私にとって何かを考えさせる重要資料になつていったから、まったくふしぎなことである。そのひとつをあげよう。すでにのべたように、河口かわぐち慧海師かいのチベット紀行の中に、こういうことが書いてある。チベットでは、高僧の死体だけは一種の塩類とともに箱づめにして脱水し、それから詰めものをし、最後に金箔きんぱくで仏像に仕上げるのである。

私はチユングブー寺でサンギエオパメだけ拝観したが、それは人間大のふつうの座像で、ガリガリになつたミイラの骸骨がくではなかつた。そうれみる、でたらめな話だ、と思つたけれど、今になって考えてみると、その二体の仏像の中身にほんとうのミイラがあるということは、大いにありそうな話だ。

この二体の仏像は、カルチュエの村にとつて、いわばおまもり護符ごふのような役をはたすのだった。たとえ、農作物のできが悪いとか、そのほか非常の災害のときには、村の連中はこの二体の「神様」

をお寺から担かいできて、村中を練り歩くのである。もっとも、「神様」に關係した本、つまり、お経も同じような効果があるとみえて、一年に一度、サンギエオパメの開帳をする春のお祭りのころに、村の男が一冊ずつお経を背負つて村中を練り歩く行事もあるのである。こんなふうにして村のお清めきよめをするつもりなのだ。

「ところが……。」

と、ある村人は真剣な顔つきで話すのだった。

「いまや、この二体の神様は、災害から村を守る手段として今までほど有効ではなくなつてきているのです。といいますのは、以前はこの神様のてのひらの上にはいつもコムギの芽があつて、それが緑に芽を吹いていたものです。それが三年ほど前からは、枯れてしまいました。」

私たちは不安に思つてラマに尋ねました。ラマの話によると、これは悪い兆きざしなのです。いまに災害がやってくる。やがて、もっとひどい災害がくるときには、このサンギエは消えてなくなるはずだ。いまや強力な守り神は、この村から去ろうとしているのだ。それは悪魔あくまどもの力が猛烈で、神々もそれをとどめることができなからだ、と、そう言つてゐるので。

……え、ラマはどうしてそれを知つたのかつて？ ええ、彼はナミックルルングデンというお経で占うらなつたのです。そのお経は、チベットで天から降つてきたのです。それがチベットやネパールで広く配られて、この村にも三年前にとどいたのです。」

その最新版の古い本とやらは、私も見たが、うすつぺらな細長い綴本だった。

荒唐無稽な作り話、際限もなさそうな奇跡の物語。笑ってしまえばそれまでである。じつさい彼らの縁起かつきや迷信じみたお話は、世界のどこに、こんな連中があらうと思うほどである。いったいどうして彼らはこう迷信深いのだろうと、私は思う。「なあに大山奥にいて文明からうぢと取り残されているからさ。文化が低く、野蛮なところにはどこでも見られることだよ。後進性というやつさ。」そんな解釈で片づけてしまふ人がたくさんいることだろう。しかし、そんな解釈は陳腐な見方である、と私は思う。リンゴが地面に落ちるのはあたりまえだという、たいへんものわかりのよい見方に似ている。第一、迷信は世界中にあるといったって、私の知ってる大興安嶺の山奥や南洋の離れ島にいる連中だって、彼らチベット人ほど縁起かつき屋には思えない。だが、こんな疑問は、いましばらくは難問にすぎようだ。

私はサンゴダの仙人の話を思いだす。空を飛ぶなどということは超人のわざだ。勝手に雨を止めたり大雪を降らしたり、何町も先の人間を釘づけにするというのも、まさに超人のわざだ。いわんや、村を災難から守るといふ両サンギエの威力に至っては、人間ばなれしていること、いうまでもない。しかもサンギエたちは、かつてこの地上を歩いていたのだ。彼は人間だった。

神様が人間ばなれをしたことをやるのは、世界中どこでも、起こっていることである。ところ

が、生き身の人間でありながら、こういう超人や神の域にまで登りつづけるところに、チベット人の世界の面目躍如たるどころがあった。いったい、どうすればそんなすばらしい高さにまで到達できるのだろうか。

この村には、プレンボウのラマのように世襲のラマもあった。だから代々ラマの家筋に生まれただものでないとラマにはなれないのだろうか。ところが、そんなラマ以外に、男ならばだれでもラマを志願できるらしい。男の子がだんだん大きくなって宗教的な願望を抱くと、村内のラマか、あるいは俗人でも宗教的訓練を積んだ人のところへ教えをこいにゆくのさそうだ。そこでお経を読むことを習ったり、写経の練習をしたりする。それからもっと大きくなって、宗教的な訓練も相当へてくると、ラマのもとに出かけて入信をこうのである。

ラマはこの入信希望者にたいして、まず家族や氏族や村における彼の立場をともどもに検討してやる。それから、よろしいということになると、こんどは試験をするのである。まず仏前で、数百回あるいは一千回も二千回も伏し拝む姿勢をさせる。これにパスするとつぎは、お経の文句をとえながら、数珠の玉をひとつずつ数えさせる。これは一千回から数千回くりかえさなければならぬ。それからこれもパスすると、穀物の粒を片手ににぎらせ、その手でもう一方の手の手首を何百回、何千回もこすらせる。こういった試験にたえて道心堅固とみれば、ラマをはじめ入信を許すのである。さらに本格的な修業を望む者は、修道院に入れてもらって修業をする。

こんな説明をきいたり、そのほかの節ぶしを思い合すと、私はつくづく思った。よく物の本を読むと、チベットでは、一家族に一人の男の子はラマ僧にしなければならぬ、などと書いてある。これじゃあ、まるで徴兵制度で兵隊にとられるみたいである。ところが、聞くとも見るとは大抵が、ラマになるものは、少なくとも男であれば、だれが志してもよいのだ。どんな貧乏人のせがれでも、金持のせがれでもかまわない。長男でも弟でもかまわない。そしておそらく、チベット族であろうが白人族であろうが、天孫族であろうがかまわないのである。

必要なことは、彼の自発的意志であり志である。それがなければ、あんなきびしい試験はいらないはずである。きびしいといったら、まだこれは序の口の試験である。彼は何回もの試験をパスし、奮闘努力して一步一步のぼってゆくのである。彼が「個人として」奮闘努力するかぎり、そこには無限に高く登る道が開かれているのだ。俗人は半俗人に、半俗人はラマに、ラマは聖者に、そして聖者はついに神へと高まることができる。それは彼らのあいだに見られるあの強い個人主義的雰囲気になつたふさわしい制度ではないか。そしてまた、これこそ一種のデモクラシーでなくてなんであらう。

しかしながら、こういうきびしい試験制度には、入学難にあえぐ日本の学生や高等文官の試験とはちがった味わいがある。おそらくまた中国の昔の科擧の試験ともちがったところがある。どこがちがうのか。それは、日本の入学試験はだいたいにおいて頭さえよく、知識さえ詰めこんで

あればパスするということだ。学生たちは一年も二年も背中を丸くして運動もしないでカンカンになるから、受験をするころには青白い顔になってヒョロヒョロしている。ところが彼らのほうが。それは肉体力や意志力をもふりしぼらなければならぬ試験なのである。

日本だって、私のいた旧陸軍の兵隊生活では、あべこべに肉体的力量が偏重される傾向があった。精神的能力のうち、「精神力」は尊ばれたが、「頭がよい」ということ、もしくは知的であるということには、一種の侮蔑的な雰囲気さえなくはなかった。

「頭がよいということをお鼻にかけおつて、生意気なやつじゃ。なんだ、そのヘッピリ腰は！ 軍隊は要領で通ると思つたら大まちがいだぞ！」

そういつて上等兵や下士官が、青白く頭の良いインテリ初年兵をつきとばす。彼はヨロヨロと倒れて尻もちをつく。

しかしチベット人たちの宗教教育は体操の試験とはわけがちがう。精神的あるいは知的な面もまたひじょうに大切だからこそ、苦吟してお経読みもするのにながいがいない。

私は何度も何度も村の背後をふり仰いだ。そこには、はるか崖の上に、ちらちらとお寺の一角が見え隠れするのだった。黒々とした森を背負って、まえには断崖をひかえて、そのお寺はいかにも、俗界からつとめて遠ざかるうとするかのようである。霧や嵐の中に、孤高を求めて寂然とみずからのうちに沈潜しているかのようである。

そういえば、この村ばかりではない。僧院というものは、村里をはなれて山の上にあるものが多かった。はなはだしきは、断崖絶壁のまっただ中であつた。どこから登れるのかと思うほどである。

僧院ばかりではない。カリガンダキの上流には、絶壁の途中に洞穴が点々とうがたれていたではないか。これは「昔聖者たちが籠ったところ」なのである。洞穴をチベット語ではプーというが、そのプーという言葉はこのカルチュエ村のチュンガプー寺だけでなく、シアルコーラ流域のお寺や僧院にしばしば名づけられているではないか。こんなふうにはなれた洞窟を選んで完全な孤独の中で行をする風習は、昔どころではない、今なおチベットには多いことである。

とうとう私は漠然とこんなことを感じはじめ、たつたひとりの力で、彼らは無限の高い境地に達しようとしているのだ。おのれの持つすべての力をつくして達しようとしているのだ。その到達境地において、彼の霊と肉と、つまり、ひとりの人間が持っているふたつのは完全に合致するであろう。彼は完全な自由の境地をちらうことだろう。そのときそが醉生夢死の人生を去って、彼がもっとも充実して「生きていく」という実感に立つときである。それがさどりの境地なのであるか。

もっとも、そんなことをいったって、私は仏教を勉強したわけではない。そして、その当時は、まだひじょうにバクゼンたる気分的な印象として、そんなことを感じ取ったのにすぎない。

感じ取ったからには、何かの根拠があつてよさそうだ。だが、私じしんにもその根拠がなんだかよくわからなかつた。



31 石版にきざまれた男女合体像 (依田孝喜氏撮影)

あれから四年の年月が流れた。いま私はある程度その根拠を整理して語ることができる。それが正しいかどうかはべつとして。

試みに私たちがそういうさどりの境地に辿りついたとする。その気持は、ちょうどエベレストの頂にたどりついたか、あるいはむしろ無限の天空にのぼったような気持である。そして、たとえはその願望は、聖なる高みとの交信を求めているタルチョーの旗ノポリに暗示されている。霊と肉との合致の境地は、あのラマ寺にみられる男女合体像の忘我の境地に暗示されている。あるいはまた、その境地に達したとされる高僧のなきがらをミイラにして崇拜するところに現われている。霊と肉とが分離している普通人においては、あれほど死体に執着を持たず、あるいはそれを不浄視するというのに、聖者の死体

にたいしてこんなに執着する原因は、このあたりに謎のカギがひそんでいるように思う。

彼が到達したその自由の境地。その生命力にみちみちた実感。いったい何ものにそれをたとえよう。しかもそれが、彼ひとりの奮闘によって勝ち得たものだとするれば、この気持こそ神通力といい表わし、あるいは超人にいたったというよりほかはあるまい。そしてまた、こんなふうに自己を求めて辿りついた底の底において、生命の充実感が小さな自己からあふれだして、どこどこまでもほとばしり、ひろがってゆくエネルギーのように感ぜられてもよいではないか。彼は太陽である。彼は万物の上に光熱を惜しみなく与える。ただ与えるのみである。無限に与えるのみである。彼は貧しくはない。ニーチェならば、そこで「与うる者の寂しさ……」などというところであろう。じっさい、もしチベット人たちに「ツアラトツストラかく語りぬ」を読ませたならば、少なからぬ共鳴者を出すにちがいない。

サイコロの人生

超人の世界。それもし幸福というならば、それは淨福というべきものであろう。しかし、それを果たして「幸福」という言葉であらわすべきかどうかは、ちよつと疑問である。なぜというに、私はむかし、榎有恒さん——あのマナスル征頂隊のリーダー——の『山行』という本を読んだことがある。その序文にはたしかこういったことが書いてあった。

ひとりの青年が、「幸福」とはどういうものかと思ひ悩み、「幸福」を求めながら谷間をのぼっていった。ふと目をあげると、おりからの夕日に照らされて、谷の奥に荘嚴な白雪の高峰が輝いていた。それをみつめた青年は、ハッと気がついた。

「人生には幸福以上のものがある。」

青年は欣然として山をくだった。

超人の世界——よしやそれがチベット人たちの理想の世界であらうとも、現実の世界はおおかつたが凡俗と迷蒙の世界なのであった。超人の世界をコップからあふれてやまない水にたとえるならば、凡俗の世界は水の満たされないコップ、ときには半分しか水がなく、ときにはスッカラカンで、ときには底にヒビのはいったコップなのであった。彼らは水の満たされることを渴し望んでいるようだ。あふれた人たちはまたその水——神聖な力——を、空いたコップに注ぎ入れたがっているようだ。

だが、そんな状態にある凡俗でもなおかつ、彼らの個人主義はていついしている。彼らの一人一人は、神通力もないくせに、神通力を持った神々や聖者やラマを動員し、神聖なお経や呪文を動員し、自分の知っている限りの呪術を動員して、神通力を間接に操縦しようとする。彼らはひじょうな運命論者でもあるのだが、「諦め」の気持に立ち、運命を甘んじて受けてただ忍従するというような、消極的な意味での運命論者では断じてない。

みよ、彼らのさかんな征服欲を。呪文を唱え、ミイラ仏をかつぎまわり、ラムチェバで道路を破壊し、食べ物で悪魔をおびきよせてからそいつをカンヅメにして投げすてるなど、奸知の限りをつくしてまで悲愴な戦いをくりひろげているのではないか。ある日、私は、タルチョーの旗竿に、木製で二枚一組のプロペラがとりつけられているのを見た。プロペラには呪文が書いてある。そのプロペラは、ありがたい呪文を、風に託してクルクルと何千遍も唱えているのである。この家は屋根の修繕をしていたので、そのあいだは雨が降ると困るのである。風車は雨降りをストップさせるためにつけられたのであった。

超人と神の世界が彼らの理想であり天上界だというなら、墮落の世界はその反対の方にあるはずである。そこでは人間の靈魂と肉体はバラバラである。靈魂は肉体を恋しがって合体をもとめているが、そこに安住することができない。彼は空虚な人間である。だからすぐ悪霊が忍びこんで、思いがけないことを彼にやらせ、災難をもたらしってくる。死んでからも悪霊が彼の靈魂に食いついたりしているので、天上にのぼりたいと思ってもそれは容易なわざではない。そのときになってあわてて神聖な力を恵んでもらって、悪霊をただで追っばらってもらおうといったって、それは虫のいい相談だ。彼らの世界では貸し借りの觀念が発達しているからだ。だから、生きているうちから神様に預金しておかなければ不安である。

悪魔はどこにいるのか。それは地上をうろついている。ほの暗い森の中にいる。谷間にいる。あ

るいは地下にいる。つまり天とは反対のところにいる。光の世界とは反対に闇の世界にいる。悪魔はまた、人の力ではどうにもコントロールのできない狂暴な自然の力である。人里から離れたところにいる。近づきたい断崖にいる。湖の底にいる。狂奔する川の流に架した吊橋のあたりにいる。こいつが、無能力な人間を無間地獄にひきずりこみかねないのである。こうして彼らの世界とはまた、天界の神々と地界の悪魔との、やむことのない闘争の世界でもあった。悪魔は力づよい。プロメシウスのように強い。神と悪魔、光と闇、永遠と無常のあいだにはさまっている人間どもは、まことに不安定な状態にあるらしい。彼は無限に高まって超人になることもできる。無限に転落してゆくこともできる。

天国ゆきか地獄ゆきか。それは彼らの一人一人の肩にかかっている。各員一層奮励努力せよ。「チベット国の興廢のため」にでなく、自分の興廢のために。

だが、いかに奮励これつとめても、いかにせん、一人一人には生まれつきの能力のちがいがあつた。それから、偶然の災難やチャンスというものがある。あたりまえな話である。どこの国へ行つたって、人間というもののまぬがれがたいところではないか。

俗界における彼らの生活は、どうやら興亡浮沈のはげしいものにみえる。ペムバやバルバのよいうに甲斐性があつて、運がよくつて、繁榮している連中でも、息子の代になつたらどうなるかわかつたものじゃない。あのプロレタリアンの連中みたいに、各地を転々と流れ歩くことになるか

もしれない。そのかわりに、やり手で運がよければ、トントンと金を儲けたり、えらい坊さんになつたり、政治家になつたりできるのかもしれない。

彼らの人生が変転常なく波瀾の多いものだということは、ただ金儲けにしくじつたということだけでではないらしい。ラブランの一家のように、叔父と甥との大喧嘩で分裂してしまつたのがある。そうかと思うとツイリン・ドルジュのように、細君に駆落ちされてしまつたのがある。二十歳歳の彼は、今は五十歳の婆さんと再婚していた。もともと、彼女はなかなか金持なんだそうである。そのほか、すでにのべたように、彼らの家族はしょっちゅう分裂をくりかえしているではないか。そしてまた、しょっちゅうお家断絶をくりかえしているのである。

このように、あんなに強い氏族の団結にもかかわらず、彼らの人生を絶えず波瀾に富ませているものがある。ふしぎなことである。それこそ個人主義と名づけるにふさわしいものではなからうか。

残念ながら、彼らのひとりひとりの人生行路については、私のノートの内容はあまりにも貧弱だった。そこで私は日本にもどつてから、チベット探検記のたぐいを幾冊か読んでみる。そして、私の感じていたことが、じつさいには想像以上であるのに舌を巻いた。チベット人の一生に、貧乏人の家に生まれながら金持やえらい坊さんと総理大臣になつたものがあり、またその逆に、転落するものが多いというばかりではない。同一の男が、一生のうちに浮沈をくりかえすこともま

た相当みられるようである。

しかもそれは今にはじまつたことではないのだ。たとえばチベットには、十一世紀の後半に、ミラレバという行者が住んでいた。彼の一生は、さながら活劇の人生である。そして最後に洞窟にこもつて極端な苦行生活を何十年かやつたのである。彼はその苦行生活の中から、じつに十萬におよぶ雄渾な宗教的な詩を作つた。それは今なおチベットの民衆にひじょうに愛されているものである。

彼が最後にこもつた洞窟は、たしかに私が歩きまわつた辺からそんなに遠くないところらしい。そんなことを直観的に感じながら、私は河口師訳するところの『ミラレバ伝』をむさぼるように読んだ。

それによると、ただこの尊者の一生が波瀾万丈だつたばかりではない。尊者の祖父は、はじめは相當な金持だつたが、バクチを打つこともはなはだうまかつたところがあるとき、詐欺賭博に巧妙な男と勝負のすえ、ついに田畑・家屋・財産の三つとも賭けて、サイコロに利あらず、スッテンテンになつてしまつた。そこで一族はすべての財産と離れて、遠い所に移住した。ここで彼は、読書習字の教師をしたり、村の供養や祈禱や霰防ぎの呪術をやつたり、あるいは商業に従事したりして、ふたたび大金持になつたとある。

そこで、こういう人生を送っている彼らが、一人一人の人間の奮闘努力を尊重するばかりでな

く、またサイコロ運の良し悪しということを深く信ずるようになるとしても、かならずしも矛盾したことはないのかもしれない。いくら努力をしたって星占いが黒と出れば、なんにもならぬではないか、という理屈も成り立つであろう。しかし、たぶん彼らは、運がいいとか頭がいいということのほか、努力家か怠け者かということをも運命の中にふくめているのだろう。

いやいや、彼らのあきるところを知らない探究欲は、偶然の中にも必然の法則を見つけないければ気がすまないのだろう。その必然の法則、自然の秘密とやらは、いったいどこにあるのだろう。それがみつければ、彼らは未来を予言することができる。また運命をコントロールすることができるかもしれない。ちょうどヨーロッパの中世の錬金術師のように、彼らは「不可能」にたいしてすら挑戦しているようにみえる。

「やがて、もっとひどい災害がこの村をおそうであろう。」

「この子は、大きくなって嫁入りすれば若死にしようはずだ。だから独身でラマニにさす方がよい。」

けれどもその錬金術のさかんだったヨーロッパこそは、そこから近代的な科学と技術を生み出してきた世界だったのである。

愛欲無限

ついに出発の朝がきた。たった一ヵ月半の滞在だったのに、この村にお別かれをつけるのが、まるで故郷を立ち去るような気持である。ペムバ老人が旅立ちを祝って地酒を杯についでくれる。杯のふちに、ツアンパの粉をちよつと粧よそつて、さあ飲めという。これが彼らのしきたりだ。私にはありがたくグツと一杯ちよつと飲ませる。

子飼いのポーターはもちろんのこと、カルチェの村人たちが新しくわれわれのポーターとして加わった。われわれの銀貨はもういくばくもない。それで余分なものはみんな村人にやったり、捨ててしまったのに、われわれの荷物は旅立ちのはじめとほとんど変わらず十七、八個もあった。新しい荷物が加わったのだ。中尾君の植物標本や、私の土俗品標本などがふえたからである。

私たちは騒然さわごとして出発準備に走りまわっている。そのうちに、村のポーター連もゾロゾロと集まってくる。それなのに、私たちの隊はなかなか動き出さない。第一、これらのポーターたちを指導すべき役割のシエルバ二人は何をしているのだ。朝から、ろくつたま何もしていないではないか。

「長滞在をしたので、シエルバたちはすっかり悪くせがつかってしまった。」

と、中尾君はブンブンである。

炊事係たしごをしていたシエルバの巨がやってきて、私に申し出る。

「隣村へバターを買いにやらしてあるのですが、その荷物がまだ着きません。すみませんが、且

那、私は二時間ほど後で出発します。すぐ追いつきますから。」

「そうか。ではたのむよ。」

私は出発の服装を整えたまま、右往左往する村人を眺めていた。カルチエ組のポーターのリーダー格は、どうやらダコプーらしい。ダッドルジエもいた。だが、彼はポーターの列に加わるのかどうか、すこしおかしいなと思う。妙なことをしている。彼はダコプーの耳もとに何かささやいている。ダコプーは軽くなずいている。それからダッドルジエは、ほかのポーター連にも何やら耳打ちしているのではないか。何だかおかしいぞと、私はちょっと気になった。

私にとっては、ペムバ老の部屋はほんとうに懐かしいところだ。その部屋のイロリを囲んだ、あのいく晩の思い出。イロリには粗朶がもえ、ゴトクの上には大釜がゴトゴトと煮えたぎっていた。ペムバ老はイロリの奥、窓に面したところにあぐらをかいている。ここは氏神をまつる神聖な位置だから、私にも譲らない。彼の右側には女衆がイロリ端をかこんでいる。彼女たちと向かい合って、彼の左側には私をはじめ男衆が陣取っている。みんなが飲んでいた。ほろ酔い機嫌でだれかが歌う。しぶ味のある民謡。こんな歌もあったのか、などと思う。それから四方山話に夜はふける。S君がこういふところへ来ないので、なんだか「水入らず」といった感じである。

そうだ、お別かれにあのイロリの間をちょっと覗いてこよう、と思った。ところが、なんということだ。いないいないと思つたシェルバのAがそこにいた。おまけに彼はグデングデンに酔っ

ぱらって、いっかな腰をあげようとしなない。

「川喜田旦那、まあ一杯飲んでいきなせえ。」

私たちは怒って、せき立てる。

正午も遠くないころ、ようやく一行は動き出した。一時ポーツと明かるくなって晴れるかとみえたお天気も、また霧になる。霧の中を、一人また一人と重荷を負つたポーターたちが消えてゆく。コースは九十九折りを一気に千メートルあまりもくだつて、シアルルコーラの谷底へ。

谷底はすごい峽谷である。濁流の渦巻く本流を、あぶなっかしい丸太の継ぎ橋で越える。対岸を、また一汗かいて登る。私たち旦那衆は、おかれてくるポーター連を案じて川向こうを見る。双眼鏡でのぞくほどに遠い。ようやく彼らの姿が現われてきた。Aを先頭に、ひとり、ふたり、……と行列がみえる。どうやら無事についてくるらしい。

S君は疲れて遅れぎみだ。中尾君と私は、もう一足先へ伸ばそうと思う。道は絶壁の中腹をほそほそと続いている。やがて手ごろなキャンプ地にたどりついて、ポーター連の到着を待った。ところろが、たそがれになつても、やってきたのは子飼いのポーター五、六人だけである。テントも食糧も到着しなかった。そして暗闇の迫るころ、S君がしょんぼりとやってきた。

「カルチエのポーター連は、川を渡つたところで動かなくなりました。私がどんなに説得しても、そこで泊まるんだと頑張って動きません。」

「Hはいたか？」

と私はきく。

「いいえ。Hもダールドルジエもいません。」

その夜は岩壁の下で、ひさびさにゴロ寝だった。もちろん晩飯などはない。ロウソクも二、三本ばかり。谷あいに細くひろがる夜空をながめながら、私たちは話した。中尾君は、村人が総反乱を起こしたらしいと、心配に心配をしている。むりもない。もしそうだとすれば、私たちは明日からどうすればよいのだ。

私も心配はしたが、それほどではなかった。なぜかというに、私は反乱説以外にもう一説持ち合わせていたのだから。

私の頭にピンときたのは、あの娘のことだ。ペムバ老と付きあつたあの娘のことだ。その後まもなく、シエルバのHとAとは、彼女を獲得しようとして猛烈に張りあつたらしい。そして、ついにHが恋の凱歌をあげたのだ。勤勉なHが、みるみる朝寝坊になっていった。うっかりすると朝寝坊の旦那たる私よりもあとから、目をこすりながら起きあがつたこともあつた。なんたることだ。うつつを抜かすにもほどがある、と思つた。

だから、Hは今夜カルチュエに「外泊」している、と私は思う。もちろん、別かれたい彼女と今一夜をすごすためだ。バターを買うなどとウソをついて、とうとう彼はこなかつた。

Aのやつは、Hのライバルだった。けれど彼は、いったん彼女をHにゆずつてからは、淡々として、むしろ二人の恋人の關係に、友だちとして気を配つてやりかねないほどのふうだった。やりおつたわい、と私は思う。彼はHの朝がえりができるように、われわれの第一日のキャンプ地をできるだけ村の近くにくいとめるように協力したんだ。朝っぱらから酔っぱらつて怠けて、われわれの出発をすこしでも遅らせるのが彼の魂胆こんたんだったのだ。

それから、恋人たちのために気をきかせて、ポーター連にストライキを指示したのは、もちろんダールドルジエにちがいない。彼はHやAの共謀者である。それから、「合点だ。」とうなずいていたダコプー以下の村人も共犯である。なんというとつびな奴らだ。

ところが、旦那衆があんまり先へ行きすぎたので、彼らの予定がすこし狂つたのだらう。彼らはせいぜい川を渡つたあたりで、私たちの足をとどめたかつたのだ。よもや、わざわざ私たちに、晩飯も食わせずゴロ寝をさせるのが目的だったのではあるまい。

S君を入れてわれわれ三人の寝物語は、悲観説と樂觀説、反乱説と恋愛説のあいだをゆききした。そして結論は、明日の十時ごろまで、ここで様子を見てみようということになった。もし悪意の反乱でなければ、彼らはそのころまでにここまで追いつくだろう。

「Hはもうあの村に住みつく気かもしれないね。」

ポツリと私がそういうと、他の二人は声をたてて笑つた。

とうとう夜が明けた。彼らはやってくるだろうか。彼らはやってきた。八時ごろ、Aを先頭に、ポーター連は続々と到着した。どいつもこいつも申しわけなさそうな顔をして、足ばやにやってきた。旦那連の大目玉をくらっても甘んじて受けようという覚悟がみえている。それでも彼らの心中は晴ればれとしていたにちがいない。二人の恋人たちになりたいしてつくすべき仁義はつくしたのだから。友だちというものはいいものだ。

そんな気分が見えたので、大いにとちちめてやろうと思ったわれわれも、何もおこごとは言わない。こんなときにお説教をするほどやばな話はない。それにしてもHの姿だけはまだ見えなかった。われわれは急いで朝食をすませると、さらに行進した。

ようやく正午ごろになって、Hが息せききって追いついてきた。

「おお、Hか。」

と私はふりかえる。見れば彼の目はくぼみ、頬はげっそりとこけていてではないか。恋とはこんなにつまらないものか。彼は私にどのくらい叱られるかと覚悟している。私は怒る気持などどくに消えうせている。

「Hよ。どうだ、昨晚はよかったか？」

いっさいはわれわれの予想どおりだった。この男は、恋にうつつをぬかして、あやうくいっさいを放棄するところだったのである。マナスの七千メートルで敢闘したこの男は、久米の仙人

のように、下界に墜落することにかけても勇猛猪突であった。それにしても、二人の恋人に意気投合して、こんなに大さわぎまでおっぼじめた村人も村人である。商売にかけてはチャッカリ屋の彼らに、こんなとっぴな半面があるうとは。

「女ほど恐ろしいものはない。」と、あるダライイラマは語ったそうだ。これは、いわゆる男尊女卑の言葉ではなくて、まさに、その逆の皮肉ではなかったらうか。その証拠がある。第六世ダライイラマだ。

いったい、活仏かつぶつとして生まれた幼いダライイラマの教育は、ひじょうに厳格だそうだ。彼は生涯の最初の三、四年は女性に会わない。自分の母親にすら会わない。その教育のせいかどうか、正道から踏みはずしたといわれるダライイラマは、たったひとり第六世だけであった。

彼は前代ダライイラマの死が長いあいだ秘められていたために、十歳ごろまで活仏として承認されなかった。したがって、ふつうのチベット人として育てられたのである。彼は異常な才能のある男であった。法務にはつとめず、遊樂の生涯をおくり、うるわしい乙女たちに夢中になり、おびただしい恋歌を残した。そしておしまいには、清朝と蒙古王の手にかかって、非業の最期をあげている。彼の美しい恋の歌を、今なお民衆たちはこよなく愛唱するという。いま、チャールズベルの翻訳した中からその二節をひろってみよう。



32 シェルバのAとふざける明朗なチベット人の娘
(シアル・コーラ上流にて、中尾佐助氏撮影)

スタンダードの好きそうな題材は、この国には数限りもなからう。ゲーテならば随喜の涙を流すロマンの花がある。どうも彼らは牧童の時代から、したたか人世の酒を飲みすぎたのではないか。歌、ダンス、バクチ、運動会、駆落ち、漂流、陽気なプロレタリアン。こういったものを羅列すると、彼らの人柄の重要な半面が浮かびあがってくる。そして、それらのすべてにもなお満たされないとき、彼らはツァラトゥストラを志して岩窟の中にこもるのである。

たまさかに遭えり。麗わしの想い人に、
道ぼたに或る日。

ふと心づきし、澄める空色のトルコ玉。

心づきし——乗てられてあるに。

見よ、蛇神や悪魔が、

厳然と強く、私のうしろに潜んでいる。

私の前のリンゴはうまそうだ。

私は恐ろしくない。私はとらずにおられない。

愛することも激しく、憎むことも徹底している。喜びにつけ悲しみにつけ、チベットの空のように鮮烈で深い。それがチベット人の世界なのである。私は思いだす。あの自殺するといった少女の話を。それから、駆落ちした妻の話を。こんなにけわしく霧深いヒマラヤの山奥に、そして何ものをも吹き飛ばすようなあの荒原の夜、吹雪の中に、そのような悲喜ともごもの人世の花が咲き乱れていようとは。

4 ネパール探検から得たもの

どんな魚が釣れるかわからない

日本に帰ったとき、私のアタマはゴチャゴチャであった。いったい私は何を知ったのだろうか。あんなこともあった、こんなこともあったという知識が雑然と頭にはいつているだけではないか。ノートは十数冊あったけれど、どこにどんなことが書いてあるのやら。そのほかにあるものとして、茫漠たる旅の印象だけである。モンズーンの真最中に突破したあのブリッガンダキ峽谷の身の毛のよだつような奔流、絶壁ののぼりくだり。ふたたびもどってきた灼熱地獄の国々。そうかと思うと、あの慕わしい砂漠の中の乗馬の旅、ヤクの鈴の音、……。

こういった、つかまえどころのない知識の屑箱から、ひとつのまとまったものを組み立てなければなるまいと思う。これは容易な仕事ではない。ひよっとすると、チベットの超人のような仕事かもしれない。あるいは左甚五郎のような名人芸を要する仕事なのかもしれない。

けれど私は、名人芸はやるまいと思っていた。それは芸術ではあっても学問ではない。私はゴミクズのような知識を、整理して組み立ててゆこうと思う。それにはどうすればよいか。私には

成算があった。もう数年も前から、しょっちゅう考え続けていた方法があった。

私はまず、ノートに書きつけた記録を、片っ端から一枚ずつのカードに分解して書き写してゆく。一単元の内容をもった事がらは、かならず一枚もしくは一組のカードに書き写すのである。たった一行でも、それが一まとまりの事がらなら、惜し気なく一枚を使って書く。しかし私には雑用がたくさんあったから、自分で全部この仕事をやっていたら、いつまでかかるかわからない。そこで、ここからこまごまで一枚分というのを赤エンピツでノートにするしをつけ、学生さんをアルバイトにたのんで書き写してもらった。彼はときどき、私の書きなぐりが判読できなくて写しそこなった。ノートというものは、どんなに追われていても、人にも読める字で書くものだ。

それから私は、そのカードが、もとのノートと食いちがっていないか、一枚ずつ検討してゆく。まちがっていないければ、私はカードの一端に、内容を一行で簡潔にあらわしたキャッチ・フレーズを書きこみ、さらに事がらごとの分類番号を書きこむ。たとえば、カードに書きこまれた事がらが、農業のことにも農具のことにも農業労働のことにも関係しているとすると、そうすると分類番号は、二四(農業)、四一(道具)、四六(労働)と三つ記すのである。こういった分類番号は、アメリカの何人かの人類学者たちが協力して、十数年もかかって苦心して作った優れたものがあったので、それを採用したのだった。こういった作業を、私は「事項分類」と呼んでいる。これにたいして、記録した時間の順番に並んだ資料は、つまり私のフィールドノートじたいであった。

もしも前後の続き具合が知りたいとかいったときには、どのノートの何月何日のところを見ればよい、という照らし合わせのために、どのカードにも左下のすみに、記録した日時と場所が書いてある。カード作りと事項分類は、数ヶ月で完成した。

こうして事がらごとに分類されたものを、とりまとめて通読してみると、いままで気がつきもしなかったことが、「オヤ」と気づかれてきた。たとえば、「労働」という項目を通覧してみる。そこには、「どこそこだれがどんな仕事をこういうふうにしていた。」というような記録が、かなりの枚数にわたってくりかえしくりかえし現われてくる。そうすると、たとえば鋤を操る者はほとんど男だということがわかるし、収穫には女や子供の出勤することが多い、ということもわかる。馬鹿でもそれくらいのがわかる。私は名人芸をふるう必要がない。

けれど、こういった事項分類のカードを作って、それを二、三度通読しても、それだけではまだまとまった映像は生まれて来ないのだ。そこで私は第二段階の作業に移る。それを私は「モノグラフの段階」と呼ぶ。この段階ではじめて、バラバラの資料をひとつの文章の中に整理してのべるのである。私はまず、自分にとつてもっとも手が、宗教や信仰に關係した資料を整理しようと思う。

そこで、それにすこしでも關係があると思われるカードを、全部ぬき出して机の上に置く。宗教的なことといつても広いから、私はそのカードをバラバラ見ながら、思いつくままに、さらに

小分けの項目を紙切れにひとつずつ書く。それから、そのメモを書きつけた紙切れを、机の上にいっぱい並べて、ああでもない、こうでもない、と思いつながら順序だてる。それがすむと、私はそれにしたがって、原稿を書きおろすための第何章第何節というプログラムを作る。いぜんとしてあまり名人芸はいらない。

プログラムができた。そこで私はもう一度、宗教に關するカードを、そのプログラムどおり、つまり書きおろしに必要な順番に並べる。こうしてどうとう私は原稿書きにかかった。カードをくりながら。そうして、すんだカードは別の箱にはねのけながら。

驚いたことに、四百字づめの原稿用紙二百五十枚ほどが、わずか半月で書きおろされてしまった。これは、筆の運びのきわめておそい私にとっては、未曾有の新記録である。なにしろカードに書かれたことを、できるだけもとの資料に忠実に取りまとめて書き写すような仕事だから、アタマをほとんど使わない。だから早いのである。アタマはすこし使うが、それは資料をひとまとめたのべたあとに、私の浮かんだ感想を書くためである。この感想がつぎの資料へのメモの役割をする。主観的であつてもちつともかまわない。「思うに」だとか、「これで見ると」といふたふうに書くから、客観的な資料の部分とまぎれる恐れはほとんどない。

そこで、これは予期以上に具合がよいと思つて、残りの資料も同じようにしてモノグラフ——資料の編みあげ——にしてみる。今度は四百枚が四十日でできあがる。これも未曾有の早さであ

った。というのは、私は自分のいる学校の仕事や、その他の雑務にたずさわっている暇々にそれをやっていたのだから。専念しておれば、おそらく半分以下の日数で片づいたかもしれない。こうしたモノグラフ作りの結果、私にとってまさに奇跡的なことが起こった。あのつかまえてこころのないゴミクズのひとつひとつが、整然と私の身につけてしまった。私のアタマのヒキダシにはいってしまった。私はまるでザドュー神になってしまったようだ。あのドューという悪魔、すなわち、コントロールしがたい狂暴な自然力を、自由自在に操縦するという神のようになってきた。私はたいへんな真理をひとつ学んだのである。

「人間というものは、表現してみなければ知識が身につかないものである。」

創作してみなければ芸術がわからない、というのに、すこし似た真理かも知れない。

それから、私じしんが思いがけなかったようなおもしろい着想が湧きつぎと浮かんで発展してきた。資料を煉瓦にたとえるならば、その煉瓦と煉瓦をつなぐ役割に、勝手気ままな私の主観的判断をセメントに使ったことは大成功だった。それはそのときどきの私の気ままな解釈がみんな正しかったというのではない。それどころか、その中のかんりの解釈は、後に至って誤まっていたことが判明する。それでもかまわない。「誤まりだった」ことがわかったのは、そういった誤まった解釈を提案しておいたお陰だったから。そして、「誤まりだ」とわかったとたんに、もっと正しい解釈が暗示されているのだから。

皆さんは「二十の扉」という謎々遊びを知っているだろう。「それは動物か植物か鉱物か？」という質問を皮切りに、ああでもない、こうでもない、と、二十質問をするあいだに、たいてい謎々が何物かわかってしまうのである。だから、宗教の資料だけ整理したって、それではヒマラヤの人びとの生活様式の組立てはわからない。さらに集落のこと、建築のこと、衣食のこと、結婚のこと、家族のこと、農業や牧畜のことなど、できるだけ、いろいろな方角から光をあててみる必要があるのである。

こういふふうにして、モノグラフの書きおろしが終わりに近づいてくるほど、捉まえどころのなかった雑多な資料の山から、ヒマラヤに住む人びとの映像がだんだんはっきりした形をとってきた。頭の中の記憶にたよって、まちがいないと思いきんでいたことが、案外ウソだとわかってくることもあった。記憶よりはやはり記録である。その逆に、現地で直感的に感じたことが、確かに正しかったというばあいも多い。直観とか記憶も馬鹿にはできない。

こうして形づくられたいくつかの映像は、おたがいに組み合わされたり一つにとけ合ったりして、書きおろしが終幕に近づいてくるほど、大きな一塊の網の目のようにまとまってきた。それはちょうど、源流では無数に枝わかれている谷川の流れが、いく本かずつしだいに合流して、ついには一本の大河になるようなものである。私は資料に従って谷川の水のように流れたのであって、まとめるのに無理をしたという感じはもたなかった。

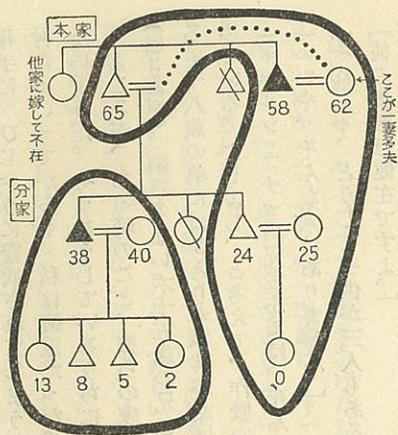
名人芸はあまり必要ではなかった。私と同じような方法、手続きをふめば、だれだって似たり寄ったりの結論を出してくるだろうと感じた。発見は自然に生まれてくるのであって、はじめからこういうものを発見しようとか証明しようなどと考える必要はなかった。この気持を、ある著名な人類学者はこういうふうに語った。

「それはあたかも、どんな魚が釣れるかしらせずに出かけ、ゆく魚釣りのようなものである。」

私はその暇々を見て、ヒマラヤやチベットについての先輩たちの報告書を読みだした。もっとも、出かけるまえにも二、三のそういう報告書を読んだことはあった。しかし、モノグラフを書きおろしてから読んだそれらの本は、こうもちがうかと思うほど多くのことを私に教えてくれる。もちろん、私がすこし詳しく調べたのは、たったひとつのチベット人の寒村だったから、広いチベット全般のことを考えるには、経験も知識も不足している。それにもかかわらず、大局的にみると、たったひとつの村の生活を流れている文化の組立ては、大きなチベット全体を貫いている文化の組立ての縮図の感を禁じえない。大宇宙は小宇宙に宿っていたらしい。

一妻多夫——その一 兄弟による共有

ふとしたはずみから引っかけた魚の一例をあげよう。



注 △ は男, ○ は女,
 ▲ は戸主,
 ≡ は結婚していることを示す,
 △/○ は死者
 数字 は 年齢
 〰 は 1 家族の範囲

図3 一妻多夫の系図の一例

いったいチベット人のあいだには、奇妙な風習があるということだった。それはお嫁さん一人にたいしてお婿さんが何人もあるという話である。あるえらい人類学者の書物を見たらチベットのばあいには、そのお婿さんは兄弟同士のばあいが多いから、「兄弟型一妻多夫婚」だとあった。そんな話を事前にききおよんでいたものだから、私はチベット人たちのあいだに、じっさいそういうことがあるかどうか、注意していた。だが、通訳のS君にそういう話をしたら、とんでもない、そんな馬鹿げたことがあるものか、ときた。そう思いこんでいるから、彼はもちろん事の真疑を確かめることに協力しようとはしない。どうも、堅い頭にはこまったものだ、と私は思う。

さりとて、こういう性質のことは、真つ正面からきいたって成功するかどうかかわからない。もし不成功だったら、

相手に、ひじょうに警戒されてしまうから、ますますむずかしくなる。そう思って、カルチェの村にはいってからも、私は慎重だった。系図買いをやってみても、それらしい続きがら一つもないようだ。そうこうしているうちに、村を去る日が迫ってきた。

ところが、ある晩のこと、彼らの家族構成を調べているうちに、ふしぎな実例が目にとまった(図3参照)。細君のない六十五歳の兄さんにはたくさんの子供があるのに、細君(六十二歳)のあゝる五十八歳の弟にはひとりも子供がない、という奇妙な系図だ。家長は細君のある弟のほうに勤めていた。よしよし、と考えて、作戦を練る。つぎの日のこと。

「ギェルンツチマの兄さんには、死んだ細君があつたのかね？」

「いいや、そんな人はありません。」

「それじゃ、どうして子供が三人もあるのだ？」

「彼の細君は健在ですよ。」

「だって、君は先だって、彼女はギェルンツチマの細君だといつたぜ。いったいどちらの細君なんだ？ 兄弟いっしょのお嫁さんだろう？」

「ダゴプーはまたもやグツとつまつてしまった。それから、ひきつづいて彼からききだした説明によると、兄弟が共同の妻を持つというのは、村で行われている慣習なのである。もつとも、その妻がはじめ兄の妻であれば、弟たちはその妻と関係することができるけれど、はじめから弟の

妻となった者に兄が関係することは許されぬ。こういうしだい、三人や四人の兄弟でも一人の妻を共有することができるのである。しかしネパール政府は、兄弟二人まではよろしいが、三人以上が妻を共有することを禁じたのだという。

残念なことに、その翌日私たちは懐かし^{なつか}しのカルチェ^カを発^たたねばならなかつたので、これ以上くわしいことを実例についできく機会がなかつた。

けれども、モノグラフを書きあげた結果から、三つの兄弟一妻婚と、一つの叔父^{おじ}甥^{おにい}一妻婚^{あひな}があまりきらかになつた。叔父甥一妻婚は、すでにのべたように、ラブランのラマ家族のそれである。そのほかに、たとい後では別の妻を迎えて分家する弟たちであっても、それまでは兄の妻を共有するものと思われる。

こういった妻の年齢は、ひとつの例外もなく最年長の夫より若く、もつとも若い夫よりも年長であつた。ところで、このうち詳しいことのわからないラブランのばあいを除くと、そういった家族の家長は、ふしぎなことにみんな長男が家長ではなく、弟たちのだれかが家長をやつていた。さらにこういうことがわかつてきた。こんなふう^{よう}に何人かの夫があるといつても、その夫たちの中に、ひとりだけおもな夫というものがある。だから私のような外来者がたずねると、彼らはまるで彼女の夫がその男ただひとりのように擬装して答えたのであつた。私はそういう夫を「ア

クセントのある夫」と名づけた。

そのアクセントのある夫は、最初は一番年長の夫であったにちがいない。このばあい、三例はいずれも兄弟一妻婚だから、長男だったのである。叔父甥一妻婚のばあいでも、アクセントのある夫は、はじめ叔父の方だったかもしれない。ところが、いつのまにやら、そのアクセントは、若い方の夫に移ってしまった。それはちょうど、はじめは長男が家長をしていても、いつのまにやら弟たちが家長をつとめるように、とってかわるのに似ているではないか。

それは似ているどころでなく、三例のうち少なくとも二例では、家長をやっている弟と、アクセントのある夫とは一致していた。第三の例では、子供たちは長男の子供だというふうに語られ、アクセントのある夫は次男であり、そして三男が家長であった。このばあい、私が彼女の夫はどれかと尋ねたら、二、三人の村人は、

「彼女は夫とちょうど同じ年だ。」

と証言したから分かったのである。それは次男の年齢と一致した。ダッドルジェは、ツジツマを合わせるために、彼女は長男の妻だといつてごまかしたのであった。さもないと、長男は子供だけあって妻がないというジレンマにおちいって、ダコプーと同じように返答に窮することになったろう。

これらの少ない例だけから察すると、夫のアクセントは、だいたいにおいて家長の地位と合致

するが、厳密にそうではないらしい。アクセントはいつしか若い方に移るものらしい。

そうすると、必然的にこういうことになる。兄弟が若い時代には、一番成長している長男のところへ妻が嫁入りして行くのである。彼が一家のリーダーとしてもっとも有能であるあいだは、アクセントのある夫は彼である。だが四十歳台の前後を境として、もっとも有能なリーダーは、しばしば弟たちの中にみいだされてゆく。そして兄貴はだんだん老衰にも近づいてゆく。そこで家長の地位は弟たちのだれかに移り、そのとき夫のアクセントもおのずからその弟に移ってゆく。それではなぜ弟たちは、兄さんとは別のお嫁さんをもらわないのだろう。いや、彼はじっさい別にお嫁さんをもらうことが多い。しかし、そのときには十中八九まで分家しなければならぬのである。そうして分裂してしまった家族は、じっさいひじょうに多いのだ。

だが、おそらく経済上の理由で、そういうふうな家族が分裂してしまうと不利になるばあいも生ずるのだった。だいたいシンムシエには一妻多夫の例が多く、したがって、アクセントのある夫以外に、一見独身の、そのじつ夫である、年輩の男たちが多く、私はそのわけを問うと、村人はそれを「シンムシエは貧乏だからだ。」と説明した。なるほど貧乏だからこそ家産を分けたり労働力を分散させたりするのが不利なばあいもある。しかし貧乏でなくても、家産を分けたり働きの手が分裂して、いわば株を分けるのが好ましくないとはいえない。やはり兄弟どもが分裂しないで残ることがある。現にまえにあげた系図の家族は、借金奴隷の女を二人も置いていて、それ

ほど貧乏とは思えない。

それから、ラッサあたりの上流階級の中にも、そういう一妻多夫の例があり、貧乏人ばかりに多いのではないのだ。商業にさかんに従事する連中にはしばしば一妻多夫の例が多い。これも、人的物的に家族の株を一本に維持して協力する方が、商業活動にとって有利だからだと思われる。そこで、どうしても兄弟たちがいっしょに暮らした方がいいとして、もしも弟たちが兄貴のお嫁さんとべつに自分たちのお嫁さんを迎えたら、いったいどうなるだろう。私はいったいチベットの主婦たちがどんなものであるか知ろうとする。その結果は、すでにお話したように、彼女たちの豪傑ぶり、強い権力、そして人にゆずらない強い個性を発見したのである。もしも弟たちにも嫁がやってきて、兄の嫁と同居するだけならばまだしもである。ときがたつて兄貴が弟にこう言うときが来たらどうなるだろう。

「弟よ。どうもおまえの方がやり手だから、これからはおまえが家長をつとめてくれ。」

ところが、そうなると必然的に、家政を牛耳る主婦権も、兄貴の妻から弟の妻へバトンを渡さなければならなくなる。彼女がおめおめと、しかも年齢がそれほどへだたつてもいない弟の妻にその権限を渡すものか。おそらくそんなことをおくびに出しただけでも、二人の女はとっつかみ合いをはじめ、意気地なしの夫は横ツラをはりたおされ、ツアンパは飛び散り、家具は蹴り倒され、灰カグラは立ち、いやはや目もあてられない光景が展開するだろう。

してみると、一妻多夫制度というものは、まことにうまくできたものだ。それは傲岸不遜、独立自尊のチベット人男女の性格に合っている。兄貴が弟に家長の地位を譲つたつて、お嫁さんは共同だから、せいぜい夫のアクセントが変わるだけである。また、長男だから全能なのでなく、もっとも有能なリーダーならだれでも推し立てられるようにできている。彼らが、個人の能力をすなおに是認し、有能者をリーダーに推し立てることによって、家族的協力の生産力を高めようという装置なのである。それによって困難な生活を戦い取ろうというのである。それが個人主義を土台においた、彼らのデモクラシーの原理なのである。

このように彼らのデモクラシーは、機会均等のデモクラシーであつて、機械的平等のデモクラシーではない。個人の能力を抜擢しうるデモクラシーであり、個人主義と自由競争に立脚したデモクラシーなのである。集団教育を叩きこんで全体主義で出る杭をも叩いてならそうというデモクラシーではないのである。そしてそれは家族制度の中ばかりでなく、チベット文化のすべてを貫いているデモクラシーの原理なのである。それは法皇を推し立てた僧侶政治の中にもっとも徹底的な現われを見ようである。そこには法皇を頂点として、下は俗人に至る階級が整然として、その形だけみればどこにも平等はない。しかもその階級のきざしをよじ登るためには、「お家柄」というものは徹底的に否定されて、有能者の抜擢という原則がたくましく貫いている。

一妻多夫——その二 叔父と甥による共有

ところで、とほうに暮れたのは叔父甥一妻婚である。私の系図資料を整理した結果はそういう結論が出たものの、第一そんな変テコなものがありうるのだろうか。

さて弱ったといろいろ首をひねっているうちに、ふと私は珍らしい記事を読んだ。それはギリシャとデンマークの皇太子をかねているプリンスパーターという人の書いたものである。この人はチベットの探検もやったことのある人で、チベットやヒマラヤの人類学についての大家である。彼によると、チベットにはきわめて珍らしい婚姻制度がある。つまり、父の世代何人かと思子の世代何人かと思、ひとりの妻を共有して、それをチベット人たちはチャマドゥングと呼んでいるというのだ。ただしそのばあい、その妻は息子の実母ではないのである。

なるほどと思って注意していると、そういう報告がまれにちよいちよいあった。だから、叔父と甥とが一人の妻を共有するぐらいのことは、あるのかもしれないと思う。

それから私は、彼らが親族をどう呼ぶかに注意してみた。すると、彼らは年上の者と年下の者とを区別する傾向がわかってきた。たとえば、兄はアジョであり、姉はアジェである。それにたいていして、弟はノーであり妹はヌモである。日本でこそ同じように兄や姉と弟と妹を区別するけれど、英語ではブラザーとシスターであって、上下の区別はないわけである。ここがちがっている。つぎに、アジョとかアジェの「ア」は、年齢の上の者にたいする敬語のようなもので、兄や姉

ばかりでなく、父(アヤ)にも母(アマ)にも、父方の叔父さん(アウ)にも叔母さん(アニ)にも、母方の叔父さん(アジャン)にも使われている。(ただし、祖父母や曾祖父母には使われない。)そのうえに、父方の叔母さんの夫もアジャンであるし、母方の叔父さんの妻もアニであり、母方の叔母さんの夫もアウであった。つまり「ア」は、自分と同じ世代にも、父母の世代にも使われているので、それは世代間でとぎれずに、世代間を貫いている使い方である。「ア」は世代を問題にせず、むしろ年齢的序列を問題にした呼び方であった。

ところが、男からみて、自分より年長だと思われる親族でありながら、たったひとつ「ア」のつかない例外があった。それはフルと呼ばれる女性である。フルは、(一)兄さんのお嫁さん、(二)父方の父より若い方の叔父さんのお嫁さん、および、(三)母方の叔母で母より若い女、の三人をさすのだった。だから、このフルという呼び名も、自分の世代と父母の世代とを貫いて使われているわけだ。彼らは世代の相違を無視する傾向があるらしい。

ところで、この三つのフルの関係にある女性は、いずれも彼と結婚しうる関係にあることは実例がこれを示していた。つまり彼は、兄さんのお嫁さんを共有できる。これが兄弟一妻婚にはかならない。また彼は父の弟にあたる叔父さんのお嫁さんをも共有できる。これが叔父甥一妻婚である。そしてまた、実母でなければ父のお嫁さんをも共有できるというのが、先人の教えるところである。それが父子一妻婚である。

そのうえに、すでにのべたように、ラブランには、母の妹にあたる叔母さんと結婚していた例がある。さらにそのうえに、姉と妹をともにお嫁さんにしていた例があった。もっとも彼は、シムシエの総本家の家へ婿入りしたのであって、嫁入りではない。

これでわかった。兄弟一妻婚と叔父甥一妻婚と父子一妻婚は、いずれも彼らの間で合法的な結婚の仕方なのである。そして、世代の差別を重要視する文化の中に育った人間——日本人もそうだし、漢人はなおさら極端なのであるが——からみると、この三種類の一妻多夫婚は、まったく別々の形式にみえる。なぜかという、そういう人たちは、兄弟、叔父甥、父子という三つの関係を、全然異なったものと考えているからである。だから、そういう連中から見ると、チベット人たちの婚姻形態はまったく支離滅裂で、なんの秩序もなくみえるだろう。いやいや、彼らはそこでとどまらない。この無秩序とびらんぶりこそ、いかに彼らが野蛮で低級な文化にあるかの証拠と考えるだろう。

ところが、そう考える人びとは、自分たちの「世代間の序列」という觀念が、あたかも世界中どこでも通用しなければならない真理だとひとりぎめしているのである。立場を変えてみよう。チベット人たちは、世代の積み重なったような序列には関心がなく、そのかわりに、「年齢的傾斜の序列」を重要視するのである。この立場から見ると、父と息子、叔父と甥、そして兄と弟とは、同じ氏族にいて、どれもこれも、年齢の上の者と下の者との一組ということになってしまうので

ある。したがって、そういった年齢序列の一組の血縁者を夫に持つという点では、この三種類の一妻多夫婚は、じつは一種類の、あるいは同一の原理に立った婚姻なのである。

もっとも、私がカルチエの家系図で調べたところでは、相隣兄弟間の平均年齢差は平均六・九歳であるが、いちばん若い叔父と一番年寄りの甥（つまり長男）との平均年齢差は一六・〇歳もある。ということは、兄弟一妻婚は起こりやすいが、叔父甥一妻婚はそれほどには起こらないということだし、父子一妻婚はなお起こりにくいということである。お嫁さんはすでにのべたように、こういった夫たちの中間の年齢が好まれるらしい。

そこでこういった考え方を応用して、婿入りというばあいの一妻多妻婚を考えてみよう。婿入りは、父系で嫁入婚をたて、まゑとする彼らの社会では、いちおう例外的なほうに属する。しかし、あとつぎの男の子がなくて、しかも何かの理由で家の株や系譜を絶やしたくないようならば、たとえば氏族の総本家といったばあいにときどき起こるのである。それからラッサあたりの上流貴族の家系などでこういった婿入婚が案外多いということもチャールスベルが物語っている。

そうすると、私のみつけた姉妹一夫婚はまさにその兄弟一妻婚を裏がえしたものにほかならない。母方の叔母とも結婚しうる彼は、ことよつたら、叔母姪一夫婚をやってもよいのかもしれない。そんな例を私はきいたこともないが、ありうることだと想像する。

こうして一妻多夫も、またおそらく数少ない一夫多妻のばあいも、そこに働いているのは年齢

序列の原理である。彼は自分より年上の兄に最初の嫁入りをした女を共同の妻にすることはできず、弟の方へ嫁入りした女を共同の妻とすることは絶対にできない。同じ論法でゆくと、父や叔父に嫁入った女を共同の妻にすることはできても、甥や息子に嫁入った女性を共同の妻にすることはできないのかもしれない。

同様に、妻の母と結婚することができないと思われる節がある。なぜかという、妻の母はアニと呼ばれているからだ。アニと呼ばれる女には、そのほかに二種類ある。ひとりは男からみて父の姉妹にあたるオババ。彼女は彼と同じ氏族に生まれた者だから、これは当然近親相姦になるのである。もうひとりは母方の叔父の妻をさす。彼女は、第三の氏族から母の生まれた氏族へお嫁入りしたのだから、当然彼とは別の氏族に住むたてまえの女である。結婚できなくてもいらいおあたりまえだ。そのうえに、この第三の氏族がすなわち彼自身の氏族と合致するばあいも多いらしい。そうなれば、彼女は彼と同じ氏族に生まれたものだから、もちろん結婚すれば近親相姦となるのである。こういうふうには、アニと名のつく女性の二つまでのばあいは、彼と絶対に結婚できない間柄なのである。だから、第三のばあい、すなわち、妻の母のばあいにも、ぜったいに禁ぜられているのだらうと想像する。こうして一妻多妻のばあいも、同様に、最初の妻より年長の、そして妻と同血縁の女とは結婚できないらしい。

農耕をやり、定住している彼らのあいだでは、こういうふうには、一妻多妻婚がかなりあり、一

妻多妻婚はいちおう少ない。けれど、ひとりひとりの男の一生をとってみると、じつは案外に、彼は二人以上の女性を妻にする機会があることになる。かりに彼が次男や三男であるとしよう。

彼は十五、六歳にもなると、兄の妻を共有しはじめる。河口師によると、兄が旅に出たり牧場にいったりして留守のとき、母のとりもちで簡単な祝言をするという話まである。それから彼は、もっと年をとってから、自分専用の妻を迎えて分家することもできるわけだ。そうすると、次男や三男のばあいでも、一生に二人の女を妻にする勘定になる。

私は現在こう思っている。純粹に遊牧的な生活をするチベット人にくらべて、半農半牧で定住生活をする農耕チベット人の方に一妻多妻の割合が多いのは、定住生活のために財産をたくわえる見こみが多いためである。そのために、家産を分割すると不利になる事態が、いっそう頻繁に起こるからであらう。まったく同じ理由から、貴族とか金持とか商業をやる連中のあいだに、比較的に多いらしい。

ただし、思いちがいを起こされないためにお断わりするが、彼らのあいだで一妻多妻婚はせいぜい全夫婦数の三割までかと推測する。大部分は一夫一妻婚なのである。こういうふうには少ない割合ではあるが、それはチベット人の文化の根底を流れている原理に深く触れている制度なのである。またそれは、彼らの生活のために重要な安全弁となっている制度であらう。

それでは、一妻多妻制のために生ずる女性の過剰は、どう始末されるのか。同じカルチュエ村の

資料からみると、オールドミスというものがある。彼女らはどういうわけか、兄弟姉妹の多い家族にしばしばみいだされ、姉妹の中の長女である。そして彼女は二十七、八歳になると、一番若い弟と二人で分家する傾向がある。なぜそうなのか。この謎の解決は、私がもう一度彼らの世界で暮らす日までおあずけだ。

チベット文化と、漢文化の分かれ道

それでは、なぜチベット人のあいだでは「年齢序列の原理」が重要になり、「世代階層の序列」が軽んぜられるのだろうか。こんどは天降りに、私の辿りついた結論から順序だてて解釈してみよう。ただし、じっさいには、この逆の順番で結論に辿りついたのだけれど。

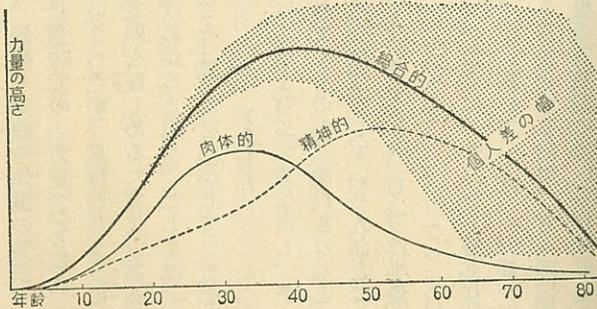
ヒマラヤやチベット高原のようなきびしい自然の中で、彼らは生きんがために、はげしい精神力と肉体力をふるわねばならなかった。しかも彼らは、幼い時代から、自分の身のまわりのことはなんでもやらなければならず、孤独に耐えて育たなければならなかった。なぜかというに、彼や彼女は、ひとりで羊飼いや牛飼いをしなければならず、またひとりで遠い国へけわしい道をふみこえて行かねばならなかったからだ。たとい隊商とつれだつて出かけても、雪の中や絶壁の細道では、だれも助けるわけにゆかない。たよれるのは自分の手足と体力とアタマだけである。衆をたのんだり特技をたのんだりするわけにはゆかない。

ここに彼らの強い個人主義の発足点があった。また彼らが、個人の能力を重んずるといふ倫理の起点があった。

そこで、男性個人の一生において、こういった能力の発達ぶりがどういふ経過をとるか考えてみよう。まず幼児の時代には、彼は何も自分ですることができない。つまり彼の能力はゼロだ。それから、少年時代、青年時代とへるにしたがつて、彼の能力はグングンと高くなる。そしてついに四十歳前後で、彼は有能の頂点に到達する。それから、老衰の方に近づくにつれ、彼の能力はしだいに下り坂となり、最後に死ぬ。これを一つのカーブに描くと、図4のようなになる。私はこれを「力量カーブ」と名づけた。

こういうカーブの中で、とくに力量の頂点を四十歳前後と認めた理由は二、三あるが、もっともあざやかなきめ手となったのは、すでにのべたように、家長の地位がつぎの家長にバトン渡しされる年ごろである。一妻多夫制もこの力量カーブの問題に関係しているのである。

図4 農耕チベット人の力量カーブ



さて、このような「力量」の中には、彼らの社会で必要とされる、経験や熟練や知識の蓄積、あるいは「鍛えあげ」もすべてふくまれているのである。そういった意味での「力量」として、四十歳前後というのはいったい若いというべきか年をとっているというべきか。私はひじょうに若い年齢だといってよいと思う。彼らの文化は、やはり「壯を尊び老弱を賤しめる」文化であると思う。これは読者がそれぞれの国の文化と思いくらべて見られればわかると思う。たとえば、日本で会社の重役とか校長さんとか、大臣といった人、つまりわれこそは日本を動かしているぞといった顔をしている人びとの平均年齢はどんなものだろう。

漢民族の民衆文化とくらべるときには、あきらかに、漢民族の方は「老を尊ぶ」方に属し、チベット族の方は「壯を尊ぶ」方である。そのちがいはどこから生まれてくるのか。漢民族はもともと農耕社会を作っており、大きな集落を作って定住して、複雑な社会生活をしている人びとである。ところが、チベット族はその土地柄からして、「農耕チベット人」ですらも、じつは半農半牧の人びとである。

そういった生活様式のちがいがいからして、漢民族における力量カーブの頂点は、チベット族よりもうんと老年の方にかたよったものではなからうか。なぜかという点、漢民族の方では、「力量」の中に占める経験の比重が大きくなった。とくに社会生活がいつそう複雑化する結果、対人関係において経験がものをいう比重が大きくなったのである。それは人生の円熟期にはいらねば獲得

できない。漢民族の文化は、こういう点であくまでも人間のあいだを整える現実的な倫理を中心に展開していったように思う。彼らはけっして超自然的なことに熱中してうつつをぬかずことはなかった。それは、孔子のたまわく「怪力乱神を語らず」の昔からそうだったのかもしれない。ところがチベット人の方はちやうどその逆である。まず第一に、その労働、とくに肉体労働がきびしいところから、血氣壯んな年ごろが重要となる。それから、彼らが何でもひとりでもやらねばならないことと、そこから生まれでてきた個人主義のために、熟練の極致をきわめるといふほどのことがなくなる。経験の蓄積ということはそれほど大きな役割をはたさない。むしろ彼らのあいだでそれに類したことで重要になるのは、個人としての「鍛えあげ」——精神的のみならず肉体的にも——なのである。こういう事情が、彼らをして「壯を尊ば」しめたのである。

そこで問題をふたたび、家族生活にもどしてみよう。老を尊ぶ漢民族が、家族を中心として生活の協同体制を強化しようとするならば、まず家族のタテのつながりを強くし、安定化させねばならない。家族の中のリーダーたる家長について考えると、老を尊ぶ漢文化はこの点ではるかに有利である。なぜかというに、彼らの力量の頂点が老年の方にずれているために、その老年の家長がいよいよ働けなくなったり死んだりするまでに、彼の奥の息子がすでに一人前の年ごろになっっている確率はずつと高くなる。したがって、父から息子への家長権のリレーは、よほど安心して目的を達することができる。

こうして、漢民族の家族では、家長権のリレーは、父から息子へ、息子から孫へと、世代から世代へ飛躍しながら伝えることができる。しかしそれですら、いつのばあいも安定したリレーが行われるかどうか不安である。そこで、彼らの社会にいちじるしいひとつの特色が生まれ得る。つまり彼らは、若い息子どもを早く一人前に仕立てようと望む。彼らのあいだでは、子供が「子供らしい」ということはほめたことにはならない。それは「子供くさい」ことであって、困ったことなのだ。早く社会人としてませくさりになることを望むのである。「子供くさい」息子にあとを託するわけにはゆかないというのであろう。

かようにして、彼らのあいだでは、世代と世代のあいだは断絶的であり、断絶の上に立った世代と世代との強い握手である。この握手を強めるものが「孝」である。世代の積み重なり意識はどこまでも上に伸びて、ついには雲の中に没してしまうほどだ。彼らは何代も前の家長の弟の細君のお墓まで、それと知って毎年一度はお掃除をする。日本人みたいに「先祖代々の墓」の一本でごまかしてしまわない。ましてやチベット人みたいに、オジイサンの代から先のことはきれいさっぱり忘れていような、観念的な祖先崇拜ではない。

これに反して、その力量カーブの頂点が若い年齢であるチベット人のあいだでは、家長がもう下り坂の年輩に向かっても、彼の実の息子はつぎの家長たるには子供すぎる。そこで、定住生活の結果、やはり家族的協同の安定が望まれるときには、下り坂の家長と彼の実子とのあいだに、

中間のバトンを託せるような人間が必要なのである。それは若い方の弟をおいてはない。そこで家長権のリレーは、兄―弟―兄の息子、というふうになることが望ましいのである。バトンのゆずり渡しは、同一世代内でも一度横スベリして、それからつぎの世代へ移ってゆくのである。

いやいや、そういった「横スベリ」という説明をするのは、私自身がまだ「世代階層の序列」という観念にいくぶん拘泥しているからだ。兄―弟―兄の息子、といったジグザグのコースを考えるよりも、有能さが充実したり、衰えたりしてゆく順序を端的にあらわしたものが、すなわち「年齢序列」の原理である。家長権は、この一本の年齢傾斜に沿って、もっとも有能な者から、それを凌いでゆくつぎの有能者へとリレーされてゆく。これが、彼らの一妻多夫制においてもっともみごとにあらわれている原理である。

いいかえるならば、漢民族の家族生活では、家族の安定を求めて、個人の有能さを抜擢する原理の方をそれに奉仕させたのである。だからモウロクした親父でも、親父であるかぎりはどこまでも一応たてまつっておかなければならない。そして人びとの協力関係は、タテの方向では世代間の協力であり、ヨコの方向に向かつては同じ祖先から分かれた家族の団結、すなわち、よく氏族とか宗族と呼ばれる集まりである。彼らのあいだでは、こうした「家族主義」が強力である。

しかるにチベット人のあいだでは、あべこべに、まず個人の有能さを抜擢する原理の方を立てて、家族生活の安定をそれに調和させるように仕組んだのであった。こういったふうに、もともと

とは、それぞれの土地がらに適應していかに生きぬくかといったところから発した相違が、やがて長年月をへる間にそれぞれの文化の型のちがいへと固まっていたものと思われるのである。したがってそれは、どちらの方がいっそう優れた文化であるとか、いっそう進んだ文化であるかというまえに、まずもって發展する方向のちがった文化だったのである。そしてその相違は、ただ家族生活のちがいとか「世代序列」と「年齢序列」のちがいということだけにとどまらず、そこから発して、文化のひじょうに広い範囲にまで影響をおよぼしてゆくちがひとなっていたのであろう。

チベット文化と、ヒンズー文化の分かれ道

それでは、ヒンズー文化とチベット文化とは、どういふ点にちがひがあるのだろうか。

いったいチベット文化と漢文化の分かれ道を作りだすものとして、人間の有能さを壮年期にみいだすか老年期にみいだすかということは、決定的な重要性を持っているかにみえる。それとまったく同様に、チベット文化とヒンズー文化の分かれ道も、やはり人間の有能さの認め方いかんにかかっているのではないか。ただし、それはよほどちがった意味においてであらうと思う。

すでにのべたように、彼らの文化は有能者をふるいわけける点においてきわめて優れたものをもっている。彼らは、成功か失敗かを批評するにあたって遠慮がない。チベット人の民衆は、いく

らえらい人にたいしても、その人が何かしくじりをする、遠慮なくドツと笑う。この笑いによって、彼らは率直に成功と失敗とをふるいわけける。自分がしくじりをやったばあいにも、「まあなんて、私はトンマなんだろう。」と笑う。こういう調子だから、マナスルに同行したシェルパたちの、隊員にたいする下馬評などをきいているとおもしろい。だから、また、彼らは、日本の中の学生のように、人に縛名おだなをつけるのが好きだ。

こういうふうには、個人主義者の彼らは、個人の力量を判定するにあたっては率直である。そのうえに、個人の力量を全面的、総合的に判定する傾向が強いのであって、体力と精神力を区別したりすることが少ないのである。この点では、私のとつたどの資料よりも、ハーラー氏の『チベットの七年』にてくる実例が暗示的だ。

ハーラー氏は私たちのカルチュエ村からたつた一つ峠を越えたところにある、キエロンというチベット領の村に長滞在したことがある。この村でもまた、他の多くのチベットの村と同様に、村人たちはスポーツ好きであった。あるとき、村の運動会が開かれ、各種の競技が行われた。彼はランニングの競走に参加してみた。ところが、彼は優れたスポーツマンだから、ゴール寸前までトップをきいて走った。その瞬間、二番目を走っていた男が、やにわにハーラー氏のズボンの尻をひつつかまえ、ハーラー氏がポカンとしているあいだに、その男は一番にゴールインしたのである。

われわれの通念では、これは卑怯な演技もはなほだしいものだ。ところが、なみいる見物人たちは、どっとばかりにその卑怯者の一番乗りの男をほめ、ハーラーはトンマ野郎だということになってしまった。もちろん、ハーラー氏はこの事実をたいする解釈をなんらつけ加えていない。しかしこれこそ、私の仮説にとつては、まさに持ってこいの証明材料に思われる。つまりこのばあい、スタートラインとゴールとは、なんびとにたいしても公平であった。この中間で、各人は全力量を發揮してさしつかえなかったのだ。肉体的力量だけでなく、たとえばハーラーのズボンをつかまえるという機知も、またその男の力量の一部でなくてなんであらう。勝った者は勝った者だ！

このように、肉体的力量と精神的力量、あるいは物理的な力と心理的な力を一個人の中に渾然一体として見いだそうとする傾向は、また彼らの人生の理想でもあった。それが、靈肉合致の極致であり、聖者をミイラ仏にして尊崇するところに象徴されているものであった。そしてまたそこに、彼らが物理的な自然の事実と、心理的な世界の真実とを混同しやすい原因があったように思う。あるいは現実界と空想界とを混同しやすい原因があった。これが、なぜチベットには奇跡の物語が氾濫しているかという一因だと思ふ。同じように個人主義的な傾向の強かった南ヨーロッパの人も、中世には同じように奇跡物語を愛したと、そしてそこに、ラマ教の法王政治によく似たカトリックの法王政治をくりひろげたことは、なかなか暗示的なことだ。日本人など

は、古代でも中世でもけっしてそれほど迷信屋ではなかったらう。

これにたいして、ヒンズー文化は、まさに反対の極致ではなからうか。すなわち彼らは、精神的な力量と肉体的な力量とを極端に切りはなしてしまった。チベット人が一個人の中に渾然一体として認めようとしたものを、全社会の中にバラバラに解体して見いだそうとした。それがカーストの制度ではなからうか。インドの四大カーストは、それぞれつぎのようにたとえられるという。すなわち、ブラーマンは人間の頭であり、クシャトリアは手である。バイシヤは胃袋であり、スードラは足である。いちばん上にあるブラーマンは、精神的力量を売りものにしており、スードラは、いちばん下にあるスードラは、すこしも精神性のない肉体的力量を売りものにしてい。どの個人も、どころでなく、どのカーストの者も、彼らだけでは生きてゆかれない。それはちょうど、頭や手や胃袋や足だけでは生きてゆかれないのと同じである。

もちろん精神的力量を代表する方が上位のカーストであり、その乏しくなるほど下層のカーストだ。だからこのアタマの部分で代表する一員であるS君などは、チベット人の社会と、彼らの住むような世界にはいれば、つらい思いをしなければならなかったのも無理はない。たとえば、彼は観念の世界で空転するだけで、実行的に手足で仕事をするとということと容易に結びつかない。そこには手足がなかったのだ。彼はいつも何かしら、心理的な世界の奥の方に解決を求めて悩んでいるふうで、ときどき見ているのが痛々しくなるような様子をしていることもあった。

だが彼の熱烈な思索性には、禪宗坊主ぜんしんぼうしゆうのように体もろともで思索するということがない。あるいは実証しようとする思索がない。そんな印象を私は受けた。

ところが、ヒンズー文化の人びともまた、漢民族と同じように、集落をなして暮らし、農耕社会の民である。そういった基本的な生活様式においては一見共通でありながら、ヒンズー文化はあきらかに漢文化とひじょうに異なるところがある。なぜだろう。これはひじょうに重要な問題であるけれど、いまの私にはかきもく手がかりがない。ただひとつだけヒントとなるかもしれないことを注意しておこう。それはこの本のはじめにふれた「清潔感」の原理である。熱帯の悪疫の流行する風土が教えた、あの衛生学的な経験の知恵と、それと結びついて発展した心理的な物差しとである。それがカースト社会の形成にたいして、ひとつの必要条件を与えてはいないであろうか。もちろんそれは十分な条件ではあるまいが。

お家柄と腕一本

さてここに、彼らチベット人の社会を流れるふしぎな二つの原理がある。そのひとつはカルチエの氏族の集まりに示されているものだ。つまり血縁関係にある連中が総本家を中心に集まり、その集团的協同的結束は強くて、個人はそれに従わねばならないという原理である。いまひとつは、一見ちやうどその正反対のもので、ささい強調してきた、強烈な個人主義の原理である。

この二つの原理は、おたがいに相補なって調和していることもあれば、ときには相矛盾して闘争の火花を散らすこともある。私はただ娘の縁談の話でのみ、その矛盾を説明した。しかし、その調和も、その矛盾も、この本を注意して読み返していただくならば、いろいろなところで頭を出していることだろう。

私は残念ながらその一面、つまり個人主義の面ばかりを強調しすぎたきらいがある。というのは、血縁者の集団、とくに家族よりも氏族の実態については、私の知りえた知識がまだひじょうに乏しいからだ。なおそのうえに不幸なことには、そもそもチベット人のあいだに氏族制があることすら、今まではっきり証拠をつきつけた人がほとんどなかった。だからますますわからない。それにもかかわらず、チベットにはこういう血縁関係の門閥がひじょうに広く行きわたっていると思われる節がある。家族が氏族につながっているばかりでなく、氏族はさらに氏族連合を作っていた、あるいは現在も作っている、という可能性はある。それはちやうど、木の太い幹から枝がわかれ、それがまたわかれているように。その中には本流の氏族もあれば末流の氏族もあった。氏族の中にも、本流の家族あれば末流の家族があった。

このような組立て方の上では、蒙古人の社会とチベット人の社会ではひじょうによく似たものをふくんでいるらしい。私はときどき、蒙古人の社会を調べた人の記録を参考にしながら、自分の考えをまとめようとした。

こういつた血縁の門閥には、ときに地位の高い低いがあった。私の調べた地域ではいっこうにはっきり見当たらなかったが、地位の高い門閥、つまり貴族の階級がチベットにあることは広く知られている。彼らは、各地にある自分たちの荘園の人びとにたいして、ただに、経済的のみならず、また政治的・刑事的な権力をもふるうことができるそうだ。民衆は、貴族にゆき会えば頭を下げ、貴族にたいしては特別の敬語を用いるのである。

しかし貴族と平民とのあいだの人間的な結びつきはけっして冷やかに閉ざされているのではない。貴族はしばしば、自分の子供たちのために寺小屋式の学校を開く。そこへは付近の平民の子もぞろぞろまじって、いっしょに教育を受ける。貴族の主人夫婦とその下男下女とは、家の中や戸外で、いっしょにまじってダンスをやったり、ともどもにピクニックを楽しむ。貴族の召使いたちは、自分の主人の家柄や勢力を、まるで自分のもののように誇りに思う。主人は概して召使いを大切にいたわる傾向がある。どういふ妻がよいかというラッサの上流男子の価値判断には、召使いをいたわる妻がよいとされているようだ。同じように、もし荘園領主や僧院のマネージャーが、自分たちの小作人をあんまりひどく扱うときには、郡長や県知事は、ただちにそれを中央政府に詳しく報告しなければならぬ。それを怠ると彼は失脚させられる。

こういう貴族階級の発生の源は、チャールスベルによると三種類ある。第一は、先祖がチベットの政治に功労があったばあい、日本でいえば明治の元勳から華族が生まれたようなものであ

る。かりにこれを「功勞貴族」と呼んでおこう。第二には、その家から、チベットの二大活仏——すなわちダライラマおよびパンツェンラマ——を出したばあい、その家筋は政府から大きな荘園を下付されて、貴族に昇格する。その活仏が死んでも、この家系は貴族として続くのである。これをかりに「活仏貴族」と呼んでおこう。

第三の部類は、昔の王国の王の子孫たる貴族で、これは貴族階級中もっとも古いが、もっとも小さい部分を占める。この中には、チベットのアレキサンダー大王ともいうべき七世紀のソンツェンガンボ王の時代より前から続いているといわれる家系もある。これをかりに、「藩王貴族」とでも呼ぼう。

貴族の子孫は、ボンクラであってもやはり貴族たること、「クサつても鯛」として不動の地位をつぎうるようにみえる。ここには門閥の力があり、「腕一本」のものがのしあがるという原理よりも、「お家柄」という原理の方が圧倒的に優勢であるかにみえる。私がチベット人の文化の大きな特色としてのべた「腕一本」の原理というのはウソだったろうか。

ところがここにふしぎなことは、そういつた貴族の家筋には、どうやら偶然の確率以上に有能の人材があらわれて、チベットの政治に貢献しているらしいことである。その一因として、貴族の子弟は特別によい教育を受けるからだというところもあるかもしれない。だが、それと同時に、貴族の子弟は安逸な生活に慣れて、腐敗墮落する危険性もまた考えられる。

じっさいラッサの上流階級の人士たちは、安逸な生活に溺れる傾向があるそうだ。そのため、貴族の子弟は僧侶になりながらぬばあいが多いという。なぜかという、僧門にはいつてピシピシしぼられるのがつらいからである。このように、僧侶の組織と貴族階級とは、ただおたがいにナレナイになって「封建的な？」支配階級を作っているのではない。この両者は、おたがいに相手の腐敗墮落をケンセイするようにできた仕組のように思われる。

私はそのほかにつぎのような重要な一点を注意しておきたい。

それはチベットの政治に、とくに奉仕した偉大な人物を数々送り出したシャター家の一例にも暗示される点である。この家系は、ベルののべた当時から四代前の祖先も、すぐれた大臣をチベットの政治に送り出している。ベルが当時偉大な人物として激賞した一九二〇年代当時のシャター氏は、シャター家の生まれではなく、婿養子によってこの家系にはいった人であった。ラッサの上流階級には、この例のように、娘が家系を相続してこれに婿養子をとるといふばあいがおびただしくあるという。婿養子は同じく上流階級から取るばあいもあるが、かならずしも最高級の家柄からではない。ときには貧乏人の家からも迎えることがある。

こういった有能な婿養子の採用が、富と特権とから生ずる類魔的な影響に抗して、新しい血を貴族階級に注入することは明きらかである。こういった傾向を評して、ベルは「チベット人の遊牧人的本能」といつている。すなわちここにも、血縁集団と「お家柄」の原理が、個人主義と「腕

一本」の原理と、巧みにかみあわされているようである。カルチエの氏族のばあいにも総本家の家のみ唯一の婿入婚を見いだしたのであるが、いまひとつの総本家でも、奇妙な現象が見られた。それは四人兄弟のうちで、長男も次男も四男も分家してしまい、あととりには三男がなったということである。この三男は奇妙なことに、ひじょうな年上の女性を妻にしていた。彼はひょっとすると父の代の叔父と共同の妻を継承したのかもしれない。しかも三人の兄弟が全部分家し終わって三男があととりときまわっているとき、妻はすでに四十五歳で、もう男の子の生まれる望みはなかった。彼と彼女のあいだには娘がひとりあっただけなのである。

さて、僧門の方はどうであったかというに、こちらの方では血縁集団の原理が否定されている。むしろ個人主義と機会均等の原理の方が、圧倒的に支配しているといつてよい。血統や門閥は否定されるのである。最貧の家の子に生まれた者でも、奮闘努力により、またその生まれつきの能力により、最高級の地位につきうるのである。それはたんにたて、まへだけでなく、おびたしい実例によって証することができる。また、年が若くても僧院最高級の地位に達しているものもある。れば、刻苦勉勵がたりないかアタマが悪いために、老齢になっても低い地位にいるものがある。また活仏の生まれかわりとされる少年は、子供のときから尊崇されるが、そのえらび方はけつして上流階級などからえらぶのではない。彼らのサイコロぶりのような人生を反映したかのよう

に、占いによってまったく偶然的にえらぶのである。

さて、貴族階級は、いわば俗人としての支配階級層なのである。現在のチベットの政治では、内閣をはじめ、いろいろの地位が、僧侶出身者と俗人出身者との組合わせてできている。そして優位を占めているのは僧侶のほうである。チベットの歴史を見ると、こういった俗人の権力そのものにたいして、僧侶の権力がうち勝っていったことがわかる。その昔、チベットは武力的にも活動力の高い国であった。そのはなやかな活動で最盛の帝王は、すでにのべたソンツェンガンポ王から、彼の三、四代後のティソンデツァン王のあたりまで、つまり、七―八世紀のころであった。その時代には、北インドの大きな部分や北ビルマまでチベット王の版図となったことがあるし、中国の長安の都までチベット王国に陥落せしめられたことがある。

ところがこういふチベット王たちは、その活動の半面、あるいはむしろその活動の結果、外来の文物を大いにチベットに導入する端緒を開いた。その中に仏教もあったのである。以来仏教は、一時受難時代もあったけれど、しだいに勢力を扶植して、ここにチベット風の仏教、つまりラマ教が確立するに至った。

仏教の確立するのに反比例して、武力のチベット、あるいは俗権のチベットは、しだいに下向きのカープをたどるようになった。一進一退はあったけれども、俗権の方はしだいにチベット人以外、すなわち、ときにはそれが中国の皇帝、そしてとりわけ蒙古の諸王に依存するようになる。

後には満州族の中国、すなわち清朝の皇帝をたよるようになる。

これに反して、チベット内では僧侶の政治力が大きくなってゆく。まず旧派のラマ教の中でもチベット全土に覇を唱えたのが、サキャ派とよばれるものである。これはチベットからはみ出して、元朝時代の蒙古にひろがりはじめた。ついでチベットには宗教改革が起こり、改革派つまり「黄帽派」とよばれるものがチベットの主流を占める時代がきた。これにたいして旧教の諸派は「紅帽派」と呼ばれた。

ここにおもしろいのは、旧教派は肉食妻帯を認めて僧職を世襲するものがわりに多く、その一例がカルチエのラブランにも見られたわけである。すなわちそこには血統とお家柄の原理が、まだすこしくつついていたわけである。しかるに黄帽派は妻帯を否定した。当然のなりゆきとして、世襲は不可能になる。それにもかかわらず、いよいよ重きを加える僧侶政治の中心には、連続たる權威の継承が望まれる。そこで改革派の教祖であるツォンカバの後継者ガンデンポツパの死後しばらくしてから、あの有名な「活仏の生まれかわり」という、ふしぎな後継者のえらび方が、チベットにできあがってきたのである。

だから旧教派から新教派への転換ということは、血縁集団とお家柄の原理が、ますます脱落して、個人主義と機会均等の原理がいっそう徹底してきたことを物語っているであろう。

黄帽派が登場して以来、それはさらに新しい力をもって蒙古をラマ教化して行ったのである。

ツォンカバの後継者たちにダライラマという蒙古的称号を贈る習わしを作ったのは、十六世紀の蒙古王だった。こうしてチベットの宗教は蒙古を征服する傾向をとるとともに、蒙古の武力はチベットを征服する傾向をとった。いやいや、「征服」といっては不適當かもしれない。それは武力と宗教の、あるいは俗権と僧権との、おたがいに補い合うような発展である。蒙古とチベットとは、いわば兄弟のごとく、おたがいの文化には、ひじょうな公約数が基礎に横たわっている。蒙古とチベット、それはどちらも寒冷な乾燥した土地に住む人びとの国である。どちらの民も牧畜が重要な生業となっている。ただ蒙古では遊牧民が大部分であるのに反して、チベットでは、定住して半農半牧の民が相当多いというちがいはある。しかし彼らはいずれも個人で力強く生きることを学び、壯を尊ぶ民であり、そのパソナリティーには共通性が多い。

蒙古がリードした武力的俗権は、私にはカルチエの村のあの氏族の原理の延長上の何ものかに思われる。それは家族—氏族—氏族連合—部族、という組立てを持った力であつたらしいから。しかるに、チベットがリードした宗教的な「聖」の力は、やはりカルチエの村人を流れている個人主義の原理の延長上の何ものかに思われる。一寒村カルチエ村は、この点でもやはり小宇宙だったのではなからうか。

ここに提出しておいた「聖と俗」という問題は、おそらくチベットと蒙古のばあいだけでなく、ヨーロッパにおける「聖と俗」の闘争とその相互補足にも問題になるのではないか。また小規模

ながらも、日本のばあいにも問題を提供しないだろうか。日本は神仏混交の国である。それをただ宗教の形式面の混合とみるか、あるいは氏神的原理と仏教的原理という対立するものの動態力学とみるか。私はこの点について歴史家や社会学者から多くを教わりたいと思っている。

富士山の登リロは一つではない

私の仕事は、まだまだやりかけであり、ようやく緒にたどりついたばかりだ。それはそれで今後つづけなければならぬ。その意味では、もうこれで何もいうべきことはないし、いう資格もない。だがそれにもかかわらず、私はいま何ものかをつけ加えずにはおられない気持である。

この本で書いたチベット文化のお話のように、世界中のいろいろな民族が、それぞれの文化を持っている。私のいる日本にはまた、日本をして日本人の国たらしめている何ものかがある。それを学者たちは文化とか生活様式というふうに呼んできた。こういったいろいろの文化は、しかし、よく立ち入って理解してみると、バラバラの無秩序なものではなくて、それぞれにちゃんとした組立てを持っているものである。いろいろの文化には、それぞれの型があり、組立て方があるものだ。

そして、それらの型や組立て方は、ふつう長い歴史の中で民衆生活の必要上からきたえあげられてきたものである。そういった文化を身につけているからこそ、人びとはときにけわしい風

に耐えつつ生きぬいてくることができたのである。いわばほとんどの文化が、それぞれに根深い存在理由をひっさげているのである。

それにもかかわらず、こういったことにたいする認識が欠けがちなために、今日の世界には恐ろしい暴力の嵐が吹きすさんでいる。今日の世界の平和をかき乱しつつある最大の癌(がん)は、そこにあるのではないか。いろいろな民族と民族、文化と文化のあいだに、おたがいの理解が欠けているという、この一事なのである。

地球上において、生産技術が大して進歩せず、交通が幼稚であった時代には、まだ事態はそれほど深刻ではなかった。ちがった文化の人びとが顔を合わせなければならぬ機会が少なかったからだ。ところが、蒸気機関車が走り、電灯がとまり、飛行機が飛び、原子力が登場する時代になると、事態はすっかり一変してきた。遠い国々と物資の交換がさかんになるばかりでなく、遠い所の人びととの直接間接の接触も、急ピッチに深められざるを得なくなってきたのである。

そしてその現代において、文化を異にする人びとは、おたがいに相手を理解しようとしないうるべき狭(きま)量を暴露(ばくろ)しはじめたのである。彼らはおたがいにその狭量を改めようとはしないで、かえってかた意地に自分のカラを固めようとすることさえある。オーストラリアや南阿連邦の白人が、アジア人やアフリカ人にたいするヒステリックな偏見のごとき。

それからまたそういう異民族の接触にあたって、政治的に、武力的に、あるいは人口の上で優

勢な民族は、しばしばなんの根拠もなく、自分たちの文化の方が上等だというモノサシを作る。

たとえば私は日本人であるが、この日本人が朝鮮人にたいする優越意識は、戦争に負けてからもほとんど変わらない。朝鮮文化の方が何から何まで劣等だと思っているから相手を理解しようとしないう。悪いことはなんでも「朝鮮人だから。」ということにしてしまう。それが、私がしょっちゅう身辺でくわす光景だ。漢民族に接してもそういうところがあったが、戦争に負けてからよほどましにはなった。この誤まった優越感こそ戦争の挑発者である。もうすこし歴史の神様が日本人の頭の上に爆弾の雨を降らざないと、この根性はタタキなおせないのかもしれない。

同じように、アメリカの民衆の多くがいだいている誤まった優越感——おれたちが一番高級な文化を持っている、沖繩の住民の人権なんかは認めなくてよろしい——も、まことに困ったものだ。だいたいこのごろのように民主主義とやらが流行してくると、評論をやるような人たちは民衆に迎合(べいごう)する卑屈(ひくつ)さを往々示すものである。そういうせいも、スターリンが悪いとかマッカーサーが悪いとか、あるいは資本家どもが悪いとか共産主義の独裁者が悪いとかいう勇ましいことであるが、後者は大人数だから、大人数の方の御機嫌を損ねては損だという無意識の打算もなくはない。私ははっきりのべたい。アメリカの誤まった優越感(ゆうえつかん)はアメリカの指導者ばかりでなく、民衆のミーハー族もまた、その有力な張本人なのだ。

「いろいろな文化の存在理由をいずれも尊重しなければならぬ。」ということとは、今後の世界の民主化のためにきわめて重要な原則である。しかしながら、そういうときにきままって出される反論がある。

「それでは進歩発展というものはどこにあるのだ。どれもこれも結構では、はじめられないではないか。そういうふうには手放しに現状を見認するのは、けっきょく旧態を保存しようということも一歩も出ないではないか。けっきょくそれは民主的たることを装って、反動的・保守的な立場を主張しているのだから。」

これは一見気の利いた理屈である。私はこの意見に半分賛成であるが、半面において徹底的にやっつけておく必要も感ずるのである。

賛成するというのは、どの文化にも進歩発展がなければならぬという意味において。そしてまた、じっさいに、どの文化にもそれはあるのである。しかしながら、同じ富士山に登るにも、吉田日も御殿場口もあり大宮口もあるのだ。せつかく吉田口を五合目まで登っているのに、いちばん優秀な登山口は大宮口だからもう一度山をおりて大宮口を登りなおせというのが、はたして正しいことだろうか。

それと同じように、文化にいろいろの型や組立て方があるからといって、その様式のなかでの進歩や発展はいくらでもありうるのである。進歩し、発展したあげく、どれも頂上で一本になっ

てしまったということもあろう。あるいは途中で二つの登山道が合流したようなことにもなる。あるいは、八合目まで登りつめたが、その文化の組立て方では、ニッチもサッチもゆかなくなつて、よその登山道へ苦勞して鞍がえししなければならぬということもあろう。

それを、他の登山口のことをわかりもせぬくせに、また理解しようともせぬくせに、勝手に序列をつけ、自分の方を恩着せがましく押しつけ、あげくのはてには相手をおどしつけるということが、まず現在全世界にわたって日夜進行していることだ。そういったことをやっているのは少数の為政者だけではない。民衆がまた、ひじょうな誤まりを犯している。戦争挑発者のリストの中から、知らん顔をして民衆だけをぬきとるわけにはゆかない。

話をもうすこし具体的にどうぞ。ヨーロッパ人の文化を一つの登山口にしたとえるならば、漢文化やヒンズー文化もまたそれぞれ登山口たるの権利をもつものである。チベット文化もまた第四の登山口たるの権利をもっている。共通の山頂は、それぞれの地域の民衆の福祉の増大ということである。漢文化は五合目まで登っているかもしれない。チベット文化はまだ二合目かもしれない。しかしそれはひとつの登山口たる権利をもっている。

私が旅をして感じたことの一つは、ヒンズー教徒の人たちがチベット人およびチベット文化にたいしていただいている軽蔑と、ときには憎悪の感情である。それからまた、先輩たちの記録から

学ぶことは、漢民族がチベット人にたいして怠っている、これまた別種の軽蔑と、ときには憎悪の感情である。それからとくに、こういったことに端を発して、チベット人と漢人とのあいだに大量の殺傷事件が起こった歴史も、またかなり以前からあったのである。これら三つの文化になつた人びとが、おたがいの文化を理解しようとしてこなかったことは明らかなである。とくに目立つのは、漢民族とヒンズー教徒が、それぞれに、自分たちの文化をチベット文化より数等優れたものだとうぬぼれる、傲慢無礼な態度である。この逆はあまり見当たらない。それはチベット人がみずから劣等視しているからではなくて、彼らにはそういう優劣づけに自己満足をするような気が乏しいからであらう。

いったい現代の国際社会に滔々として優位を占めつつあるイデオロギーは、民主主義である。民主化ということ、ほとんどの国々の政治家や国民が、錦の御旗として押し立ててしているのである。相手をやっつけるときにも「民主的でない」という悪口が一枚看板である。そこで、私はこれから、この民主化する国際社会の中はいって、チベットの文化がどれほどそれにたいする適応力を持っているかをのべたい。だがそのまえに、なぜ民主主義がそんなに立派なものであるのか、私の考えをひとこと断わっておかねばならない。私自身も民主主義礼賛者の一人なのである。それだからなおのこと、その「民主主義」を、ただ神棚の上に祭りあげておくという卑怯なことにはしたくない。

いったい、民衆の福祉を増大するためには、その福祉の裏づけをなす生産力の増大ということがかくべからざるものである。ところで生産力を増大させるにあたって、人類はつねに二つの方向をとってそれを求めてきた。ひとつは「熟練化」の方向であり、もうひとつは「発明化」の方向である。

熟練労働者の賃銀が非熟練労働者の賃銀より高いということは、もちろん前者の方が高能率あるいは高品質の生産力を発揮するからである。熟練の効用は疑うべくもない。そこで、この熟練化という方向へ傾倒してゆく民族では、身分的分業がますます発達する。分業の中に、いろいろの熟練工が育てられる。サムライという熟練工、百姓という熟練工、壺作りという熟練工、商売人という熟練工など。そしてもう一步熟練工が前進すると、彼らは小さい時からその道一本にたつきこまれるようになり、さらに進んでその技は父祖伝来の世襲になる。

このような方向だけに極端に進んだ社会では、人間はしだいに熟練工的人格であることを求められてゆく。彼は一個の全人格的存在である必要はなく、まず何かの熟練者としての人格であることを要求される。こうして、おしまいには彼の身分は社会の網目の中の一つの座席として固定してしまい、彼の人格すらも、それに対応した型にはめこまれてしまふであらう。インドのカースト社会のきあがった原因を私は知らないが、結果的にみると、カースト社会の利点は、こうした「熟練化」の方向をどこどこまでも推し進めた点にある。

ところが発明化の方向は、ちょうどそれとアベコベである。一枚ずつ手で書き写すよりは、活字というものを作っていきよに刷ってしまえ。ボンクラの王侯の御機嫌を取って金儲けのメソッドになってもらうよりは、一口ずつ有限責任の株を持ってもらってたくさん人間から金をかき集めよう。こういった、だれもまだやったことのないことをやりはじめるには、彼は頭がやわらかくなければならぬ。

こういった頭のやわらかい人間を大量に要求するようになってきたのが、近代社会というものである。近代化された時代になっても、熟練というものがなおひじょうに重要ではあるけれど、以前にくらべると、発明化の方向がこれまたそれにもまして重要になってきた。現代はその意味で発明化の方向に生産力の拡大を期しつつある時代なのである。

こうなると、現代が要求するのは、頭のやわらかい人間、全人格的に育てられた人間であつて、職能人的に固まった人間の価値は相対的に下落する。頭の固まった人間では会社社員もつとまらない。昔のようにきまつた常識とくだけだけ掛取りにまわっていたらすむという単純なものではなくなつたからである。これに反して、熟練の極致という方は、人間にかわつて機械が何十倍、何百倍もの能率をあげることになつた。

民主主義的理想というものは、こういった「発明的人間」への要求とからみ合つて前進したものである。どの人間も、自発的に、自律的に、みずからの主人公となつて生産力を発揮してくれ

なければならぬ。こういう人間の自主的協力によつて、組織の運営も機械の運転もなされなければならぬ。それは一人一人の人格を平等に認めるところからするよりほかに仕方がない。少なくともそれが理想である。

ここから、個人主義の確立が必要になる。またそういった個人個人が、みんな大なり小なり経営の才幹を持つ必要がある。そしてそういった個人個人が集まつて何かをやるために、チームワークの訓練が必要となる。ちょうどそれはヒマラヤ登山隊が求めているような理想である。隊員の一人一人が、自分一人でも山頂に立ちたいという自主性と、一人でも戦うという力量とが必要になる。しかもチームワークこそは、これまた山頂を勝ち取るために欠くべからざるものだ。

ここまでのべてくれば、問題の解答は、ある程度皆さんにもわかっているようにも思う。チベット文化がデモクラシーの前進にたいして持っている、ひじょうに優れた素質は、まずもつて彼らの個人主義である。それから、有能者をすなおに登用することのできる社会倫理である。また男女間の地位の対等さをはじめとする、人びとのあいだの人格的対等さの尊重である。それからまた、外来の文物を受け入れることにたいする、寛容さと好奇心とである。外来人にたいする人種的民族な偏見のないことである。これらの点で、彼らの文化は漢文化やヒンズー文化よりもずつと優れた素質を持っているようだ。

しかしながら、欠点もまた数々ある。彼らの進歩的エネルギーは、現実にエベレストやマナスルの頂に立つ力を持ちながら、大部分は、まだ洞窟の中の座禪に凝り固まっている。彼らの新奇なものにたいする好奇心は、すぐ目移りする飽きっぽさを持っているようだ。そして最大の弱点は、チームワークの拙劣なことである。あまりに独立自尊でありすぎて、すぐおたがいに仲間われしてしまう。ラッサ付近の三大寺にいる僧兵は、一人一人は豪傑でありながら、テンデンバラバラの烏合の衆にすぎない。

チベットの軍隊が弱いのも、こういった点にあるらしい。それから、あんなに商業が好きなくせに、組織的な商業となると、インドのマルワリ族やネパールのタカリー族、ネワール族、漢人の商人などにずいぶん食ひこまれてしまう。それでも彼らはどこよらの国民みたいに商売に愛国心を持ちこんだりはしない。「漢人の官吏はまっぴらだが、漢人の商人は歓迎する。」という民族である。彼らのテンデンバラを救っているのは、家族や氏族の血縁組織と、僧権政治の組織くらいなものであろう。組織的な商業をリードしているのは僧院くらいなものであろう。チベットの資本家は僧院である。

それだから私は切実に望む。漢民族がリードしてできた新しい中国と、ヒンズー教徒がリードしてできた新しいインドとに望む。その民衆と指導者に望む。とくにチベット人は中国内の一民

族でもあるからだ。あなた方は民主的な社会と民衆の福祉を望んでいるはずだ。また世界の平和を切望しているはずだ。それならば、漢民族やヒンズー教徒の生活様式が、その理想の頂への唯一の登山道であるなどと過信しないこと、チベット文化もまたその権利を有することをおわかりであろう。チベット文化を漢文化に同化するなどということがバカげた考えであることも十分りてあろう。彼らの身になって、彼らの文化の組立てを理解してあげることが必要なことも十分おわかりであろう。その文化の中に欠点もあれば長所もあることがおわかりであろう。福祉の上と生活の改革は、彼らの文化の組立て方、そのレールの敷き方に沿って進められるべきだということも、おわかりであろう。

少数民族だといってあなどって、力で解決しようということが、いかにおろかなことかもおわかりであろう。インドからラッサへ自動車道路がつけられたって、あるいは康蔵公路を自動車が行くようになったって、それで一ひねりだというような不幸きわまる権力的な考えを起こされることのないように望む。そんな道路を通じて戦車やブルドーザーを持ちこんでチベットの民衆を屈服したってなにもならないということは、為政者の方々は当然知っていることと思う。なんとならば、権力が正しいものを製造することは断じてできないからである。そんなことをすれば、民主主義の敵と呼ばれても仕方がないから。文化的帝国主義といわれても仕方がないから。そんなことをすれば、あなた方の国がよってもって立つ民主主義の力は、足もとから音を立ててくず

れますよ。

私はそんなバカげたことが行われるとはけっして信じたくない。しかし過去の歴史は不幸であったから、念のためにも思うのである。私はそれを日本人としていつているのではない。人類の一員としていつているのである。おまちがいのないように。「おれの家の中のことだ。生意気な余計なお世話、かいをたたくな。」などという曲解のないように。たとい中国に五億の民衆があり、インドに四億の民衆があつたつて、私は人類の一員としてチベットの民衆のことについても発言権を持っている。そして、権力というものが正しいものを製造することは断じてできない。正しいものがあつてこそ、権力はその限りに生きて生きているのである。

つぎの時代を作るものは、少数民族の力をも正しくのぼす精神であり、そのイデオロギーをおいてはない。文化的帝国主義よ、すみやかに地上から去れ。

読者へのお願

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけます。もし、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思ひますので、もしもお気づきの点がありましたら、あわせて教えてください。おかげさまで、カッパ・ブックスのどの本も版を重ねるごとに、誤植が一つ一つ少なくなつております。お手紙には、職業や年齢なども書きをえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社出版局
神吉晴夫

ネパール王国探検記 一日本人世界の屋根を行く一

昭和32年10月25日 初版発行 ① 180
昭和32年11月25日 6版発行

著者 川喜田二郎
京都市左京区松ヶ崎呼返町14
発行者 神吉晴夫
印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷



発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

著丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。
表紙の模様・意匠登録 116613

〔関川製本〕



KAPPA BOOKS

光文社の「カッパ・ブックス」誕生のことば

カッパは、日本の庶民が生んだフィクションであり、みずからの象徴である。
カッパは、いかなる権威にもヘコたれない。非道の圧迫にも屈しない。なんのへのカッパと、自由自在に行動する。その何ものにもとられぬ明朗さ。その屈託のない潤達さ。
裸一貫のカッパは、いっさいの虚飾をとりさつて、真実を求めてやまない。たえず人びとの心に出没して、共に楽しみ、共に悲しみ、共に怒る。しかも、つねに生活の夢をえがいて、飽くことを知らない。カッパこそは、私たちの心の友である。
この愛すべきカッパ精神を編集モットーとする、私たちの「カッパの本」Kappa Booksは、いつもスマートで、新鮮で、しかも廉価。あらゆる人のポケットにあつて、読むものの心を洗い、生きる喜びを感じさせる——そういう本でありたい、と私たちは願つてやまないのである。

製作刊行者 神吉晴夫

KAPPA BOOKS

裁	判	官	関	財	指	導	者	国	会	新	社	政	治	官	検	察	役	人	大	学	教	授	
正木ひろし著	岡倉古志郎著	本多顕彰著	羽仁五郎著	尾崎宏次著	新名丈夫著	正木ひろし著	増田米治著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著	本多顕彰著
至一三〇	至一三〇	至一〇〇	至一五〇	至一〇〇	至一五〇	至一五〇	至一三〇	至一〇〇	至一〇〇	至一〇〇	至一五〇	至一五〇	至一五〇	至一五〇	至一五〇	至一五〇	至一三〇						
人の命は権力で奪えるものか——探偵小説以上の迫力と感動。「八海事件」の恐るべき真相をあばいて、「神聖」な裁判の実体をえぐり出す。映画「真昼の暗黒」の原作。	かくて戦争は、また作られるか——日本では基地がふえ、兵隊が作られる。戦争は準備されているのか。それは何のため。誰のためか。日米両国財閥の秘密を解明する。	この人びとを見よ——戦中軍閥に協力し、戦後は民主主義のチャンピオンに早代りした文化人指導者が、時の権勢の前に右往左往する姿。あの人の人恋く失名の記録。	占領下、政治家は何をしているのか——国会には新聞も伝えない、こんな秘密がある。敗戦以後の日本の政治の舞台裏を、その心臓部にメスを入れて描く生きた政治史。	パツカードに乗った森の石松——毎日就んでいる新聞の一行一行に、こうした記者の報酬なき人生が脈うつ。新聞社の仕組みと矛盾を描き出した泥まみれの人生記録。	この事実を黙つて見のがせるか——日本を支配する白い魔手、その下請けをする政府、国民の目をくらます政治の手段……新聞の書かない政治のカラクリを解明する。	神の名において、司法殺人は許されるか——「犯人製造」のモデルケース。その恐るべき手口と日本の検察陣の非人間性を明かすみに出し、肌を粟を生じさせる。	風にゆらぐ課長の告白——学園でトコロテン式に栄光の道を行く官僚の世界、そこに息吹くお役人気質、権力と結び金銭と結ぶ泥沼の実態を赤裸に描く類のない記録。	知識人の地獄極楽——「象牙の塔」のベールにかくれて、大大学教授の実態。地位の争い、研究や講義の裏側、原稿稼ぎなどの「地獄極楽」——絵図を仮借なく描き出す。															



帝王と墓と民衆

付わが思い出の記

三笠宮崇仁著
辛一五〇

細胞生活

杉浦明平著
辛一五〇

大学の青春・駒場

山下肇著
辛二二〇

日本が私をつくる

清水幾太郎著
辛二〇〇

考える兵隊

山田晃訳
辛一〇〇

私は背広だ

篠原正英著
辛一三〇

メキシコの青春

画家北川民次著
辛一三〇

望郷

亀田東伍著
辛一三〇

陣笠三九郎都へ行く

下川儀太郎著
辛一三〇

オリエントのあけぼのに人間文明の起源をたずねる本書は皇族の処女出版。付「わが思い出の記」は自らの体験を通じての戦争と皇族制度批判であり、真摯な自己反省を通じた一進一退を、ユーモラスに描いた人間記録。

共産党員の悲しみと喜び——誠実勇健、しかし恋も、問もない。一度は既まねばならぬ現代学生のパイプ。最高学府へと進む男女大学生。学問と思想の苦悶。あの教授、この学生の生きる道。銀杏並木のかげに何が。生きている人間の記録——二つの世界の矛盾がふき出た朝鮮の戦争のただ中で、米兵も英兵も真剣に考えた。そして真実を書くことで、戦争の悪の実態を抉り出した。

アメリカを裏切ったヨーン博士——「ドイツで起ることは日本でも起る。」軍備拡張、ナチス復活、戦争政策への反抗から起ったヨーン博士事件。これは偶然ではない。十五年をインデアンと共に——むせ返るような生命才、メキシコの野性の生活のなかに飛びこみ、メキシコ感覚の神髄を見いだした著者の青春のアバンチュール。

北京にありて、日本人の想える——故国に妻子が寂しく待つ。なすべき多くの仕事を疎して四年間、新中国の建設に協力してきた著者が、憂国の情で綴る望郷の手記。これは国会でおどる政治家たちの生懸図録。実在のもの。人が目に浮ぶ。素材で生一本な三九郎の悲哀はユーモアとなり風刺となつて、笑いと怒りがこみよがる。

愛は死をこえて

山田晃訳
辛一三〇

母と子の四年間の記録

波多野勤子著
辛一〇〇

野の草のように

壺井栄編
辛一〇〇

涙の谷より

田中澄江著
辛一三〇

鷗外の子供たち

森類著
辛一三〇

恋の子供たち

岡田真吉訳
辛一三〇

随筆うらなり抄

渡辺一夫著
辛一〇〇

随筆たずねびと

田宮虎彦著
辛一三〇

随筆旅路のはてに

本多顯彰著
辛一三〇

ロゼンバークの手紙——愛はうるわし、愛は悲し、また愛はかくも強し。原爆の被害の名のもとに、真実のために死の道を選んだ夫妻の愛情は永久に人々の胸に。

母と子の四年間の記録——多感な少年の心理を赤裸々につづつたこの手紙集こそ、愛情の古典として、日本中の親と子に、いつまでも読まなければならない。

人の世の味を奥歯の強さで噛みしめてきた日本の母、母とはこんなにも悲しいのか。これは働く娘たちが描く母の像。母の通つた道は歩むまいという愛と涙の記録。縁として悲しむ母として、不治の病を負う子に捧げ、十年を流し、これからの結婚について考えなおした。

あとに残されたものの記録——鷗外は家庭でどんな夫であり、父であつたか。文藝界の人々の赤裸なインサイド・ストーリー。が語る、森家の人々の赤裸なインサイド・ストーリー。ふとした一瞬の愛の衝動のために子をやどした清純な女性、戦後フランスの若い男女の性の開放を描いて話題を呼んだセミ・ドキュメンタリーな物語。

おへその微笑——フランス文学者として、また当人も最も貴重なエッセイストとして名高い著者が、生活の中でのユーモアとペロンスを描いた最近の珠玉の随筆集。人間への郷愁——人間のいのちの生きうる可能性を、ギリギリまで追求してやまない著者が、初めて世に送る心温まる随筆集。人生の哀歌を語って余すところがない。

「もし私の死後に何かが言るとしたら、おそらくこの作品であろう。」と著者は言う。おどけ九日で人間性の機軸を描き、ユーモアとペロンスをたたえた小温まる名品。

KAPPA BOOKS



長篇岸うつ波	壺井 栄著 至一三〇	某進歩的作家のモデル小説として文壇、ジャーナリズムの話題をさらった問題作。封建性のきつなと戦いみずからの道を開いてゆく女の美しい半生を描いた問題作。
連作霧の街	壺井 栄著 至一〇〇	処女作「大根の葉」以来、風車、赤いステッキ、霧、霧、母の悲しみをえがいて、詩情あふれる名作。
長篇花ひらく	伊藤 整著 至一五〇	現代の非情なメカニズムの中で、人間性がいかにかユガマられ、見失われるか。名作「火の鳥」の著者であることの重大なテーマを、青春とエロモアにたくした野心の長編。
小説街と村	伊藤 整著 至二二〇	幽鬼の街・幽鬼の村——これは作家伊藤整を理解するための重要な作品である。ここに描かれている少女の幻想こそ、日本文学の中で、いちばん美しい幻想である。
長篇愛情について	田宮虎彦著 至二二〇	愛するものが仕合わせか、愛されるものが幸いか、夏の夜泣きさきまめいには消えてゆく花火のように、美しく、はかなく、かなしい女の愛情のさきまめを描く。
小説道子の結婚	田宮虎彦著 至一〇〇	女性の胸に描く「結婚の幸福」とは何であらうか。大きく転換する時代を「途に生きてゆく人間の「いのち」のいぶきをしみじみと感じさせる香り高い著者の名作集。
小説美也と六人の恋人	井上 靖著 至二〇〇	チャンピオン、合流点、投網、夜の金魚、薄氷、美也と六人の恋人。混迷せる現代への不信と純粋感情を追求した詩情ゆたかな代表作集。井上文学の精華はここに。
戦後十年名作選集	白井吉見編 至各二二〇	この混乱と動揺の戦後十年間は、ただならぬ特別の時期であった。きびしい時代に出あつてその本領を發揮した作家、初めて世に出た作家の作品三千九編を選んで我我にとつて忘れえぬこの十年の記念のために、全七集を編集して世におくる——本選集は、新かなづかい、当用漢字を使用、固有名詞、むずかしい漢字にはふりがなをつけ、各集には分かりやすい編者の解説がついている。

KAPPA BOOKS

長篇火の鳥	伊藤 整著 至一三〇	一九五三年文学ベストストーリー第一位。連作五年、イギリス近代文学の手法を、日本の風土の上に再現させた新しい本格小説の出現と読書界の絶賛をあびた名作。
長篇二十四の瞳	壺井 栄著 至一三〇	原作のすばらしい感動が、十年に一度とへら映画の美しい感動を生んだ。文部大臣賞作品。美しい小豆島に降りひろげられる女教師と十二人の教え子の愛と涙の物語。
長篇雲に乗る	石井桃子著 至一五〇	第一回文部大臣賞受賞……戦後日本の創作話の最高傑作として、これほど多くの人々の心を洗つた作品はない。夢と現実と抒情の、現代日本のマスコット、ノンちゃん。
小説千恵子の生き方	田宮虎彦著 至一〇〇	波子の幸福、まじろ、色は匂えど、須磨の月、藤の花、孤女の像、千恵子の生き方。時代の転換期に生きる女性の悲劇を描き、私小説に新しい分野を開いた珠玉編。
小説目白三平	中村武志著 至一〇〇	平凡な庶民生活の中にあふれるユーモアとペーソスを描いた快作。善意と誠実で生一本に生きさせるのはなぜか。目白三平。笑いながら笑えぬものを感じさせるのはなぜか。
連作風	壺井 栄著 至一〇〇	著者が愛憎と自信をもつて世におくる自伝小説。ここに、孤民の女の青春の像が、あざやかに描かれることにも、いきいきとした時代の息吹きがあふれている……。
小説伊那の白梅	井上 靖著 至一三〇	伊那の白梅、三ノ宮炎上、傍観者、誘ひ大海、七夕の町。虚無と孤独の影をひいて生きる現代の男女の姿を冷感な筆に描く、井上文学の珠玉の中の珠玉、五編を取む。
長篇愛の証言	椎名麟三著 至一三〇	いつたい何が真実であり、何が偽りであるか。今日の複雑な現実の中で、真実に生きようとする、少女せいで子の悪い、悩み、悲しみを通じて愛の目ざめを描く。
長篇巴里夫人	芹沢光治良著 至一三〇	富める夫といし子をして、粗悶さえるまで、美観の才媛が、なぜ巴里の裏街にちらぶれた一生を終えぬばななかつたのか。「巴里に死す」をしのぐ問題作。



KAPPA BOOKS

欲	望	望月 衛著 辛二〇〇	その底にうごめく心理—恋愛、結婚、夫婦生活、魅力、性の開眼、性と金の二大欲望に入れた社会心理学のメス。欲望の出し方、その処理の秘法と幸福へのテクニック。
異性ノイロリーゼ	加藤 正明著 辛二〇〇	歪んだ性行動の心理診断—暴飲、好色、異常な同性愛、サディズムとマゾヒズム、拡大された異常性愛の世界の診断図。これは、若いあなたを映した鏡だ。	
金	望月 衛著 辛二〇〇	現代人の煩惱—私たちは金ゆえに泣いたり笑ったり恥をかいたりする。この金の世の中のカケヒキとカククリを「欲望」の著者が社会心理の立場から分析した。	
悪ノ生態	樋口 幸吉著 辛二五〇	日本人にひそむ犯罪の心理—人間はなぜ自分にお互いに親を愛する人々を殺さむか。悪の生態をえぐった名著。乱した日本社会にうごめく悪の生態をえぐった名著。	
メスとオス	岡田 要著 辛二〇〇	性の闘争と妥協—あらゆる生物の千差万別の性の営み、「発生子」の目で性と生殖の秘密を解いてくれる。	
成功は君のものだ	遠藤 健一著 辛二〇〇	セーラムン時代の商魂—不満や不安やひまを感じて居る、若い大学出のセーラムンや店員は、本書で販売の原理と技術を体得し、成功の鍵をつかむだろう。	
出	永田 久光著 辛二〇〇	友よ、この道で行こう—出世は学歴でできるのか。どこにあるか。戦後の「出世の秘法」を共にさぐろう。	
おしやれ案内	マダム・マサコ著 辛二五〇	ハイカラとはどうすることか—お金をかけなくても、センスひとつで、もつと美しくするための教科書。	
実用とシック	マダム・マサコ著 辛二五〇	だれでもシックになれる。今や、貴女の役に立ち、春夏秋冬のスタイルがきめられる本。各頁ごとに集物写真を入れて親切に説明。見て美しく、読んでたのしい。	
改訂文学入門	伊藤 整著 辛二五〇	刊行以来三年、文学入門書中の白眉として絶賛をあげている本書は、著者のその後の研究成果によつて、全面的に増補改訂がなされ、ここに金字塔を打ち立てた。	
今日の芸術	岡本 太郎著 辛二〇〇	時代を創造するものは誰か—セザンヌはヘッソコ、ゴッホは薬師、下手に描くピカソ、という驚くべき遊戯。語り、力強く、明快到芸術の権威の封建性を打ち破る。	
新聞作法	古谷 綱正著 辛二〇〇	ジャーナリスト的ものの考え方—新聞は現代生活の典型だ。新聞文章の中にこそ時代の求める文章の方向がある。毎日新聞「余録」の筆者が書下した「現代文章の範例」。	
大学習心理学的必勝法	小口 忠彦著 辛二〇〇	最近の出版傾向と実例をあげ、最も効果的な戦術戦術を懇切に指導する。最も新しい学習心理学の立場から能率的な勉強法、確実な学力養成受取必勝の指針を身える。	
社会心理	照 鏡 南 著 辛二五〇	日本の経済、政治、文化、生活にわたり、複雑微妙な社会の面影を、新聞の読み方ラジオの聞き方が変わるだろう。	
カッパ版	太平洋戦争 上・中・下 野五郎編 辛二〇〇	戦後十年、日米の膨大な資料を総合した太平洋戦争の決定版。歴史的価値を世界に誇る大記念誌。子々孫々に伝うべき記録。米海軍特別提供写真四〇枚収録。	
万葉集の謎	安田 徳太郎著 辛二五〇	ヒマラヤの奥に今も万葉時代の日本語をしゃべる人種が引つくり返して日本人の祖先の故郷と生活の謎を解く。	
天孫	安田 徳太郎著 辛二〇〇	今の天皇は高天原から天降った「天孫族」の子孫か。「古事記」を証拠にして、明治以来の御用学者の誤った解釈を正してゆく。「天皇の発生」に加えられる科学のメス。	
黄色い部屋	吉浦 亀雄著 辛二〇〇	スガモ・ブリズンの通訳医者—洋総理も、「黄色い部屋」の住人だった。どんな「大人物」もここは弱点をさらけ出す。その誰も知らない愉快きわまりない奇行記。	



すらんぐ(卑語) てるおか・やすたか 辛二一〇

スキヤンダル 岡倉古志郎著 辛二一〇

現代の英雄 小説 家 荒 正人著 辛二一〇

小説異母兄弟 田宮虎彦著 辛二一〇

町会議員一年生 杉浦明平著 辛二一〇

みみずく説法 今東光著 辛二一〇

ネパール王国探検記 川喜田二郎著 辛二一〇

面 接 堀川直義著 辛二一〇

愉しわがバリ 美川徳之助著 辛二一〇

ネオン街から原台まで——近世国文学の権威がその学識を傾け、三百年の昔から今日まで活用されてきた百戦千回のスラングを解剖、庶民の漫知と哀歎あふれる風俗図史。

税金を食う怪物——今日の日本は「再臨天國」の旗が金、その汚穢・疑獄といふスキヤンダルに使われている。金は、私たちが国民の血税：ここにその赤裸な実態がある。

ペンに金なり、原稿用紙一枚二万五千円。その収入において、社会的影響力において小説家はまさに現代の英雄である。かすかすの名作の陰にかくれた小説家の素肌裏

横暴なる夫に仕える妻の忍従の姿と、兄弟の心の動きを描いた田宮文学の青春の名作。ほかに「ある女の生涯」「霧の中」「比叡ある」「朝鮮ダリヤ」の四編を収める

町民の利益を代表する彼らは、町の費用で飲む話になる。町会議員行状記の縮小版である。本書はその生感証録。

「週刊朝日」に連載されて、大好評を得た名作。最近、「直木賞」を受けて油の乗った著者が、大胆に描きだした、なまぐさ坊主行状記であり、奇抜な世相諷刺である。

日本人世界の屋根を行く、怪奇な風俗の宝庫ネパールの奥地へ踏みこんだ学術探検記。探検の興味に加えて、文化人類学上の貴重な発見と感動が全編に溢れている。

どうしたら相手を説得できるか——面接の技術は成功と失敗の鍵であり、人間関係の潤滑油であり、エチケットの第一課では、面接はどうしたら上手になれるか。青春の日をバリの裏街に感懐した、かつての藤道息子が、ふたたびその土をふんでバリの夜屋を隈なく御案内する。美しい女たちと美食の歡々、愉しいバリの教科書。

